ディス・イズ・ナイトメア

王者の剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ディス・イズ・ナイトメア

【Ｎコード】
Ｎ７７００Ｒ

【作者名】
王者の剣

【あらすじ】
銃好き少年・井野俊樹は親友・中村隼勇の家から帰宅途中、ゾンビ化した男性に
襲われる。この市原のバイオハザードから俊樹は悪夢を何度も乗り越えること
になる。共に戦う仲間を巻きこんで。

登場人物紹介（市原戦）

井野俊樹（いのとしき）（１２）
主人公。平凡な毎日を送っていたが、ある日、市原バイオハザードに巻き込まれる。
銃好きで小学生（中学生の前兆でもある）ではありえない「モデルガン実銃化」を考えた。
さらに銃火器も器用に扱う。正義感が強い。

中村隼勇（なかむらはゆ）（１２）
俊樹と親友関係。俊樹と同様、市原のバイオハザードに巻き込まれる。
親友の影響を受けてか、銃火器も多少なら扱える。頭がよく、まじめな性格。

細坂千里（ほさかちさと）（１２）
俊樹、隼勇とはクラスメート。悪夢の中、俊樹と出会う。ものすごく初めてのことに慣れるのが早い。

ゾンビ？
ウイルス感染により人間が変化した者。常に食べることを目的としている。

ゾンビ犬？
飼い犬、または野良犬がウイルス感染によって生まれた。集団で行動している。

悪夢の序章

卒業式前日。明日で小学校を卒業することになる。嬉しい気持ちと寂しい気持ちに包まれている。いつものように帰りの会が進められていく。最後の会が？？？？？？？帰りの会は会った言う間に終わり僕らはいつも通り校門を出た。明日来ればもう来ることはほとんどない。だがこの時、僕は今日中に来ることになるとは思わなかった。まさかこんなことになるとは？？？

３時半、僕は学校近くの歩道橋を歩いていた。そう、一人の親友と共に。お互い重くなったランドセルに苦戦しつつ、今日の予定を話す。

「おい、井野。今日遊びに来るんだよな？」

親友が先に口を開く。僕らは卒業式前日にもかかわらず、「遊ぶ」という予定があるのだ。まあ、僕らの他にも同じ奴らがいると思うが。

「もちろんさ！」

「マックのキャラ口調はやめてくれ・・・」

「僕は今、隼勇に夢中なんだ！」

質問にふざけながら答える。親友の隼勇は確かマックのあのキャラは嫌いだったな・・・隼勇とは一度としてクラスが違ったことはない。つまり６年間共に過ごしてきた。中学でもクラスが同じになったらすごい偶然だ。といっても隼勇は何かとうるさいから別にどっちでも・・・

そんなことを考えていると僕と隼勇の分かれ道に差し掛かった。ここからは帰り道が違う。

「じゃあまたあとで」

「ああ。バトミントンの道具とグロイゲームを忘れるなよ。あとラケットは無論、2本で頼む」

こう別れを告げ、家に走った。早いとこ道具を持って隼勇の家へ急がないと。遊ぶ時間はあと2時間くらいしかないからな。

「ただいま」

ようやく階段を上り終え、自宅のドアを開けた。僕の自宅は経営住宅の3階のため階段に足を悩まされる。靴を脱ぎ途中、ふと玄関の靴に目が留まった。いつもより靴が多い。2足ほど増えているな。誰の靴かすぐに分かった。これは警察官の靴だ。最近、なぜか頻繁に警察官が訪れる。しかも僕の家や他の家だけではなく、歩道や道路でもだ。一体なぜだろう?まさか指名手配中に犯罪者が!?とにかく、早く家に入るか。靴を乱雑に脱ぎ、自分の部屋へ向かった。向かう途中、リビングのドアが開き、そこから母親が顔を覗かせた。

「おかえり。ちょっと静かにしてて」

「分かってるよ。ていうか隼勇の家にすぐ行くから関係ないけど」

ドアからリビングが見えた。案の定、母の後ろに警官が二人いる。二人の警官は何かの紙とペンを持っている。険しい顔だ。どうやら母と何か話していたらしい。でも僕らの事ではなさそうだ。もっと重要なこと・・・のような気がする。おっと急いでいたんだ。

部屋に入りすぐさまバトミントンの道具、「バイオハザード」と「グランドセフトオート」のゲームをカバンに詰めた。隼勇は「グロイゲーム」と言っていたからこの二つがいいだろう。ついでに自転

車のカギを、と思ったがあることを思い出した。カギは無くしていたな。とりあえず走って行くか。
家を飛び出し、隼勇の家へ走った。

その後は実に平凡という名が相応しい時間だった。まずバトミントンの試合をして僕は隼勇以外、全員に圧勝した（僕と隼勇を覗いてあと3人の友達がいた）。次は僕の持ってきたゲームで誰が一番うまいか争う。これも僕が勝った。バイオハザードをやっている中、隼勇がふとこんなことを言い始める。
バイオハザードが実際に起きたらどこに逃げるか、と。皆、が1分ほど考え込む。
一人が病院といい、他の一人は地下、と言った。僕が学校、と意見を上げた後、武器の話が始まる。皆、銃の名前ばかり。そう簡単に手に入るわけないのに。普通、バットとか木刀とか身近なものを上げるだろ。その前にバイオハザードが現実になるわけないか？？？？？

午後6時半。夏とはいえ、さすがに暗くなってきた。帰宅の時だ。皆、「おじゃましました」と挨拶をし家を出ていく。僕も帰らないと。階段を下り、玄関へ向かう。
台所では隼勇の母親が体調不良なのか、テーブルに伏せていた。寝ているだけかもしれないので邪魔はしないでおこう。靴を履き、ドアに手を掛ける。「おじゃましました」と挨拶をし、ドアを開ける？？？
まさかここから隼勇の言ったことが本当になるとは知らずに？？？

空がだんだん暗くなっていく中、線路沿いの道を進む。それにしても電車が一度も通らないのはなぜだ？まあ、ただの偶然だろう。しかしあれほど立っていた警察官たちは？昼だけパトロールしているというのはおかしい。もし指名手配犯の犯人が影響しているのなら

逆に夜を厳重に警備するはずだ。じゃあなぜ?何か悪い予感を感じる。かつてない事が起こりそうな・・・ん?あれは?何か、いや誰かが倒れている。手に何かを握っているようだが薄暗くて見えない。小走りで近づき、確認する。手に握っているものの正体がわかった時、僕は唖然とした。サバイバルナイフ・・・!これはインターネットで見たものと同じだ。しかもサバイバルナイフには血のような赤い液体がこびりついている。まさか・・・本物の指名手配犯!?とりあえず声をかけてみるか。僕は「もしもし」と背中をたたいた。反応がない。だが、それからすぐその人はうめき声を上げながら立ち上がった。まるでゾンビのような声だ・・・!

顔が・・・真っ青だ。いわば死人のような。これってまさか・・・いやそんなわけない。「バイオハザード」はあくまでゲーム内の悪夢にすぎないのだ。犯罪者ならすぐに襲い掛かってくるはずだ。気ちがいでも同じだろう。じゃあこの人は一体?ゾンビにしか見えないのはなぜだ・・・?男性がナイフを落とし、腕を前に突き出しながら歩み寄って来る。逃げなければまずいのだが僕は混乱に陥り、思うように動けない。あげくの果てに腰を抜かしてしまった。その僕を見てさらにうめき声を上げつつ男性は近づいて来る。まずい、早くしないと!手遅れに・・・死が迫っている???

「うわっ・・・来るな!やめろ!」

パニック状態の僕は寄生を道路に響かせた。だがその声はすぐに乗っ取られ、一つの機械音にかき消された。車だ。猛スピードで走って来た一台の乗用車が男性と衝突し、エンジン音を響かせる。男性は弾き飛ばされ、電柱に打ち付けられる。乗用車もただではすまない。ブレーキを掛けたようだが減速しきれずガードレールに衝突した。あっというまに二体の死体が出来上がってしまった???ようやく我に返った僕は今の状況を予測した。これはバイオハザー

ドが本当に起きてしまったに違いない？？？そうならば混乱している場合ではない。一秒でも早く安全な場所へ避難しないと！しかしこのことを母や妹、そして友らが気が付いているのだろうか？気づいていないのならば知らせないと危ない！まずは隼勇に知らせるか？いや、ダメだ。もうずいぶん離れてしまっている。ならば家族に知らせた方がいいな。僕は両手でほっぺたを叩き、意識をしっかりさせた。その時、ふと地面に転がったサバイバルナイフに目が止まる。あれは男性が握っていたものだ。また今みたいな状況になるかもしれない。ということは無論、持っていた方が良いだろう。少しでも強力な武器が必要だ。すでに悪夢が始まってしまったのだから・・・

悪夢の中、僕は家族の元へ走った。

アパートからの脱出

勢いよく階段を駆け上がり、家へとたどり着いた。果てしなく疲れる。だが休んでいる暇などない。もし化け物の世界が始まってしまったのならば早く家族に知らせて安全な場所に逃げなければ。ドアを引くがカギがかかっていて開かない。まさか家族は今の事態に気が付いているのだろうか？とにかく一応、確かめる必要がある。僕はズボンのポケットからカギを取り出し、錠を外した。玄関へと入り、靴は脱がないまま母と妹を呼んでみた。

「母さんー？佳南ー？」

返事はない。やはりすでに家を出たのか？いや、それはない。二人が僕を見捨てて逃げ出すわけはない。土足で中へ入り、リビングへ向かう。無論、油断はできない。もしもの場合がある。慣れない手つきで震えつつ、サバイバルナイフを握りしめる。いざというときは死ぬ気で戦うつもりだ。リビングのドアまで来た。耳を澄ませてみるが喋り声や物音は聞こえない。やはり入って確かめるのが一番だろう。スライド式のドアを開け、リビングへと足を踏み入れる。・・・・・そこはもはやリビングとは言えない状態だった。血だ。まるで食い荒らしたかのようで床、壁、テーブル・・・その中でも僕を歓迎してくれた人はいた。いや、元人間だった人、というのが正しいだろう。つい数時間前に見た、家に来ていた警官が人を貪り食っている。その人は・・・明らかに死んでいる。自分の目を疑った。これは悪夢に違いない。だが現実は変わらない。

母が・・・今まで僕と妹を愛し、育ててくれた母が今、化け物の餌食となっている。心が一気に冷え固まり、また混乱に陥ろうとしている。そんな僕を警官のゾンビが嗅ぎつけ、獲物を変えた。途端に

母の死体が視野に飛び込んできた。僕はまた奇声を上げ、混乱へと陥った。だがゾンビの動きは止まらない。距離が少しずつ縮まる。気が付くと僕は何かをきっかけにゾンビにタックルを食らわせていた。ゾンビを倒し、馬乗り状態になる。また無意識に体が働き、今度はゾンビの額にサバイバルナイフを振り下ろした。大量の血が広がる。ゾンビは絶命したに違いない。ひとまず危機は回避したが返り血を浴びたことでまた混乱を起こした。だが、亡骸となった母が再び視界へと入り、気持ちが一気に切り替わった。

母が死んでしまった？？？なぜ？なぜ母が死ななければならないんだ？悪人が死ねばいいのになぜ？運が悪すぎるよ。突然、いなくなるなんて？？？僕はこれから誰を頼ればいいのだ？涙がかつてないほどあふれる。鳴き声も自分の耳が痛くなるほど響いた。僕は床に倒れこみ、そして？？？？？？
あれから３０分くらい経ったのだろうか？悲しみはまだかなり残るがとりあえず意識は回復した。残った涙をぬぐいながら改めて母の死体を確認する。・・・ゾンビにやられた傷がかなりひどい。腹、胸、脚、首・・・異様なほど肉がもうほとんどない。その中で一つゾンビの傷とはちがうものを見つけた。ちょうど心臓のあたりに刃物で刺した後がある。これはまさか・・・自殺？そういえば警官は二人来ていたな。おそらく母は一人のゾンビは倒したが、その時に噛まれ、感染したと自覚した。それでも一人にやられる前にと自殺・・・これで理由が付く。感染したからだ。ゾンビにならなかったのもこのためだろう。

手には紙を握っていた。学校でもらうプリントほどの紙だ。「地域の皆様へ」と書いてある。

この地域にある学校が不審な行動を見せております。地域の方の目撃情報では学校周辺を刃物を持った不審者が行ったり来たりしてい

たそうです。政府は多くの警官を派遣しましたが、念のため地域の皆様は木刀、バットなどの身近な防犯道具を設備しておくようお願いします。

なるほど、警官が最近多かったのはこのためか・・・というか不審者って?とにかく武器を集めないと。やはり手始めは警官の亡骸からか。まだ少し生暖かい警官の死体を調べる。もちろん、こんなことはしたくない。だが、死ぬのはごめんだ。それに警官なら多少の武器は持っているだろう。まず手錠を見つけたがこれは必要ない。警棒、いわばトンファーは持っていないのか?調べるもののやはり見つからない。ズボンからホルスターを見つけた。これは・・・銃を持っているのか?ホルスターを開けるとやはり銃が見つかった。拳銃だ。ニューナンブＭ６０、日本の警察などが使用する正式採用拳銃だ。約７００gと僕にとっては重いが撃ち方がしっかりしてれば撃てる。弾は・・・5発か。なるべく戦闘は避けたい。

できるだけ使えるものをかき集め玄関に向かった。ドアノブに手を掛けた瞬間、あることに気が付いた。
ドアの外にゾンビの大群がいるのだ。外に出られなくなってしまった。ほかの脱出口を探すしかないか。
ベランダにある非常口を突き破りとなりの室にいった。
持ち物を確認した。

ニューナンブＭ６０、サバイバルナイフ、消毒液

中をくまなく捜索した。何件回っただろうか。役に立ちそうなものが全くない。
3件目の部屋でようやく脱出に役立つものを発見した。避難用のハシゴだ。これで3階から降りられる。
ベランダに向かう途中なにかの落下音が聞こえた。ドラム缶のよう

な音だ。台所の方から聞こえたような・・・とにかく行ってみるか。
自部屋に再び戻り、リビングの台所へと向かう。
辺りを確認するとちょうど電子レンジの上の天井が抜け、ドラム缶のようなものが突き出していた。その時、穴の開いた巨大な缶から何かが落ちる。銃のようだ。それは電子レンジの上に音を立てて落下した。すぐさま電子レンジから取り上げ、確認する。小型のソウドオフショットガンだろうか?とにかくこれも入手しておくのが良い。ありがたく取っておいた。

その瞬間、ピチャ、ピチャ・・・という不気味な音が天井に感じた。天井を見上げるととかげのようなカメレオンのような舌を出した赤い化け物がいた。どうでもいいけど名前は「血オオトカゲ」にしよう。血みたいな色だし姿は思いっきりトカゲだし。
間違えなく襲ってくるだろう。僕はその恐ろしい姿に震え、ベランダに急いで飛び出した。
背後のガラス戸の裏で血オオトカゲの騒ぐ音がする。その数秒後、もっと恐ろしい敵の出現を感じた。
血オオトカゲがぎゃあああ、とかん高い声を上げ、絶命する声がした。そう、謎の敵にやられたのだ。
僕はさらに震えあがり、急いで3階から脱出した。

通路に降りるとゾンビが数十体いた。これは何ともない。通路が広いため、避けて通れた。
道路が見えてきた。途端に動物が走る音がする。血オオトカゲと巨人の次はゾンビ犬か?
予想は大当たりだ。ゾンビ犬が数十体襲ってきた。この先は川でしかも一直線の道が多いため追いつかれてしまう。何かいい脱出口はないか?マンホールが見える。ありがたいことにマンホールのフタは外されていた。下水道の点検のためか?まあなんにせよタイミングがいい。全速力でマンホールに入り、フタを閉めた。これで奴ら

は入って来れない。とりあえず下水道を進むしかないな。
ハシゴを下り、下水道へと進んだ。

学校へ

下水道を歩く。悪臭がたまらない。吐きそうになるくらいだ。きっとウイルスか何かの影響だろう。

今ゾンビの5体の列を横切っている。もちろん、倒せるのだが弾の節約のためだ。ニューナンブＭ６０はたったの5発しかない。予備弾がこの先、手に入るとは限らない。そのためいざというときしか使わないと決めた。下水道を進むさなか、正真正銘の死体が数体、視界に現れた。大半は下水道に点検に来た業者の人間のようだ。だが数人は防護マスクをつけていていかにも軍人らしい。なぜこんなところに軍人がいるのだろうか?政府が派遣したのか?軍人の死体の近くにはグレネードランチャーが転がっていた。幸い、汚水に浸かっていないため故障はしていない。砲弾は軍人の死体から入手したものと合わせて6発ある。先端に砲弾を入れて引き金を引くタイプだ。衝撃に僕は腰を抜かしてしまうかもしれない。しかし今は役に立つ武器が一つでも必要なので一応、取っておこう。さらに軍人の死体からニューナンブＭ６０とソウドオフの弾薬を少々、入手した。

休憩して持ち物を確認した。

ニューナンブＭ６０、ソウドオフ、グレネードランチャー、ハ?３０、シ?7、家族の写真、消毒液

バシャバシャ。少し先で水しぶきの音がした。誰かいるのか?音の方向へを頼りに僕は走り出す。

途端に上から液体が落ちた。毒蜘蛛だ。全長2~3ｍほど。数は４匹だ。かわすのは難しいだろう。

1匹目の下を通過した。2匹目が毒液を垂らした。これをかわし、ソウドオフで撃った。

毒蜘蛛が天井から落下し、絶命したのがわかる。３匹目を通過した。続いて４匹目。

４匹目も滑りこみでかわした。これで前方に毒蜘蛛はいない。全速力で逃げれば振り切れる。背後の毒蜘蛛を無視し、全速力で走る。１００ｍほど走ったところで足を止めた。一安心して下水道の壁に背中をつける。と少し先で誰かが走っているのが見えた。さっきの音ってまさかあいつか？とにかく追わなければ。呼吸を整えつつ、再び走り出す。だんだん姿がはっきりしてくる。そしてついに姿が明らかになった。髪の長い僕と同じくらいの女子だ。右手にはバール、左手には果物ナイフを握りしめている。

「おい、待てよ！」

僕は声を上げて呼びとめたが女子は止まらない。再び後を追う。その時、突然、破壊音が響いた。途端に僕の行き先でマンホールのフタが汚水に落下する。開けたのではない。無理やり破壊したのだろう。

奴が姿を現す。恐ろしい姿、そして人間とは思えないほどの身長・・・巨人だ。アパートを出る途中に僕を襲おうとしたのはこいつか？そいつは僕の視界にゆっくりと現れた。そしてこっちに向き直る。服は着用しておらず、全裸の状態だ。髪はなく剥げている。両手には鋼鉄と思われるグローブを付けている。気づいたら巨人はすぐ目の前に来ていた。そして殴りかかってくる。

避ける暇などなかった。僕は殴られ、吹っ飛び、汚水へと倒れた。すさまじい痛みが襲う。骨折はしていないがあばらと背中にアザを作った。ソウドオフで巨人の脳天へと射撃する。銃弾は見事に命中した。巨人が一瞬、怯んだ。続けて発砲。また脳天に命中。すると巨人はよろめきながら汚水へ倒れた。絶命したのか？とにかく危機は脱出した。早くあの子を追わないと。

走り続けていると一筋の光が見えてきた。マンホールが開いているようだ。同時にさっきの女子がマンホールから抜け出すのを視界の捕らえた。呼び止める間もなく、女子はマンホールを潜って外に出てしまった。後を追ってマンホールから這い出た。出た先は・・・・・大きな建物。辺りを見渡すと「給食センター」と書かれたトラックが止めてある。「給食」と聞いて僕はすぐのここがどこだかわかった。学校だ。僕が隼勇たちとバイオハザード対策についての時、避難場所として挙げた学校。おそらく役に立つものが多くあるにちがいない。広いし、校門はバリケードが張られているので化け物の侵入は防げそうだ。避難者もいるかもしれない。とりあえず入ってみるか。僕は校舎の入り口へ急いだ。

再会そして誓い

今僕は校舎の入り口を探している。しかしなかなか侵入口が見つからない。
あちらこちらに作られたバリケードからすると学校でも大惨事があったようだ。
そのわりにはゾンビが少ない。ゾンビといってもせいぜい教員や保護者ぐらいだ。それでもやはりゾンビはかなりの数だ。倒すのには一苦労している。
僕は一つの階段を上った。職員室から外に出て音楽室につながる階段だ。
今度こそは侵入できるだろう、と思ったがやはりここもバリケードでふさがれていた。蹴り飛ばしたがびくともしない。仕方なく南校舎の方へ戻った。
南校舎の駐車場を歩いている。が、ここにも侵入口はなかった。その時だった。駐車場と面している1階の多目的スペースからガギッガギッ、とガラスの壁を突き破るかのような音が聞こえた。
サッと振り向き、身構えるとガラスの壁にひびが入っていた。ひびがどんどん広がっていっている。
そのひびを広げていたのは舌の長い、手に鋭い爪が生えた血オオトカゲだった。
気づいた時には血オオトカゲはガラスの壁を突き破っていた。
血オオトカゲはかん高い声を上げると飛び上がる体制をとった。とっさにソウドオフを構え、発砲する。攻撃は僕の方がわずかに早かった。ソウドオフの弾丸は血オオトカゲの顔面に直撃した。血オオトカゲがひっくり返る。がまた起き上ってきた。舌で攻撃してきたがいち早く察知し、かわした。そして今度は喉に狙いを定め、撃った。
血オオトカゲを倒した。と同時に血オオトカゲが突き破った壁から

侵入できることに気が付いた。
校舎の中にはゾンビのほかに血オオトカゲがいた。ゾンビ化した先生たちを倒して一休みした。
すると突然、銃声が鳴り響いた。誰かいるらしい。急いで見に行った。
その人物は倒して僕と同じように一休みしていた。しかし僕の存在に気づき警戒したため、銃を構えた。
僕はゾンビじゃないと言おうとしたがその人物の姿を見た瞬間、違う言葉を言った。

「隼勇！生きていたのか！」ぼくはいった。ようやく向こうも銃をおろし、僕が誰だかわかったようだ
「俊樹じゃないか！無事でよかった！」

僕らは再会を喜び合った。そしてこの事態について話し合うことにした。
僕は両親のことを聞いてみた。

「僕の両親は俊樹、お前が帰った後ゾンビになったよ。」
隼勇は泣きそうだ。
「僕の両親は・・・死んでしまっていた。」
僕も泣きそうになった。
「なんでこんなことになったんだ・・・・・」
隼勇がそういうと二人そろって泣き出した。
数分後、僕と隼勇は泣き止んだ。そして僕は言った。

「生きて絶対この町から脱出するんだ。」
「ああ。絶対に生きよう。希望はあるはずだ。」隼勇もうなずいた。

両者の持ち物を確認した。

俊樹・・・ニューナンブＭ６０、ソウドオフ、グレネードランチャー、ハ？６０、シ？１４、グ？5、家族の写真、消毒液
隼勇・・・ワルワーＰＰＫ、ボウガン、工事用ダイナマイト５本、ハ７０、包丁、消毒スプレー、家族の写真、缶詰？４
隼勇の持っていた缶詰をそれぞれ2缶ずつ食べ、作戦を立てた。

「よしとりあえず別れて行動しよう。」僕は1，2階、隼勇は3階と屋上に行くことになった。

分かれた謎の文字

僕は隼勇と別れた後まず職員室に向かった。学校中の扉のカギを取りに行くためだ。
ゾンビを撃ち殺しながら廊下を進んだ。廊下の角に差し掛かった時だった。何者かが横切る。
下水道で会ったあの髪の長い年齢が同じくらいの女子だ。今度こそ話さなければ。
必死に後を追ったが、ゾンビや血オオトカゲに邪魔されてなかなか進めない。それでも見失わずに済んだ。
どうにか追いついた。と、気がいたら職員室まで走っていた。１石２鳥だ。

「待てって。なんで・・・・・・」

言い終わらないうちに何かが破損する音にかき消された。窓ガラスと壁が同時に破壊された音だ。
その音の正体の主は分かっていた。そう、巨人だ。まさかとは思っていたが本当に生き返るとは！
出てきた拍子に窓ガラスの近くにいた女子が吹き飛ばされた。当然、彼女は気絶した。
しかし今度は僕が危なくなった。グレネードランチャーを使いたいが弾が少ない。
僕は辺りを見回し、何か武器はないかと探した。すると下水道で見た人たちと同じだと思われる軍人の死体がある。その死体の上にはさらにもう一体の死体が覆いかぶさり、軍人の首には痛々しい傷があった。ゾンビにやられたとみて間違いない。よく見ると軍人の地下に何かある。あれは銃器か？
急いで手に取り、なんという銃なのか確認した。マグナムか？いや

コルトパイソンだ。なぜここにあるのかわからないがとにかく使える。
僕はコルトパイソンの引き金を引き、巨人の頭に銃弾を浴びせた。
巨人がよろめく。
続けて5、6発と銃弾を放ち、巨人を倒した。
巨人に近寄り倒れたか確認した。動かない。しかしまた襲ってくるかもしれない。
巨人はコルトパイソンに使える銃弾とグレネード弾をいくつか持っていた。それらをすべて回収し、女子の安全を確認した。
息はある。よく見るとクラスメイトの細坂千里だった。とりあえず安全な保健室のベットの寝かせた。保健室にある治療薬をできるだけ救急箱に詰め、持っていくことにした。
あと何時間かは気を失ったままだろう。その間に校舎の1、2階の探索を始めることにした。
まず1の1。ゾンビも血オオトカゲもいない。飛び散った血と何やら光るものがある。光る物は固い針金でできている。これはたぶんキーピックだろう。それ以外にこれといったものはない。
1の2。警官の死体からハンドガンの銃弾を手に入れた。
さらに2の1、2の2、3の1と進んだが特に何もなかった。
3の2。ここは妹の教室だ。できれば妹の成績や工作などをじっくり見たい。しかしそのすべてが血オオトカゲ2体に破壊されていた。
血オオトカゲを時間短縮のためコルトパイソンで殺した。
先生の机の引き出しをキーピックであけて調べると何かのファイルとライターがある。ライターをしまいファイルを読んでみた。

緊急警戒書
何者かが我々のNB実験の遺産を狙っている。目撃情報による人物は以下の特徴である。
1人目、迷彩服を着ている。体つきからして男性。能力値は超人並み。

2人目、ミニスカートで赤い服を着ている。女性。能力値は超人並み。
超人並みであるからして十分に警戒を。渡されたメモは3の2担任が以下の場所に謎解きで隠してある
音楽室・・・U　理科室・・・ｍｂ　図工室・・・ｒｅ　図書室・・・ｌｌ　体育館・・・ａ
緊急事態には渡されたメモを読めない程度の破り捨て全教員でメモをかき集めコンピュータ室で入力せよ。そして全員で遺産への入り口へ向かうように。

ここで終わっている。ＮＢ実験ってなんだ?それにメモってなんなんだ?
疑惑が深まった。もしかしてこの事件の黒幕と僕が通っていた学校はグルなのでは?
とりあえず「遺産への入り口」について考えた。研究所か何か?だとしたら脱出口があるのかも。
千里のことが心配になり保健室へいったん戻った。ドアをガラッとあけると視線を感じた。
千里は起きている。傷を消毒していた。千里が僕に気付き、話しかけてきた。

「井野俊樹君?」
「そうだ」
「よかった生きていて。それと助けてくれてありがとう。」
「ああ。それより恐怖はこれからだ。」
千里は元気のようだ。そしてここからの脱出について話し合った。
まずさっきのファイルの話をした。

「遺産への入り口ってのがあるらしい。もしかしたらそこから脱出できるかもしれない。」

とっさに千里が答えた。
「わずかでも希望があるなら行こうよ。まずメモを探すのよね？」
「それでどうする？千里は待ってるか？」
「井野君は謎解き得意じゃないでしょ。私もついていくわ。それに1人は怖いし。」
「わかった。まずここから1番近い音楽室に向かおう」
「オッケー。ところで井野君は何を持っているの？」
「持ち物確認するか。武器と回復薬以外は渡すよ。」

俊樹・・・ニューナンブM60、ソウドオフ、グレネードランチャー、コルトパイソン、救急箱、ハ？60、シ？21、グ？10、コ？4、家族の写真
千里・・・バール、ライター、キーピック、消毒液、包帯、家族の写真
持ち物を確認し終わったところで千里が一声叫んだ。
「がんばろうね！」

メモを求めて

音楽室につながる階段を上っている。音楽室は楽器や名曲家の肖像画はもちろんあるが一つだけ妙なものがある。それは視力検査の用紙が貼ってあることだ。必要あるわけないのになぜだろう？

音楽室の扉を静かに開ける。音楽室にはゾンビが5体いた。

僕はゾンビを3体ハンドガンで、千里はバールでゾンビの首をへし折って葬った。

ゾンビを倒したところで謎について考える。まず床を見た。

ピアノやオルガン用のコンセントが5列ずつ並んでいる。

1列目は小のコンセントが2つ、中のコンセントが2つ、大のコンセントが1つある。

2列目は小が2つ、中が1つ、大が2つある。

3列目は小が1つ、中が2つ、大が2つある

4列目は小が2つ、大が3つある。中はない。

5列目は大が5つある。小と中はない。

今度は壁を見た。視力検査の用紙が貼ってある。視力検査の紙も同じく丸の列が5列ずつ並んでいる。

1列目は大丸の上にT、そして小丸が1つ、中丸が2つ、大丸が2つある。

2列目は大丸の上にW、そして大丸が5つある。

3列目は大丸の上にV、そして小丸が2つ、大丸が3つある。

4列目は大丸の上にU、そして小丸が2つ、中丸が1つ、大丸が2つある。

5列目は大丸の上にX、そして小丸が2つ、中丸が2つ、大丸が1つある。

ほかにも手がかりはないか周りを見渡したがこれといったものはない。

いったいここのどこにメモの1部が隠してあるのだろう？全く分か

らない。

「視力検査の用紙の大丸の上のアルファベットが怪しいわ。」
「確かに。ていうか音楽室に視力検査の用紙があること自体おかしいし。」
千里が何か発見した。
「このコンセント、何かのコードパターンみたい。えっとほかに何か・・・あった！」
説明書きのようだ。

正しいと思ったところにこのコンセントを差せ。まちがえた場合は死んでもらう。各教員に渡した「緊急警戒書」をよく見ればわかるはずだ。

僕はうんざりしてつぶやいた。
「意味わからん」
その途端、千里が叫んだ。
「わかった！」
「えっ、で正解は？」
「2列目よ」
カチャリ。千里がコンセントを差した。すると視力検査の用紙がはがれその壁から一つの紙がおちた。
僕は唖然として千里に問いかけた。

「なぜ・・・だ？」
「ま、それは自分で考えるのよ」

わけのわからないままメモの一部を拾い上げ、理科室に向かった。
理科室のカギを開けた。血オオトカゲが2体いる。さすがに千里はバールでは倒せそうにないのでコルトパイソンを渡した。

を血オオトカゲをソウドオフとコルトパイソンで撃ち殺し、謎について考えた。
今度もやはり見立ちにくいところに説明書きがあった。
黒い世界を超えよ。その先にメモあり。なおこれは二人係でしかできぬ。

今度は僕がひらめいた。
「このスライド式の黒板のことじゃないか？」
スライドさせるとあるはずのない部屋から光が差し込んできた。光が差し込んできた部分はひとり分のスペースがある。高い位置にある。

「肩車するからさ、早くメモを取って戻ってきてくれ。」
「わかった。上る間がんばってね井野君。」
千里を肩車し、向こうにくぐらせた。戦っている音がする。思わず叫んだ。
「だいじょうぶか！」
叫んでから数分が経った。死んでしまったのか？そう思った矢先、理科室の一つの床が開いた。
そこから千里がひょい、と顔を出した。
「よかったぜ」
「少し危なかったけどね」

続いて図工室、図書室、体育館と難なくクリアした。メモを解読するため保健室へ向かった。
保健室に近い、まだ調べていない校長室が目に入った。一応調べてみることにした。
中に入ると思ったより整っていた。校長先生の机には日記と何かの兵器のパーツがあった。

日記を読む。けっこう新しい文だ。

４月４日　ＮＢ実験成功
我々の協力とあの方と共に研究したＮＢ実験が成功した。市原いや日本中が壊滅することだ。万が一生き残った強きものにチャンスを与える。家庭科室には研究所につながる通路がある。しかしその通路を開くにはコンピューター室でパスワードをうち込んでロックを解除しなければならない。あと最強のレールガンをあたえよう。１つはここにあるがもう１つは３階のどこかに隠した。幸運を祈る。
斉藤正行

「研究所か・・・しかもあの方と共に、か。あの方って・・・黒幕？」
「やっぱりグルだったんだね」

学校は事件の黒幕とグルだったに違いない。研究所がこの学校の家庭科室とつながっているということが何よりの証拠だ。だが脱出ルートということは変わりない。
僕はレールガンについて考えた。電気を発射させる兵器。心強い最強の武器だ。取りに行った方がいい
「レールガンを取りに行くぞ」
僕らはレールガンを探しに心当たりのある６の１に向かった。
予想通りレールガンのパーツがあった。これで最強の武器が手に入る。
その最強武器の試しにしてくれ、とでも言っているかのように巨人が教室に飛び込んできた。
まずい。急いで組み合わせないと。千里が渡したコルトパイソンで食い止めている。
ついにレールガンが完成した。スパークを発射した瞬間、手がしびれて後ろに倒れた。すさまじい衝撃だ！巨人を見ると巨人は上半身

が吹っ飛び、動かなくなっていた。
「ざまーみな」
僕はそう吐くとコンピュータ室に向かって走り出した。

メモを求めて（後書き）

少し長くなりました。音楽室の謎解きの理由は「緊急警戒書」に音楽室のメモの一部は「U」となっていました。という事なので視力検査の用紙の４列目「U」と同じ原理のものコンセントの２列目を選べばいいわけです。

解き明かされる秘密

「よし！ロックが解除されたみたいだ。」

不自然に1台だけ電源が入ったパソコンに「メモ」に書かれたパスワードを打ち込んでいる。

そう、「メモ」とは研究所へのフタのロック解除のパスワードだったのだ。

となると「遺産への入り口」とは研究所ということになるだろう。

研究所にはきっと脱出ルートがあるはず。家庭科室からいけるようだ。

僕らは家庭科室に向かった。

家庭科室には驚いたことにゾンビがいない。感染が始まったとしたらここに大勢いるはずなのに、だ。

家庭科室の普通とは違うフタを探した。千里に探すのは任せ、僕は隼勇に携帯電話を掛けた。

「どうした？なにかあったのか？」

隼勇が電話に出る。無事なようだ。

「脱出ルートを見つけたんだ。家庭科室からいける。早く来いよ」

「家庭科室か・・・。ここからじゃたぶん遠いな。先に行っていてくれ」

「わかった。あとで合流しよう。」

電話をし終わった調度に千里が研究所へのフタを見つけたようだ。

フタを開けるとものすごい悪臭がした。悪臭にこらえながらやっとのことで言った。

「僕が先に降りて安全を確認してくる。少し待っていてくれ」

暗闇に続いているハシゴに足を掛けた。かなりの高さだ。足を踏み外したら命はないだろう。

・・・・・真っ暗だ。ここが本当に研究所なのだろうか？非常食の貯蔵ではないのか？

とりあえず周りの壁に触れた。土の感触を手に感じる。やはり貯蔵庫なのか？

そう思いながら数分壁を確認していると何かのくぼみに触れた。スイッチのようだ。

スイッチを押すと薄暗い、電灯が機能した。ここを照らすには十分だ。

安全と思い、千里を呼んだ。合図が聞こえたようでハシゴに足を掛ける音がした。

千里が下りてくる間も周りをよく調べた。隠し扉か何かはないか？

足元と見てみると大量の缶詰、カップメン、カンパンなどの食料や水などの飲み物などが透明の冷蔵庫に入っていた。これらはすべて非常食だろう。

しかし一向に隠し扉らしきものは見つからない。そのうちに千里が下りてきた。

「ここって・・・研究所なの？」

「いや、非常食の貯蔵庫だな。ちくしょう！」

怒りのあまりハシゴから正面の壁を蹴っ飛ばした。蹴りが当たるとなぜか鉄の鈍い音がした。

「なんだ？」

僕が不思議に思っていると千里が手でその壁を調べ始めた。

「空洞になってる。この薄い土の壁の向こうには鉄製の扉がある」

僕は足で周りの土を蹴散らした。何回か蹴ると土がみるみるはがれ、鉄製の扉が現れた。

「ほんとだ。やっと見つけたな」
鉄製の扉を開け、ようやく研究所に足を踏み入れた。
入って少し歩くと久しぶりにゾンビに出くわした。姿は研究員だ。
肉が腐っていて悪臭を発している。
しかし肉が腐ってやわらかいため打ち込む弾が少なくて済んだ。
さっさと倒し、一つのドアを開け、中に進んだ。休憩所のようだ。
ゾンビはいないが死体が数体ある。
少し休憩し、千里にある程度の武器を渡し、持ち物を確認し合った。
俊樹・・・ニューナンブＭ６０、ソウドオフ、レールガン、救急箱、ハ?４０、シ?7
千里・・・コルトパイソン、グレネードランチャー、、グ?5、消毒液、包帯、コ?9
立ち上がって周りを調べると研究員の机にノートがあった。「ＮＢ実験について」と書かれている。
４月４日　深夜０時１０分
今この瞬間、ＮＢ実験が成功した。この実験によりＮウイルスとあともう一つを生み出すことができた。
Ｎウイルスは感染すると源のウイルスとは異なり感染者が化け物と化する。
さらに感染者は前よりも恐ろしい突然変異を遂げる。さらに突然変異後はバイオ体を見極め、感染していない生物を殺し続ける。
もう一つ特徴があり、感染者は肉体を４回ほど再生し、再び活動することができる。
上半身と下半身に分かれると分裂しそれぞれまた活動することができる。
しかし、下半身で再生した肉体は思うように動かなくなる。

どちらとも格段に恐ろしくなったという事だ。

Nウイルス・・・何の略だろう?学校の地下ではこんな恐ろしいものが作られていたようだ。

ノートを証拠品としてしまい、休憩所を出た。

今、研究所の地図を探している。もしかしたら緊急避難列車か無線室があるかもしれない。

そしてついに研究所の案内板を見つけた。地図には少し行った先に緊急避難用プラットホームと書かれている。

「やった!これで助かるぞ!」

「ええ!これでやっと悪夢が終わるのね!」

「これで悪夢ともおさらばだ!」

しかしこの嬉しさが1発の銃弾によって消え失せた。

一瞬、何が起きたのかわからなかった。が、すぐに今、ある現状に気が付いた。

千里が倒れている。何者かが放った銃弾は僕のほおをかすめ、千里に命中した。

ショックで呆然と立ち尽くしていると銃弾を放った何者かが話しかけてきた。

「ほう。さすがだ。よく銃弾をかわしたな。」

銃弾をかわした?そんなバカな。謎の人物は千里を狙ったくせに―

――――――――

「だれだ?」

やっとのことで声を出すと謎の人物は姿を現した。

「私が誰だかわかるか?井野俊樹君よ。」

その見覚えのある人物に僕は驚いた。

「斉藤校長先生!?」

「そのとおり。私は君の通っている小学校の校長の斉藤正行だ。」
僕は銃を構えて今でも撃って来そうな校長先生に問いかけた。
「なぜ・・・千里を撃ったんです?それに僕が銃弾を避けたとか言ってましたよね?」
校長先生は冷静に言った。
「それはだな、ある組織の黒幕と関連がある男に君たちの抹殺を頼まれてね。
4月4日に殺せと命令されたのだ。」
さらにもう一つの疑問を問いかけた。
「この学校は事件の黒幕とグルだったのか?」
そうだ、とまたもや冷静に校長先生は答えた。
「2年ほど前、4月4日に発行先不明の封筒が送られてきた。恐る恐る開けてみると中にはごく普通の手紙が入っていた。その手紙にはこんなことが書かれていてね、
(我々の計画に協力してもらいたい。まずは君の学校の家庭科室を2か月間立ち入り禁止にしてほしい)
さらに驚いたことに協力して実験が成功すれば永遠の富を与えるというじゃないか。最初はためらったがね、望みにかけてみた結果、NB実験は成功した。今日の0時05分だ。4月5日に私は永遠の富を授かるんだ。」
ようやく確信がついた。この小学校と黒幕はNB実験を研究した。いや、この小学校ではなくこの学校の校長というべきか。ごく普通の先生たちはきっと騙されていたのだろう。
「雇っていた先生たちは騙していたのか?」
「ああ、だましていたぞ。一人1億と聞いただけで私に協力した。しかし、手紙のことは黙っていた。疑われぬようにだ。緊急事態には教員を使って男は巨人に、女は上半身活動獣にしようとした。」
僕は今までよりも大きな声で叫んだ。
「住民を殺して何も思わないのか!一人一人笑ったり泣いたりと生きていたんだぞ!」

途端に校長先生の表情が変わった。
「おしゃべりはここまでだ。それに俊樹君、君も元は人だったゾンビを殺していたではないか。
さて、そろそろ君にも死んでもらうとしよう。」
校長先生の銃口が僕の心臓に向く。
「さらばだ！」

解き明かされる秘密（後書き）

次で最終回になります。

夜明け

1秒1秒が地獄だ。死ぬなら早く終わらせたい。しかしその時は一向にやってこないのだ。
恐る恐る目を開き、銃で僕を殺そうとしている校長先生を見た。
視線の先にはなんと校長先生が倒れていた。校長先生から血が少しずつ広がっていっている。
いったい何が起きたのだろう?校長先生より奥に目線を向けると見覚えのある姿が見えた。
そう、親友の隼勇だ。この状況はすぐに分かった。隼勇が銃で校長先生の心臓を撃ちぬいたのだ。

「隼勇!」
名前を叫ぶと隼勇が駆け寄ってきた。
「間一髪っだったな。」
「本当にな。助かったぜ。」
隼勇は僕から視線をそらし、後ろに血だらけで倒れている千里を見た。
「おい俊樹、千里は早くしないと危ないんじゃないか?」
僕は走る体制をし、言った。
「わかってる。だから千里を助けるために薬品庫に行ってくる。」
「銃で撃たれたんだろ?そこらの薬じゃ助からないぜ。」
「大丈夫だ。休憩所に薬品庫のデータがあったんだ。そこには(どんな傷でも治せる薬がある)と書いてあった。」

その途端、サイレンが鳴り響いた。
「証拠隠滅装置作動。研究所の各部に仕掛けられた爆弾が作動します。直ちに避難してください」
僕も隼勇も絶望に包まれた。心臓の心拍数があっという間に最高ま

で上がる。校長先生が最後の言葉を発した。

「お前たちは必ず消えてもらうぞ。ここで脱出できたとしてもあの方が必ずお前たちを・・・」

校長先生は絶命した。欲望に振り回された哀れな死に方だ。

隼勇が励ましの言葉を掛ける。

「頑張れよ！必ず生きて脱出しよう！列車と千里は俺に任せな！」

僕は走りながら言葉を返した。

「ああ、生きて脱出しよう！」

薬品庫についた。普段とは姿の違うゾンビと血オオトカゲがいた。ゾンビも血オオトカゲもソウドオフで仕留めた。ニューナンブＭ６０とソウドオフの銃弾は完全に使い切った。

薬品庫を手当たり次第に探した。なかなか見つからないが数分後ようやくそれらしき物を見つけた。

名前札のプレートはＮウイルスの影響で読めないが、データで見た写真と同じだ。

開けようとしたが電子ロックがかかっていて開かない。パスワードの入力が必要らしい。

「？ｍｂｒｅｌｌａ」と入力した。しかしエラーが発生してロックが解除されなかった。

僕はこの事件といえば、と考えた。頭に浮かんだものは――――――バイオハザード。

アルファベットを使ってバイオハザードと入力した。カチャ、と音がした。ロックが解除されたようだ。

「作動５分前です。直ちに非難してください」

ワクチンを確認し、全速力で隼勇と千里が待つプラットホームに向かった。

「作動3分前です。直ちに非難してください」
プラットホームが見えてきた。隼勇が列車から手を振って叫んでいる。

「おーい！こっちだ！いつでも発進させられるぞ！」

希望の光が見えてきた。ああ、これで助かる。僕たちは生き抜いたんだ――――――――
もういるはずのない、死んだはずのあいつに希望の光を遮られた。巨人だ。天井を突き破って目の前に舞い降りた。そして、身をかばう間もなく、吹き飛ばされた。

「ううっ・・・・・・」

痛みのあまり咳き込んだ。が、すぐに戦闘に切り替える。レールガンを構えた。
レールガンを連発するがびくともしない。強すぎる。また殴られ、吹き飛ばされた。
だめだ。いくらうってもびくともしない。このままやられるのか？
そんなのはごめんだ！

「こいつを使え！」

隼勇の言葉に我に返り、隼勇の投げた兵器を視界にとらえて確認する。何かの兵器のようだ。手に取り素早く確認した。先端にミサイルがついている。これは・・・かなり強力だ！巨人の攻撃をかわしつつ、膝をつき、ミサイルのついた銃を構えた。狙いを定め、引き金を引く？？？？？？
その瞬間、ミサイルが勢いよく飛び出し、巨人に命中した。巨人は

木端微塵になり、肉や骨、さらに頭が飛び散った。ミサイルのなくなった兵器を投げ捨て、列車に飛び込んだ。
だが、これで安心はできない。千里が死にかかっている。早速、「どんな傷でも治せる薬」を注入した。
しかし、1分たっても目を覚まさない。さらに2、3分と経った。
死んでしまったのか？
あきらめかけたその時、千里の腹の出血が止まり、傷がみるみるふさがった。表情も和らいでいる。
ふーと息を吐きだし、列車のイスに腰掛けた。隼勇が安心して一言いう。

「やっと・・・終わったな」
「ああ。とりあえずこれで一息つける」
隼勇がため息をつきながら続けた。
「結局、事件の黒幕は分からなかったな」
「ああ・・・でも生きて脱出できたことだけでも奇跡何じゃないか」
僕らは列車に身を任せた。安楽の地に着くまで？？？

夜明け（後書き）

一応これでこの話は完結ですが、隼勇は何をしていたかという事でまだ続くという事にします。

裏の戦い・パート1

僕は中村隼勇。僕は井野俊樹、細坂千里と共にバイオハザード化した市原市を脱出した。
俊樹と千里もいろいろな物語があったようだが、僕にもこんな物語があった――――――――
卒業式前日、友達数人と親友の俊樹が遊びに来た。時を忘れ、遊びに夢中になっていると俊樹の帰宅の時がきた。

「あ、もうこんな時間か。そろそろ帰るよ。」
僕は俊樹に手を振り、別れを告げた。
「じゃあな。気をつけろよ。」
腹が減っていた。学校で給食を食べてから6時間ほど過ぎていた。
台所に食べるものを取りに行くか。
階段を下りながら台所にいる母に食べものについて問いかけた。

「母さん、お腹すいたんだけど何か軽い食べ物ない?」

返事がない。聞こえなかったのだろうか?とりあえず台所に行ってみた。
母は確かにいた。イスに座り、テーブルに顔を伏せている。顔をのぞいてみた。真っ青になっている。寝ているわけではなさそうだ。
風邪気味なのだろうか?

「具合でも悪いの?」

母がゆっくりと目を開いた。だが、いつもの目ではない。まるで獲物を捕らえたような目だ。
その瞬間、母が僕の足にかみついてきた。間一髪、足をひっこめた

ため、服を引きちぎられるだけで済んだ。母はもう人間ではない、と思った。つまりすぐさま動かなければ自分の身が危ない。だが恐怖のあまり体が動かなかった。その間も母はぐんぐん近づいてくる。まずい！何とか金縛りを時、後退し続けた結果、僕はキッチンまで追い詰められた。母が「終わりだ」とでも言っているように見える。本当に何とかしないと終わりだよ！次の瞬間、母が飛びかかって来た！とっさに反応し、かわす。母がキッチンの下戸棚に激突した。あまりにもすごい勢いだったため戸棚が壊れ、母がそこでつっかえる。しばらくは抜けられないだろう。今なら倒せる・・・でも相手は母だ。直接、手など下せない。逃げるしか方法はない。だがある程度の武器を持っていかなければすぐに僕はやられてしまう。僕は辺りを見渡し、何か使えるものはないかと確認した。すると調度、母の突っ込んでいる戸棚の上に包丁があった。

テーブルの上に置きっぱなしだったショルダーバッグを手に取り、そこに武器や食料などをショルダーバックに詰めた。武器といっても今の所、包丁しかない。屋根裏に古びたチェーンソウと斧があったが恐ろしくてとても扱いたくない。食料は缶詰４個とコンビニで買ってあったカルビ弁当ぐらいしかない。なぜか冷蔵庫にあった食べ物はほとんど腐っていた。母が「死んでしまった」ことと関係があるのか？

玄関を勢いよく開ける。その拍子で玄関に群がっていた5体のゾンビが倒れる。起き上がらないうちにそそくさと逃げ出した。今、川沿いに走っている。ゾンビを突っ切りながらだ。目的地は・・・学校だ。

学校なら広くて役立つものがきっとあるだろう。おそらく避難民がいるに違いない。そこで救助を待てばいい。歩道橋を上りかけた時だった。１台のトラックが突っ込んできた。引かれる！

また間一髪のところでかわしたため、トラックとの衝突を避けるこ

とができた。
が、一休みなどしていられなかった。今の騒ぎでゾンビが大勢、こっちに向かってきている。
急いで立ち上がり、道を確認した。学校への道はゾンビで埋め尽くされ、通れない。後ろに逃げるしかなさそうだ。全速力で逃げ、僕は一つのバーに駆け込んだ。すぐさま周りを見渡すとひとりの男がいた。
この店の店主だろう。逃げる準備をしていて武器や食料、通帳などを大きなカバンに詰めている。
その男が僕に気が付き、ボウガンを撃ってきた。が腕の服を破いただけだった。男は頭から足の先まで僕の姿を確認すると安心したらしくボウガンを下げた。そして悪かった、と謝ってきた。

「なにしろこんな事態だ。見まちがえてしまってな。」
「いえ、いきなり駆け込んだ僕も悪かったんです。」
男が話を変えた。そして自己紹介をした。
「俺は澤原太一。ここのバーの経営者だ。息子もいたんだが家出してしまってな。おっと、関係ないことまでしゃべってたな。ところで君の武器は？」
「えっと、包丁・・・です。」
「銃が必要だな。といっても・・・操れるわけないか」
「たぶん大丈夫です。撃ち方ぐらいは分かってるので」
「そうか。ならば念のためこれを」
そういって銃器を一つ、渡してくれた。これは・・・ワルサーＰＰＫ？なぜドイツの銃を？とりあえずお礼を言うのが先だ。

「ありがとうございます！」
「そのハンドガン、昔俺が警官だったころに親友がくれてな。調度、退職してバーを始める時だ。その親友にとってワルサーＰＰＫは命といってもいい。だが、親友は二丁のうち一丁を「友情の証だ」と

いってくれた。まあそれ以来、彼とは会っていないがな」

突然、背後で扉が壊れる音がした。数十体のゾンビがなだれ込んでくる。僕は銃を構えた。途端に澤原太一さんが言った。

「君はまだ若い。ここは俺に任せて裏口から逃げろ。」

そういってボウガンを僕に手渡した。

「でも・・・もう澤原さんはナイフ以外武器がないじゃないですか。」

「大丈夫だ。俺はナイフの達人だからな。ナイフ1本あれば何とかなる。」

穏やかにほほ笑んだ澤原さんの気持ちを無駄にはできない。僕は裏口から外に飛び出した。

バーから少し離れ、持ち物を確認した。

ワルサーＰＰＫ、ボウガン、包丁、消毒スプレー、カルビ弁当、缶詰、

今度は違うルートで学校へ向かうことにした。

裏の戦い・パート2

ゾンビの群れを走り抜ける。ゾンビの数は思ったより多い。学校までは約1?だ。

敵は多いが弾の心配はいらなかった。ゾンビに殺られた警官たちの死体から予備弾を手に入れることができたからだ。それに弾丸節約のため、ゾンビはできる限りかわしている。さらに一般人男性の持っていた死体からある箱を手に入れた。中を確認すると工事用のダイナマイトが!この男性、どうやって盗み出したんだ?まああまり気にするほどの事でもない。学校が見えてくる。今の僕は返り血にまみれている。校舎に入ったら鏡だけには映りたくない。しかし、そんな考えは一瞬で消え失せた。ゾンビより恐ろしい敵の出現よって。そいつはゆっくり僕の近づいてきた。数は1・・・2体だ。血生臭い、体臭と息を発している。ゾンビ犬だ!その途端、ゾンビ犬が飛び掛かってきた。こちらもとっさにハンドガンを構え、引き金を引く。

運が味方したことによって銃弾がゾンビ犬よりも早く、銃口から飛び出した。銃弾はゾンビ犬の頭に命中し、絶命させた。残るは1体。もう1匹も楽勝だろう。僕は再び銃口をもう1体のゾンビ犬の頭に合わせた。引き金を引けばこの化け物ともおさらばだ。だが、今度は幸運の女神は向こう側に微笑んだ。引き金を引いても銃弾の飛び出す音がしない。壊れたのか?いや、違う。弾切れだ。こんな時に・・・くそ!

ゾンビ犬が再び、飛び掛かってきた。かみつかれる寸前の所で蹴りをぶち当てた。ゾンビ犬は1mほど吹き飛んだが、すぐに足を地面に立てる。銃の扱いがそれほどうまくない僕には起き上られる前にマガジンをセットすることなど間に合わないだろう。起き上るゾンビ犬から目をそらし、に視界に見える学校に走った。学校に入れば

ひとまずは安心できる。

１０ｍを走りきると後ろでウウッ、とゾンビ犬がうなる声がした。起き上ったのだろう。なおさら急がなければ命はない。追いつかれる前に何とか学校の正門にたどり着いた。これで助かる。そして汗だくの顔を上げた。立て続けに幸運の女神は向こうに味方した。運の悪いことに正門はバリケードと木の板でふさがれていた。というより当り前だろう。この騒ぎだ、意識しなかった僕の失敗の結果なのだ。

追いついたゾンビ犬にタックルされた。その拍子に倒れる。立ち上がろうとしたが無駄だった。

ゾンビ犬に伸し掛かられ、逃げ場を失った。もう終わりだ。幸運の女神は味方してくれないだろう。

出来れば一瞬で息の根を止めてほしい。あとはゾンビ犬に始めに首にかみついてくれと祈るまでだ。

その時、１発の銃声が鳴り響いた。生存者か？校舎か道路にいる警官か先生か？

ゾンビ犬に視線を向けると血が顔に降りかかる。ゾンビ犬は頭を撃たれ死んでいた。

さっきの銃声だろう。喜ぶというよりも命の恩人の人物を探した。道路を見たがいない。

今度は校舎を見た。すると命の恩人と思われる人物の姿をとらえた。女性だ。白いＴシャツにサバイバル用のズボンを履いている。

その人物は呼び止める間もなく、風のように去ってしまった。警官ではないだろう。市民か？

いや、市民なら自分の心配しか考えず、目にもくれないだろう。先生でもなさそうだ。

この謎の命の恩人はあとで考えることにして学校の入り口を探すことにした。

しばらく立ち止まって考えると学校の裏口が頭に浮かんだ。裏口ならフェンスがあるのでバリケードがあったとしても乗り越えて侵入できるだろう。避けて通れるゾンビをかわし、行き先をふさいでるゾンビを倒し、裏口へ向かった。それほどかからず、裏口についた。記憶通りバリケードはあるがフェンスもあった。すぐにフェンスに足を掛け、慎重に乗り越えた。とりあえず、学校に入ることはできた。

学校についてすぐに向かった先は職員室の廊下と音楽室をつなぐ階段だ。ここから1番近い。
もう人間ではない先生たちを撃ち殺すのは気が引けたが、生きるためだと自分に言い聞かせ、なるべく最初の1撃で息の根を止めた。さっきの仕返しのために用意されたのかゾンビ犬がちょうど2体、階段のところにいた。ゆっくりじわじわと痛めつけながら2体のゾンビ犬を倒した。そして階段を上る。
階段を上り終え、ガラス戸を確認した。壊れた木の板がドアの周りに釘で打ち付けられ、真ん中には一人分の穴がぽっかりと開いている。おかしい。バリケードがもともとはあったようだ。だが人間ではない何かに無理やり破壊されたみたいだ。きっとバイオハザードで言うボス的な存在のやつだろう。
不自然な穴をくぐり、廊下を進んだ。電気はショートしそうだがついている。音楽室を調べると警官の死体があったその死体からハンドガンの銃弾を手に入れた。

音楽室を出て理科室に向かった。理科室の着き、扉に手を掛けたが、カギがかかっていた。
カギを取りに行くため、職員室へ走った。廊下にいるゾンビをなぎ倒しながら。
途中、ゾンビ以外に敵に出くわした。舌が長く手に鋭い爪を持ち、トカゲのようなカメレオンのような姿で赤い化け物だ。襲ってくる

と思い、ボウガンを構えたが、その化け物は僕に気が付かず、1階の方へ行ってしまった。目が見えないようだ。赤い体で這い這いしているみたいだから赤這い這いとでも呼ぶか。音を立てなければ大丈夫そうだ。そしてやっと職員室についた。職員室は普段の何倍も静まりかえっている。ドアに手を掛ける。しかし何かに引っかかって開かない。もう一度思いっきり引くと開いた。

それと同時に数十体のゾンビがなだれ込んできた。予想外だ！後退し、ハンドガンを構える。5体のゾンビにクリティカルヒットさせ、残りのゾンビの相手をする。足に銃弾を浴びせ、這いずり状態にさせた。その上から包丁で頭をつぶし、葬った。安心して立膝をついた。が、直ぐに警戒心が甦った。何者かがこっちを見ている。暗くてよく見えない。ハンドガンを構えた。

その人物は僕の名を嬉しそうに言った。

「隼勇！」

ようやく誰だが分かり、銃をおろした。そう、親友の俊樹だ。

「俊樹じゃないか！無事でよかった！」

二人で短い時間、再会を喜び合った。あまり長くは喜んでいられない。この状況をどう切り抜けるか話さないと。

両親の話を始めに話し合って二人そろって泣き叫んだ。そして本題に入る。

まず僕が問いかける。

「とりあえずどうする？」

俊樹が提案を出した。

「二手に分かれて食料とか道具とか集めて屋上か地下で救助を待つ、って言うのはどうだ？」

僕は否定した。

「それはまずいと思う。ゾンビならバリケードで防げるけどもっと恐ろしいボス的な奴はダメだ。

こういうのはどうだ？下水道を探して安全な市に逃げるってのは

？」

俊樹がうなずく。

「それが一番安全かもしれないな。よし。二手に分かれて2時間後に保健室で落ち合おう。」

話し合いが終わり僕はと3階と屋上、俊樹は2階と1階とに分かれることになった。

職員室で担当場所のカギを取り、まず2階半分を調べることにした。まず、5の1を調べる。包帯があった。誰かがけがをしたときに使ったものだろう。ほかには特にない。

5の2を調べた。何かのカードキーがある。「屋上ハシゴ制御」と書かれている。

その時、廊下でガラスの割れる音がした。ゾンビか？いや、ゾンビの声が聞こえない。別の敵だろう

ボウガンを構え、警戒態勢を取り、廊下に出る。サッと辺りを見渡す。しかし何もいない。割れたガラスから真正面の天井から赤い液体が垂れているだけだ。ん？赤い液体？これってまさか・・・

血だ。その瞬間、天井からかん高い声を上げた赤這い這いが落ちてきた。

とっさにボウガンを構える。が、向こうの方が行動を早くとり、僕の足に舌を巻きつかせた。

舌に足を引かれ、転倒した。その拍子にボウガンを落としてしまった。ハンドガンに切り替え、連発するがひるまない。今度こそ終わるだろう、と思った。

またもや銃声が鳴り響く。今度は連射の音だ。サブマシンガンを連発しているらしい。

赤這い這いが倒れ、そこから血が広がる。立ち上がり、割れた窓から外を見るとヘリコプターが飛んでいた。

ヘリコプターから一人の人物が下りてきた。軍服を着ている。男性のようだ。

その人物は僕を見て防護マスクを外し、言ってきた。
「死にたくなかったらアメリカ合衆国の俺たちの秘密組織へ来い」

裏の戦い・パート2（後書き）

今回は謎の人物が登場しました。女性はまだ正体を明かしませんが迷彩服の男は次の話で正体がわかりますので。

裏の戦い・パート3

その男は僕に近づいて来る。念のためいつでも攻撃できるように警戒態勢を取った。
僕が先に言葉を言った。
「あなたは？」
男は僕の前で立ち止まり、こう話した。
「俺はドラッグ。ある組織の任務を終えて偶然、この学校の上を飛行していたところ、君を見かけた。
死人を見るのはもううんざりだからな。君を助けたんだ」
僕は希望に満ちあふれた声で言った。
「ということは救出に来たんですか！？」
ドラッグがうなずく。
「そうだ。分かったんなら急ぐぞ。ほら、早くヘリに乗れ」
そう言うドラッグを引き留める。
「ちょっと待ってください。もう一人、僕の親友がいるんです。連れてこなきゃ」
しかしドラッグは首を振った。
「悪いがそれはできない。君は今起きている事態に気付いていないようだな」
何が起きているのかわからず顔を下げて考え込んでいると、ドラッグが双眼鏡を渡してきた。
「そいつで外を見てみろ。学校の正門をだ」
双眼鏡のレンズに目を当て、正門に向ける。正門には何かが群がっている。しかし双眼鏡のレンズが汚れていてよく見えない。
もう一度汚れをよく落として見てみた。そしてようやく今の事態に気が付いた。
数えきれないほどのおぞましいゾンビたちが正門に押し寄せている

のだ。正門に作られているバリケードが今にも崩れそうになっている。あと1時間もしない内になだれ込んでくるだろう。
おぞましい光景から目をそらし、ドラッグに向き直った。双眼鏡を返し、両方とも沈黙が数分続いた。

ようやくドラッグが口を開いた。
「どうだ、見えたか?数えきれないほどの化け物を。時間がないんだ。一緒に餌食になってもいいくらいの親友なのか?残って死ぬなら別に構わない」
僕は頭をフル回転させた。今まで色々と支えてくれた俊樹。そんな俊樹を見殺しにできるはずがない?
しかし化け物の餌食になるのもごめんだ。でも希望がないわけではない。
心に決めた決断をドラッグに告げた。
「僕はここに残ります。わずかな希望を信じて。死ぬときは親友と一緒だ」
ドラッグはわかった、とつぶやき、否定も何もしなかった。
「とにかく生きれ。あんな化け物共に食われるなよ。いいな?」
僕はヘリに乗り込もうとしているドラッグにうなずいた。
「おっと、それには強力な武器がいるな。これを持って行け。役に立つはずだ」
そう言って持っていたサブマシンガンとマグナムに使える銃弾をくれた。サブマシンガンはかなり重い。扱えるか?マグナムは持っていない。

ヘリが上昇する。そして夕日がかすかに光る空に消えていくヘリを僕は眺めていた。

ドラッグのヘリが空に消えて言った後、僕は新たに脱出に役立つものを探した。6の1。ここは僕や俊樹がいた教室だ。今は少し前の

面影もほとんどない。扉を引いたが開かない。カギがかかっている。ほかの教室は開いているのになぜだろう?そういえば職員室には6の1のカギだけなかった。

仕方がなく、隣のクラスの6の2を調べることにした。ドアを引いた。今度は開く。6の2には赤這い這いが3体いた。音を立てないよう、ボウガンを構えた。そして脳天に矢を放つ。1体を仕留めた。悲鳴を上げたが、ほかの2体は全く気が付かなかった。ボウガンなら音が小さいため、気が付かないのだろう。残りの2体を始末し、先生の机を調べた。日記がある。最近、書れた文を読んだ。

4月3日

校長が極秘で各教師に配布した銃を回収すると言い出した。いったいなぜだろう?

遺産への入り口のための資源にでもするのだろうか?とにかく愛用のマグナムを取られたので腹が立つ。校長室へこっそり忍び込んで取り返そうかと考えている。しかもいきなり4月4日の用事はすべてキャンセルしろ、だなんて・・・そのせいで彼氏とのデートを台無しにされてしまった。あとで落とし前つけさせてもらわないと。まあ、これで遺産への入り口が開くのならばた安いものだ。

ここで終わっている。遺産への入り口ってなんだ?大体、女の先生が愛用にマグナムとか・・・その時、後ろでガサッと音がした。敵か?銃を構えて後にふっと振り向く。しかし敵ではなかった。一つの紙飛行機がある。どこから飛んできたのだろう?紙飛行機を手に取り、崩してみた。中には誰かの口紅を付けた後と文が書いてあった。僕へ向けてだろうか?とにかく、読むことにした。

中村隼勇に向けて

もう気づいていると思うけど私は1度、あなたを助けた。それと同時に任務中に姿を目撃された。

本来ならば任務中に姿を見られた場合、目撃者を始末しなければならないところだけれどあなたはまだ卒業したばかりの小学生。いや、中学生というべきね。もう一つ、理由があるわ。
それはあなたが昔、愛した人に見えたこと。だから一応忠告と脱出方法を告げる。
ゾンビがバリケードを破るまではせいぜい３０分。脱出ルートは料理関連の場所に隠されている。
最後に言うけどもうあなたを助けることはできない。任務を終えたからよ。

・・・・この送り主は誰だ?昔愛した人に目えた?何の任務を終えたのだろう?
あまり長くは考えていられない。タイムリミットは３０分じゃないか!急がないと!
とりあえず、担当場所で最後の屋上へ行くことにした。

月の明かりが不気味にも輝いている。４月にしては風が冷たい。早くこんなところを調べ終えたい。
屋上のハシゴのカードスロットにカードキーを差し込んだ。ハシゴが下される。
ハシゴに足を掛ける。すっかり錆びついて今にも壊れそうなので静かに上った。
屋上に出た。結構広い。奥には一つの建物がある。ポンプの制御室だろう。
建物に向かって走った。風のせいでなかなか進めない。何かが近づいてくる音がした。
どんどん、近づいてくる。警戒をし、サブマシンガンを構えた。
警戒は正解だった。明らかとなった正体は見るからに化け物だ。背は僕より大きく高く、服は着ておらず全裸だ。髪はなく剥げていて両手には鋼鉄のグローブを着けている。脳天や胸、腹には小さな傷

があった。巨人だ。巨人は僕に気が付いたようで走ってきた！避けられず、腕をつかまれ、制御室の方へ投げられる。
サブマシンガンを連射する。効果はあるようだが、倒れない。そしてまた腕をつかまれた。
投げ飛ばされる。落ちる！ぎりぎりのところで落ちずに済んだ。
サブマシンガンでは倒す前にこっちがやられてしまう。何か策を考えなければ！
ショルダーバックをあさった。するとマッチと学校に着くまでに拾った工事用のダイナマイトを手についた。ここで僕は撃対策をひらめく。これはいい案だろう！
ダイナマイトにマッチで火をつけた。3本に急いで火をつけ、巨人の周りに三角形上に
放り投げた。順番につけた2個のダイナマイトが爆発し、巨人の足場が崩れる。
僕の考えた案とはダイナマイトを古びた学校のコンクリートの急所で爆発させ、屋上の1部ごと巨人を落とすという作戦だ。これならさすがの巨人もくたばるはずだ！。
しかしそううまくは行かなかった。最後の1本のダイナマイトがなかなか爆発しない。
その間にも巨人は崩れかけている足場から出ようとこっちに向かってくる！
やられる！きっと導火線に火がちゃんとついていなかったのだろう。
今度こそこの世ともおさらばだ―

そう思った瞬間、制御室の屋根から銃弾が放たれた。その銃弾はダイナマイトに命中し、はじけた。
途端にダイナマイトが爆発し、崩れかけていた足場が巨人を巻きこんで崩れ落ちた。
すかさず、制御室の屋根を見た。1瞬、顔と姿がはっきりと見えた。
髪の長い美しい女性でゾンビ犬に襲われた時、校舎で見た時と同じ

服装をしていた。ん?どっかで見たことのある顔だな。まあいいか。なぜ助けてくれたのだろう?任務を終えてここから去ったはず。偶然、通りかかったのか?

制御室に向かった。制御室の扉を開ける。ロッカーには消毒スプレーがあった。

下水道につながると思われるフタを開け、ハシゴを下りて行った。

裏の戦い・パート４

ハシゴを下りた先には予想通り下水道があった。かなり古い。学校の汚水はここに流れてくるのだろう。そのため、吐きそうなぐらいの悪臭が漂っていた。濁った汚水を歩いて進む。ズボンがぐしょぐしょだが仕方がない。屋上の１部が壊れたため家庭科室に向かうにはここしかないのだ。ここにもゾンビはいた。しかし学校で見たのとは全く違う、迷彩服を着たゾンビだ。ドラッグと同じ、任務とやらに来ていたのだろうか？それでウイルス感染したならおかしくはない。ゾンビの中にはなぜか腹をえぐり取られてたり、下半身がない這いずりゾンビがいた。ゾンビはこんな噛み方はしないだろう。また恐ろしい化け物と僕は戦うのか？今、毒蜘蛛をボウガンで仕留めている。毒液を落としてくるので気づかれたら厄介だ。さらに毒蜘蛛の下から子蜘蛛が１０匹出てきた。こんなの相手にしているだけ時間の無駄だ。
僕は一時的、水がないところについた。休憩ついでに持ち物を確認する。

ワルサーＰＰＫ、ボウガン、サブマシンガン、包丁、消毒スプレー２本、ハ？４０、工事用ダイナマイト？2、家族の写真、カルビ弁当（二分の一）

残ったカルビ弁当を平らげ、数分ほど座り込んでから再び出発した。携帯電話で時間を確認するとあれから２０分たっていた。タイムリミットはあと１０分・・・
急いでマンホールを探さなければ！ここにもいつかゾンビが入ってくるだろう。いや、
飢えて死ぬのが先か？どちらにせよ、残酷で哀れだ。
やっとマンホールを探し当てた。マンホールのフタはそれほどがっ

ちり閉まっていない。
これなら僕の力でも持ち上げられそうだ。そして、そのまま家庭科室に向かえば問題ない。
マンホールに向かって走った。ハシゴに足を掛ける。あとは上って開けるのみだ？？？？？
しかし、うまくいかないのが現実だ。何かが横の柵を押し通そうとしている。
とっさに僕は気づき、ハシゴから飛び降りた。柵から少し後ろでサブマシンガンを構える。
柵がだんだん歪んでくる。向こうにいる何かの力で歪んだのだ。

そしてついに柵が倒され、その何かが姿を現した。通路にぎりぎり通れるほどの大きさだ。
？？？？？？亀だ。こんなのは見たことがない。僕の何十倍も大きさがある。狂暴化しているようだ。
ウイルス感染でここまで増幅したのだろう。巨大な亀は僕に迫ってきた。
とっさに僕は後退する。たまたま開いた口には血の付いた牙がぎっしりとなりと並んでいる。
血がついているのはさっきの軍事防護服のゾンビにかぶりついたときのものだろう。
サブマシンガンを連射する。が、ほとんど甲羅にガードされて効果がない。急所はないのか？
また大亀は凶器ともいえる口を開けてかぶりつこうとした。動きが遅いため楽にかわせる。
だがそんなことも言っていられない。あとがもうほとんどないのだ。
早くけりをつけなければ！
試しに開いた亀の口の中にサブマシンガンの銃弾を浴びせた。大量の血が吹きだし、大亀が悲鳴を上げる。口が急所なのか？ならばあの作戦を使えば？？？？？

「あの作戦」とは巨人を倒したときに似た作戦だ。残り2本のうちの1本の工事用ダイナマイトに火をつけ、大亀の口にぶち込む。亀の口は水分が多いため、導火線の火が消える前にダイナマイトに銃弾を撃ち込み、爆発させる、という作戦だ。これで倒せなかったらチェックメイトだ。

ダイナマイトにマッチで導火線に火をつける。大亀が口を開けた。

そしてダイナマイトをぶち込んだ。

大亀が口を閉じる前に爆破させなければ！ハンドガンを構え、ダイナマイトに標準を合わせる。

その時、大亀の口が閉じ始めるのを感じだ。くそ！今度こそ成功させてやる！

引き金を引いた。銃口から銃弾が飛び出す。ここからは時間の勝負だ。

銃弾は見事にダイナマイトに命中した。ダイナマイトが爆発し、大亀の頭が吹っ飛ぶ。血が僕に降り注いだ。

成功だ！幸運の女神は僕に微笑んだのだ！やった！嬉しさのあまり口元が緩む。

しかし、一瞬にして気持ちが変わった。あれから何分たった？タイムリミットは？携帯電話を開く。

？？？？？？3分。まずい！ゾンビ軍団の侵入までもう時間がない！

僕はハシゴに再び足を掛け、上った。そしてマンホールの穴をくぐり、地上へ出た。

マンホールは給食入荷口の前に続いた。その隣の駐車場には先生たちの車や給食センターのトラックが止まっていた。今となっては廃車同然だろう。

ここから正門が見える。正門には相変わらずゾンビ軍団が押し寄せている。あと数分でなだれ込んでくるのだ。あまり見たい光景ではないため、目をそらした。

辺りを見回していると携帯電話が鳴り響いた。すかさず出る。
俊樹だ。向こうも無事のようだ。電話の理由を問いかける。

「どうした？何かあったのか？」
俊樹がすぐさま答える。嬉しそうな声だ。
「脱出ルートを見つけたんだ。家庭科室からいけるぞ。早く来いよ。」

その声がもう聞きたくない音にかすかにかき消される。
ズシン、ズシンという何かが近づいてくる音だ。
僕は今から起こることに対し、こういった。

「家庭科室か・・・ここからじゃ遠いな。先に行っていてくれ。」
俊樹がわかった、とつぶやく。
「あとで落ち合おう。」
携帯電話の通信が切れた。これが最後になるかもしれない。

音の正体はご存じのとおり、巨人だ。屋上から落ちただけあって頭がへこみ、よろよろとよろけている。それを除けばほとんど変わらないおそらく、巨人を倒すころには僕はゾンビの餌食となっているだろう。それどころか戦いの途中で食われるかもしれない。
だがまだ希望は捨てられない。脱出ルートがあるからだ。こんなところで死んでたまるか！
巨人に背を向け、最初の入り口へと向かった。それと同時に巨人も走るのが聞こえた。
正門を突っ切る。正門から正面の時計のピロティの下を通り過ぎた。まだ巨人との距離はわずかだが、余裕がある。階段を駆け上がりバリケードを壊されてできた穴をくぐった。この穴も今となっては不思議じゃない廊下を全速力で突っ走る。廊下は走るな、と言われたころが懐かしい。つい最近だが。

理科室、理科準備室を通り過ぎたところでついに巨人との距離がわずかになった。
僕は骨を折る覚悟で2階から1階へとつながる階段から飛び降りた。
運よく、骨は無事だった。奇跡だ。なおも巨人は追ってくる。
気が付いたときには家庭科室、職員室を通り過ぎ校長室へ飛び込んでいた。袋のネズミではないか。もう遅い。校長室を飛び出す前に巨人にやられているだろう。戦うしかなさそうだ。呼吸を整え、辺りをあさる。武器はないか?僕は6の2で見た日記を思い出した。あの日記が本当ならばマグナムという強力な武器があるはず。一つの戸棚を開けた。すると銃がしまってある。これがマグナムというやつだろう。予備弾もある。その瞬間、巨人がドアを突き破って侵入してきた。マグナムにかけるしかない。
マグナムを構え、巨人のへこんだ頭を撃った。振動が結構あるが耐えた。
さらにマグナムを4、5発と撃った。残りの弾はあと1発。予備弾があるがセットしている暇などないだろう。これで仕留めなければ。最後の銃弾を放った。銃弾は巨人の頭部に命中し、今まで以上に出血させた。
巨人が膝をつき、前かがみに倒れた。どうにか倒した。
校長室を全速力で飛び出し、家庭科室に駆け込んだ。タイムリミットはきっとあと数秒だ。
一つだけ不自然なフタを発見した。これだ!フタを勢いよく開ける。その瞬間、正門の方からバリケードを突き破る音がした。いよいよゾンビ軍団のおでましか!
ハシゴに足を掛け、なるべく急いで下りた。もちろん、侵入を防ぐため、フタは閉めておいた。
どうにかゾンビの餌食にはならずに済んだのだ。

裏の戦い・パート４（後書き）

大亀は少し無理があったかもしれません。
次は研究所です。

裏の戦い・パート5

ここが本当に脱出ルートなのだろうか?非常食の収納庫ではないのか?

疑いが徐々に大きくなる。たくさんの保存庫が目に入ったからだ。

俊樹が嘘をついたとは思えないが、疑わずにはいられない。僕はさらに辺りを見渡した。

だが、やはり土の壁と大量の保存庫しか見当たらない。僕の目がおかしいのか?いや、近眼ではあるが見えないわけではない。少し歩いてみることにした。

土の壁を伝いながら歩く。すると突然、ひんやりとした感触が僕の手に感じた。

その部分の軽く拳で叩いてみた。カンカンと鈍い音がする。明らかに土ではなさそうだ。

金属製のドアだろう。ここから脱出ルートにつながるはずだ。ドアを手で調べ、ドアノブを探した。

一つのでっぱりが手に伝わった。ドアノブだ。ドアノブを時計回りに回す。

ガチャ、と音が鳴り、そのまま前に押すとキイ、とドアが開いた。

ついに脱出への道が開けた。

明かりが視界に入る。それと同時に鉄の壁も見えた。研究所だろう。

なんの研究所だ?

なぜ、学校の地下に研究所があるのか不思議だが、この悪夢から脱出できるのならどうでもいい。

道を進む。歩く音が不気味に響く。一つの角を曲がった。曲がった先には驚きの光景があった。

ゾンビだ。5体ほどいる。白衣を着ていて足、顔、頭の肉がむき出しだ。まさかここにもいたとは!

ハンドガンを構えた。クリティカルヒットを5回連続で出し、あっという間に葬った。
それにしてもなぜここにいるんだ?正門を突き破ってきたゾンビが侵入して来たのか?
ならば、もっといるはず。それに姿が全く違う。この研究所の研究員たちだろう。
それにしてもここはいったい何の研究所だ?疑問が深まる。しかし本当に正門から来たゾンビたちが来たら大変なことになるので早く進んだ。
研究所にいたのはゾンビだけではなかった。総合撃退数で2体のあのおぞましい化け物もいた。
そう、赤這い這いだ。しかも驚いたことに5体もいるのだ。
さすがにこれだけの数にはかなわない。倒す前に僕はやられてしまうだろう。
通行に邪魔な2体の赤這い這いを仕留め、残りの赤這い這いに気付かれないように進んだ。
一つのドアをくぐり、ソファーとイスが置いてある部屋に入った。きっと研究員の休憩所だろう。
ソファーに座り、少し休憩した。ついでに残りの武器と回復薬を確認した。

ワルサーPPK、ボウガン、サブマシンガン、マグナム、包丁、消毒スプレー、ハ?30、工事用ダイナマイト?1

持ち物の確認が終わり、ソファーで楽にしながら辺りを見渡した。
正面には机がある。
机にはたくさんの紙が散らかっている。その中にマグナムの銃弾が何発かあった。ありがたくもらい、また調べ始めた。机をさらに散らかしながら変わった文はないかと探した。そして1枚の研究データを見つける。研究データを取り上げ、ソファーに戻り、再び座っ

た。休憩しているという事もあるので読んでみた。

４月３日・２２時３７分０４秒
研究データは以下の通りだ。あと１時間半もすれば成功という結果
完全にが出る。
Ｎウイルスについて
一人の女教員に「Ｎウイルス」と名付けた作品を注入してみた。
すると過去のデータ値とは異なる変異が発生した。さらに待つこと
１時間。
女教員の顔色が変わり牙はとがり、けだものとかした。感染時間も
短い。
これによりＮＢ実験の成功を確定した。
Ｂウイルスについて
「Ｂウイルス」については未だにこれといった変化が出ていない。
Ｎウイルス散布について
これについては０時００分調度に実行することにする。本小学校の
発電力はあと少しで目標に達する
全教員から集めた銃は研究員の幹部に１丁ずつ持たすように。

斉藤正行

ようやく謎が解けた。なぜこの研究所にゾンビがいたのか、なぜこ
んな悪夢が起きたのか、
それは学校とこの事件の黒幕がグルだったからだ。Ｎウイルスとや
らをばら撒いたのは何かの
目的のためだろう。どちらにせよ、この問題は事件の黒幕が仕組ん
だに違いない。
研究データを投げ捨て前のドアに進んだ。謎もわかって余計にこん
な悪夢は早く抜け出したい。

ドアをくぐった先には悪夢が待っていた。ゾンビでも赤這い這いで

もない。
銃声だ。化け物を撃ったのではなく、人間を撃ったのだ。何が起こったのかはよくわからない。
とにかく今はこの状況を何とかしなければもう一人の人間が死ぬ。
親友とも呼べる人間が。
一人の大人が僕の親友に銃を向けていた。親友の横には見覚えのある姿と顔の女の子が倒れていた。
あれは僕と親友のクラスメートの細坂千里だ。よく見えないが命が消えかかっていることは確かだ。
一人の大人、僕の学校の斉藤校長先生が今にも撃とうと引き金に指を添えている。
狙いは？？？？？俊樹だ！俊樹も震えながら銃を構えようとしている。しかし、構えた瞬間、銃弾が俊樹の胸を通り越すだろう。絶体絶命の状態だ！
校長先生も俊樹も僕に気が付いていない。何かを言い合っているらしい。遠くて聞こえないが。
ついに声が僕の耳に届いた。校長先生だ。その発言した言葉とは？？？？？？
「さらばだ！」
気が付いたときには僕は影から飛び出し、１発の銃弾を放っていた。
銃口から飛び出した銃弾は校長先生の心臓に命中し、天井に食い込んだ。
唖然として立っていた僕を俊樹がとらえ、僕の名を叫んできた。
「隼勇！」
はっとして我に返り、絶体絶命だった俊樹に駆け寄った。
「間一髪だったな。」
しかし、笑えなかった。血まみれで倒れている千里を見ると絶望的な状況だったからだ。
俊樹が僕から視線を逸らしたのを見て言った。
「おい、俊樹。千里は早くしないと危ないんじゃないか？」

今度は俊樹が答える。
「わかってる。だから千里を助けるための薬を取りに薬品庫にいってくる」
そして僕に背を向け、走る体制をした。
僕は俊樹の発言を否定した。
「銃で撃たれたんだろ。そこらの薬じゃ助からないぜ」
俊樹がすぐさま答える。
「大丈夫だ。休憩所で薬品庫のデータを見たんだ。データには（どんな傷でも治せる薬）が
あるらしいんだ。それにかけるしかない」
その時、ほとんど音のない静かな研究所にサイレンが鳴り響いた。
「証拠隠滅装置作動。研究所の各部に仕掛けられた爆弾が作動します。直ちに非難してください」

裏の戦い・パート5（後書き）

さて隼勇は最後の活躍をします。ボス戦もあります。

裏の戦い・パート6

爆弾だって！普通ならだれでもこう叫ぶはずだ。しかし僕と俊樹は絶望のあまり叫ぶことすらできなかった。まさかこんなことになるとは。

沈黙が少しの間続いた。沈黙がようやく終わる。発言したのは死にかけの斉藤校長先生だ。

そして言った。これが最後の言葉となるだろう。

「お前たちには必ず消えてもらうぞ。ここを脱出できたとしてもあの方が必ずお前たちを・・・」

口からゴホッ、と血を吐き、僕の学校のこの事件の共犯者の校長先生は絶命した。

僕が殺したのだ。僕は殺人者になってしまった。このことは一生心から消えないかもしれない。

校長先生の亡骸から視線をそらし、俊樹へと視線を向けた。

そして励ましの言葉をかける。

「頑張れよ！必ず生きて脱出しよう！列車と千里は俺に任せな！」

俊樹が小走りしながら言葉を返してきた。

「ああ、生きて脱出しよう！」

俊樹が角を曲がり、見えなくなった。

僕もモタモタしていられない。俊樹が千里の命を救おうとしているのだ。僕も生きる架け橋の列車を

動かさなければ！ここまで死ぬわけにはいかない！

千里を抱え上げ、プラットホームへ走った。

ゾンビ化した哀れな研究員を駆け抜ける。普段なら楽に倒せるが、時間がもうないかもしれない。

それに死にかけの千里を抱えながら銃をうまく命中させるのは至難のワザだ。
ゾンビを見事に駆け抜け、プラットホームに到着した。列車が視界に入る。列車は古びてるが動かすことは可能だろう。
しかし今のままでは発車はできない。電車のゲートが下されたままだ。あれを何とかしないと。
とりあえず列車に飛び込み、列車の長椅子に千里を寝かせた。
列車内をくまなく調べ、プラットホームのカギを入手した。列車を下り、ゲートの開閉装置に走った
プラットホームにさっき通り過ぎたゾンビたちが侵入してきた。ハンドガンとボウガンを構える。
ハンドガンを右手にボウガンを左手に持ち、連射してゾンビを蹴散らした。
プラットホームのカギを使い、鉄格子のドアを開けた。階段が見える。
階段を素早く上り、向こう側に降りた。そしてゲート開閉装置に駆け寄る。
ゲート開閉装置はそれほど複雑ではなく、レバーを引くだけだった。レバーを引くと同時に列車前のゲートが開く。希望の道は開けた。
あとは待つのみだ。

だが、そううまくいくはずはなかった。このような場面では必ずしも災いがつきものだ。
災いが列車の屋根を飛び越え、僕の前に舞い降りた。思わず立ちすくむ。
災いは僕をとらえ、ゆっくりと近づいてきた。動いた瞬間、また勢いよく突っ込んでくるだろう。
災いとはご存じすぎて飽き飽きするほどの巨人だ。巨人は姿が前とは違う。
緑色の服が完全に破け、本体がむき出しになっている。手からは変

異したと思われる骨が突き出ている。
マグナムを構えた瞬間、巨人が手を前に突っ込んできた。やられる！
間一髪のところでかわし、巨人から離れた。すかさず、マグナムを撃つ。
マグナムの銃弾が巨人の脳を突き抜ける。相当効くはず？？？？？？
が、は巨人少しもひるまなかった。前よりもボディが固くなっているのか？
途端にが巨人が手を構え、再び突っ込んできた。今度は避けられず、吹き飛び、壁に衝突する。
何とか立ち上がり、体制を整えた。さっきの攻撃で胸の肉をスッパリと切られた。内臓には至っていないがそれでも立つのがやっとというほど痛む。

ぶつかった壁から離れ、マグナムを構える。すると突然、さっきの壁から何かが落ちる音がした。
やられるのを承知にうえで後ろをサッと振り向いた。壁のガラスケースから二つの兵器が落ちたのだ。
先端にミサイルがついている。ガラスケースについているプレートには「ミサイルガン」と書かれている。すぐさま一丁を手に取り、構えた。これなら倒せるはずだ！
重みにこらえ、が巨人突っ込んでくるのを待った。そしてついに突っ込んでくる！
その瞬間、僕はレバーを引いた。ミサイルが放たれる。あまりの衝撃に耐えきれず、僕は床に倒れた。
巨人はどうなったのだ？ミサイルは命中したのだろうか？運命の結果が今、視界に映る――
そこには巨人の血と下半身があった。が、ピクリとも動かない。
巨人もこれで終わりだ。僕は勝ったのだ！これですべてが終わったはずだ！

残り一つのミサイルガンを念のため、担ぎ上げ、列車に戻った。
再びサイレンが鳴り響く。

「作動3分前です。直ちに非難してください」

俊樹はまだ見えてこない。まさか最後の最後でゾンビや巨人にやられてしまったのか?
そう思い始めた時、一人の人間の姿が視界に入った。俊樹だ!よかった?????
僕は手を振り、叫んだ。

「おーい!こっちだ!いつでも発車させられるぞ!」

聞こえたようで何かを叫ぼうとした。しかしその言葉はまたあの化け物に遮られた。
巨人!?さっき倒したはず。まさか今まで2体の巨人が僕たちを追っていたのか?
そんなことを考えられたのはほんの少しの間だけだった。
巨人は俊樹に突っ込み、吹き飛ばしたのだ。さすがの俊樹も咳き込んでいる。
俊樹がレールガンを連射し、死に物狂いで戦っている。
しかしこのままでは俊樹はやられてしまうだろう。僕は倒す方法を頭に浮かべた。
するとさっき拾った一つのミサイルガンが頭に浮かんだ。すかさずミサイルガンを手に取り、俊樹に投げ渡すタイミングを見計らった。
一瞬、巨人がプラットホームの外側に行ったのが見えた。その瞬間、僕はミサイルガンを投げた。ミサイルガンは俊樹から真正面に落ちた。
巨人の攻撃を俊樹はかわしながらミサイルガンを手に取った。ミサイルが飛び出し、に巨人命中した。僕の時のように下半身は残らず、

頭以外すべてが吹き飛んだ。
俊樹が急いで列車に飛び乗り、すぐさま手に入れた「なんでも治せる薬」とやらを取り出した。
千里に薬を注入した。しかし意識は戻らない。2分、3分と過ぎた。意識はまだ戻らない。死んでしまったのか?俊樹の行動は無駄になってしまうのか?
次の瞬間、千里の腹の傷がみるみるふさがり、千里の表情も和らいだ。呼吸も再びしだした。
僕も俊樹も安心し、しばらく長椅子に腰掛けた。
ふーと息を吐きだし、安心の一言を僕は言った。

「やっと・・・終わったな。」
「ああ。とりあえずこれで一息つける」
僕はまた話しかけた。
「結局、事件の黒幕はわからなかったな」
すると俊樹はこう言った。
「ああ・・・でもでも生きて脱出できたことだけでも奇跡なんじゃないか」
安楽の地が近づく???しかし、これで終わりではなかった。

裏の戦い・パート６（後書き）

次で市原での戦いは終わりです。

裏の戦い・最終パート

普通ならこのまま、僕らの物語は幕を閉じただろう。が、まだ終わらなかった。
再び悪夢の幕が開いた。そしてすさまじい衝撃が僕らを吹き飛ばした。
俊樹がぶつけた頭をさすりながら言う。

「痛つつ・・・いったい今のはなんだ?まさかまだ・・・」

言い終わらないまま列車にサイレンが鳴り響いた。
「列車にバイオハザード発生が確認されました。ただちに発生位置の列車を切り離し爆破してください。なお、安全のため3分後に全車両が爆破されます」
全員、絶望的な状況となった。ただ、気絶している千里を除いては。
俊樹が驚きと焦りを隠せずに叫ぶ。
「なんだって!いったい何が列車に侵入したんだ?」
僕は冷静に言った。
「わからない。たぶん、後ろの車両にゾンビか何かが残っていたんだろう」
そして後ろの車両に向かうドアをくぐった。俊樹に言われる間も与えずに、だ。
その時、背後でガチャ、と音がした。驚いて後ろに振り向く。
わけがわからず、ドア越しに俊樹に問いかけた。
「どうしたんだ?」
俊樹がすぐさま答える。
「ドアがロックされたらしい。開かないんだ」
とりあえずここで立っているだけでは死を待つばかりなので後ろの車両に進んだ。

マグナムを構え、小走りで進んだ。辺りを見渡すが、ボス敵どころかゾンビすらいない。
コンピュータの故障か？だとしたらまだ安心できる。僕が外から列車の屋根を外せば全員難なく脱出できるからだ。
しかしそんなにうまくいくはずはない。姿は見えないが何者かの気配を感じる。
おぞましい化け物が今、車両の奥でうごめいている。なんだあいつは・・・！？
その化け物はズルッ、ズルッとゆっくりと触手を壁にひっかけながら近づいてくる。
だいぶ近くに化け物は近づき、姿がはっきりとしてきた。そう、この世のものとは思えない姿が。
とにかく巨大でおぞましい。今まで見た中でダントツで一番だろう。ナメクジのような進み方をし、車両の通路いっぱいの体がある。触手は8本ついていて中央の体には大きな口がある。
いい加減してもらいたい。この化け物の正体がわかった時、僕はうんざりした。
こいつはあの巨人の変異型だ！Nウイルスを以上に注入されたのだろう。その証拠に変異した骨が触手1本1本についている。そしてこれほどの変異を遂げたの違いない。
しかし、いったい誰が注入したのだろうか？

長く考える時間をやはり相手は与えなかった。再び2本の触手を壁にひっかけ僕に向かって前進した。
これが最後の1戦になることだろう。この悪夢を締めくくるのにまさにふさわしい相手だ！
勝利を手にするのはもちろん？？？僕らだ！絶対に負けるものか！
マグナムを巨人の体の中央の口へ連射した。銃弾が食い込み、血が大量に吹き出る。

しかしも巨人黙ってはいない。触手で僕の皮膚を切り刻み、出血をさせた。
さらにどんどん体を前進させ、僕を丸呑みにしようとする。こんなのに捕まったら僕なんかひとたまりもないだろう。それに食われて死ぬなんてごめんだ。
徐々に足場を奪われていく。早くけりをつけなければの巨人の餌になってしまう！。
マグナムの弾が残り１２発になった。ああ、早くくたばってもらいたい？？？？？？
ついには巨人くたばった。今まで以上に大量の血があふれる。

これであとは脱出するのみだ！よし！早いとこ俊樹と千里を屋根から救い出そう――――――
しかし悪夢はまだ完全に幕を閉じたわけではなかった。巨人再び動き出したのだ。
巨人は車両の屋根に乗った僕とその車両にいる俊樹と千里を触手で襲って来た。
僕は必死にマグナムで中央の口に銃弾を浴びせている。俊樹は車両のドアを突き破り、侵入してきた
巨人の触手をレールガンで撃退していた。
僕たちはそう長くは持たないだろう。このままではもうすぐこの世からおさらばになる。
その時、千里が目を覚ました。なにが起きたのかすぐに分かったようだ。
そしてこう言った。

「状況はなんとなく分かってる！いま私たちを殺そうとしている化け物の車両を
引き離せばいいんでしょ？私なら操縦席へのドアの窓をくぐれるわ！」

大正解だ。学校で生活しているうちにわかっていたがすごい判断力だ！すばらしい！
千里にかけるしかない。その間、僕にできることはこの化け物を食い止めることだ。
ついにマグナムの弾がなくなった。これで武器はあとダイナマイト1本しかない。
その時、絶好のタイミングで車両が引き離された。これで終わりだ！が、巨人は最後の抵抗を見せた。必死で僕たちの車両にしがみ付く。
俊樹も弾切れになったようでレールガンの銃声がやんだ。これで強力な武器はダイナマイトしかない
僕は一か八かの賭けに出た。ダイナマイトを使うのだ。

「俊樹！ライターはあるか？」

俊樹はにやりとし、ライターを僕の手に投げた。ライターを受け取った僕に俊樹は言った。

「隼勇、お前の作戦は分かってる。よし！親友のお前にかける！頼んだぜ！」

俊樹の言葉を受け、ライターの火をダイナマイトに灯した。導火線を火がかけ抜ける。
そしてに巨人に向かって投げた。あとは運にかける！幸運の女神よ、力を！
奇跡が起きた。ダイナマイトは巨人の口に侵入し、大爆発を起こした。
巨人の力が触手から消え去った。巨人と引き離した車両が離れ、少し先で止まった。
またも、絶好のタイミングで千里が巨人の車両を爆破させた。

車両は粉々に吹き飛んだ。これで完全に悪夢は消え去ったのだ。

僕らの乗った車両はとある山で止まった。人の気配はないがそれほど深い山でもなさそうだ。

俊樹が初めにつぶやいた。

「ここは・・・どこだ?」

僕は見覚えがあり、すぐに思い出した。

「東京につながってたみたいだな。ここは御前山だ。４月はあんまり見頃じゃないから人がいないんだ。」

そして俊樹が答えた。

「御前山か。そういえばここは来たことあるぞ。それにしてもどうやって東京の山と市原をつなげたんだろう?まあどうでもいいや。東京・・・!だとしたら親戚の家に助けを求められる!」

僕もまた言った。

「俺も来たことがある。親戚の家はここからならわかるな。助けてもらえるだろう。」

次に千里が言った。

「私は親戚はここにはいない。だから警察に行く事にする。もう会えないかもしれないけど。」

俊樹が言った。

「ならみんな行き先は途中まで同じだな。山を下るか。」

1時間歩きようやく道路についた。ここでお互いに別れを告げる。まず僕からいった。

「俊樹も千里も元気で再び生活しなよ。俊樹には中学で会えるかもしれないけど千里は分からない。

だが、おれはみんなでまた再開したい。」

それに二人とも答えた。

「ああ、いつかまた会おう。」

「二人とも命を救ってありがとう。またいつの日か会おうね。」

こうしてみな、目的地へ走り出した。新たな夢に向かって???

？？？？？

しかし、まだ黒い影は潜んでいた。

裏の戦い・最終パート（後書き）

これで市原の戦いは今度こそ終わりです。

登場人物紹介（東京戦）

井野俊樹（１４）
主人公。ある事件から生還し、東京の親せきの家で暮らしていたがまたしても悪夢に巻き込まれる。緊急回避など戦闘能力がアップしている。性格は少しうるさくなったが、相変わらずまじめ。中学ではバドミントン部に所属していて同じ部の先輩と友人関係を築き上げている。

中村隼勇（１４）
俊樹と親友関係。彼も俊樹と共にある事件から生還し、東京の親せきの家で暮らしていた。前の事件で銃に執着したらしく、中学では射撃部に入部している。正義感が強く頭が良い。

細坂千里（１４）
俊樹、隼勇と共に市原の事件から生還。静岡の親せきの家で暮らし、偶然東京に来たところ悪夢に巻き込まれる。中学では柔道部に入部しているが、実際は剣道や射的の能力が高い。

ベティ・アレナス（２３）
「ＳＷＡＴ」の数少ない女性隊員。偶然日本にいる恋人と息子に会いに来たところ悪夢に遭遇。文字通りＳＷＡＴの隊員なので並外れた戦闘能力を持つ。結婚はしていない。

ゾンビ？
前とほぼ同じ。変わった所といえば口から内臓を触手のように出すこと。

ゾンビ犬？

前とほぼ同じ。基本的、警察犬が多い。たまにペットの犬や野良犬が混じっている。

登場人物紹介（東京戦）（後書き）

中途半端なところでの登場人物紹介、申し訳ありません。

悪夢再び

２０１０年、４月４日、千葉県市原市五所で謎の怪奇事件が起きた。死者が歩く、という。

僕は一人の親友と一人のクラスメートと共に悪夢の町を脱出した。

その翌日、政府はこの事態に気づき、事件の原因を突き止めようと自衛隊を派遣した。

しかし自衛隊は派遣されてからたった１日で壊滅状態に陥った。

政府は生存者が事件の原因を突き止めるのは困難だと判断し、ミサイルによる滅菌作戦を実行することにした。まだ派遣した自衛隊の生き残りや生存者がいるのかもしれなかったが。

４月６日、１３発もの特殊なミサイルが千葉県全体に発射された。

これにより、千葉県は大きく土地がへこみ、海に沈んだ。ただ、市原はそれほど沈まなかった。

政府も国民も安心したようだ。これですべて解決したように思われた。

しかし、僕はそうは思わない。なぜならこのバイオハザードには黒幕がいるはずだ。

黒幕が再び動きだし、今度は東京が悪夢に見まわれることとなるだろう。

その悪夢が今、東京に襲いかかろうとしていた。

あの事件から2年の月日がたった。しかしいまだにあの悪夢は忘れられない。

僕は井川俊樹。市原のバイオハザードから生還した後、東京の親せきの家で暮らすことになった。

親戚のおじさんとおばさんはを温かく迎えてくれた。もちろん、事件のことは話した。

が、警察に言って事件を解決してもらおうなどとは思っていなかっ

たようだ。
それどころか学費、食費なども引き受けてくれた。世間には親を亡くしてここに来た、と知られているらしい。
僕は今、中学校の帰り道を一人の友達と話しながら帰っていた。修学旅行の帰りだ。
僕は今日のことについて話した。

「修学旅行でさ、何買った?」
その友達が答える。
「これだ。」
さすがに驚いた。なぜなら刃物を差し出したからだ。
「ナイフ!?そんなもんよく先生に見つからずに買ってこれたな。」
すると、友達が得意げに言った。
「あの事件から隠す腕を上げたんだ!」
僕はニヤリとしていった。
「全く、困った奴だ。中村隼勇」

そう、この友達はあの事件から共に生還した中村隼勇(なかむらはゆ)である。
彼も僕と同じく東京に親戚がいて同じ中学に通っている。
夢中になって話していると僕のほおに水が一滴、垂れた。空を見上げるとさらに垂れてきた。
雨だ。しかもかなり降っている。ずぶ濡れになると面倒だ。
僕は隼勇に走りながら言った。

「濡れないうちに帰ろう。じゃあな、隼勇!」
隼勇は手を振って言った。
「またな。」

家に向かって走る。霧も少し出てきたが視界に影響はない。
家が近くなったとき、前方に人影が現れた。傘はさしていない。し

かしあわてる様子もない。
障害者か?この雨の中、傘持っていないなら普通はあわてるはずだが。
僕は自分の身を優先して気にせず、また走り出した。その人の横に差し掛かった。
その時、突然、その人が飛び掛かってきた!途端に僕は反応し、かわす。
なんなんだ?こんな障害者、見たことも聞いたこともない。
顔を見ると青白い顔をしていた。皮膚も少しはがれ、肉が見える。
僕はようやくなぜ襲ってきたのかわかり、はっとした。まさかとは思っていたが、間違いない。
ゾンビだ。今、この前にいるのはおぞましい化け物で元人間だ。

ゾンビが再び飛びかかって来た。サッとかわす。動きは遅いため、かわすのは簡単だ。
相手が隙を見せた瞬間、僕は制服の内側に隠している護身用のナイフを構えた。
そしてゾンビが振り向く前に頭にナイフを突き刺した。血が噴き出す。
ゾンビがどさりと倒れ、絶命した。安心しがっくりと膝をついた。
しかしあまりゆっくりしていられない。またバイオハザードが起きたならば早く準備しなければ!
僕はナイフを片手に立ち上がり、初のゾンビを背に向け、家に走り出した。

家のドア開ける。誰もいない。おじさんとおばさんは仕事で忙しいためここにはいない。
僕は警戒しながら自分の部屋に向かった。部屋には自作の改造ハンドガンがある。
前と同様、大いに役立つだろう。装弾数も改良して増やした。

トイレを通り過ぎようとしたとき、急に用を足したくなった。帰りのバスから我慢していたことを忘れていた。
用を足し終わり、ドアを開けた。再び部屋に向かう。
おじさんの部屋に差し掛かった時だった。何者かの気配を感じる。
これはもしや・・・・・・
その化け物は僕の前にゆっくりと姿を現した。
一瞬、舌の長い、血オオトカゲかと思った。しかし実際は違った。
よく見ると体はノミのようだ。僕より少し全長は高い。手には鎌のような手がついている。
どうやらノミが感染によって巨大化したものらしい。血を吸ってくるようなので「吸血オオノミ」とでも名付けるか。

その瞬間、が吸血オオノミ僕に気づき、かん高い声を上げ、走ってきた。
さすがにナイフじゃ勝てそうにない。何か使えるものはないかと辺りを素早く見渡した。
するとおじさんの机の横に銃がかけてあるのが見えた。猟銃だ。おじさんは狩りをやっている。
とっさに猟銃を手に取り、構えた。吸血オオノミがわずか３ｍの距離まで来た。
猟銃の引き金を引いた。銃弾は吸血オオノミの急所と思われる場所に命中した。
吸血オオノミが悲鳴を上げ、やがて動かなくなった。吸血オオノミは死んだ。それにつられたのか猟銃も壊れてしまった。これではもう使えない。邪魔になるだけなので捨てるのがいい。

僕は安心し、部屋に向かった。見覚えのある風景が視界に入る。
自作の金庫を開けた。暗号は僕しか知らない。金庫の扉が開き、中に入っている物が見えた。ハンドガンと使えそうなもの全部をショルダーバックに詰めた。このハンドガンはニューナンブＭ６０と言

って警察官も制式採用されている銃だ。前の事件で唯一、残った武器である。まさかまた使うことになるとは。

そしてどこに向かえばいいか考えた。中学校はどうだ?いや、少し遠い。

ならば警察署が良さそうだ。警察署なら役立つものが何かとある。

僕は玄関を出て、自転車乗り場に向かった。自転車で行った方が早い。

行く途中、5、6体のゾンビに出くわしたが、かわせないわけではないので無視して進んだ。

自転車乗り場につき、自分の自転車のカギを開けた。ペダルを漕ぎ警察署に向かって走らせた。

あの時の悪夢が再び起こってしまったのだ。

悪夢再び（後書き）

今度の舞台は見ての通り、東京です。

ベティ・アレナス

ペダルを必死でこぎ、ゾンビをかわしながら進んでいる。ゾンビはすでにかなりの数がいるようだ。
一つの角を曲がり、ようやく警察署が見えてきた。警察署の窓から明かりが見える。
警察署の正門に向かってさらに自転車をこいだ。正門まではあと１０mほどだ。
ふと辺りを見渡すと何かが雷の稲光に照らされて見えた。ゾンビではない。
かなりの巨体だ。よくは見えないが僕よりは完全に背が高い。まさかあれは・・・
その瞬間、巨体の何かからミサイルが放たれた。ミサイルは僕に向かってきている！
いち早く反応し、急いで自転車から飛びのいた。すぐに立ち上がり警戒態勢に入る。
ミサイルは自転車に命中し、すさまじい爆発を起こした。自転車は吹っ飛んだ。

視線の先の光景から目をそらし、巨体の何かに視線を移した。大体正体は分かっている。
巨人ではない。巨人はロケットランチャーなどまして武器は使わないからだ。
そいつは武装していた。じゃあこいつはファイターとでも呼ぼうかな。
ファイターが暗い視界の先で走る体勢をとったのが見えた。このままでは攻撃を許してしまう！
逃げるしかないだろう。武器はハンドガンとナイフのみだ。これらの武器では倒すのは難しい。

正門に向きを変え、全速力で走った。もファイター同時に走り出す。
距離は少し余裕がある。
何とかファイターに追いつかれずに済んだ。そして正門の扉を勢いよく開け、署内に飛び込んだ。
が、まだ安心するのは早い。とりあえずは正門の扉を閉めないと今度こそは一間の終わりだ！
しかし以外にもファイターの行動は違った。すぐに走ってくるのかと思いきや、立ち止まり、
ロケットランチャーを構えたではないか！この後起こることは考えなくてもわかる！

予想通りファイターはミサイルを放ってきた。ミサイルの標的はもちろん、僕だ！
しかしファイターの放ったミサイルは僕ではなく、警察署のコンクリートの外壁に命中した。
コンクリートの壁は崩れ、出口を完全にふさいだ。ここから出る事はもうできないだろう。
そして雨の音と入り混じっていたファイターの声も消え、わずかだが静かになった。
僕は崩れた外壁から向き直り、警察署内に走った。雨は今だにやまない。
警察署内のドアを開け、ようやく逃げ込んだ。

ドアを閉める音が響くほど警察署内は静かだった。ドアを閉め終わり、辺りを見渡した。
電気はついている。暖房器も作動しているが、人影は一つも見えない。
奥に避難しているのだろうか？僕は警察署内の廊下を進んだ。廊下には血が垂れている。
血の跡が次第に増えていき、垂れている源を見つけた。物ではなく、

人だ。
いや、元は人だった化け物というべきか。その化け物とはいやというほど知っているゾンビだ。
ゾンビは住民の姿かと思いきや制服を着ている警察官のゾンビだった。5体ほどいる。
1体が僕に気づき、それに続いて2、3体と僕に向かってきた。ここに入ってから初のゾンビ戦だ。
自作のハンドガンを構える。1体の頭に銃口を重ね、引き金を引いた。銃の性能は問題ない。
警官ゾンビの頭が吹っ飛び、絶命した。さらに警官ゾンビを2、3体とクリティカルヒットさせ、倒す。残りの2体は足が少し早かったため、足に数発撃ち、転ばせ、頭をナイフでつぶして倒した。

僕はふーと息を吐きだし、再び起きてしまったこの悪夢について考えた。
いったいいつから感染が始まっていたのだろう?修学旅行の間にこうなったのかもしれない。
またNウイルスが原因か?しかしNウイルスは僕らが脱出してから2日後に打ち込まれたミサイルによって消されたはずだ。自然でないとすると市原の事件の時、斉藤正行校長が言っていた
「あの方」とやらがばら撒いたのか?もしNウイルスによってバイオハザードが発生したのならば東京は致命的な被害を受けたことになる。Nウイルスは数日の間で一つの市をゾンビで埋め尽くすことができるからだ。修学旅行は4泊5日だった。という事は首都東京も壊滅に落ちいっている。それどころか付近の県まで感染が広まっているかもしれない。

考えをまとめたところで再び廊下を歩きだした。一つの部屋を見つ

け、入った。
ここで少し休憩し、持ち物を確認した。

ニューナンブＭ６０、ミリタリーナイフ、消毒スプレー、ハ？１５、ゴールドキー、キーピック

持ち物を確認し終わったところで立ち上がり、来た方向とは逆のドアを進んだ。

地下駐車場に出た。ここにも当然のようにゾンビがさまよっいる。ゾンビをいち早く倒し、辺りを調べた。駐車場出入り口はシャッターでふさがれている。
シャッターの近くには警官の死体が数体、転がっていた。その死体からハンドガンの銃弾を手に入れ、ショルダーバックにしまった。一応、予備弾として前の事件の余り弾があるが、到底足りないと思うのでありがたい。次にパトカーを調べることにした。パトカーのドアは当然、鍵がかかっている。
仕方がなく、パトカーの窓ガラスを割り、侵入した。警察署でパトカーに侵入する人物は今までで僕が初めてだろう。だとしたら相当間抜けだ！
内部に役に立つものはないか探した。ほとんどのパトカーは特に何もなかったが、３台のパトカーに
１台ずつにハンドガンの弾が１５発、置いてあった。
最後の１台のパトカーの窓ガラスを割り、また侵入した。武器があるとありがたいが。
ガンホルダーを開けた。すると中にかなり使える武器とその武器の予備弾があった。
ベネリＭ３・ショットガンとショットガンの予備弾だ！心強い！
パトカーから外に飛び出し、駐車場に出た。ここは行き止まりのため戻らなければならない。

さっきくぐったドアに走った。その時、背後の通り過ぎた駐車場で突き破るかのような音がした。
驚いて駐車場に向き直るとシャッターの一部が破られていた。というより溶かされたのか？
シャッターに開いた穴から大量のゾンビがなだれ込んできた。２０・・・いや、３０体はいる！
まずい！気づかれないうちに逃げなければ！とても相手にできる数ではない。
ドアをくぐり、元の部屋へ戻った。

ドアをくぐった瞬間、ゾンビのうめき声が一段と大きくなった。獲物のにおいを嗅ぎつけたらしい。
だが、駐車場のドアは鉄製でかなり頑丈だ。ゾンビの力ではまず、破られないだろう。
そうなのならばこのドアより頑丈なシャッターはなぜ破られたのだろうか？明らかにゾンビの仕業ではない。あれはミサイルによって破られた穴だ。ファイターは追跡者だったのだ。
駐車場のドアの近くにあるもう一方のドアを行くことにした。ドアを開く。
ドアをくぐると１本道の屋外に出た。１０月なのに真冬並みに寒い。
Ｎウイルスの影響だろうか？前の悪夢の時も４月なのにやたらと寒かった。
１本道を進む。向こう側にはドアが見える。ようやく半分、歩き切った。
その時、僕の正面にあいつが現れた。そう、家で見た吸血オオノミだ！
警察署内にまで存在したとは！やはりバイオハザードはかなり進行している！
吸血オオノミは２体いて１匹は壁にへばりつき、もう１匹は僕にゆ

っくり近づいて来ている。
パトカーで手に入れたショットガンを構えた。これならすぐに仕留められる。
忍び寄ってきていた吸血オオノミがついに本気になった。真っ直ぐ走ってくる。

吸血オオノミが手についた鎌のようなもので腹を狙ってきたが、簡単にかわした。
その隙に吸血オオノミの頭を至近距離でショットガンの銃弾を浴びせた。
吸血オオノミがひっくり返る。また立ち上がるそぶりを見せたため、さらに銃弾を浴びせた。
吸血オオノミが悲鳴を上げ、緑色の奇妙な血を流し、絶命する。
しかし休む暇などなかった。壁にへばりついていたもう1体が僕の背後に忍び寄り、背中に
噛みついてきた。血を吸われる。必死にもがき、何とか引き離した。
引き離し、一瞬の隙にショットガンで攻撃した。今度は連続で2発放つ。
頭に連続で2発の銃弾を受け、吸血オオノミのもう一匹も絶命した。
その場に安心し、膝を伸ばして座り込んだ。傷を確認する。痛みはそれほどではない。噛まれたが
感染はしないだろう。市原での悪夢の時もあれだけ長時間さまよっていたが感染しなかった。
そう思った途端、誰かが後ろでささやいた。

「大丈夫？何があったの？」
僕はいつも以上に驚き、すばやく立ち上がり、銃を構え、警戒しながらその人物を見た。
その人物はまた言った。
「銃をおろしてくれる？」

だんだん姿がはっきりしてきた。外国の女性だ。紫のシャツを着ていて黒の長いズボンを履いている。髪は金髪で長い。きれいな人だ。ついつい見とれてしまう。

見とれているとその人の視線を感じ、はっと我に返った。

思い切ってゾンビと間違えたことを謝り、聞いてみた。

「すいません。今、化け物を倒したところでして。ところであなたは？」

「私？私はベティ。ベティ・アレナス。元ＳＷＡＴの隊員よ。」

ベティ・アレナス？？？ようやく名前がわかったところでベティと名乗る美しい女性の方へ歩いた。

良再開、そして悪再開

僕はベティに名乗った。
「僕は井野俊樹。よろしく。」
ベティが問いかけてきた。
「この街は一体どうなっているの?」
ため息をついて僕は言った。
「それがよくわからなくて4泊5日の修学旅行が終わって帰ってきたらこうなってました。」
「私は夫と息子に会いに日本に飛んだら到着して移動途中、五万といる化け物に襲われたわ。必死に逃げた結果、ここの警察署に逃げ込んだの」
「とにかくここからの脱出方法を考えないと。ベティさん、なんかいい案は?」
「ベティでいいわよ。いい案は・・・」

ここで途切れてしまった。なぜなら天から落ちてくる何かの気配を察知したからだ。
しかし僕はベティより気がつくのが遅かった!落ちてくる何かに押し潰されてしまう!
が、ベティに思いっきり押し倒され、落下物を回避した。まさに間一髪だ!
僕一人では今頃、落下物の重みで押しつぶされ、この世から去っていたことだろう。
落下物はコンクリートの地面にめり込み、到達した。いったいこれはなんだろう?
鋼鉄で巨大な円柱の個体だ。簡単に言うと超特大サイズのドラム缶と言える。
巨大な落下物は1本道の通路を完全に塞いだ。これで今の状況では

戻ることはできなくなった。
さらに避けた拍子にベティと別々に分かれてしまった。他の道を進んで合流するしかなさそうだ。
巨大な落下物の観察をやめ、向こう側のベティに話しかけた。

「これは・・・別々に行動するしかないですね」
「ええ。とりあえず先に進んで合流することを考えましょう」

僕は巨大な落下物と向こうにいるベティに背を向け、ドアをくぐった。

合流するため、先に進む。警官から住民と様々なゾンビもさまよっている。吸血オオノミも
嫌というほど潜んでいた。どちらもいくら見ても慣れない死に様を見せる。
あれからファイターは姿を一切見せない。僕やベティと同じような生存者を抹殺するために送られた、
と考えたが間違っていたのだろうか?それならそれで嬉しいが。
ファイターがいなくともこの最悪な悪夢は変わらない。ファイターのいない分を補うかのように
ゾンビたちが僕に噛みつこうと群がってくる。
今、僕は１０体のゾンビに囲まれている。ハンドガンでゾンビの頭を撃ちぬくがとても間に合わない。
ハンドガンをしまい、ショットガンに武器を替えた。これで一気に蹴散らしてやる!
残った7体のゾンビを銃弾が通り抜ける。５体のゾンビが倒れ絶命した。
しかししぶといことにまだ2体のゾンビが這いずりながら僕の足を掴んできた。
噛まれても感染しないが傷を負うとまずいので噛まれる前に頭を靴

の踵で消した。
安心し少し立ちつくした。頭を擦りながらだ。さっき壁越しにショットガンを撃ったため、振動で
後退し、その拍子に頭をぶつけた。これが結構痛い。
痛みが和らいだところでドアを開け、先に進んだ。

警察所庭に出た。月が不気味にも光り輝いている。前の事件で屋上の探索をした隼勇は今と同じ
月を見たのだろうか?だとしたらバイオハザードが苦手な隼勇はかなり恐怖心が湧いたことだろう。
所庭を駆け抜ける。こんな不気味なところ、早く抜け出したい!
一つの角に差し掛かった。最短で行けるように無駄なく曲る。
その時、光る物体が僕の頬をかすめた。血管が破け、頬から血が噴き出る!
後退し、角を曲がった所にいる何者かに警戒した。ハンドガンとナイフを構える。
何者かはついに姿を現した。化け物ではない。人間だ。セーラー服を着ている。
女子中学生のようだ。包丁を右手と左手に1本ずつ、計2本きつく握りしめている。
目が一瞬合った。その目は恐怖と悲しみが浮かんでいた。そしてまた切りかかって来た!
かなりの速さの包丁を1本、2本とかわした。女子中学生はさらに切りつけてきそうな勢いだ。
攻撃態勢に入ったのを感じ、すかさず僕は言った。

「やめろ!俺はゾンビじゃない!」
その途端、手が止まり、包丁を下げた。ようやく正気に戻ったようだ。
そして謝ってくれた。

「ごめんね。目の前の人がついゾンビに思えちゃって・・・」
僕は同情し、言った。
「気にしなくてもいい。この状況だ、誰だって同じ気持ちさ。」
女子高生が微笑み、そしていきなりはっとして僕の名前を言った。
「もしかして・・・井野俊樹君?」
今度は僕が驚いた。この人とは初対面のはず。なのになぜ名前を知っているんだ?
いや、待てよ、この長い髪、この声、どこかで見て聞いたことがあったような・・・・・・
考え込んでいるうちについに思い出した。
「細坂千里!?」
満面の笑みを浮かべ、千里が言った。僕もだ。
「やっぱり!また会えたね!」
僕らは喜び、お互いに話し始めた。

まず、僕が問いかけた。
「なんでここにいるんだ?確かどこかの県にいる親戚の家で暮らしていたんじゃないのか?」
千里が言う。
「今日はたまたま親戚のおじさんとおばさんと一緒に東京に買い物に来たの。
それで買い物途中、化け物に襲われてね、それで近くにあった警察署に逃げ込んだわ。」
「なるほど。そういうわけか。」
僕は少し間を開けて言った。
「で、どうする?お互い親戚もなくした。近くにの県に逃げたとしても同じかもしれない。」
「外国に逃げるしかないかもね。空港まで走るのはどう?」
「東京の空港はもう使えない。東京と隣り合わせの県もだ。遠くの県に行くとしてもそれまでに

バイオハザードは日本中に広がるかもしれないな」
「とりあえず合流したんだから一緒に脱出ルートを探さない？」
「それはいいけど・・・警察署に脱出口なんてあるのだろうか？」
「とにかく前みたいにうまくいくことを願うしかないわ。」
話し合いが終わり所庭から出るドアをくぐった。

オフィスに出た。電灯はごく普通についている。受付越しに僕がベティと会う前までに
通った道が見える。崩れた正門は雨と暗闇で見えない。僕らは周りを調べた。
机に何か光るものがある。僕は目が悪いため、近づいて確認した。
ようやく確認できる。
光るものはライターだった。警官がよく持っていそうなオイルライターだ。オイル残量は0で
このままでは使うことができない。オイルライターを探さなければ。

「井野君、これって何かわかる？」

千里が何か見つけたようだ。すかさず駆け寄る。そして千里の見つけたものを確認した。
僕はすぐに分かった。これはオイルライターだ。まさに絶好のタイミングで見つかったものだ！
運がいい、という考えはすぐに吹っ飛んだ。それはもういないと思っていたあいつのせいだ！
所庭とつながるドアの方に気配を感じ、後ろをふっとみると巨体の恐ろしい化け物が立っていた。
ファイターだ！ご丁寧にドアを開け閉めするため侵入してくるまでの気配に気がつかなかった。
外とは違い明るいため、はっきりファイターの姿が見えた。武器はロケットランチャーだけかと

思ったが、背中にファイターの身長と同じ長さの刀を2本・ギザギザな刃がついた巨大な鉄の槍・
そしてロケットランチャーを武装している。まさに追跡者といえるだろう。
途端にファイターが2本の長刀を引き抜いた。そしてファイター独特の声で叫んだ。
僕は千里を下がらせ、ショットガンを構えた。それと同時にファイターが長い刀を構え突進してくる！
すばやく引き金を引いた。銃弾がファイターの頭を貫く。が、低い苦痛な声を上げるだけで怯まない。
気がついたらファイターの長刀が僕に迫っていた。ファイターが横振りで攻撃してくる。
長刀を緊急回避で何とかかわした。すぐに立ち上がりショットガンの銃弾を浴びせる。
しかし怯む気配が全くない！ショットガンじゃだめなのか？考えるばかりではやられる！
ファイターはまた突進してきた！今度も危ういところでかわす。壁に頭をぶつけた。
痛みにこらえながらファイターを見るとファイターは壁に刺さった長刀を引き抜こうとしている。
チャンスだ！ショットガンを構えながらファイターへ走った。近距離で撃てばかなり効くだろう。
しかし現実はそううまくはいかない。引き金を引こうとしたその時、ファイターは長刀をへし折り、
長刀の柄で脳天を思いっきり殴ってきた！一瞬、意識が途切れる。
頭がくらくらし、体がいう事を聞かない。これでは立つことさえままならなくなる。
それを見逃さず、ファイターは僕の首を掴んできた！そしてもう片方の手も上げる。

バイオハザードのゲームで見たことがある。ネメシスという化け物は首をつかんだ後、もう片方の手の触手を使い、口から後頭部まで貫いてくるのだ。当然、貫かれたら命はない。

今、僕はそれと似た状況におちいっている。必死にもがくが殴られたせいで力が入らない。

前みたいにうまくはいかないのが現実だ。今度こそ僕はジ・エンドだ？？？？？？？？？？？

そう思った時だった。ファイターの手の力が緩み、僕は床に落ちた。ファイターが苦しそうに声を上げている。その近くに千里がいて、包丁で脳天を貫いている。

だが、これだけでは倒せないだろう。何か使えるものはないか？辺りを素早く見渡す。

すぐ近くの壁にあのかなり頑丈そうなファイターの長刀が突き刺さっている。これだ！

必死に体を動かし、立ち上がった。長刀を引き抜く。そして刃を向け、ファイターに突進した。

長刀は大きくファイターの頭を貫いた。途端にファイターが膝をつき、倒れる。ファイターから紫色の

不気味な血が流れた。これで本当に死んだのか？

疑っている間にまた生き返られても困るので急いでその場を離れた。

何部屋も超えたところでようやく立ち止まり、休憩した。

千里にお礼を言う。

「助かったよ。ありがとう。千里は命の恩人だ。」

「やっと前の借りが返せたね。」

しばらくの間、ここで体を休めることにした。

脱出への希望

休憩するついでに千里と持ち物の確認をし合った。

俊樹
ニューナンブＭ６０、ベネリＭ３、ミスタリーナイフ、キーピック、空のライター、長刀の刃、ゴールドキー、消毒スプレー?1、ハ?４０、シ?１４
千里
出刃包丁、肉切り包丁、火薬銃、ライターオイル、プラスチック爆弾、消毒液、包帯、ガム

確認し終わったところで当たりを調べた。が、ここは休憩所のためほとんど使えるものはない。
その時、１つのロッカーが目に入った。何だが怪しいロッカーだ。他とは明らかに違う。
全体が金色で光り輝いている。メッキでなさそうだ。だとしたらかなりの無駄遣いだ。
扉に手を掛け引くが開かない。やはりよっぽど貴重なものが入っているのだろうか?
ロッカーを上下左右の揺さぶった。ガン、ガンと鈍い音がする。金属の個体が入っているようだ。
お釣か?いや、お釣だとしたらもう少しやわらかい音がするはずだ。
じゃあ何がこの中に?
しばらく考えこんでいると頭にこれと似た色の物が浮かんだ。すぐさま持ち物袋の中を探った。
そして１つの金色に輝くおもしろい形のカギを取り出した。
そのカギをロッカーのカギ穴に差し込んでいると千里が問いかけてきた。

「なんで警察署のロッカーのカギなんか持っているの？」
指を動かしながら僕は答える。
「前に警察署に来たときに拾ったんだ。なかなかきれいだったからさ。」
そういうと千里が笑って言った。
「井野君はさ、小学校でもよく拾ってたよね。鉛筆とか消しゴムとか落ちている物を。」
「そんなこともあったな。あと落し物箱から盗った時もあった気がする。」

思い出話をしているとガチャと音がした。僕はロッカーに視線を戻し、作業を再開した。
ロッカーの扉を引く。すると扉は音を立てて開いた。完全に扉を開け、中を確認する。
中にはショットガン以上に強力な武器が！これならきっとあの化け物も楽に倒せるだろう！
S&WM500・マグナムだ。バレルが長く装弾数は5発である。
当然、僕はこのマグナムをショルダーバックにしまった。警察署で盗みをすることになるとは。
休憩所を後にし、先に進んだ。

警察署の裏庭に出た。出た瞬間、化け物のお出迎えかゾンビ犬が5体待ち構えていた。
あの事件から初のゾンビ犬だ。前はごく普通の飼い犬や野良犬だったが今回は警察犬だ。
警察犬は普通より能力値が高いため、前より手ごわい。十分に警戒しなければ。
ハンドガンを構え、すぐさま引き金を引く。1匹のゾンビ犬の急所に命中し、絶命させた。

絶命したゾンビ犬の悲鳴が合図となり、残り4体のゾンビ犬がいっせいに飛びかかって来た！
忍ばせていたミスタリーナイフを1体のゾンビ犬に投げつけた。ミスタリーナイフが急所に命中し、
絶命させた。武器をハンドガンに変え、すぐさま構える。
僕が引き金を引く前に背後で千里が2本の包丁をゾンビ犬に投げつけた。包丁は見事に2匹の
ゾンビ犬に1本ずつ命中する。さっきと同様、急所に命中したため、
1撃で絶命させた。
残すはゾンビ犬は1匹。しかし姿が見えない。どこへ隠れたのだ？
その時、背後でウウッ、とゾンビ犬のうなり声が聞こえた。驚き後ろにサッと振り向く。
ゾンビ犬はやはり背後に回っていた。僕より後ろの千里の背後だ。
千里が危ない！
だが、それほどゾンビ犬は僕らに接近していたわけではない。銃を構える余裕があるほどだ。
構えたハンドガンの引き金を引き、ゾンビ犬に銃弾を浴びせた。当たり所は急所の脳天だ。
最後のゾンビ犬が断末魔の叫び声を上げ、倒れた。これでゾンビ犬は今はもういないだろう。
僕らはさらに裏庭を進んだ。

裏庭の一つのドアをくぐると正方形の草地とそれに面した1本道が現れた。
草地には何かといろいろな道具が放置されていた。僕らはその中の「マンホールオープナー」を念のため、拾った。もしマンホールが見つかった時、重宝する。草地を離れ、1本道を奥まで小走りで探索する。1本道には使えるものは一つもなかった。だが、脱出の糸口となる道があった。
かすかにだがマンホールが見える。かすかしか見えないのは上に重

ねてある木材のせいだ。
なぜこんな所に木材が重ねてあるのかともかくこれをどうにかしないとマンホールを調べられない。
とりあえず単純に押し引きしてみた。が、壁に敷き詰められてびくともしない。
千里と二人係で同じことをしてみたが結果は変わらなかった。何かいい方法はないだろうか？
通行をふさぐ木材をくやしい思いで蹴飛ばしていると千里が持ち物から何かを取り出して見せた。
得意げに千里は言った。

「これでどうにかできない？」
僕は千里の取り出したものを見ながら問いかけた。
「ライターオイル？確かにこっちの持ち物にもからのライターはあるが・・・」
その時、僕はようやく千里のやろうとしていることが分かった。
「なるほど！ライターの火で木材を燃やして灰にするんだな！」
「そう！灰になったら軽いから楽に払えるものね。」

早速、空のライターにオイルをセットし、燃やす準備をした。そして火をつける。
火を木材に燃えうつす。木材が勢いよく燃えだし、一瞬にして暗闇を照らしだした。
木材が灰になるまでは時間がしばらくかかるだろう。なにしろかなりの量だ。
燃えさかる木材を見すえているその時、背後でガチャ、と音がした。
背後に振り向く。
しかし背後には共に燃えさかる木材が灰になるのを待つ千里しかいない。気のせいか？
千里がどうしたの？と問いかけてきたがなんでもない、気のせいだ

った、で済ました。
本当に気のせいだったのだろうか?あの音は明らかにドアを開ける音。やはり千里に言うべきか・・
千里に言う間もなく、答えはすぐそこに迫っていた。「答え」はウオオオ、と叫び声を上げる。
ファイターだ!あの音はドアを開ける音だったのだ!答えは・・・
「本当」だった!
ファイターが驚くべき速さで長刀を引き抜き、僕らに切りつけてきた!今度は「突き」だ!
間一髪、僕と千里は長刀をかわし、ファイターの向こう側に倒れこんだ。すぐさま立ち上がる。

木材は完全に崩れた。これでマンホールに進めるが、今はそれどころではない。ファイターを
何とかしなければ!前はいわば運により勝ったようなものだ。今回もうまくいく確信はない。
横で何かを噛む音がした。何かと確認すると千里がガムを噛んでいる。作戦でもあるのか?
その時またファイターが突っ込んできた。僕は5発のマグナムの銃弾をファイターの脳天に放った。
ファイターの脳天に見事命中させ、足止めさせた。やはりショットガンよりも効果がある。
千里がガムを噛み終わったのか口から吐き出し、小さい何かに取りつけた。一体あれはなんだ?
千里が合図を出したのが見える。おそらくファイターをもっと撃て、だろう。千里がファイターに
向かって突っ走って行く。僕はファイターが攻撃しないよう、マグナムで足止めをする。
マグナムの銃弾が空になったところで千里がガムのついた何かの兵器をファイターの頭に取りつけた。

そして何かの棒のようなものを引き抜いた。千里がファイターから離れ、近くの地面に伏せる。
その瞬間、ファイターの頭に取りつけられた何かが爆発を起こした。ファイターの頭が吹っ飛ぶ。
ネメシスが膝をつき、地面に倒れた。前と同様、その死体から紫色の奇妙な血が広がる。
千里が服についた土をはらい、こちらに走ってくる。満面の笑みを浮かべてだ。
早速、僕は問いかけた。

「あれはなんだ？小型の爆弾か？それにしてもよくやったな！」
「あれはプラスチック爆弾。弱い爆発だけど近距離で爆破させればかなりの武器になるの。
　ちなみにプラスチック爆弾は警察署で手に入れたよ。」
千里の見事な策略で倒したファイターの死体を後にし、マンホールへ向かった。

マンホールのフタをマンホールオープナーで開けると驚いたことにハシゴではなく階段が現れた。
繋がるのは下水道じゃないのか？どうやら秘密の通路の可能性が出てきた。僕らは階段を下りる。
ここは異様な感じだ。見たところ警察署の地下の収納所らしい。武器や食料が閉まってある。
食料庫を探索した。どれも缶詰や冷凍食品、インスタント食品ばかりだ。なぜこんなに？
冷凍食品やインスタント食品はガスや電がなく食べられないためおいていった。缶詰はナイフで
開けられるので持てるだけバックに詰めた。持ちきれなかった分はできるだけ胃に収めた。
腹ごしらえをし先に進む。武器庫があるとありがたいのだが。

少し進むと一つの部屋が現れた。プレートがある。プレートにはこう書かれていた。

「武器庫」ついに武器庫を発見した！やった！これで強力な武器が手に入ることだろう！

だが、そううまくはいかなかった。カード読み込みのスキャンが壊れてしまっている。

しかしありがたいことにドアに亀裂が入っている。ここからドアを破壊できそうだ。

僕は千里に尋ねた。

「なあ、プラスチック爆弾あるか？」

「あるよ。でも気をつけて使わないと扉もろとも・・・なんでもない。」

プラスチック爆弾を受け取り、ドアの亀裂に引っかけた。同時に信管を抜く。

急いでドアから離れ、爆発を待った。そして離れてすぐ、爆発音が鳴り響いた。

ドアを確かめると跡形もなく吹き飛んでいた。そして武器庫に侵入する。

長く使われていないようで武器庫はほこりっぽい。ほこりと蜘蛛の巣を掃いながら探索した。

探すこと１０分。僕はＨ＆ＫＭＰ５Ａ４サブマシンガンを見つけた。千里はＨ＆ＫＵＳＰハンドガンとマグナムの銃弾を見つけたようだ。マグナムの弾は譲ってもらった。逆に僕はハンドガンの弾を半分ほど譲った。武器庫を出てさらに地下を進む。

ハシゴを見つける。下は暗くて見えない。僕が先に下りその後に千里が下りることにした。

下りた瞬間、何かの液が前に勢いよく落ちた。ふと上を見ると毒蜘蛛が２匹天井にいる！
その液は硫酸と同じだ。これは危険だ！僕は千里の手を引っ張り、奥のドアに逃げ込むことにした。が、ドアには鍵がかかっている。
僕は千里にキーピックを渡し、言った。

「こいつらを何とかしている間にキーピックで開けてくれ。簡単なカギのようだから開くはずだ」

僕は戦闘態勢に入った。武器はベネリＭ３・ショットガンだ。毒蜘蛛が酸性の液を飛ばしてくる。
１発目はかわした。２匹とも同じ方向のいる。チャンスだ！僕は狙いを定め、引き金を引いた。
毒蜘蛛が吹っ飛ぶ。１匹倒した。今度はもう１匹が向かってくる。こいつも仕留められそうだが硫酸はくらいたくない。僕は千里の方へ向かった。
タイミングが良く開いたらしい。ドアを開け逃げ込んだ先には階段あった。
もちろん、これも拾った。ここで持ち物を確認した。
俊樹
ニューナンブＭ６０、ベネリＭ３、マグナム、サブマシンガン、ミスタリーナイフ、ライター、ハ？５０、シ？７、マ？１２、消毒スプレー？１
千里
Ｈ＆Ｋ・ＵＳＰ、出刃包丁、肉切り包丁、火薬銃、ハ？４５、消毒液、包帯、キーピック、缶詰
僕らは階段を上り地上へと進んだ。
出た先は見慣れない場所だった。だが、少しくらいは分かる。よく

この辺りは通ったものだ。
ここは警察署から3?離れた謎の建物。いつも軍人が見張りをしていた。周りは壁に囲まれていた。
僕らから正面の壁にはこの建物の地図が貼ってある。そこには驚きの場所が！
「ヘリポート」と書かれている。ここから遠いが２０分もあれば行ける。まさに希望だ！
僕らは脱出への希望へ向かって走った。

影の男

ここは「秘密軍事施設」と呼ばれているらしい。この事は一つの日記で知った。

２０１０年・３月２０日

ここ「秘密軍事施設」が完成してから今日で１か月になる。悪夢だ。「秘密軍事施設」に近づいた関係者ではない者は見張りの軍人に殺されてしまう。

もうすでに１００人近くの死者は出たのだろうが驚いたことにニュースにすらなっていない。

見張りの軍人はなぜか目がおかしい。まるで操られてるようなのだ。目的は一体なんだ?

この軍人たちは運よく生き延びた目撃者によると御前山から春、冬ごろに連れられているらしい。

とにかく私はこの悪夢から逃れるべく、この真相を暴くため警察を退職することにした。

まずは体勢を整え、訓練を積み、御前山へと向かう事にしよう。

中村武隼

・・・・・御前山に何があるんだ?確か御前山は市原のバイオハザードを脱出した時に出た場所だった。もしや市原、東京も含めて全てはそこから始まったかもしれない。

大体、日本は戦争のしない国のはずだ。なのになぜこれほどの武器が保管されているのだろう?

なんにせよ、この施設には何らかの秘密が隠されているに違いない。この日記について疑問は多かったが考えている余裕などない。早く

今回の悪夢を脱出しなければ。
僕らが目指しているのはこの施設のどこかにあるヘリポートだ。といってもヘリはどう考えても
僕と千里には操縦できない。脱出するにはベティが来ることを祈って待つしかないのだ。
やはりここにもゾンビが多少の数存在していた。どれも軍服の格好をしている。
残り少ないハンドガンの銃弾を1体ずつ脳天に浴びせ、倒した。さらにヘリポートを探して進む。
かなり歩き少し休憩した。だが、この休憩はあっという間に中断された。一人の人物によって。

コツ、コツ・・・奥の廊下の方から不気味に響く靴の音が聞こえてくる。ゾンビではなさそうだ。
僕は銃の弾をセットしながら小声で千里に話しかけた。

「気をつけろ。もしかしたらファイターよりたちが悪い化け物かも知れないからな」
「大丈夫。前みたいに撃たれることはもうないと思うから」
「おい、思い出させるなよ。あの時はめちゃくちゃ心配したんだからな」

一瞬、僕らを一つの風が通り過ぎた。ただのそよ風だろう。特に気にせず、背後を確認した。
その時、恐ろしい光景が目の前に現れた。ゾンビでもファイターでもない、人間だ。
僕と千里はその人物から後退し、姿が完全に見えるまで待った。そしてついにその人物が前進する？
「俊樹、君は光より闇の方が美しいとは思わんか」
姿が月夜に照らされ、はっきり見える。！！！影か？こいつは？？

?????????????????????

僕は警戒しながら影のような男に問いかけた。

「あんたは誰だ?」

影のような男は言った。

「私の名前を知らないのか?前の事件で知ったと思ったが・・・ならばかなり都合がいい!」

「じゃあ質問を変えるよ。Nウイルスで僕たちを苦しめたのはあんたか?」

影のような男は笑っていった。

「それは君の小学校の斉藤校長が自ら進んでやったことだ。金にまんまと掛かってくれたよ。

私はそれに対して少し力を貸しただけだがね。そう、絶大なるパワーの一部を!」

僕は怒りがあふれ、怒鳴ろうとしたが、先に影のような男に言われた。

「いいだろう、怒鳴るくらいなら教えてやる。Nウイルスの源を授けたのは私だ。

もちろん、研究所は私が作った。その結果、罠にはまったバカどもは3つの絶大なるウイルスを作り出した。君たちは2つだけ知っているな。だが残りの一つは全生物共通の最強ウイルスだ。

それは今、何者かに奪われ、私の手元にはない・・・」

ここで千里がさえぎった。

「まさかそのウイルスはわたしたちが持っているとでもいうの?」

影のような男は話を続けた。

「その通りだ。最強のウイルスはお前たちの一人の体内流れている。あの市原の事件の時に

使ったようだな。一人の優秀な部下に回収をさせたがどうしても見つからなかった。

僕は大声で言った。

「なるほどな。あんたが僕たちの前に現れた理由はウイルスの摂取のためだ」
「ウイルスを持っているのは・・・わたしね？どうりであの後、体が急激に強くなったと思った」
同時に僕は影のような男に叫んだ。
「千里を殺す気だな！」
「最後に教えておいてやろう。どちらにしろ世界は滅びる。ウイルスによってではない。私が遣える方、闇の神によってだ。その方の復活まで我々は世に混乱を示しているのだ。その方が復活した時、世界は闇の者たちで埋め尽くされる。Ｎウイルスは目的の１部にすぎん。」
「何言ってるんだ！闇の神だか何だか知らないが千里は死なせない！」
「私の正体を今知ったものは死んでもらう。貴様の横にいる一人の少女からはウイルスを回収させてもらうとしよう！」
「僕たちは生きてここを脱出する。お前なんかに殺られてたまるか！」
影のような男が笑みを浮かべ、
「少しは勝つ自身でもあるのかね？よし、一瞬で終わらすつもりだったが１分間だけ相手を
してやる！」
懐にあったマグナムを取り出し、構えたと共にそいつが目にも止まらぬ速さで突っ込んできた！

マグナムの引き金を引く。銃弾は影の男に向かって放たれた。命中しているだろうか？
だが、銃弾は軽々とかわされた。というより銃弾が影の男の体を突き抜けたのだ！一体なんだ？
新たなの銃弾を放つ間もなく、影の男に首を掴まれる！まずい！これでは手も足も出ない！

殺される、そう思ったが、僕は壁に投げつけられた。背中にものすごい痛みと衝撃が走る！
あのままだったら完全に僕は殺されていた。影の男は遊んでいるに違いない。
その考えを見抜き、あざ笑うかのように影の男は言った。

「少しはやると思ったが所詮は人間。この程度なら貴様など１０秒以内で始末可能だ！」

影の男は僕から目をそらし、後退しながら銃弾を放っている千里にゆっくり近づいて行く。
千里の放った銃弾は影の男の体を突き抜ける。このままでは今度こそ絶対に二人ともやられてしまう！
マグナムの引き金を再び引く。影の男にはやはり効いていない。不思議な体の作りだ。
さらに１、２発と撃ったがよけられた。影の男が再び僕に視線を向ける！
またあの速さで深く腰を落としながら拳打をはなってきた。これをギリギリのところでかわす。
一瞬、影の男の隙が見えた。チャンスだ！慎重に銃口を重ね、銃弾を放つ。
１発目を外してしまった。だが運のいいことにまだ影の男は隙を見せている。
まだ熱を発しているマグナムの銃口から再び銃弾が飛び出す。銃弾が影の男の腹に命中する！
命中した瞬間、奴の内部の何かを破壊した気がする。しかしまた攻撃態勢に入るのがわかった。
腹は意味がないのか？だとしたらやはり頭が弱点なのか？また狙いを定める。

だが、影の男の動きが早すぎて狙いが定まらない。そのうちにまたこちらに突っ込んでくる！
その時、影の男の腹と胸を銃弾が突き抜けた！途端に影の男がついに僕に追いついてしまう。
影の男が影の腕のようなものを刃物に変える。どうやら僕たちはここで終わりのようだ。
強い！強すぎる！本当の正体を知らないまま僕らは天へ旅立つのだろうか？そんなの酷すぎる！
何にせよ、僕らはもう終わりだ。まさにジ・エンド・・・・・・・
歯を食いしばり殺せ、と言わんばかりに胸を突きだしていると影の男が何か言った。

「今ちょうど1分経った・・・」

影の男は壁を破壊し、大人一人分の穴を作った。

「いつでも貴様らの前に現れて相手をしてやる。それまで楽しみに待っているがいい。」

そう言い残し影の男はどこかに去った。それにしても恐ろしい恐ろしいやつだ
キイ・・・・・ふっとして音の方向を向くとドアが開く。まさかファイターか！？
しかしドアから現れたのは少し前に出会った金髪の美しい女性、ベティ・アレナスだった。

「俊樹！無事でよかったわ！」
すぐに言葉を返す。
「ベティこそ無事でよかった！」
ベティの後ろを見るとさらに会いたかった人物がいた

その人物が何気なく言った。
「よう、親友君！」
「隼勇！お前も無事でよかったよ！」

そして少し立ち話をすることにした。まず千里のことを話した。千里は自分の助かった理由を知り、怯えているのだろう。次にベティがここまでのいきさつを話してくれた。
「隼勇とは下水道を進んでるときに出会ったの。それで一緒に行動することになったわ。」
この後も話が続き、また僕が話した。次は影の男のことだ。
「実はついさっきわけのわからない影の男に襲われたんです。」
「影の男・・・？聞いたことあるんだけど思い出せないわ・・・・・・」
「影の男については脱出してから考えませんか？脱出ルートとしてヘリポートと無線室があるんです。どっちに先に行きますか？」
「まずは無線室の方がいいかもしれない。助けを呼べるかも・・・・・・」

ここでさえぎられた。もういい加減飽き飽きしたあいつの登場シーンだ。決まって僕らを襲う。
そう、久しぶりのファイターだ！前と同じように独特の叫び声を上げ、こちらに向かってくる！
僕がマグナムを構えた瞬間、ベティが僕の前に立った。かばってくれているのだろうか？
「俊樹、あなたは先に行って。あとで必ず行くわ。」
「この化け物とは決着をつけたいのもあるし、それにベティ一人じゃ・・・」
「早く行きなさい。取り返しがつかなくなるわよ！」

僕は戦うベティを背後に無線室へのルートに出るドアをくぐった。

ドラッグの救援

ベテイが戦う戦場を後にした僕らはひたすら3人で無線室を探した。銃弾も残り少ない中、ゾンビたちは今も襲ってくる。吸血オオノミもだ。

僕は今、2体の吸血オオノミを相手に戦っている。さすがに2体は少し苦しい。

僕はカスタムショットガンを構え、2体連続銃弾を浴びせる。急所に命中しクリティカルヒット

した。カスタムしたこともあり、吸血オオノミ2体は1発の銃弾で絶命する。

背後では隼勇と千里が背中合わせに戦っていて、隼勇はミスタリーナイフ、千里は武器庫で

手に入れたハンドガンを連射させている。相手は12体のゾンビだ。二人は苦戦しているようだ。特に隼勇は接近戦のナイフのため、かなり辛いだろう。

すかさず僕はショットガンで応戦した。ゾンビをなるべく接近して銃弾を浴びせる。その方が

ゾンビを多く蹴散らすことができるのだ。そして2発目の銃弾を放った。

6体のゾンビが後退する。というより銃弾で吹き飛んだのだろう。

4体のゾンビは頭がない。

さらに撃とうと構えたが、すぐに下げた。それは目の前の光景に圧倒されたからだ。

かつてないほどのゾンビ。数はおそらく50体。これほどの数を相手にするとなるとかなり危険を

伴う。逃げるが勝ちだ。幸い先には警察署駐車場のドアと同じくらい頑丈なドアがある。

襲ってくる50体のゾンビに背を向け走り出した。その間も僕ら3

人は武器で撃退している。

ドアをくぐって真っ先に隼勇がドアに鍵をかけ、念のためかドアの前に机やロッカーを置いた。

僕は額の汗を拭い、乱れている呼吸を整えた。顔を上げると隼勇と千里も同じことをしている。

何か話そう、と思ったが言葉が出なかった。そして呼吸の音だけが響く時間が数分続く。

その時間を終わらせたのは隼勇だった。疲れた顔に少し見える恐怖が見える中、話した。

「俊樹、なんであんなにいるんだ?ここは出口があるはずだ。しかもまるで奴ら僕たちを集中狙いしているじゃないか!あれが偶然だなんてありえない。」

ようやく呼吸が整い、僕は考えを話した。

「たぶん、影の男の仕業だ。きっとゾンビや吸血オオノミにファイターと同じ仕組みを仕掛けたんだろう。といってもあくまでこれは予想だ。絶対とは言えない。」

次に千里がつぶやいた。

「ベティさん、大丈夫かな?まさかとは思うけどさっきの大勢のゾンビに・・・・・・」

そう言ったので僕は答えた。

「ベティなら大丈夫だと思う。見たところかなりの難をかいくぐって来たに違いない。ＳＷＡＴになるにはに数々の訓練を乗り越えなければならないのだから。」

続けて僕は今度、隼勇に問いかけた。

「そういえば隼勇はどうやってベティと出会ったんだ?」

「お前と別れた後、僕は家に帰った。家に入った途端、ゾンビ化したおじさんに襲われたんだ。おばさんは・・・食われていた。人間のままで。途方に暮れた僕はただじっと立ちつくした。そんな時、

一人の警官に僕は引っ張られ、パトカーに乗せられた。それから警察署に向かう、といわれて数十メートル走行していたら今まさにベティが戦っている化け物に襲われた。僕はその警官に庇われて、助かったんだけどその人は・・・」
これ以上聞くと悲しくなりそうなので僕はわかった、と言って止めた。
「要するに駐車場から警察署に入り進んだ結果、ベティと出会ったんだろ？」
隼勇がうなずき、今度は向こうが問いかけてきた。
「俊樹はどうやって千里と再会したんだ？」
「話せば長くなる。この話は無事、脱出できた時に話してやるよ。」
「まあ、聞かなくても僕は大体わかる。俊樹の行動は前の事件の時、覚えたからな。」
話し終わったところで互いに持ち物を確認し整理した。

俊樹
ニューナンブＭ６０、ベネリＭ３、マグナム、サブマシンガン、ミスタリーナイフ、家族の写真、キーピック、ハ？２４、シ？７、マ？１８

千里
Ｈ＆Ｋ・ＵＳＰ、出刃包丁、肉切り包丁、火薬銃、ハ？３０、消毒液、包帯、ライター

隼勇
ミスタリーナイフ、家族の写真、懐中電灯

辺りを見渡すと２つのドアが見える。右か左かどちらに行くか３人で話し合った。
結果、僕が右のドアで隼勇と千里が左のドアに行くことになった。

ここで隼勇が疑問を言う。

「俊樹、なんでお前一人で行くことにしたんだ?まさか千里を守る自信がないのか?」

僕はドアノブのカギ穴にキーピック差し込みながら言った。

「そうじゃない。僕はいろいろ武器があるから心配はほとんどないだろ。隼勇はナイフ1本しか持っていない。だからあえて千里と組ませたんだ。わかるか?」

「なるほど。そういう事か。」

「おっと、この2つ武器を渡す。予備弾もすべて渡すからな。」

「いいのか?ショットガンとサブマシンガンを手放して。」

「大丈夫だ。それじゃあ気をつけて進めよ。」

僕は隼勇と千里に別れ、前に進んだ。

一気に走って駆け抜け、一つの部屋に入った。薄暗い。僕はスイッチを押し、電灯をつけた。

周りを見渡すと一つの長い机と机の上に散乱した紙があった。長机の先にはドアが見える。

ここは会議室のようだ。その証拠に散乱した紙はメモや資料ばかりである。

一応机を調べると紙の山からマグナムの弾を見つけた。その数6発。ありがたい。

もう何もなさそうなので長机に沿って進みドアに向かった。歩いていると何かにつまずいた。

なんだろう?恐る恐る足元を伺うとファイターより恐ろしいかもしれない化け物が横たわっていた。

上半身だけの化け物。姿は人間の女性そっくりだ。こいつは一体・・・・

その瞬間、そいつは襲いかかって来た!目にもとまらぬ速さで襲い

来る攻撃をすぐさま回避する。
ギリギリその化け物の襲撃をかわした。後退しながら化け物の姿と動きを観察し始める。
そしてようやく確信がついた。こいつは斉藤校長が行っていた上半身活動獣！寄生体の塊のような奴で組織を破壊されると瞬時に再生することができる。なぜこいつがこんなところにいるのだ？
とにかく今はこの化け物を倒さなければ死ぬ。といってもは上半身活動獣は普通の兵器では
中々倒せない。だがなぜか下半身は再生しそうにないのでこちらにも十分に勝算はある。
攻撃のチャンスを待った。ハンドガンでは倒せそうにないのでマグナムを構えた。
そして上半身活動獣飛び上がった！同時にマグナムの引き金を引く！
銃弾は命中し、上半身活動獣は床に叩き付けられた。死んだか？銃を構えつつ様子を見る。
かすかに奴は動いた。僕はマグナムをさらに連射し、計５発の銃弾を浴びせた。
さすがには上半身活動獣絶命したようだ。上半身が風船のように膨らみ爆発する。
血痕の上を歩き、会議室を出た。

部屋に入った途端、人の気配を察知した。素早く僕は銃を右手にナイフを左手に構える。
だが人物の正体がわかった時、嬉しさが混み上げてきた。そして名を叫ぶ。
「ベティ！！！」
「俊樹！無事だったのね！」
しかしあまり再開を喜ぶ暇はないことを知った。それは一つのテレビ放送によって。
「ニュース速報です。４日前、再び復活してしまったバイオハザー

ドによって致命的なダメージを受けた東京について政府は今日4月7日止む追えず、日本とアメリカの救助隊の退却を命じました。そして深夜1時30分、ミサイルの発射をまたも実行するとの事です。しかしまだアメリカの救助隊の一部が捜索に当たっているため実行が難しい模様です」

僕とベティは当然、このことに驚いた。がベティはすぐに冷静になり、時間をつぶやいた。

「今は1時15分・・・タイムリミットまであと15分・・・」

そういってベティはこの部屋にある機械を動かし始めた。一体なんだろう?

「ベティ、その機械がどうかしたんですか?」

「これは無線装置。ニュースでアメリカの救助隊が一部がまだ捜索してるって聞いたわね?そのヘリの無線に繋いでここに生存者がいることを知らせようと思ったの。」

そうか、ここは無線室。ついに無線室にたどり着いたのだ。上手くいけば脱出できるかもしれない。

ベティが無線をつないでる間、僕は周りにある引き出しを調べた。引き出しがあったため

探ってみるが開かない。だが簡単なカギのためキーピック外せた。中には「?」と書かれたカードキーがあった。おそらくこれはヘリポートのカードキー。何より「?」が証拠だ。ヘリポートのカードキーをしまい、再びベティの作業を見守った。

そしてついに無線が繋がる。ベティとヘリの操縦士が話し始めた。

「こちらドラッグ!タイムリミットギリギリまで捜索に当たっている!生存者はいないか?」

「こちらベティ!生存者は4名!秘密軍事施設にとどまっている!救援を!」

「わかった!すぐ向かう!屋上か何かで待機していてくれ!」

無線が止まり、ベティが僕に向き直って言った。
「俊樹、ヘリポートに行くわよ。あとそこにある照明弾を念のため。」
「わかりました。あとこれを。」
さっき見つけたヘリポートのカードキーを渡した。無線室を出てヘリポートへ向かった。

エレベーターがある。しかしエレベーターが作動しない。カギか何かが必要なのだろう。
横にはカードスロットがあり赤のランプが点灯している。ヘリポート入場条件を機械が発した。

「ヘリポートへはカードキーが必要となります」

すかさずベティがカードキーを差し込む。すると赤いランプが青く切り替わった。
「カードキー確認。ヘリポートへの入場を許可します」
エレベーターの装置が起動する。ベティは時計を見てタイムリミットを確認してる。
「あとタイムリミットは・・・5分よ。」
エレベーターに乗りみ最後の脱出の希望ヘリポートへ進んだ。

ヘリポートに乗り込むと隼勇と千里が待っていた。二人とも絶望の顔をしている。
僕らを見つけ、その心を打ち明けてきた。

「よかった、俊樹もベティも無事で。でももう終わりだ。ヘリコプターがないからな」
さえぎろうとしたが千里に先を越された。

「俊樹もベティも知ってる?あと4分程度でミサイルが東京中に放たれるそうなの・・・・・・
もう終わりだね・・・・・・今まで頑張って来たのに・・・・・・」
僕はニヤリと笑い事実を話した。
「何言ってんだよ。実はベティが無線でヘリを呼んだんだ!全員助かるぞ!」

二人は驚いた顔をし、何か言おうとしたが一つの爆音にかき消された。そう、救援のヘリの音だ。
操縦士が無線で叫んだ。
「こちらドラッグ!生存者が確認できない!照明弾を撃ってくれ!」
すかさず照明弾を作動させ、居場所を知らせた。すぐに操縦士から答えが返る。
「生存者確認!上陸は出来ないためハシゴを下す!」

ハシゴが下りてきたところですばやく上る順番を決めた。順番は千里、隼勇、僕、ベティになった。
さあ、希望の光が見えてきた!今回はもう邪魔する者はいない!存分に2度目の生還を喜ぼう――
だが現実はそうはいかないのが当り前なのだ。当然、邪魔する者がいないわけがない。
しかももう聞きたくないあの声がする。最低最悪の宿敵ファイターだ!
立ち止まってしまったのは僕とベティのみ。隼勇と千里は空耳かと思って気にせず上ったに違いない。
ファイターは驚きの変化を遂げていた。武器を完全に捨て両手から大中小様々な触手を出している。
いや、よく見ると背中にはまだロケットランチャーが装備されていた。

どうやらもう逃げるには遅いようだ。ファイターはそれほど遠くない距離にいてさらに僕とベティはまだ半分もハシゴを上っていない。戦うしかないのだ。

ベティが静かに言った。

「早く上りなさい・・・あと操縦士のドラッグに私はいいからと・・・」

その瞬間、ベディはハシゴから飛び降り、武器を構えてファイターへと走って行った。

僕はベティを見殺しにすることなどできず、ベティの少し後に飛び降りた。

着地と同時にマグナムを取り出しファイターへ突っ込んだ。これが最終決戦だ！

銃弾をもう何十発もファイターの脳天に浴びせたが効果はまるでない。緊急回避、撃つの繰り返しが続く。このままではとてもじゃないが勝ち目はないだろう。

ファイターはマグナムやグレネードランチャーではびくともしない。まさに絶望的だ。

タイムリミットまであとおそらく2分30秒。なんとなくだが直感で分かる。

その時、ファイターが僕の足に触手を巻きつけてきた！今の僕は宙吊り状態だ！

地面に3回叩き付けられ、やがて放された。激痛が走るが骨は折れていないのが幸い。

すぐさま立ち上がり、ファイターへとまた視線を向けた。すると勝利への道が見えた！

なんとファイターの背中に装備されていたロケットランチャーが地

面に落ちたのだ。これを使えば
ファイターを倒せるかもしれない！とりあえず手に取るチャンスを伺った。

ファイターがベティに標的を変え、僕から離れて行った。チャンスだ！すぐさま手に取る。
ロケットランチャーを構える。しかし撃つことができない。なぜならファイターの近くには
まだベティがいる。このまま撃てば外れる可能性とベティも巻き添えになる可能性もあるのだ。
ベティが倒れた。ファイターからおよそ１０ｍ。まずい！このままではベティがやられてしまう！
途方に暮れていたその時、千里が叫んだ！

「これを使って！役に立つはずよ！」
それは火薬銃だった。すぐに頭の回転が周り千里の作戦がわかった。
「助かったぜ千里！」

その作戦とは火薬銃でファイターをその隙にロケットランチャーで倒すという作戦だ。
取り返しのつかなくなる前に早速、火薬銃を撃った。轟音が鳴り響く。
そしてファイターは思惑通り僕に向き直り、突っ込んでくる。これで終わりだ！
ミサイルが放たれファイターに命中！肉片が飛び散り、ファイターは完全に跡形もなくなった。
当り前だが安心している暇などない。タイムリミットはおそらくあと１分！急がねば！
死に物狂いでハシゴを上り、席に座った。
隼勇と千里、ベティが喜びの言葉で話しかけてくれる。それに僕は

何気なく言葉を返した。

「これで永遠に日本ともおさらばかもな。」

窓からまだ真っ暗な空を見上げ言った。

しかしこの時はまだ一生消えることのない災いに誰も気づかなかった

突然の起こり

バイオハザード・・・・・僕にとってはこの世で一番恐ろしく醜いものである。実際に起こったら、と思った時は果てしなくゾッとした。でもこれはゲームや映画の話。現実ではないと思った。だが、その事件は僕を巻きこんで発生した。しかも卒業式前日に、だ。不吉に感じ、これはきっと死ぬな、と思った。

しかし僕は生還した。いや、僕らというべきか。親友でもある仲間の助けがなかったらきっと僕は中学の修学旅行へ行けなかっただろう？？？？？？？？？？

今僕は一人の友達、いや親友と帰り道を歩いていた。僕らは４泊５日の修学旅行から今さっき、帰って来たばかりだ。何気ない会話が繰り広げられる。

「修学旅行で何買った？」

親友の井野俊樹だ。彼も数少ない市原のバイオハザードから生還した身である。今は僕と同じくここ東京の親戚の家で暮らしているそうだ。

俊樹の質問に答えるべく修学旅行で買った土産袋をあさる。数秒あさってからようやくお目当ての土産に手が触れた。それを掴み、土産袋から出す。

「これだ」

鞘に仕舞われた自慢の品を俊樹の目の前へと突き出す。自慢の品とはミスタリーナイフのことだ。ミスタリーナイフはいざというときに役立つ。例に例えると泥棒侵入時や不良に絡まれた時、あとはバ

イオハザードが起きた時・・・おっと、もうバイオハザードのことは忘れないと。
鞘に仕舞われたナイフを見て俊樹が大声を上げて驚いた。

「ナイフ!?よくそんなもん先生に見つからずに買ってこれたな」
「あの事件から隠す腕を上げたんだ!」

僕が得意げに言うと俊樹が呆れた顔をしていった。

「全く、困った奴だ。中村隼勇」

「中村隼勇」は僕の名前だ。自分でも隼勇（はやき）という読み方をまちがえそうになる時がある。
夢中になって話していると頬に突然、水滴が垂れた。俊樹が見上げたので僕もやろうとしたが、やめた。なぜならさらに水滴が落ちてきてすぐに状況を判断したからだ。
雨だ?????????といっても僕はジャージのため（校則破りだが知ったことない。ジャージ登下校は雨が降っている時のみ許されるのだ）濡れても心配ないが、制服の俊樹はまずいだろう。当然、慌て始める。
俊樹が分かれ道で走りながら言った。

「濡れないうちに帰ろう。じゃあな、隼勇!」
「またな」

僕は手を振り、走り出した。ジャージといってもさすがに濡れるのは気持ち悪い。早く帰ろう。

手で頭を覆いながら走る。家まではあと２００mというところか。
走れば当然、早く着く。

公園の横を通りかかった。その公園に僕はふと、気を取られる。自分でもなぜだかわからないが、興味を引かれたのだ。
公園の砂場に人影らしきものが見える。背はかなり高い。まるで巨人のようだ。それともう一つ、真っ黒な姿の人影が見える。あれは全身黒タイツ姿なのか？
背の高い人影をよく見るとバイオハザードの巨人着用の服を着ている。ということはあれは映画バイオハザードの撮影なのか？じゃあのもう一つの影も役者か。

とりあえず見ていてもしょうがないので家に再び走った。

ようやく家に到着し、ピンポンを鳴らした。１０秒が経過。おばさん、寝ているのかな？おじさんは仕事でいるはずないけど。さらに３０秒、と過ぎていく。
ついに1分が経った。ふむふむ、どうやらおばさんは寝ているみたいだな。まあいいや。僕は玄関のドアノブを回し、こっちに引いた。

「ただいま」

返事がない。本当に寝ているようだ。しんとしているのが何よりの証拠だろう。
靴を脱ぎ、床に足を踏み出す。まずリビングへ向かった。おばさんが寝ているとしたらリビング以外ありえない。おばさんは自分からリビングじゃないと寝れない、と主張していた。
リビングを見渡す・・・がいない。いないという事は寝ていないのか？まさかトイレ？とりあえずトイレに行ってみるか。

トイレのドアは閉まっていた。ドアをコンコン、と軽くたたいてノックする。しかし案の定、返事はない。試しに開けてみると（何やっているんだ僕は）軽く開いた。カギは閉まっていないようだ。

ドアを開けた瞬間、すさまじい悪臭が鼻をつく。あまりの悪臭に一瞬、吐きそうになった。

全く、流せよ。というか流してないだけでこんなに悪臭がするだろうか?何日も洗っていないような・・・そんなことはどうでもいい。くそ、どこにいるんだ?

イライラしながら今度は台所へ行った。台所にいるとキッチンの方でおじさんが膝をついて壁側に座っていた。まさか、気持ち悪くて吐いたのだろうか?にしてもおじさんは仕事のはず。

「おじさん、ただいま。おばさんはどこ?」

返事がない。よっぽど気持ちが悪いのか?というかそれ以前に反応していない。僕ってそんなに存在感なかったけ。自分ではそう思わないのだが・・・

鞄を置き、おじさんの元へ駆け寄った。よく見ると周りに赤い液体が垂れている。吐血!?

しかしそれはもっと残酷なものだった。おじさんが口に何かを咥えている・・・!

内臓!?おじさんの目の前にはおばさんが壁の寄りかかって倒れていた。腹が切り裂かれ、内臓が飛び出ている。おそらく、いや確実におじさんが加えているものはおばさんの内臓だろう。

この現象前にもあったような・・・まさか、ゾンビなのか!?そんなはずはない。確かミサイル攻撃で千葉県ごとバイオハザードは消滅したはず。

でも今、目の前で起きていることは現実。再び起きたバイオハザード。その事実は変えられない。

おじさんが僕に気が付き、歯をむき出しにして歩み寄ってくる。そ

の顔は真っ青でまさにあの時のゾンビと同じだ。おじさんはゾンビ化しているらしい。
とにかく、倒さなければ！元はおじさんだったとしてもやるしかない。やらなければ僕がやられるのだ。化け物と化したおじさんの身を構っている場合ではない。

僕は後退し、ソファーに置いた土産袋をあさった。そして中からミスタリーナイフを取り出す。ミスタリーナイフの刃を鞘から抜いてから構える。
この部屋の構造だと普通に頭を潰すのは難しい。なのに飛び出せば間違えなく噛まれて感染する。何か戦略を考えなければ。使えるものはないか？
リビングの端っこにあるちゃぶ台に目が留まった。あれはおじさんの趣味で置いてあるものだ。使いようによっては役立つかもしれない。

ちゃぶ台を盾のようにおじさんに向かって構える。距離がわずか３メートルまで縮まった。
今だ！ちゃぶ台を盾におじさんに向かって突撃する。ちゃぶ台に押されておじさんは下敷きとなった。
倒れたおじさんの頭に少しためらいながらミスタリーナイフを尽きさす。おじさんが少し大きいうめき声を上げ、絶命した。
・・・これで僕の親族はいなくなった、ってわけか。でもあまり気にしてはいられない。バイオハザードがまた起きてしまった以上、僕は再び戦わなければならないのだ。

突然の起こり（後書き）

突然の割り込み投稿ですみません。でも楽しんでいただけたらいいです。

警官の助け

おじさんが死んだあと（これはただのいいわけで実際は僕が殺した）僕はしばらく動けなかった。おじさんだけではなくおばさんももうこの世にはいない。思えばあっという間だったな。僕が市原の怪奇事件から生還してここに来た。普通、親類でも感染している可能性のある者を迎えてはくれないだろう。

しかし二人は違った。最初は初めに驚いた顔をしたが、それからすぐに私たちが面倒を見るから安心しなさい、って・・・あの時は死ぬほど嬉しかった。

やばい、涙が出てきた。くそ、泣いてたまるか。泣くようじゃこの先、生きていけないじゃないか。心を切り替えろ。二人のことは忘れろ。この悪夢の中から生還することだけを考えるんだ！

と決断したつもりだったが、やはりダメだった。涙が止まらない。無限にあるかのように溢れてくる。それはきっと再び起きた悪夢への恐怖と心の底にたまった悲しみだろう。とりあえず泣き止まないと。

ようやく涙が止まり、正気を取り戻した。まずは何をすべきか。前のように食料や飲み物を集める？それともこのまま外へ飛び出すか？どちらも何だか納得いかない。

・・・・・！そうだ！大事なことを忘れていた！まずは化け物たちを対処するための武器。武器がなければ１００％死ぬ。素手で倒そう、などと考える人は現実が見えていない。

僕は今の持ち物を確認した。武器といえばミスタリーナイフが１本と台所にある包丁とフライパンぐらい。傷薬はおじさんが狩猟の際に持っていく消毒スプレー１本くらいか。

武器は何を持っていこう?刃物などの小さい物はいいが、フライパンや消火器などの重い武器はどうする?あった方がいいかもしれないが、戦いの際、邪魔になる。というかそんなに持っていけるとは思えない。でも前みたいに銃火器が手に入るとは限らないし・・・・・

結局、僕はナイフや包丁といった小さい武器だけを持っていくことにした。

最終的に集まった武器は、

ミスタリーナイフ1本、包丁2本、自転車のスタンド1つ、花火セット（30本入り）

もうほかに武器はないか確かめるため、家中をくまなく探索した。ほとんどの部屋には使えるものはなかった。しかし最後一つの部屋で立ち止まる。ここはおじさんの部屋だ。

おじさんは確か狩猟をやっていたはず。ならば猟銃の一つや二つ、それとその猟銃の予備弾がたくさんあるのではないか?とにかく入って調べよう。ドアノブを回す。

が、ガチャガチャと音がするだけで開かない。どうやらカギがかかっているらしい。おじさんは僕がこっそり猟銃を持ち出さないようにと、閉めていたのだろうか?

カギはなさそうなので、何か扉を破る重量の重い物を探しに行った。思い当たる物は数個、消火器、金槌、金庫など。どれもさっき探索しているときあちらこちらで見かけた。

最初に見つかったのは消火器だった。おじさんの部屋はちょうど玄関のすぐ右側にあるため、当然といえば当然だ。消火器を持ち上げ、おじさんの部屋へ戻る。

消火器を後ろに引き上げ、力を込める。そして勢いよくドアを殴り

つけた。手に衝撃が走る。ドアは木性だが、丈夫なようで消火器一発殴るだけでは壊れない。
ドアが少し壊れた。消火器で壊れないかも、と心配したが大丈夫そうだ。さらに2、3回と殴りつける。そのたびに手が振動でしびれたが堪えた。
4回目でようやくドアに穴が開いた。その穴に手を突っ込み、内側のカギを開ける。これで出入りが可能となる。といっても武器を集めたらもう来ないと思うが。

早々と部屋を見渡す。銃はどこだ?壁を見ると1丁のみ、猟銃がかけられていた。本当はもっとあると思うが、修学旅行の少し前におじさんは言っていた。それは1週間前の事だ。

おじさんが玄関を弱々しく開き、1年ぶりの顔を見せる。この時までおじさんは狩猟の仕事の際に事故で死んだ、と思われた。しかし何と生きていたのだ!嬉しい!

「今帰った。朱里、隼勇・・・心配かけてすまなかった」

僕はおじさんを見て泣きそうになった。体中傷だらけで背中には1丁しか銃が武装されていない。とにかく今は身なりなどどうでもいい。生きて帰って来られたのだから!

「おじさん!よかった・・・今までどこで何してたんだよ!」
「いや、えとな・・・狩猟の際に崖から落ちた。幸い狩猟の仲間がいて助けてくれてな、一命は取り留めた。だが、記憶喪失になったらしい。これはちょうど1週間前の話だ。そして今日、ようやく記憶を取り戻し、帰ってきた。銃はかなり失ったがな」
「とにかく・・・よかったよ・・・」

その時、僕ははっとした。おじさんの目がそわそわしている。あの目って嘘をついてるときに現れる目だよな?おじさん、何か嘘をついているのか?まあどうでもいいけど。

今思うと「目」についてはどうでもいいが銃のことは・・・くそ!おじさんめ、全部持って帰ってこいよ!ていうかこうなることなんて予想できるわけないか。僕もそうだし。

心を切り替える。考えてみれば今は前のことなど振り返っている場合ではない。早いとこ銃を回収して家を出よう。行き先についてはあとで考えるか。

壁から猟銃を取る。かなり重い。種類は何だろう?ウインチェスターか?いや、違う。

イサカM37。番径12ゲージ、全長1017mm(約1m)重量2300g(2,3kg)のショットガンだ。装弾数は5発と普通だが、左利きでも扱いやすいらしい(俊樹から聞いた)僕は左利きのため、嬉しい銃だ。イサカM37は戦争でも使われたらしく、さらにアメリカの警官がパトカーに装備しているそうだ。狩猟だけではなく、スポーツ射撃としても使われ、民間でもベストセラーとなった銃。さらに・・・おっと、俊樹のくせが移ったようだ。早く行動しないと。

イサカM37を肩にかけ、次は弾薬を探した。弾薬も銃と同様、あまりない。きっとおじさんが使ったのだろう。といっても合計35発もあるため、しばらくは大丈夫だろう。

部屋を出てリビングへ向かう。イサカM37以外の生き残るための道具を取りに行くためだ。リュックサックに詰めているためすぐに出発できる。でも、どこへ行こう?

リュックサックの中身を再度確認したところで背負う。さあ、悪夢の中へ出発だ。

?????でどこに避難するんだ?いつも通っている中学?いや、ダメだ。2年の僕たちは修学旅行のため部活はないが、1年と3年生の先輩たちがいる。1年と3年は2年に比べて桁外れに多い。つまり、中学はゾンビだらけ、という事だ。そこにわざわざ飛び込む奴がどこにいる?ゲームのようにうまくいくと思うやつはいくだろうが。

警察署はどうだろうか?武器も豊富にあり、何より警官たちがいる。他にも避難してきた人がいるかもしれないのでいいかもしれない。決まりだ。

目的地は警察署。ここから2?ほどある。

玄関のドアを開け、外へ出た。あいかわらず雨は降っている。雷まで鳴っている。雷がもし落ちるなら是非とも化け物たちに落としてほしいものだ。そんなこと起きるわけないか。

庭を出ると早速、ゾンビが3体、近寄ってきた。狙いはもちろん、僕だ。3体はちょうど1列・・・今からする攻撃から見れば絶好の的だ。

イサカM37・ショットガンを構える。弾は十分にセットされているので心配はいらない。目の前のゾンビに集中するのみだ。銃口を動かしながら標準を合わせる。

銃口が合わさった。それと同時に、引き金を引いた。反動が手を襲ったが全然気にならない。

銃弾は列をなした3体のゾンビを一気に貫通した。狙いは頭だったため、すぐさまゾンビたちが倒れる。2体は完全に絶命したようだが1体は這いずりながらもしぶとく残っていた。

僕はそのゾンビに歩み寄り、頭を踏みつけた。グシャリという音と共にゾンビが絶命する。

だが、次の瞬間、グシャリという音はかつてないうめき声によって消された。なんと左右の道路からゾンビの集団が群がってくるではないか！数はおよそ４０体はいるだろう。
逃げ道は家の中しかない。僕は玄関に再び戻ろうとした。が、玄関の方からも１０体ほどのゾンビが待ち構えていた。まずい！ふさがれた！

その時、今度はゾンビのうめき声を何かがかき消した。これは・・・エンジン音？車のようだ。すぐさま音の方角を見ると1台のパトカーがゾンビの群れを蹴散らしながらこちらへ向かっていた。
パトカーは僕の前で止まるとクラクションを鳴らした。載れという合図か？とにかく今は乗り込むしか逃げ道はない！ドアを開け、パトカーに乗り込んだ。
運転手とはもちろん、警官である。

川原大輝と鈴木真里之

「中坊、お前、奴らに噛まれていないよな？」

これが危機から救ってくれた警官の最初の言葉だった。普通だったら「大丈夫か？」「けがはないな？などの言葉を掛けて来る。しかしこの警官は違った。自分の身を守るための確認・・・いわば油断をしていない。この警官、階級は巡査のようだが、相当戦いに慣れているようだ。

おそらく、というかもし僕が「噛まれた」といえば１００％降ろされるだろう。いや、車内で殺される可能性の方が高いかな。まあ、事実上、噛まれていないのだから、「噛まれていない」と言えばいい。ここで嘘をつく奴は世界中探してもいないだろう。

「噛まれていません」

「本当だろうな？さっき助けたやつは噛まれたら降ろされるといって嘘をついた。まあ、肩の傷を見てすぐさま射殺したが」

その言葉にハッとして横の席を見ると白髪の男性が一人、血を流して倒れていた。無論、死んでいる。どうやらこの警官、ゾンビになる前の人間も容赦なく殺すらしい。こんな人初めてだ。

その死体の頭には９ｍｍほどの穴が開いていた。銃殺か！？どこで手に入れたのだろう？

死体に驚きつつ、観察している僕にまた警官が話しかけてきた。

「腕・肩・足を見せろ。念のためだ」

僕は無言で立ち上がり、腕・肩・足を警官に見せた。警官はくまなく確認する。爪で引っかかれた場合も感染することを知っているの

だろう。抜け目がない。この男、信用できるのか？
ようやく警官が目をそらし、ハンドルに向き直った。銃を構える様子はない。僕が噛まれていないと分かったのだ。警官が言った。

「シートベルトを閉めろ。俺の運転は少し危険だからな。さらにこの状況も加えると間違えなく死ぬぞ。シートベルトは命綱だと思え」
「ま、待った！一体どこへ向かうつもりで・・・・・・」

言い終えるのを待たず、パトカーは発進した。一気に加速し、ゾンビの大軍を蹴散らしていく。俊樹がこの光景を見たら「人がゴミのようだ！」と言って笑うに違いない。
過労時でシートベルトを閉めた。１秒でも遅れれば前の座席に顔面を強打し、鼻血を出していただろう。まさに間一髪だ。それにしても何キロスピードを出しているんだ？
僕はパトカーが走る中、イサカＭ３７に銃弾を十分にセットした。スライド式なので簡単に引き金を引ける。引き金部分にはおじさんが狩猟で付けたと思われる古い血がついている。
前方を見るとそこには大きな建物が映っていた。見たところデパートらしい。何でこんなところへ？と一瞬思ったが、すぐにわかった。生存者を助けるために来たのだ。

パトカーはデパートの駐車場で止まった。案の定、ゾンビたちが群がって来る。しかしそのほとんどはパトカーでひき殺したので今の駐車場には１０体くらいしかいない。
あまりの速さに僕は車酔いした。だが、警官は見向きもせず、外へ出た。うっ、吐きそうだ。きっとパトカーで吐いたら・・・とりあえず外に出るか。
パトカーから出る。出た瞬間、胃のものが逆流して吐いた。履いている最中、辺りを見渡すと早速、警官が銃を発砲していた。あの銃は見たところハンドガン・ワルサーＰＰＫ。９ｍｍ弾を使用し、重

量は６３５ｇと銃にしては軽い。あの銃で白髪の男性を銃殺したのだろう。

吐き気がやっと止まった。口をジャージの袖で拭いていると背後からゾンビが向かってくる。距離はそれほど遠くない。といってもショットガンがあるためすぐに倒せる。

ゾンビに向き直り、イサカＭ３７を構えた。狙いは数秒でつき、その瞬間、引き金を引いた。銃弾がゾンビの脳天に命中する。この時の距離は１ｍもなかったため、ゾンビの頭は吹っ飛んだ。

次なる敵に警戒したが、無駄だった。すでにほかのゾンビは警官が倒していたからだ。僕がそのことに気が付いた時、警官はデパートの入口へと走っていた。

警官がデパートの入り口に到着し、止まった。僕の到着を待っているらしい。スピードを上げ、さらに走る。入り口まではもう１００ｍもない。

その時、僕は突然、何かに足を乗せた。次の瞬間、僕ははでに転んだ。コンクリートの道に頭を打つ。頭がじーんと痛んだが、幸い血は出なかった。それにしても何を踏んだんだ？バナナの皮？

立ち上がって確認するとそれは鉄パイプだった。鉄パイプの近くには「工事中」と書かれた標識が置かれている。おそらくこの中の材料の一つだろう。

鉄パイプか・・・素材は鉄で固いし、リーチは確実にナイフより長いし・・・武器として使えそうだ。

僕は鉄パイプを拾い上げ、再び走り出した。

頭を摩りながらデパート内に入る。警官はワルサーＰＰＫのマガジンを取り換えていた。銃の扱いにもよほど慣れている。元軍人？・・・なわけないか。

そういえばまだこの人の名前は聞いていない。思い切って聞いてみ

るか。

「あの、あなたの名前は？」
「お前が言ったら言ってもいい」
「僕は中村隼勇。ごく普通の中学生です」

警官が名乗ろうとしたのか、口を開いた時だった。遠くで悲鳴が聞こえる。文具売り場の方からだ。声からして女性。まさかオカマなわけないよな？まあ、とりあえず助けないと。
警官が付いて来いよ、と言い、走り出した。同時に僕も走り出す。イサカＭ３７は背中に掛け、メイン装備は鉄パイプだ。未だに頭が痛く、走るたびにズキズキするが、我慢した。
進むに連れて悲鳴が大きくなると思いきや、その悲鳴がなんと銃声に変わった。襲われている生存者は本当にオカマでついに男の本性を現したのか？男の本性が引き金となって発砲しているのだろうか？

文具売り場に着いた僕らを出迎えたのはゾンビ化したお約束といってもいいほどのあいつ・・・ゾンビ犬だ！３体ほどいる！首輪を付けている奴もいておそらくそいつは誰かのペットだったのだろう。他は首輪を付けた犬より汚れている所から野良犬だと分かる。外から侵入したに違いない。
ゾンビ犬が僕らよりも早く、飛び掛かって来た！僕はいち早く察知し、鉄パイプで殴りつけた。グシャリという音がし、殴りつけたゾンビ犬の背中が不安定に曲がった。背骨が折れたのだろう。こうなってはもう動くことはできない。残るは２体。いや、１体か。１体は警官が倒したはずだ。

しかし残る数は・・・２体。なっ！？警官が倒したはずじゃ！？まさかやられたのか？すぐさま警官の身を確かめるとゾンビ犬に馬乗りされていた。それを必死に退けようと首と口を押えている。あの

状態では銃は使えそうにない。噛まれないように身をかばうのが精いっぱいだろう。
僕も相手の身ばかり心配していられない。ゾンビ犬はもう1体いる。ショットガンを撃てば楽に倒せるがその間に警官がやられてしまうかもしれない。さあ、どうする?
自分の身を優先して警官を見殺しにするか、それとも警官を助けて自分は感染するか・・・・・・
答えはもう決まっていた。僕は鉄パイプを剣のように構え、突進した。

警官に馬乗りになっていたゾンビ犬が吹き飛ぶ。警官が自力で引き離したのではない。引き離したのは僕だ。ゾンビ犬は教材の本が置いてある本棚に衝突した。
ギャン、という悲鳴と共に本棚が倒れた。ゾンビ犬は起きる間もなく、本棚の下敷きとなった。断末魔の叫び声は聞こえない。なぜなら迫り来るもう1体のゾンビ犬の声にかき消されたからだ。
僕は鉄パイプで殴ろうとしたが、今の体制ではとても間に合わない。イサカM37を発砲する、と考えたが、これもダメだ。どちらにしろ、僕は噛まれ、感染するのだ。その後、倒せたとしても感染したため、警官に置き去りにされる。さらに時間が進み、僕は奴らの仲間となるのだ?????

その時、一つの銃声が鳴り響いた。それはまだ立ち上がる途中の警官ではない。少し遠くの誰かだ。放たれた銃弾がゾンビ犬の足に命中し、怯ませる。これは・・・チャンスだ!
とっさに立膝のまま、イサカM37を構え、引き金を引く。至近距離なのでゾンビ犬の頭が吹っ飛んだ。ゾンビ犬は即死のため、絶叫する間もなかった。それにしても誰だ?
とにかく、助かった――――――僕はイサカM37を再び背中に掛け、鉄パイプを持ちつつ、立ち上がった。同時に警官も立ち上がる。

辺りを見渡すと一人の女性が立っていた。空だと思われるマガジンを捨て新たにマガジンを取り換えている。そしてこちらへ歩み寄ってきた。

「大丈夫？私が来なかったら完璧死んでたわ」

「あ、ありがとう。君は？」

「あなたは噛まれてないみたいだけど、後ろのおまわりさんは？」

警官が噛まれていない、といい足・肩・腕を突き出す。それを見て納得したのかその女性は名乗った。

「私は鈴木真里之。高1よ。狩猟が得意で御前山に1週間前まで過ごしていた。ようやく帰って来れたと思ったら・・・こんなことにね」

「僕は中村隼勇。中2で修学旅行から帰ってきたらこんなことになっていた。」

「俺は・・・川原大輝。階級は巡査だ。」

川原大輝・・・ようやく名前がわかったな。それにしても真里之が言う「御前山に1週間前まで過ごしていた」って・・・おじさんと同じ狩猟場と帰宅日じゃないか。偶然か？

他に生存者はいないだろう、ということになり僕らはパトカーに戻ることになった。行き先は警察署らしい。デパートを出る前に僕は役立ちそうなものを集めた。

武装した化け物

僕は始めに文具売場を探索した。本当は工具売場を探索したかったがそれができなくなった。いや、できなくなっていたか。大輝巡査によると工具売場にはゾンビ犬が１０体はいたらしい。すぐ隣が食品売場なので当然と言えば当然だろう。もし大輝巡査に言われなかったら大惨事になっていた。

大輝巡査は2階の食品倉庫へと探索しに行った。武器目的ではなく避難者のための食料調達だそうだ。避難者は3日前から集まったらしい。3日前というとまだ僕らが修学旅行に行っているときか。となると修学旅行中にバイオハザードが起きた、と言って間違いない。ゾンビ犬の襲撃から救ってくれた真里之は僕と同じく文具売場を探索している。服装はセーター、ダウンジャケット、長ズボン、厚手の靴下という登山の格好だ。髪はショートカットで少し茶色い。背は僕より拳一つ分高い。僕から見るとけっこう美人である。

それにしても真里之の言う狩場と帰宅日が気になる。帰宅日は1週間前でちょうどおじさんと同じ。ていうか登山の服装のままなのはなぜ?大体、御前山で狩猟はできただろうか?もしできたとしても限られるだろう。いっそのこと聞いてみようか?僕は真里之に歩み寄った。

真里之は普通のカッターや段ボールカッターを並べ、一つ一つ観察している。きっと切れ味のいいものを見極めているのだろう。おっと、そんなことより早く質問しよう。

「ちょっと聞くけど真里之の言う御前山って狩猟はできんの?」

「回答する前に一つ言うけど私の方が年上なんだから「さん」とか「先輩」とか付けて言ってよ」

僕はゴホン、と咳払いをし、続けた。中学で女の先輩とはあまり喋らないため、何だか言いにくい。でもこのさい文句は言えない。真里之の機嫌を損ねて回答してもらえないのは困る。

「えっと、真里之先輩、回答をよろしく」

「そのことは・・・ごめん。ある事情があって言えない」

「じゃあその拳銃を見せてください。盗む気なんて脳と心のどこにもありませんから」

真里之はためらわず「はい」と言って渡してくれた。この銃は・・・グロック２６。ワルサーＰＰＫよりも軽く重量は５６０ｇで９ミリ弾を使用する。強化プラスチックという素材が衝撃を吸収するため、反動はあまり強く感じない。装弾数は１０発。扱いやすい銃を選んだみたいだな。

ん？って選んだわけないよな？手に入れたに決まっている。どこで手に入れた？日本に銃がそうそうあるわけないし、非常事態でない限り警官が持っているはずもない。大輝巡査は警官のため、外国から配布されたのだろう。まあそんなに深く考えることはないが。

気になるのは銃のことだけじゃない。狩猟についてなぜ言えないんだ？そんなに大事な事情でも？考えすぎても頭が痛くなるだけなのでもうよそう。さてと探索に戻るか。

今の所、役に立ちそうなものは見つからない。鉛筆や定規、消しゴム、ノートなどと言った文房具ばかりだ。そうだ、ここは文具売場だったな。文房具ばかりなのは当り前だ。

カッターなどの刃物などもあったが、今となっては必要ない。ミスタリーナイフや包丁があるからだ。持って行っても使い道はないだろう。他に何か使えるものはないか？さらに探索を進める。

テープ類が並べられている。セロハンテープ、ガムテープ、ビニールテープ・・・工作には役に立つが鈍器を作るのに役立つだろうか

？爆弾を作るときには役立つかもしれないが。
僕は自分の持ち物を一通り、確認してみた。

ショットガン・イサカＭ３７、ミスタリーナイフ、包丁２本、鉄パイプ、消毒スプレー、止血剤

ふと包丁の柄の部分に目が留まった。家では包丁をわざわざ観察したりしないのでこれが初めてだ。この包丁は珍しく柄の部分が筒形で丸い。まるで鉄パイプの穴にはまりそうな気がする・・・
僕は突然ひらめいた。リーチの長い、鉄パイプより強力な武器の作成方法を。かなり単純だが心強い武器が作れる。これは鉄パイプと包丁２本、それから文具売場にあるビニールテープを使う。
まず包丁２本の柄の部分を鉄パイプの方穴に差し込む。包丁はぴったりとはまった。予想通りだ。そしてビニールテープを隙間なく頑丈に巻いていく。ビニールテープ３個分を巻き終わったら完成だ。こうして完成品を見てみると槍のようにも見える。ゾンビに使用するときは喉元に突き刺すのが有効かもしれない。頭を狙ってもいいが、抜けなくなる可能性がある。
ゾンビ犬は簡単に倒せるだろう。脳天に刃を突き刺せばいい。この武器の名前はどうしよう？

「槍包丁」にするか。鉄パイプの文字が一つも入っていないけど考えるのもうめんどくさいからいいや。とにかく槍包丁は強力な武器として活躍すること間違いない。メインとして常に持っておこう。
見たところもう役に立つものはなさそうだ。さあ、そろそろ大輝巡査に・・・・・・
その時、一つの叫び声が上がった。聞きなれた男性の声だ。少し遠くから聞こえてくる。

「走れ！わけもわからずパトカーまで走るんだ！早くしろ！」

この間わずか2秒。ずいぶんマシンガントークだな、大輝巡査。ていうか逃げろってどういう事だ?わけもわからずパトカーまで走れって?あれ?何だが胸騒ぎが・・・何だろう?

次の瞬間、僕は突然引っ張られ、走り出した。一度よろけたが、何とか持ち直した。苦しい。首が閉まる。そんなこともお構いなしに僕の体は引かれながら出口へと進んでいく。

僕を引っ張りながら走っていた人物は真里之だった。迫り来るゾンビをグロック26で撃退していた。しかも片手で発砲している。大輝巡査と同じよほど銃の扱いに慣れているようだ。

僕も応戦しようと槍包丁を構えた。だが、そのころにはすでにデパートの出口まで来ていた。気が付くと隣に大輝巡査がいる。なるほど、大輝巡査が駆け付けたこともあって早くゾンビを撃退出来たのか。

ようやく地下駐車場に到着した。新たに侵入したゾンビがさまよっている。まだ僕らには気が付いていない。といってもパトカーまでたどり着くにはやはりゾンビたちを始末するしかなさそうだ。

僕は槍包丁を低く構え、戦闘態勢に入った。大輝巡査と真里之は銃弾が残り少なくなったのか、銃をしまい、大輝巡査は金属バットを真里之は鉈に持ち替えた。そして3人で突っ込んでいく。

ゾンビが群がって来た。僕は1体のゾンビの喉を狙い、槍包丁を後ろに引く。狙いが定まったところで勢いよく突き出した。刃がゾンビの喉を貫通し、そこから血が噴き出る。包丁はあれだけ固く固定したため壊れる心配はない。ただ血に染まるだけだ。汚れた血に。

またゾンビが噛みつこうと群がって来た。今度は刃ではなく、鉄パイプのままの片方を使う。僕は首に狙いを定め、バットのように横振りした。その拍子に刃がほかのゾンビを切り刻む。

バキッという音と共にゾンビが倒れた。首の骨が折れ、神経が無く

なったらしい。さすがのゾンビも神経が無くなれば死ぬ。銃の少ない日本では頭より首を狙う方が効果的かもしれない。
パトカーの周りのゾンビがあと１０体ほどまで減った。減ったといってもまた外から侵入して来る。これ以上増えたらめんどうだ。ここは銃を使うのがいいだろう。もちろん、使うのは僕だ。
イサカＭ３７を構え、ゾンビの頭を狙う。大輝巡査と真里之は僕のやろうとしたことが分かったらしく脇にどいてくれた。標準が合わさる。これであとは引金を引くのみだ。
発砲してすぐにグシャリという嫌な音が響いた。その音に混じってなぜかキンという金属同士がぶつかったような音もした。ゾンビたちを確認すると大半が頭を無くしていた。

残りのゾンビを手分けして片づけ、パトカーに乗り込んだ。ふとドアを見ると一つの穴が開いていた。これってもしや、さっき発砲したときのものか？まあ、しょうがないだろう。
大輝巡査がエンジンを入れ、パトカーを発進させた。案の定、地下駐車場の入り口付近にいたゾンビはパトカーに弾かれ、絶命した。
そんなことはどうでもいい。一体なぜ、突然に走れ、などと言ったのか？その事を聞こうと喋りかけたが、真里之に先を越された。

「どうしていきなり？ゾンビかゾンビ犬の集団にでも遭遇したんですか？」
「いや、違う。あれはゾンビじゃない。ゾンビより恐ろしいぞ。」
「それってどんな奴なんですか？ゲームで言うボスキャラみたいな奴？」

大輝巡査はワルサーＰＰＫのマガジンを取り換えつつ、少し沈黙した。その間、僕はイサカＭ３７に銃弾をセットした。ついでに槍包丁の血も落とした。そしてまた大輝巡査に視線を移す。
大輝巡査が沈黙を破り、話を続けた。恐ろしい化け物とやらの。

「そいつは化け物の癖に武器を装備していやがった。その武器がまた恐ろしく、なんとバズーカだ。さらに槍や刀も見えたな。槍と刀は異常なまでに大きかった。あんな化け物に襲われたら俺たちは間違いなく死ぬだろう。見るも無残にだ。奴には銃はあまり効かないだろう。」

「・・・・・大輝巡査・・・あれは・・・一体？」

突然、真里之が前を指差した。今から向かう交差点の辺りだ。僕も目を凝らし、よく観察する。ん？あれってどこかで見たことあるな。あの巨人みたいな人。確か学校帰りの公園で見たような・・・あ、なんか構えてる。あれは・・・バズーカ？こんな時なのによく映画撮影なんてできるな。

そういえば大輝巡査の言った化け物はバズーカを持っているとか・・・てまさかあいつじゃないか！？

だとしたら・・・僕たちは相当危ないんじゃ・・・やばい！逃げないと！

僕はそのことを伝えようとしたが、もう大輝巡査も真里之も分かっていたようだ。あの交差点に立っている巨人はデパートで命からがら逃げてきたその背後にいたやつだ、と。僕らは先回りされた。奴は頭がいいようだ。あの位置からミサイルを撃たれちゃもう逃げ場はない。

つまり？？？？？ジ・エンドだ。ミサイルによって爆発と共に僕らは肉片も残さず・・・

その瞬間、巨人からミサイルが放たれた。

第４の生存者・ドラッグ

悪夢がいまだに消えない４月５日千葉県市原市での夜。逃げ惑う住民の声もない。
聞こえるのは化け物の声だけだ。血も飛びかう。生き残りはたぶん俺とわずかな住民だけだろう。
俺はドラッグ。わけあってこの悪夢が終わらない町を未だにさまよい、逃げ回っている。
いま俺は一つの建物のガラス窓を突き破り、道路に飛び降りた――
――――

足が折れる心配はなかった。訓練も散々受けたからだ。その時の傷跡もまだ、残っている。
辺りを見渡す。前後左右から数えきれないほどの化け物、ゾンビが俺の肉にかぶりつこうと集ってくる
数百匹、数千匹はいるかもしれない。周りの道路もほとんど埋め尽くされて見えない。
こうなっていることは分かっていたことだ。４月４日の深夜０時、ある組織と一つの学校は手を組み、市原を地獄と化させた。あらたな遺産のＮウイルスによって。
１日しかたっていないが、Ｎウイルスは感染スピードが速く、たった１日で一つの市を
ゾンビで埋め尽くすことができるのだ。
今度は俺が化け物になりかねない。救助のヘリ降下地点に一刻も早く向かわなければ！
地上からではどう考えても目的地には行けない。見ての通り、数千匹のゾンビに囲まれているためだ。
俺は前を見通した。頑丈そうな建物がある。おそらくあの建物ならゾンビは入ってこれないだろう。

しかしゾンビはおれを四方八方から囲んでいる。袋のネズミ同然だ。全速力で走る。左右から来るゾンビを超えながらだ。前方のゾンビが見えてくる。
これはいくら必死に走ろうが、かわすことはできないだろう。
となるとゾンビを蹴散らして道を開くしかない。役に立つものはないのか？
サイドパックを探った。銃火器やピッキングセット、治療薬、軍用具などはもうすでにない。
少し前にゾンビから逃げる時に落としてしまったのだ。しかしまだ少し残っていた。
しぶとくハンドガンの弾が１２０発と残り一つの手榴弾と足場用フックがあった。
俺は手榴弾のピンを抜き前方のゾンビの大軍に向かって投げた。手榴弾がゾンビの大軍の中に落ち、見えなくなった。が、かなりバツグンなポイントに落としたことだろう。
次の瞬間、すさまじい爆発が起こった。ゾンビが吹っ飛ぶ。
しかし計算通りにはいかなかった。目的の建物の入り口はまだは数えきれないほどのゾンビに覆い尽くされている。あれでは建物に入り込む前にゾンビの餌食になってしまう。
もう終わりなのか？今まで俺は死と隣り合わせの場面を切り抜けてきた。奇跡と実力によって。
奇跡、いや実力が足りなかったのか？どちらにしてももうおわりだ？？？？？？？？？？？？？
そう思ったときふと手榴弾によって開けた道の先が目に入った。建物の壁が見える。
目的の建物の壁には一つの穴が開いていた。穴はおどろいたことに建物の内部につながっている！
おそらく手榴弾の爆発のよってできたものだろう。あの大きさなら大人一人分は通れそうだ。
半月型の穴のため、ゾンビは気づかないかもしれない。もし気づか

れたとしても簡単なバリケードを
作って侵入を防げばいい。
あまり長くは考えていられない。開けた道に再びゾンビが集り始めた。
俺は意を決し、猛スピードでゾンビの大軍を駆け抜けた。そして頭から穴に滑り込んだ。

滑り込みは読み通り成功した。ぎりぎりの大きさの穴を何とか通り越した。
侵入は成功だ。頭を一つのカウンターにぶつけたが。立ち上がり、辺りを調べた。
ここはバーのようだ。ワインボトルやカクテルがカウンターの奥に並べてある。
そして血まみれな亡骸も倒れていた。がっしりとした体格の男性だ。
ここの店主だろうか？
ゾンビにやられたわけではなさそうだ。ゾンビにやられた時に見られる方の傷や腹の傷がみられない。
前にはゾンビの死体が8体ほど倒れていた。皆、頭を刃物でつぶされた跡がある。
おそらくこの男はゾンビは撃退したものの、ゾンビに一部を噛まれたため、感染してしまい、ゾンビになってたまるかと、ナイフで手首を切って自殺したのだろう。その証拠に手首に深い切り傷がみられる。
男の死体から目をそらし、周りを探索した。何か使えるものはないのか？
一つの戸棚を開けると治療薬が詰められた救急箱が閉まってあった。ありがたくもらっておき、さらに店内を調べた。次は武器がほしいところだ。
金庫がある。かなり頑丈そうだ。しかし、Nウイルスの影響かすっかり錆びついてフタが外れて閉まっている。Nウイルスは金属など

も破壊することができるのだ。
金庫の中を探った。ハンドガンがあった。これは・・・ニューナンブＭ６０？なぜバーなんかに実銃が？

とにかく今はここからどうやって目的地へ向かうかだ。ここはがんじょうでゾンビは侵入して来ないかもしれないが、いつかは自分が飢え死にしてしまう。ワインやカクテルだけでは当り前だが生きられない
このバーには裏口があるが、そこもゾンビで覆われているだろう。ドアを開ける事さえできない。
ならば地下から向かうのはどうだ？この市の地図によると下水道と目的地はマンホール繋がっている。
この方法が一番安全で生き抜く可能性がある。早速、店内のマンホールを探した。
マンホールはすぐに見つかった。が、ここであることを思い出し、くぐり抜けてきた穴に戻った。
バリケードを作らなければ侵入を許すことになる。俺は店内にあった重い木箱を穴の前に設置した。
これで完了だ。俺はマンホールのフタを開け、唯一の脱出への下水道へと下り立った。

下水道に下りてすぐ辺りを確認した。ゾンビは偶然にも1体もいない。
その時、サイドパックにしまってあった無線機が鳴り響いた。無線機を取り出し、応答する。

「こちらドラッグ。Ｎウイルスの入手に成功した。」
「よくやった。そのままヘリ降下ポイントに向かえ。下水道から行くのが一番有効だ。」
「了解。」

無線機をしまい、下水道を走り出した。
一つのドアをくぐるとゾンビが１２体、姿を現した。やはり下水道にもいたのだ。
弾が少ないため節約したいが、さすがにこれだけの数はかわせない。倒すしかなさそうだ。
壁沿いにいるゾンビ1体に銃弾を放った。銃弾はゾンビの脳天を貫き、絶命させた。
さらに壁沿いのゾンビ2、3体とクリティカルヒットさせた。これで通れる。
迫ってくる残りのゾンビを蹴りで倒しながら前のドアをくぐった。
なおもゾンビは追ってくるが無視した。
下水道を走る。水しぶきの音に混じって今、天井にいる化け物の音も聞こえた。
毒蜘蛛だ。普通の蜘蛛の何倍もある。これもNウイルスの影響だ。
全部で8体いるが、倒す必要はないだろう。上から落とされる毒液をかわせば問題ない。毒液は動きが
遅いため楽にかわせる。倒すとしてもハンドガンでは弾の無駄だ。
一気に8体の毒蜘蛛を駆け抜ける。通過するたびに毒液が背後で降り注ぐ。が、無傷で乗り越えた。
またドアをくぐった。またゾンビがいるのだろうか？ハンドガンの弾を込め、慎重に進んだ。
その時、何かが俺の目の前に現れた。ゾンビではない。天井から来たという事は毒蜘蛛か？
しかし違った。目の前の化け物はゾンビでも毒蜘蛛でもない、恐ろしい化け物だった。
体の肉が所々、剥がれ、槍のような長い舌、そして手には刃物のようなかき爪がついている。
こいつは何度か倒したことがある。この近くの学校で一人の少年を救った時だ。確か名前は？？？？？？

その瞬間、化け物が俺に気づき飛び掛かってきた！が、すぐさま反応し、後退したため無傷だ。
ついに思い出した。こいつは赤這い這いだ！ウイルス感染によって突然変異したものだ。
今、襲いかかって来た赤這い這いの背後にはさらに5、6体と続いてくる。
銃弾1発を放った瞬間、すべての赤這い這いが俺に飛び掛かってくるだろう。そうなったら命はない。
だとしたら逃げるか？しかしドアは赤這い這いたちの向こう側だ。
赤這い這いを飛び越えて逃げられるとは思っていない。俺はすばやく辺りを調べた。何か使えるものはないのか？
ドラム缶がある。これだ！ハンドガンを構えた瞬間、赤這い這いがおたけびを上げた！
引き金を引く。赤這い這いも足に力を込める。銃弾と赤這い這い、どっちが早いかは運次第だ。
運は俺に味方した。赤這い這いが飛び上がった時には銃弾はすでにドラム缶に命中していた。
ドラム缶が爆発を起こし、爆風が赤這い這いたちに降りかかる。俺は瞬時に身をかばった。
赤這い這いは爆風により息絶えた。飛び上がった赤這い這いもだ。
俺は3m、後ろに吹っ飛ぶ。
だが、死んだのは赤這い這いたちだけだ。俺は身をかばったため、何とか死を逃れたようだ。
すぐに立ち上がり、赤這い這いたちを確認する。完全にどいつも息がない。
俺は安心し、先に進んだ。
ようやくヘリ降下ポイントに繋がるマンホールにたどり着いた。ハシゴが壊れてしまっている。
だが問題はない。しぶとくサイドパックに残っている足場用フック

があるからだ。
俺は勢いよく飛び上がり、足場用フックをマンホールのコンクリートに突き刺した。
そしてそのまま腕に力を込め、出来た足場に上った。これでマンホールの出口に届く。
マンホールの出口に手を掛け、ヘリ降下ポイントに出た。

ここは発電塔のようで周りは柵に囲まれている。鉄で作られた発電塔はもう跡形もない。
柵の外ではゾンビたちが群がっている。俺に食らいつきたい一心で来ているに違いない。
こんなことを考えていると上空でヘリの音が聞こえてきた。すぐさま空を見上げる。
俺は照明弾を撃った。ヘリはこちらに向かってきて上空で止まる。
そしてこういった。

「着陸は無理だ。ハシゴ下すからそれで上ってきてくれ。ドラッグなら楽勝だろう。」

ヘリからハシゴが下された。さあ、これで任務は成功だ？？？？？？？？？？？？？？？？
その時！柵の方から鈍い破壊音が聞こえた！一体なんなんだ！？
さっさと逃げればいいのだが思わず振り向き、その光景を見すえてしまった。
ゾンビの3倍はある巨大な化け物が柵を殴っている。殴るたびに柵が中に歪んできている。
こいつは今までで一番のボスキャラだろう。前の任務では無視して逃げたが、今回はそうもいかないようだ。そう、巨人だ！
その瞬間、柵が破壊され、巨人と数えきれないほどのゾンビがなだ

れ込んできた！
俺は我に返り、一つの小屋の上に上った。この高さならゾンビは上ってこれないはずだ。
巨人は上ってきた。ここはそれほど広くないが十分戦える足場だ。落ちなければ問題ない。
ハンドガンで倒せるだろうか？銃弾は残り６０発。とにかく戦うしか生きる道はないのだ！
巨人が突っ込んでくる！何とかかわせた。その隙に銃弾を巨人に放つ！
銃弾は巨人の脳天に命中した。巨人よろける。どういうわけか初めから
弱っているようだ。ならば十分に勝算はある。好都合だ！
戦いが長く感じる。まだ5分くらいしかたっていないだろうが1時間が過ぎたように感じる。
その時、ヘリの救助人が叫んだ。

「これで早いとこけりをつけろ。今、その屋根の上に投げるぞ！」

屋根の上に何かが投げられた。丁度、おれの目の前だ。すぐさま手に取り、確認する。
銃のようだ。先端にミサイルがついている。小型のロケットランチャーのようだ。
「ミサイルガン」とでもいうのだろうか？とにかく早くけりつけてやる！
ミサイルガンを構え、巨人に向かって放った。ミサイルが勢いよく飛び出す。
ミサイルは巨人の上半身に命中し、爆発した。これで死んだのか？
巨人は上半身がなくなっており、下半身だけの残し、倒れた。
俺は屋根の上に合わされたハシゴに飛びついた。ハシゴを上り、ヘリのイスに腰掛ける。

任務は無事、成功した。

第5の生存者・サム（前編）

僕はあれから何があったのか全く覚えていない。怪物が入ってきたと思ったら
何者かに眠らされた。確かその薬の名前は・・・思い出せない。
名前は・・・サム・・・だ。経営に外国から引っ越したんだ。それから――――――
気がつくと僕は固い金庫の中にいた。この金庫はもうボロボロ。簡単に扉が開く。
でもなぜこんなところにいるのだろう?僕はお父さんやお母さんを探した。でも誰もいない。
なぜいないのだ?僕は状況が読めない。時はどのくらいたったのかもわからない。
とりあえず気晴らしに、とベランダに出た。
するとそこには信じられない光景が広がっていた。その光景は一面の水景色。
大洪水が起きたかのような、世界が終ったかのような光景だ。
僕はさすがに状況が読めてきた。もう誰もいない、ただ一人ということを。
今は何日たったか知りたい。とりあえず居間に向かってテレビをつけることにした。
向かう途中で僕はあることに気づいた。こんな状況なのにテレビがつくわけない、という事だ。
でも一応テレビをつけてみるか。スイッチを押すと驚くことにテレビがついた。
テレビをつけるとニュースがやっていた。ニュースではこう話している。

「２０１２年、５月２０日、正午のニュースをお知らせします」

２０１２年！あれから2年もたっていたのか？となると僕は2年も眠っていた事になる。
さらにニュースは続く。

「バイオハザード発生があった千葉県市原市は現在、１年に行われたミサイル攻撃により
水没しています　しかしまだ政府の調査によるとバイオハザードは消えていない模様です」

バイハザード？なにそれ？僕はわけがわからない。

「そこで政府はミサイル攻撃を再度実行する、とのことです」

！！！ミサイル攻撃だって！まだ生存者がいるんだ！ひどすぎる！
僕はこのまま死ぬのか・・・
この後、ニュースではこう言った。

「バイオハザードが続いているとのことでまだ生存者がいる可能性がある、と政府は主張しています。そこで日本政府はアメリカ政府の力を借り、救出部隊を潜入させることを言いました。潜入は３日後に行われるそうです。ミサイル攻撃はその１日後だそうです」

僕はテレビを消し、少し休む。その後台所へ行き、冷蔵庫を開け、食べ物を探した。
冷蔵庫には魚や野菜の缶詰があった。それを食べ、腹を落ち着かせた。そしてあることに気づく。
それはミサイル攻撃、のことだ。１年前に行われた・・・という事はここもかなり壊れているはず。
明らかにおかしい。他の建物は水の下で壊れているというのに。一

体どういう事だ?
それに僕だけなぜ助かったのだろうか?ついさっきまで入っていた金庫のおかげ?
謎が深まるばかりで正解のはたどり着けそうにない。とりあえずほかの家の部屋に行ってみた。
非常扉は吹っ飛んで壊れている。とりあえず食料と衣服や武器などを集めた。
一つの部屋には警官と思われる死体があった。頭に包丁で突き刺したような跡がある。それにしても吐き気を呼ぶ悪臭だ。しかし何か武器を持っているかもしれないので我慢して調べた。ズボンにホルスターがあり、中には拳銃が一丁、収められていた。さらにポケットから予備弾を手に入れた。だがこれだけでは必要なものが足りない。まだ探す必要がある。

そしてまた各部屋をくまなく探索した。狙いは食料や衣服だ。衣服が5着、食料は缶詰３０個とカップラーメンが3個。飲み物は水２?、ウーロン茶５００m?、コーラとサイダーがそれぞれ６‥４で１?手に入れた。目指すは3日後の救出部隊の救助を待つこと。それまで僕は生き延びなければならない。
この誰もいない恐怖の中で。とにかく食料や水分に困ることはまずないだろう。
そして無人の部屋で横になり寝た。今日から僕のサバイバル生活が始まったのだ。

救出部隊到着まであと2日
僕が起きたのは午前１０時３０。起きてから衣服を着替え、缶詰やインスタント食品で
食事を済ませた。やはりよくわからないが電気使えるようだ。食べてから5分食休みをする。
さあ精神がおかしくなる前に急いで気を紛らわすことを探さなけれ

ば！こんな時だ、
小学４年、いや小学６年の僕はじっと待つだけじゃ耐えられそうにない。
さすがに精神的におかしくなって救助を見過ごすのだけはごめんだ！周りを見渡す。
それからまた時が進む。腹が減って休憩し、食事をとった。食事のメニューはカップラーメンと
冷たいコーラと言う実に腹の痛くなる組み合わせだ。当然、腹が痛くなる。
腹が落ち着くのを待ちながらたまたまあったゲーム機で少しゲームをし、仮眠を取った。その時やっと自分の疲れに気がついた。僕は仮眠ながらも布団に入り、ぐっすり寝た。ニュースを見わすれてしまったが、まあ大丈夫だろう。しかしこのニュースを見過ごしたことで重大なパーツが外れたことを僕はまだ知らなかった。

救出部隊到着まであと？日
昨日の疲れが残っていて今日がいつなのかも忘れてしまった。でも今日がきっと
救出部隊到着の日だろう。今日でこともようやくおさらば出来る！
最後の日のお楽しみにとっておいたコーンビーフとステーキの缶詰と残っていた
スイートコーンの缶詰とマーガリンをパンに塗って食べ、最後の日の朝食を済ませる。
そして僕が見つけた中で一番気に入った服を着た。あと初日に手に入れた拳銃を持っていくことにした。
救助は来てもさすがに上陸はできないだろう。僕は穴の開いた屋根から経営住宅の
屋根に上ることにした。そのためにはハシゴが必要となる。
僕はまだ未調査の部屋に行ってみることにした。部屋は二つだ。まず、西側の方に進む。

ギイ・・・・・ドアを開けた。僕は武器（右手にハンドガン、左手に包丁を持った）を
低く構え、慎重に中に進んだ。今度は部屋のドアを開ける・・・・・
・
誰もいない。僕は武器をハンドガンだけにし、包丁を手作りの鞘にしまった。
そして早速、ハシゴを探した。が、ハシゴはない。その代りに警官の死体からハンドガンの銃弾と消毒スプレーを手に入れた。ここにはなかったがもう一つ、部屋がある。僕はもう一つの部屋に向かった。
ドアを開けて外に出る。そして通ってきたドアを開けようとしたその時、後ろの水に沈んだ
階段の方からバシャ、バシャと何かが歩く音がした。なんだ、誰かいるのか？
僕は驚きとうれしさを胸にハンドガンを再び構え、音のした方に向かった。
誰もいない。空耳だったのだろうか。僕はあけかけたドアにまた手をかけた。
しかしさっきの音は空耳ではなかった！再度、階段に行くと無数の化け物たちが！
ついに甦ってしまった！深い、沈んだ千葉県の水の底から！

ゾンビの大軍が迫ってくる！おおよそ１０～１２体はいるだろう。
さすがにかなわない。
急いでドアをさっきのドアを開け、逃げ込んだ。
居間に行くとなんとゾンビの大軍が！僕はゾンビの頭に標準を合わせ、ぶちかました。
１体のゾンビが倒れる。続けて２、３と１体ずつ、倒した。
とりあえずここの居間のゾンビは全員倒したが、ほかの部屋の扉は換気のため、

全開してある。急いで閉めなければまずい！
ガシャン！金属が落ちる音がすぐ近くでした。すぐ行ってみるとそれは「レールガン」のパーツだった。天井から落ちたらしい。
なぜここにあるのかはわからないが、とりあえず、取っておくことにした。ここで持ち物を確認し、整理した。

ハンドガン、包丁、消毒スプレー、レールガンのパーツ、ハ？４５

急いで向かってる部屋の通るベランダに出ると無数のゾンビがいた。うまく狙い、仕留めた。
さらに進む。それにしてもおよそ何体のゾンビが甦ったのだろうか！？
それにしてもこのゾンビは何かが違う。なぜなら口から触手のようなものをだし、首に絡めて縛り付けてくる。しかも動きも意外に早い。
僕はゾンビに何度もかまれたが別に何ともない。少し傷ができるだけだ。
感染しても大丈夫のようだ。あの何とか薬のおかげだろうか？！
二つ目の部屋に行くとやはりゾンビがいた。触手攻撃、噛みつきをうまくかわしながらクリティカルヒットさせた。そして全開してあるドアに向かう。
キイ・・・ガタン・・・２個目のドアを閉めた。あと一つだ。急いで向かう。
ベランダに出た。今度は蹴りで水に落とす。
やっとのことで３つ目の部屋についた。ここもやはりゾンビ地獄だ。
しかし運がよく、ストーブが付いていて、その近くには消火器があった。
すかさず消火器を撃つ。消火器はストーブとともに大爆発し、ゾン

ビもろとも吹っ飛んだ。
そしてドアに向かう。
キイ・・・ガタン・・・3つ目のドアを閉めた。これであとは予定の部屋に向かい、
ハシゴを探すのみだ。全速力で最後の部屋に向かう。
予定の部屋についた。ここにはゾンビはいない。ドアを全開していないためだ。
最後の希望を信じて、調査した。
ハシゴだ!!!見事ハシゴを見つけることができた。さらにさっき拾ったパーツと
組み合わせそうなパーツも見つける。
僕はパーツとパーツを組み合わせ、レールガンを完成させてから屋根に穴の開いた、
このハンドガンの設計図があった部屋に向かった。
ドアを今にも突き破って来そうな音が鳴る部屋を通り、やっとのことでその部屋に到着。
ハシゴを掛け、上に上った。ここで最後に持ち物を確認した。

ハンドガン、レールガン、包丁、消毒スプレー、ハ?5
あとはじっと救援のヘリを待つだけだ。しかしまだ戦いは終わってはいなかった。
また水の中から、今度はゾンビ以上の音が聞こえた。僕は組み立てたばかりのレールガンを構えた。
かなり重いが我慢だ。バシャーンと音を立てついにその化け物は姿を現した。そして僕の前に舞い降りる。変異したと思われる骨を両手に生やしている。巨人だ!そして敵は僕にゆっくり近づいてくる。
とっさに構えていたレールガンを発射した。
すこし巨人がよろけた。巨人はどういうわけか弱っている。好都合だ!
うまくいけば倒せるかもしれない!

レールガンを連射する。距離がかなり近くなってきた。僕はうまく回り込んだ。
しかし巨人も黙ってはいない！骨を突出し、殴ってきた！危ないところだ。
もう少しで屋根から落ち、水に沈みそうだった。またレールガンを撃つ。
殴られ、切られすさまじい痛みをくらったが、集中力が切れることなく、まだ戦える。
そして1発はなった瞬間、巨人は崩れ落ち、倒れた。おそらく死んだだろう。
その時頭上でヘリの音が聞こえた。
照明弾が必要だろう。運がいいことに、巨人の死体から照明弾を手に入れることが
できた。そしてヘリに向かって撃った。
ヘリは居場所がわかったようでハシゴをおろしてくれた。僕はハシゴを上り、ヘリに入った。
助かったのだ？？？？？？？？？？？？
――――――にもかかわらず、ヘリの救出部隊員は何もしゃべらない。ようやく口を開いたかと
思うと二人の救出部隊員はサブマシンガンを向けてきて驚きの言葉を言った！
「貴様にはダークグループのダークソウルになってもらうぞ！」
「！！！」

第5の生存者・サム（後編）

サブマシンガンを向ける男たちに僕は唖然とした。これは夢じゃないのか？
震える声で僕はつぶやいた。

「じょ、冗談ですよね？こんなことが・・・・・・」
一人の男に遮られる。
「俺たちは冗談を言うタイプじゃない。言った通りダークグループになってもらう。」

一体何のことだろうか？ダークグループ？なんだそれ？子供だと思ってからかっているのか？
しかし奴らは本当の事を言っているようだ。その証拠に今にも引き金を引こうと構えている。
救出部隊のニュースは嘘だったのだろうか？何にせよ、とにかくこの状況を抜けないと！
とは言っても敵は操縦士を入れて3人。2人はサブマシンガンを一人1丁、持っている。
こうなったら一か八かの賭けに出るしかない。隙を見てポケットに入っているハンドガンで
奴らを撃ち殺すのだ。一人は倒せるかもしれないが、もう1発撃つ間もなく、僕はもう一人に
撃たれる可能性がある。だが、このままでもどちらにしろ命の保証はない。
男が命令した。

「大人しくしろ！この手錠をかけて席に座れ！」
とりあえず従おう。そうすれば奴らも油断するに違いない。

「・・・・・わかった」

僕はゆっくりと男に近づいた。運命の賭けが今始まろうとしている。一か八かの賭けが。

男が僕の片方の手首に手錠をかけた。チャンスは今しかない。もう片方の手を使用不可になる前に実行だ！ついに生死を分けた絶体絶命からの生還の賭けが発動した？？？？？？？

その瞬間、僕は手錠を掛けようとしている男に会心の蹴りを入れた！男が不意を突かれ、ヘリの操縦席に倒れる。背後の男も突然の出来事に驚いたようだ。

この隙に僕はポケットからハンドガンを取り出し、背後の男に向かって発砲！銃弾が男に向かって飛び出す。

男がぎゃああ、絶叫し、崩れ落ちた。銃弾は見たところ急所に命中したようだ。残る敵はあと2人！

その時、蹴りを入れた男が倒れる操縦席からくそ、と舌打ちが聞こえた。それと同時にカチッ、と金属の鈍い音が僕の耳を通る。そして銃弾を連続で放つ、発砲音がヘリ内に響き渡った。サブマシンガンの銃弾が僕に向かって放たれた。距離はそれほど離れていない。

しかし驚くことに僕はかわした。無意識のうちに僕の中の「何か」が弾けた。

イスの裏に倒れたがすぐに立ち上がる。男は案の定、驚き銃を撃てずにいた。まさに絶好の的だ！

一生が今終わる男を睨みつけ、銃弾を浴びせる。絶叫し、大量の血を流しながら倒れた。

さあ、あとはヘリの操縦士のみ。銃を頭に突きつければこちらの命令に従うはずだ。

ん？いない。どこへ行ったんだ？逃げられるはずがない。ヘリから

飛び降りれば行きつく先は
バイオウイルスの海。これは死を意味する。そんなことは誰でもわかっているはずだ。
じゃあ一体?操縦席を覗く。だが、やはり神隠しでも起きたように消えてしまっている。
その時、僕はようやく気がついた。窓の外に一人の人間が見える。
上空からパラシュートで
降下しているのが見える。間違いない、このヘリの操縦士だろう!
ちくしょう!何てことだ!
このままではヘリがどんどん降下し、墜落してしまう。その後はバイオウイルスの海に落ちるか
建物に爆発するか・・・・・とにかく早くここを脱出しないと!
パラシュートがもう1着あるはずだ。ヘリの乗員は3名。最低でも2着は装備してあるだろう。
予想通り、パラシュートはすぐに見つかった。男の死体からだ。すぐに体に装備する。
パラシュートを使いのは初めてだがそんなこと考えている余裕はない。もう時間がないのだ!
意を決し、僕はヘリの真下に見える建物に向かって飛び降りた。

下りた建物は僕が4年生まで通っていた小学校の屋上。2年ぶりの学校と言える。
この学校の屋上は初めて見るがなぜか1部が崩れてしまっている。
まるで爆薬で
壊したかのようだ。相変わらず、学校の3階から下はバイオウイルスの海に浸かっている。
屋上のハシゴを下り、こんなことにならなければ入っていた3階へと進出した。
学校の風景は明らかにおかしかった。経営と同じく、ほとんどが無傷のまま。さらに

おかしなことについ最近まで水に浸かっていた様子があらわになっている。
水が引いてできたならば納得できるがそんなことはまずありえない。
一つの県、千葉県が沈んで
水に沈んだという事は水はかなりの量。蒸発したとしても新たに海外から流れ込んでくる。
何が起きているんだ?常識ではありえないことばかりで今僕はゴーストタウンをさまよっているのだろうか?考え込んでいても仕方がないので脱出の糸口となる物を探した。
6の1と書かれた教室に入ると触手が口からうごめくあの恐ろしい化け物が立っていた。
ゾンビ!!!やはりここにも奴らは復活していた!足が速いので気づかれる前に倒さなければ!
ハンドガンを構え、銃弾が届く距離まで気配を殺しながらゆっくりと近づいた。近くなったところで素早く撃ち殺す。1体のゾンビが絶命した。敵はあと1体。楽勝だ。
続けて銃弾を放ち、もう1体も絶命させた。辺りを見渡して敵を確認するが、いないようだ。
カビとほこりまみれの机を一つずつ調べる。ほとんどの机は何もない。当然と言えばそうだが。
しかしいくつかの机からはなぜかわからないが弾薬や武器が見つかった。一つの机には
ハンドガンの弾、もう一つの机にはボウガンがあった。
6の1を出て6の2に入った。つい癖でドアをきっちりと閉めてしまう。何だか日常生活に戻った
感じだ。でもこれは単なる現実逃避。今はもう元の生活には戻れないのだ。
6の2には特に何もなかったため無視した。6の2を出て右の5の

２へ入ろうとしたが、天井が崩れていて侵入は不可能だ。これが普通。
その隣の５の１に入るとゾンビが４体ほど僕を待ち構えていた。その期待に答えず、
僕はのろのろと倒さず、あっという間に勝負を決めた。ゾンビの死体が転がる。
５の１の机を調べる。だが、使えるものは何もなかった。最後の一つ、先生の机を調べる。
すると机の金庫式の引き出しから一つのきれいな紙を見つけた。なんだろう？
３月１８日、なるほど、この組の先生宛の手紙のようだ。気になるので読んでみた。

３月１８日
藤森広美教員、あなたをＡ・Ｏ・Ｒ隊に任命する
あなたは我らが計画をバレずにしかも努力をしたのでＡ・Ｏ・Ｒ隊に任命します。
世界を救うためダークグループに力を尽くすと我らは信じております。

レイン

Ａ・Ｏ・Ｒ？なんだろう？英語は苦手のため分からない。にしても
「我らが計画」ってなんだろう？
謎の文面をポケットにしまい、廊下へ出た。

な、なに！！！？ありえない！こんなことがあるわけない！夢だ夢だ！！！
だが現実なのにかわりはない。例え今起きている「階段水引現象」がありえないとしても。

今までで一番恐ろしい。バイオハザードよりもだ。先生よりも。お母さんよりも。

なんと階段の水が引いているのだ。なんで引いたのかはわからない。バイオハザードの現象か？

とにかくこれで先に進める。1、2階は広いため、何か役に立つものが多くあるかもしれない。

階段を下りてすぐに1階への階段を確認した、が1階は浸水したままだ。水が引いたのは2階だけだ。最初はここから一番近い、3の1へ向かった。体育館も近いがあとだ。

3の1はすでに侵入不可能。5の2同様、天井が崩れて入り口が塞がれてしまっている。

3の2へ入る。ゾンビは3体。何気なく、ゾンビたちをクリティカルヒットさせ、倒した。

素早く周りを調べるとハンドガンの弾とボウガンの矢をまずまずの数手に入れる。さらに「理科準備室と書かれたプレートが付いたカギも見つかった。他に何かないか探したがもう何もない。

3の2を出て左へ曲がり、4の2へ向かおうとしたが、廊下の天井が崩れていて進めない。自分の

過ごしていたクラスに入れないとは・・・・・少し悲しい。

仕方なく引き返し、体育館へ走った。体育館につき体育館上の観覧所に出る。

下にあるバスケットコートなどはもう水に使ってしまっている。ステージもだ。観覧所を進むと

ステージ裏に繋がる階段を見つけた。もちろん、階段の下は水の下だが。階段横を見る。

階段横にはステージのライトを調節する時に上るときの足場があった。金網になっている。

ふと光るものが目に入った。あれはなんだ？しかしここからでは足が届かず、上れない。

実に気になるのであとでハシゴか何かを取ってきて確かめてみよう。

体育館を出た。
次の目指す場所は理科室。さっき理科準備室のカギを拾ったのでちょうどいい。
途中、ゾンビが15体いたが、何とか撃退した。これほどの数を相手にしたのは初めてだ。
理科室の到着し、左右の通路を確認した。敵はいないが、右の図書室に繋がる廊下は天井が
崩れて通れない。左の通路は暗くてカビだらけなだけで問題なく通れる。
理科室に入りすぐさま探索を始めた。するとカッターの刃片がかなりの数散らかっていた。
他にはそのままの実験用具などしかないのでここから繋がる理科準備室に入ることにした。
カギを開け、中に入る。敵は0体。人体模型と薬品が並んでいるだけだ。薬品を見ていると
「硫酸」があった。なぜ小学校にあるのか不思議だが武器になるので気をつけてしまう。
もう一つ、使えるものを見つける。コンピュータ室のカギだ。あとで入ってみるか。
こうして理科室を出た。

コンピュータ室のカギを開け、中に侵入する。ゾンビが20体いる！多すぎだろう！
弾がなくなる寸前で何とか倒した。すぐに周りを調べる。弾薬がほしい！
弾薬はないが不自然に光る二つのパソコンが視線の先にあった。この2台だけついている。
片方のパソコンを操作するとメッセージが出された。

「A・O・Rカードをセットしてください　確認完了後、無線装置

を起動します」

カードがないためもう一つのパソコンを調べた。しかしこっちは作動しない。
何回かいじっているとそのパソコンからメッセージが出された。

「A・O・R隊であることの証明ができていないため無線装置を起動できません」

どうやらこの2台のパソコンは繋がっているらしい。2重セキリュティのようだ。
「A・O・Rカード」は一体どこに?細かく別室の机は調べたがそれらしき物はなかった。
もしや天井の崩れで行けなくなった先にあるのか?だとしたら万事休す。希望は立たれたことになる
ここで僕は飢えで死んでいくのか?そんなのあんまりだ。・・・・・・待てよあれって・・・
その時、脳裏にあるものとある場所が浮かんだ。体育の時間によく使った場所、体育館である。
あくまでも予想だが体育館の金網の足場にあった光る物は「A・O・Rカード」かもしれない。
あんなところにあるわけないがもしかして、という場合もある。戻る価値は十分にある。
僕は決心し、体育館へと戻った。

観覧所の角に差しかかる。光る物の場所まであと約半分だ。上る方法はもう考えてある。
あと残る距離は4分の1。あと少しで事実が判明する。そう、脱出か脱出不可か?????
バシャーン!!!突然、水しぶきの音が静かな体育館に響き渡った。

立ち止まり対岸を確認する。
！！！何だあいつは！？こんな2本足の生物は見たことがない。そいつは観覧所の対岸に現れていた。鱗に覆われていることからあいつはおそらくワニ。体長は2mちょっとくらいだ。体系は人間に似ている。しかしワニが2本足で立つ、という事はありえない。バイオハザードの影響でか？
ワニの化け物は辺りをキョロキョロと見渡している。まだ僕には気がついていないようだ。
ならばチャンスのは今しかない。金網の足場に上る方法を実行する時はまだ奴が僕を探している時。
素早く計画に移った。危険だが、奴からは完全に目を離す。これからやることはよそ見していると
大けがしかねない。それに計画に集中すれば早く終わらすことができる。
僕はポケットからガラスビンに入った硫酸1つ、取り出した。慎重にフタを外す。そしてミサイル攻撃で切断された鉄の手すりに少しずつ垂らしていく。手に垂らさないように注意しないと。
上る方法とは手すりをハシゴの代わりにする、という事だ。手すりは無論、手の力じゃ折れない。
そのため硫酸を使って溶かしたのだ。2階も水に浸かっていたわけだから水分が降りかかっている。
この状態の手すりに硫酸を垂らせば硫酸が反応し、手すりが溶けるのだ。
勢いよく手すりが溶け出し、一瞬の内に手すりが完全に切断された。
これでひとまずは成功だ。
ステージへ繋がる階段へ向かう際も慎重に気配を殺す。バレたら一巻の終わりだ！
何とかバレずに正面に金網の足場が見える位置へ着いた。早速、手に入れた手すりハシゴを掛ける。
落ちないか慎重に確かめ、足を掛けた。バランスは大丈夫だ。落ち

ずに渡れるだろう。
手すりハシゴから金網の足場へ移動する。かなり高い場所だ。早くここは去りたいものだ。
光る物を手に取り、何なのか確認した。さあ、これはカードだろうか？？？？？？

Ａ・Ｏ・Ｒカード
隊員番号１１９２番：ロン・フライト

Ａ・Ｏ・Ｒカード？？？予想は大当たりだ！これで脱出はもう夢ではなくなった！
用のなくなった金網の足場を離れようとハシゴを上ったその時、何かが下の海面でうごめく。
次の瞬間、正体の化け物が僕が渡る手すりハシゴ目がけて飛び出してきた！危ない！
またもや僕の中の「何か」が発動し、奴の攻撃を回避した。階段に着地したと同時に背後で
先ほどの手すりハシゴが水の中に落ちる。「何か」が発動しなければ今頃僕も水の中だった。
正体の化け物が金網の足場に降り立つ。そいつは・・・２足歩行のワニだ！喜びのあまり
こいつの存在を忘れてしまっていた。奴は僕のことを当然、視界に捕らえている。
２足歩行のワニが攻撃体勢に入った！僕は背後を確認しながら出口まで走ることにした。
階段に奴の着地音が聞こえる。ついに本気の戦いの時だ！負けたらどんな死に方をするのだろう？
悪い考えを脳裏から消滅させ、出口に死に物狂いで走る。なおも奴は追って来ている。
ダメだ。奴の方がスピードが速い！出口に着く前に追いつかれてし

まう！こうなったら戦うしかない！ハンドガンの銃弾を何発も浴びせる。だが、鱗に弾き返され、全く効いていない！くそ！
ついに2足歩行のワニが僕に追いついた！腕を突き出し、殴り切りつけてきた！
左腕の皮膚を超え肉を切り裂かれる！爪痕から出血した。腕がかつてないほど痛んだ。
左手はもう使い物にならない。痛みで動かすと出血が早まってしまう。右手のみで戦うしかない。
背中に装備していたボウガンを構える。奴が突っ込んできた！同時に矢を発射する。
二足歩行のワニの鱗の隙間に矢が突き刺さった。奴が少し怯み、矢を抜こうと必死なっている。
今のは偶然、効いただけだ。今度はうまくいかないだろう。次の攻撃で僕はやられてしまう！
やられる前にやらなければ！奴が矢を抜いている間に打倒策を考えないと！何かいい方法は・・・
その時、僕は最高の作戦とも言えるものを思いついた。これでダメなら死ぬしかない。
奴が矢を引き抜いた。すぐさま攻撃態勢に入るのがわかる。僕も同時に攻撃態勢に入る。
奴が突っ込んで来た！一瞬の時間に残り一つの硫酸の入ったガラスビンを取り出す！
そしてガラスビンを勢いよく奴に向かって投げた！この攻撃で全てが決まる―？？？？？
ガラスビンが奴の体に命中し、砕けた。奴に硫酸が降りかかるのとガラスの破片が鱗の隙間に
突き刺さる。2足歩行のワニが絶叫をし、やがてその声は断末魔の叫び声に変わった。
2足歩行のワニが奇妙な紺色の血を流し、倒れた。硫酸で見るも無残な姿になっていた。

とにかく勝ったのだ！はっきり言ってうまくいくとは思っていなかった賭けだ。ガラスビンが割れない場合もある。もし割れなかったら今頃僕は奴の死体を見れなかっただろう！
この沈んだ悲惨な学校を早く去りたいので急いでコンピューター室に走った。

「A・O・Rカードをセットしてください　確認完了後、無線装置を起動します」

拾いたての「A・O・Rカード」をセットした。メッセージが表示される。

「A・O・Rカード確認、無線装置を起動します」

すると今のパソコンが消え、隣のもう片方のパソコンから合図音が発された。すぐさま隣のパソコンを操作する。画面にはまたメッセージが表示された。

「無線装置起動、または家庭科室フタ制御が可能となりました　指定の動作を選択して下さい」

マウスを手に取り、矢印を動かした。指定の動作はもちろん、「無線装置起動」だ。
しかし手を滑らせてしまい、「家庭科室フタ制御」をクリックしてしまった。そんなことは
お構いなしにメッセージがまたまた出される。

「家庭科室フタ制御をロック状態からオープン状態にします」
すぐさま中止をしようとしたが

「再操作には３０分の時間がかかります」

なんてめんどくさい機械なんだ！再操作に３０分とかふざけてる！
とはいうものの自分のミスが
原因のため結局、３０分待たなければならない。

３０分が経った。パソコンからメッセージと合図音が発される。
「再操作が可能となりました　家庭科室フタ制御をロック状態にしますか？はい／いいえ」
「はい」を選択し、ようやく再選択が可能となった。すぐさま「無線起動装置」をクリックする。
「無線装置起動　一番近くの無線に繋ぎます」
しばらく待つと誰かの声が聞こえてきた。

「こちら救助隊員カラフ！何かあったのか？応答せよ！」
救助隊！！！本物か？どちらにせよ、応答してみる価値はある。
僕は深呼吸し、応答する。

「こちらサム！五所小学校に留まっている！屋上に行くから助けてください！」
救助隊員が驚いた声をする。
「なに！生存者か！よし、今すぐに行く！大人しく待っていろ！」

無線が途切れた。それと同時に僕はパソコンの電源を切った。そして救助隊について考える。
（本当に救助隊か？さっきみたいにダークグループの陰謀じゃないのか？ん？いや待てよ、
　昨日から一夜が過ぎた。もしかして今日が救助隊潜入の日なのか！？じゃあ昨日は・・・）
やっとわかった。救助隊の話は本当で昨日の奴らは何かの組織の人

間。つまり僕は1日、救助隊潜入日を間違えていたのだ。2日前、ニュースで日にちを確認しなかったのが原因となった。
コンピューター室を出て屋上へ向かった。

屋上で10分ほど待つと上空でヘリのプロペラ音が響いてきた。救助隊のヘリだ!
救助隊員が無線で僕に言った。

「今からヘリを下りて助けに行く!」

そういうとヘリから一人のガスマスクの男が下りてきた。下りてすぐ僕に近づいてくる。
男が声をかけてきた。
「大丈夫か?」
僕は疲れ切った顔で笑顔を作り、答えた。
「はい!大丈夫です!」
そして男は僕をおぶさりヘリから降ろされたハシゴを上った。僕はイスに腰掛け、腕の傷の手当をしてもらった。傷が深いそうだが命に別状はないそうだ。感染もしていないらしい。
こうして僕は救助隊によりゴーストタウンと化した千葉県を脱出したのだった。
それにしてもあの水が引く現象や「A・O・R」とは何だったんだろう?

そのころ東京の御前山では謎の大洪水が観光者たちを襲っていた。
通報を受け、警官たちが洪水の源である木の幹の白い物体に立ちはだかる。
「警部、これは一体?ブラックホールのような気も・・・」
一人の警官が問いかけた。

「わからんな。ん?なんだ?人影のようなものが・・・」
「これは・・・死体みたいですね・・・ひい!起き上った!」
「くそ!何だこいつらは!放せこの野郎・・・ぎゃあああ!」
「悲鳴・・・?なにかしら?」
この声を聴きつけた女性は警官たちの元に駆け寄った。

かすかな記憶喪失

バシャ、バシャ、バシャ・・・・・・・まずい！早く岸に向かって泳がないと！
冬に入りかけの海水。体が凍るほど冷たい。ライフジャケットを着ているため溺れる
心配がないとはいえ、この冷たさで凍死する可能性もある。
バシャ、バシャ、バシャ・・・・・・かなり泳いだはずなのにまだ岸が見えない！もう意識が・・・・消えかかってている・・・まだか、まだなのか！早く・・・早く岸へ上がらないと・・・ん？あれはもしかして・・・岸なのか？ああ、やった・・・助かる・・・助かるぞ・・・
あれ・・・視界がだんだん薄れてくるような・・・まさかもう手遅れだったのか・・・？
ついに僕の意識は消えてしまった。

ドクン、ドクン・・・！？心臓の音・・・？なぜだ？僕は死んだはずじゃ・・・
ハア、ハア・・・今度は呼吸の音・・・？あれ、また違う音が聞こえてくる。
ザザーン・・・これってもしや波の音？いや気のせいではないか？
もう少し集中しよう・・・
ザザーン、ザパーン・・・やはり聞こえる。聞こえるってことは僕は生きているのか？？？
おっ！視界が開けてきた。意識もだんだんはっきりしてくる。手足の感覚も戻ってきた。
そしてついに僕は自分が生きていることを確信した。さあ、そろそろ立ち上がるか。

凍えながら辺りを見渡す。ここはどこだ?えっと何でこんなところにいるんだ?
確か僕は誰かと東京の悪夢から脱出したはず。ダメだ、思い出せない。
ハッピーエンドじゃなかったのか?悪夢はまだ続いているのかもしれない。
寒い。凍えそうだ。今の僕の格好はずぶ濡れの制服だ。このままでは凍え死んでしまう。どこかで早く着替えなければ!といってもここには服屋などありそうにもない。
辺りを再び調べると石造りの足場に船がロープで括り付けられていた。見たところ人工で作られたものらしい。という事はこの海から背後にある林道の先には町があるってことか?
ならば目的地はもう決まっている。その町とやらだ。町に着いたら警察に駆け込めばいい。
それにしてもここは日本?外国?どちらだろう?とにかく早く進まないと。
今の時刻はおそらく6時30分くらい。10月の沈みかけの太陽を見ればわかる。
急いで林道を抜けないと遭難に陥りそうだ。僕はずぶ濡れで記憶を思い出せないまま林道を進んだ。

1時間は歩いただろうか?もうすっかり辺りは真っ暗だ。しかし未だに町は見えてこない。
もしや町などないのでは?そう思い始めたその時、何かの鉄の柱に触れた。
鉄の柱から手をどけ、指を擦るとぬるぬるとオイルのような感触を感じた。僕は鉄の柱に鼻を近づけ、臭いを確かめた。予想通りオイルの臭いがする。どうやらこれはオイル灯のようだ。
オイル灯とは火種をつけることで明かりを確保できる人工物だ。これがあるという事は

いよいよ町に近いという事か？希望が見える！とりあえずこれで明かりを確保するか。
僕は水分だらけのショルダーバッグを探った。このショルダーバッグはかろうじで残っていた。
中を探るとオイルライターとダガーナイフが残っていた。僕はライターを取り出す。
ライターの水分をよく拭き取り、火を灯す。その火をオイル灯にも灯した。
辺りが少し、明るくなった。ほかにもオイル灯があるようだ。進みながらつけて回ろう。
辺りがさらに明るくなったおかげで視線の先に一つの小屋を発見した。海岸の近くだとすると警備小屋か何かだろう。人がいるかもしれない。早速、小屋に向かって走った。
小屋に到着し、ドアを確認した。２階建てで木とコンクリートでできている。かなり頑丈そうだ。
警備小屋のすぐ横は通路がある。しかしなぜか木箱や粗大ゴミなどでふさがれている。
バリケードのようにも見えるが、気のせいだろう。再びドアを探した。
ドアノブを回し、引くが開かない。押す開けなのかと思い、押してみたがやはり開かない。
カギがかかっている。おかしい。なぜわざわざ小屋のカギを閉める必要があるのだろう。
ほかに通路はないか調べるが、通路は先ほどの木箱や粗大ゴミでふさがれた所しかない。
今度は細かく調べる。すると何かが目に入った。いや何者かだ。十分に警戒しながら近づく。
悪臭が漂う。もしかしてあれは死体か？さらに近寄り、確認する。
・・・・・死体だ。腹と肩を食いちぎられて死んでいる。明らかに事故で死んだわけはない。

警官の制服姿だ。きっとこの警備小屋の監視警官だろう。しかしなぜ死んでいるんだ?
もうわかっているのだがどうしても考えてしまう。まさか奴らがここにもいると信じたくはないからだ
だが大体、この状態の死体は奴らによってできたもの。人間はこんな派手にやらかさない。
くそ、そんなはずはないんだ。奴らは死んだ。死んだんだ。もう僕の前に現れるはずは・・・
一気に考えを吹き飛ばし、今は助かることだけを考えた。あまり見たくはないが、細かく警官の死体を調べる。手を調べるとオイル灯の明かりの照らされて何か光るものがあった。
手に取って見てみるとそれはタグがついているカギだった。タグには「警備小屋」と書かれている。
警備小屋のカギのようだ。また調べるともう一つ、ハンドガンの弾薬を持っていた。
ハンドガンの弾をショルダーバッグに入れ、警備小屋のドアの鍵穴に拾ったカギを使ってみた。
カチッ、と音がしてドアが開く。そしてすぐさま中に入る。

真っ暗だ。ライターの明かりでも壁さえ確認できない。ついには壁に当たってしまった。
だが、運が良かった。電気のスイッチを偶然押したらしい。やっと視界が戻った。
視線の先にはドアが見えた。これでとりあえず進める。その時、何かがドアの真横に落下した。
2階に通じるハシゴの上からだ。いやな予感が僕の脳裏を走る。こいつは・・・・・・
このような場面には何度も遭遇した。大抵は戦い。敵はもちろん、「奴ら」だ。
落下した何者かがゆっくりと立ち上がる。そいつは僕をとらえ、向

かってきた。
信じがたいが、今目の前にいるのは・・・ゾンビ！Nウイルスによって人間が姿を変えたもの。ゾンビがいるという事はバイオハザードがその地で起きている証拠なのだ。
久しぶりの戦闘だ！そう、終わったはずの。敵は1体だけ。ナイフ1本でも十分撃退できる。
僕は唯一の武器のダガーナイフを装備し、構えた。ゾンビが僕に歩み寄ってくる。
ついに噛みつける距離まで到達し、ゾンビが体を倒し、噛みつきかかって来た！
が、僕はこの攻撃を軽々とかわす。何度もゾンビとは戦ったため、もう慣れている。
今度は僕の攻撃だ。今の敵は隙だらけ。僕はゾンビの頭にナイフをぐさりと刺した。
ゾンビが倒れる。やはり頭が急所のようだ。倒れた2度目の死体から血が広がった。
僕はダガーナイフを下し、警備小屋のイスに座り休む。その間、どうするか考えた。となるとここから先にあると思われる町も当然、バイオハザードと化しているはず。
なら行っても無駄か？引き返して海岸の船で海へ逃げ出すか？いや、海に逃げ出したところで助かる可能性は限りなく0に近い。ならば0に近い船での脱出よりも町で脱出策を考える方がずっと生還率が高いのではないか？そうと決まったら早く行こう。
休憩し終わり、とりあえずドアの横にある2階へ通じるハシゴを上った。
すぐさまダガーナイフを構えて警戒するが、ゾンビはいない。この警備小屋にはさっき倒した1体のみ存在したようだ。安心して2階を探索する。

武器はなかったが、ハンドガンの弾を手に入れた。もう2階には用はないのでハシゴを下り、1階へ戻った。そして警備小屋のドアに向かう。
入って来た時とは逆の警備小屋のドアをくぐった。

30分ほど歩くと林道がだんだん薄くなってきた。するとやっとのことで町が見えてきた。
町の入り口は関所となっている。しかしなぜか鉄格子の門が開いている。明らかにおかしい。
こんな時間でも警備はしているはずだ。なのに門ががら空きだなんてありえないことだ。
やはり町ではバイオハザードが起こっているに違いない。また悪夢が始まるのだ。
関所の受付を調べると銃が見つかった。ハンドガンのようだ。今回はM92Fか。
これは僕がハンドガンの中で最も好む銃だ。こいつを相棒にバイオハザードを切り抜けることになる。
もちろん、このハンドガンはもらっておいた。マガジンは満タンで弾を込める必要はない。
悪夢が始まる・・・胸に確信し、関所をくぐった。バイオハザードへと繋がる道を???
そしてまたバイオハザードの支配する町へ、と関所をくぐった。

ブラティタウン

関所の先はおぞましいという名の光景にまさに相応しかった。悪夢が支配している。
数えきれないほどの死体、廃車、薬莢、血痕、放置された武器・・・・・そしてゾンビ。
これらがバイオハザードを物語っている。人々の悲鳴や行動もだ。
僕は今、パトカーの廃車の中を調べている。ショットガンなどの武器や弾薬があるかもしれない。
予想通りハンドガンの弾を数十発、手に入れた。その他にあった物と言えば警官の死体くらい。
このパトカーには用はもうない。早い所今回で3度目のバイオハザードを抜け出さなければ！
ガタン！背後で何かをけ破るような音がした。僕は銃を構えたと同時にサッと振り向く。
何かと思いきやこの町で何度も見たゾンビだった。見た所、さっきのパトカーの廃車で死んでいた警官のようだ。警官ゾンビは腸を出しながらこちらに接近して来る。
もちろん、狙いは僕だ。すぐさまハンドガンの銃弾を警官ゾンビの脳天に浴びせた。
警官ゾンビが倒れる。しかしまた起き上った。こうなることは分かっていて、さらにもう1発、穴が開いた脳天に銃弾を貫通させた。
ようやく、警官ゾンビが完全に絶命する。
なぜかここのゾンビは急所の頭に2発、銃弾を撃ち込まなければ倒せないのだ。
僕の銃の安定性が悪いのか?それともただ、ここのゾンビは市原や東京よりも強いだけか?
そんなことはどうでもよくなる。今の僕の思考は脱出、生還という文字でいっぱいだ。

辺りを見渡した。一つのまだ無傷に近い建物が視線の先に入る。何の建物だろう?

看板がついていてそこには英語で「服屋」の意味が刻まれていた。

しめたぞ!

ずぶ濡れのこの制服を着替えられる!ゾンビもいないようだし、ラッキーだ!

喜んで服屋に駆け込んだ。

服屋に入り、すぐさま銃を構えて警戒したが、外見と同じく店内も無傷のままだった。

安心して銃を下し、着れそうな服を探した。着れる服ならとりあえずなんでもいい。

着れそうな服はすぐに見つかった。早速着替え、制服を店内に残す。制服は中学校の思い出が詰まっているが、持っていくことはできない。水を含んでいるため、重いのだ。戦いの時に邪魔になる可能性も十分にある。こうするより仕方がない。

改めて服装を確かめる。黄色の半袖シャツに黒の半ズボン・・・中々いい感じだ。

とにかくこれで身軽になった!さあ、ゾンビでも何でもかかって来い!

この挑発に答えるかのように奴らは来た!来たと同時に僕の余裕も一瞬で消え失せた!

店のガラス張りをゾンビたちが破壊しようとしている!ついにヒビが入ってきた!

ヒビが少しずつ、広がってゆく。奴らが入って来るのは時間の問題だ。数は18体。

ショットガンやマシンガンなら撃退できる数だが、ハンドガンでは全員倒す前にこちらが

やられてしまう!こうなったら逃げるしかない!脱出口はどこだ?

脱出口はすぐに見つけられた。その脱出口とは服屋の裏口。ドアは

頑丈なようでゾンビたちは
僕の後を追って来れない。これしか生き延びる道はないだろう。
迫るゾンビたちに背を向け、僕は裏口をくぐった。

背後でガチャン、というガラスの割れる音が響いたときはすでに僕は前に進んでいた。
進んだ先にはゾンビが5体。通行に邪魔なゾンビだけ倒し、あとは素通りした。
ここまでかなりの距離を歩いたものの、生存者や脱出の手掛かりは見つからない。今回の悪夢は生存者は0人なのだろうか?だとしたら僕はこの悪夢を一人で乗り越えることに・・・
その考えを打ち消すかのように少し先で足音がした。ゾンビではない。生存者か?
角を曲がる。曲がってすぐに目に入ったものはアサルトライフルを構えた軍のような男だ。
その男は僕に気づき、アサルトライフルの銃口をこちらに向けてきた!危ない!
一瞬の間でいわゆるマシンガントークで男に言った。

「ちょ、ちょっと待った!よく見てくれ!俺はゾンビじゃない!」

言ってすぐには下げず、男はまだ銃口を向けている。男ははーと息を吐きだし、銃を下げた。
僕は男に言う間も与えず、またマシンガントークで問いかけた。

「ここはどこの国ですか?それとなぜ化け物たちが・・・」

最後まで言い終わらぬうちに今度は僕が遮られた。

「お前は見た目からすると日本人か中国人のようだな。まあいい。

私は質問などせん。
　ここはアジア大陸とアメリカ大陸の一番上の方の境目・・・いや、こっちの方が説明がつきやすい。　日本の北海道から調度、右斜め上の島だ。この町、ブラッティタウンは島の首都だ。」

ブラッティタウン？？？？？ブラッティとは「血」を意味する。という事は「血の町」か。
僕は改めて男を見た。年齢は５０代くらい。「Ａ・Ｏ・Ｒ」という文字がついている
軍用服と防弾チョッキを着ている。武器はアサルトライフルとナイフしかない。
こんなことを考えていると男が突然話しかけてきた。

「私はこれから町の外の港へ向かうんだが、君はどうするかね？」

港！？まさか船で脱出するつもりなのか？自殺行為だろう！だが、反論はしない。
僕は答えた。

「僕はいいです。ここからの脱出にすべてを賭けます。」
「そうか。ならこの町と運命をともにすればいい。」

男は関所の方角へ歩き始めた。しかし途中で止まりこちらを向いて言ってきた。

「最後に一つ、人類は３０年以内に滅亡する。」

そういって男は今度こそ消えた。それにしてもあの男は何だったんだろう？
「人類は３０年以内に滅亡する」あいつは障害者か？そうだろう。

だから、生きる可能性が低い、海からの脱出に決めたのだ。しかも大人のくせに名前を名乗らずに去るとか・・・・・・
僕は奥に見える一つの建物へ走った。

見渡す限り銃、銃、銃？？？？？？だったに違いない。今はもうほとんどなくなっているが。
どうやらここはガンショップらしい。ここで武器が少しだけだが確保できそうだ。
ほとんど武器がないのはこの大惨事が原因だろう。おそらくパニックに陥った市民たちが無理やり奪い持って行ってしまったに違いない。全く、人間というものは自己中心的だ！
客と思われるゾンビがいたが特に苦戦することもなく、頭を連続で撃ちぬいて倒した。
使えるものはないかと探す。だが、やはりそう簡単には見つからない。
ようやくハンドガンの弾とショットガンの弾を何十発か手に入れた。
銃はないのか？
散々荒らして探すと一つの武器を見つけた。こいつも毎回世話になっている。
ショットガンだ！「レミントンＭ８７０」というショットガン。装弾数は８発。
無論、ありがたく頂戴した。ここでついでに休憩と持ち物確認をする。

ハンドガン、ショットガン、ダガーナイフ、ハ？１１０、シ？１４発

ガンショップの裏口から外へ出た。

悪夢には相応しすぎる夜。前と同じく月明かりが不気味にも輝いて

いる。
にも関わらず、通路は薄暗い程度。敵の確認がしにくい。気がつかない可能性もある。
僕は記憶にない疲労と眠気で大あくびを一つしようと口を開けた。
冗談抜きに眠い。
ウウッ・・・ファア!?突然の何かに驚き、あくびが消えた。今唸り声が聞こえたような・・・
集中し、耳をすませた。ウウッ・・・やはり聞こえる・・・何だろう?
今度は目で確かめることにした。遠くをよく見る。数分はまだ暗闇しか見えなかった。
しかし暗闇から何かが現れた!ゾンビではない。4足歩行・・・あれは・・・犬か?
犬が近づいてくる。ここにきて初のゾンビ犬との戦いだ。
その時、いきなり奴は走り出した。僕を見つけたのだ。姿がだんだん見えてくる!
ゾンビ犬!!!やはりゾンビ犬とも遭遇したか。ここに来て初のゾンビ犬戦だ!
すかさずハンドガンの引き金を引く。銃弾がゾンビ犬に向かって飛び出した!
しかしゾンビ犬は銃弾をかわした!続けて2発目の銃弾を放つ!次こそは仕留めてやる!
銃弾はゾンビ犬の脳天に命中した。ゾンビ犬がギャン、と悲鳴を上げ、地面に倒れる。
隙を見て僕は武器をダガーナイフに切り替え、ゾンビ犬にのしかかった!
予想通りゾンビ犬は生きている。ダガーナイフを光らせ、頭を死ぬまで突き刺した。
ゾンビ犬の顔面がぐちゃぐちゃになったところでようやく、絶命させた。しぶとい。

しかしこれで終わりではなかった。ウウッ・・・またうなり声が・・・まさか・・・！

ゾンビ犬だ！もう1匹潜んでいたのか！先ほどと同じで突っ込んで来る！

僕はかわそうとしたが、間に合わなかった。まだ立ち上がってなかったからである。

グチャ！ぐっ！腕をすさまじい痛みが襲う！くそ！早く引き離さないとやられる！

もう片方の手にダガーナイフを持ち替えた。痛みにこらえながらゾンビ犬の頭上に振り下ろす！

ゾンビ犬が絶叫し、離れた。倒すなら今のうちだ！すかさずゾンビ犬の急所を狙う。

やわらかいゾンビ犬の頭を踵落としで潰した。断末魔の叫び声を上げる間もなく、絶命する。

危なかった。僕の油断が原因だ。とにかく今はこの噛まれた手の手当てをしないと。

軽く服をちぎり、傷口に巻いた。そして少し休憩し、先に進む。

同じような通りだ。ゾンビはいない。こんな場面、前にもあったような・・・・・

この時僕はこんなことが脳離を過った。それはバイオハザードにありうる中ボス的な奴。

ここにはいないのだろうか？いないなら恐怖が減ってかなり嬉しいのだが。

その時、通路の壁に何かがつたう。じっくり見てみた。四足歩行？？？？？？？

だんだん姿がはっきりしてくる。もう少しで完全に・・・いよいよその姿が明らかになる――――

！！！実態は叫びたいほど恐ろしかった。漫画に出てくるような悪魔の形体・・・全体に生えた無数の三角型の盛り上がった皮膚、中

ボスにしては大きい。目は・・・まだわからない。
その化け物は僕に気付いたようで、襲ってきた！なっ！目が見えるのか！
ハンドガンでは無理。だがショットガンなら倒せる！とっさにショットガンを構えた。
手に振動が走る。銃弾は敵に命中し、絶叫させた。どうやらショットガンで倒せそうだ！
初のショットガン2連撃ちをしようと再び構えた。しかし敵の方が早かった。腕を起用に使って攻撃してくる！皮膚がぱっくりと切られた。あの皮膚は刃物なのか？
厄介だ！攻撃はが3連攻撃とは！敵が再び攻撃態勢に入った。同時に引き金を引く！
今度は僕の方が早く、銃弾を2発、敵に浴びせた。キーンとする声で敵が絶叫する。
ついに絶命した。それにしても恐ろしい相手だ。できる事ならもう会いたくない。
僕は一安心し、さっきの化け物を振り返り、名前を考える。影に潜む切り裂き魔か？？？？？？おっ！いい名前を思いついた！
「シャドースライサー」これが奴に相応しいはず。本当の名前は分からないが。
辺りを見渡すとようやく見飽きた通路が終わろうとしていた。遠くにレストランが見える。
レストランを目的地とし、僕はシャドースライサーに背を向け、歩き出した。

ロン・フライト

レストランについてすぐに僕は食料や水を探した。しかしやはりゾンビたちが行く手を阻む。
姿は客ばかりかと思いきや警官の姿も見られる。だとするとほかに侵入口があるのだろう。
敵は１０体・・・多いな。ハンドガンでは撃退するのに時間と弾薬がかかり過ぎてしまう。
僕は辺りを見渡した。だがレストランだけあって武器などほとんどない。使えるものといえばテーブルやランチ用ナイフ、フォーク、あと皿ぐらいか。これでどう倒そう？
ん？そうだ！この方法だ！これならゾンビを撃退できるはずだ。まあ、誰でも思いつくだろうが。
僕はテーブルを大盾のように構え、ゾンビの群れに突進した。ゾンビたちはなおもこちらに歩いて来る。わざわざ集まってくるとは馬鹿な奴らだ。いや、一度死んでるわけだから脳も逝かれているか。
ゾンビの軍団がテーブルの勢いによって壁に叩けつけられた。すでにこの攻撃のよってゾンビは息絶えた。しかししぶとく残っているゾンビも何体かいる。予想よりも少ない数が残った。
１体のゾンビが立ち上がる。僕はとっさに料理で汚れた皿をゾンビの顔に押し付けた。
ゾンビがもがく。ここでいよいよもう一つのランチ道具の出番だ。
そう、ランチナイフである。
ランチナイフを数十本、束ねたものをゾンビの脳天目がけて突き刺した。ランチナイフが腐ったやわらかい頭蓋骨を貫通する。その際のグシャリ、という効果音はまさに耳を塞ぎたくなる。
僕はゾンビの死体から離れ、残りのゾンビに警戒した。残るゾンビは２体。２体ともようやく起き上がるというタイミングだ。今なら難なく倒せるだろう。

再び皿を今度は2つ構え、ゾンビの顔に押し付けた。片方のゾンビはかなり頭が腐ってやわらかい。
そこでそのゾンビの顔に押し付けた皿を割る勢いで踏みしめた。
グシャリという音と共に血が一気に噴き出た。これこそまさにグロテスクと言えるだろう!
だが、この「ゾンビ頭蓋骨粉砕」に僕は気を取られ、もう1体のゾンビの存在を忘れていた。
ん?なんだ?手が何かに押されるような・・・そんなはずはないよな?
次の瞬間、右手が勢いよく跳ね除けられた。それと同時に僕は我に返る。そうだ!
もう1体行たのだ!ゾンビの頭蓋骨の潰れる音に気を取られ、すっかり忘れていた。
すぐに身構えたが、遅かった。僕が視線を再びゾンビに向けた時はもうすでに30cmの距離まで接近していた。ダメだ、これでは銃を構える暇もない。蹴りで倒すか?やばい、混乱してきた!
あと10cm、というところで無意識で選択しを選んでいた。本当にこれでいいのか?
火?????!?そんなの選択しにはなかったような・・・火と言えば・・・・・
カチッ、ジュボ!ライターの火が勢いよくゾンビに燃え移る。ゾンビが後退した。それと同時に僕の服にも火が燃え移った。当然のこと。こんな至近距離でライターを使うとかなんてバカなんだ!
後悔している場合ではない。とにかく服の火を消さなければ!水か消火器はないか?
すでに少しだけ火傷を負った。まずい!早いところ火を消さないと全身に燃え移って・・・
僕は今度こそ混乱に陥った。混乱のあまり床を転げまわる。しかし火は消えるはずない。
床を転げ回るうちにとうとう障害物に衝突した。壁か?混乱の中、

障害物を確認する。
テーブルだ。確認したその時、何かが僕の脳天に落下した。痛みのあまり咳き込んだ。
痛みの次は・・・濡れるのか。ん?待てよ、濡れるってことはもしかして水?????
ジュウ、という音が耳に静かに響く。同時に燃えていた服の胸から熱気が消えた。
ふと火を確認すると見事に消えている。服はそれほど焦げておらず、まだ着れそうだ。
助かった――――――それにしても何が僕を救ったのだろう?もちろん水分で消えたことは分かっているが。まだ痛む頭を摩りながら辺りを確認した。立ち上がった位置はちょうどテーブルの真下。その下に一つのビールビンが転がっている。ビールビン＝ビール、という事はもしかして・・・
改めて焦げた服の部分の臭いを嗅ぐ。すると焦げた臭いの裏に少しビールの臭いが染みついていた。
ビールに救われたようだ。辺りを再度見渡す。だが、新たな化け物の姿はない。
ようやくレストランをくまなく調べられる。

テーブルには食べかけの料理やちょっぴりグラスに残ったビールやジュースなどが残っていた。
もちろん、注文客が残したわけではない。食事途中にゾンビがなだれ込んできたのだろう。
厨房には警官、客、店員などそれこそ様々な死体があった（厨房だけではないが）
どの死体も腹を食いちぎられたり、肩の肉を持って行かれたり、中には腸が引きずり出されている死体もあった。誰でもそうだと思うが、こういうグロい光景を見ると吐き気を呼ぶ。
今回で確か3度目だろうか。それでも未だに見慣れることはない。

僕はよくグロテスク表現がある映画やゲームをするのだが、現実と比べると全く違う。現実はこうも過激なのだ。
吐き気に堪えながら念のため死体を調べた。客と店員、その他の死体には特に使えるものはなかったが警官の死体には予備弾と思われるハンドガンの弾を見つけた。
さらに軍人と思われる死体からショットガンの弾とアサルトライフルの弾を手に入れた。
その後も調べを進めるもののレストランだけあってやはり使えるものはあまりないが、
包帯が山ほど詰められた救急箱と消毒用のスプレーを手に入れた。
ようやくこれで傷の対策はできそうだ。
もうほかに何もないようだ。いつゾンビが来るかはわからない。今度はまた何か施設を探さなければ。レストランの裏口ではなく、今回は入り口から店を出た。

この道はやけに細い道が多い。今歩いている道も暗く人一人分くらいしかない。
レストランを出て２００ｍほど歩いた。ゾンビは姿を見せない。まあ、来ない方がいいが。
こんな考えに答えるかのように闇からあいつが現れた。中ボス的な存在のあいつだ。盛り上がった三角形の皮膚、４足歩行のあいつである。そいつはいきなり襲いかかって来た。
途端に僕はショットガンで飛び上がった奴を撃ち落とす。さらなる攻撃に備え、身構える。
だが、奴「シャドースライサー」は再び起き上がらなかった。どうやら急所に当たったらしい。
しかしまだこれで終わりではなかった。行く先の暗い道に同じような動きで近づいてくる。
シャドースライサーだ！シャドースライサーはすぐに僕をとらえ、突っ込んできた！

僕は鞘に収めてあるダガーナイフを投げつけた。が、シャドースライサーはそれをかわす。
ついにかなり近い距離まで敵は迫った。また飛び上がる。これはチャンスだ！
ショットガンで撃ち落とすとシャドースライサーは地面に落下した途端、絶命した。
おそらくだが、飛び上がった瞬間がちょうど急所に命中しやすいようだ。弱点だな。
ショットガンに弾を込めながらシャドースライサーの死体を通り越す。
少し進んだその時！銃声が鳴り響いた。

ダダダッ！そう遠くはない。ここから約１００m以内の距離だろう。
銃声はアサルトライフルのようだ軍の生き残りの可能性が高い。なにせよ、生存者だ。協力してもらえるとありがたい。
僕が銃声の現場にたどり着くと地面にはゾンビが数体転がっていた。死んでいる。
前を見ると一つの影が見えた。僕と同じような少し長めの髪で「A・O・R」と書かれた軍服を着ている。体格からして青年。僕より少し年上、といったところか。
ちょうど今ゾンビを倒したようで額の汗を拭っている。その男は僕に気がつくとお約束かハンドガンを向け、いきなり発砲してきた。
僕はいち早く察知し、間一髪の銃弾をかわす。
その青年はなおも銃を向けながら僕に近寄ってくる。
またもお約束と言える言葉を言った。
「ま、待て！撃つな、俺は人間だ！」
そういうと青年は銃をおろし、すまなそうに言った。
「すまない。危うく生存者を殺しているところだった。」
青年が息を整えるまで待つ。それにしても最近の外人はなぜ日本語ペラペラなのか？

ようやく青年が息が整ったようなのでとりあえず名乗った。

「僕は井野俊樹。よろしく。」

「俺はロン・フライト。A・O・R兵員をやっていた。こちらこそよろしく。」

次に僕は単刀直入で聞いた。

「この町は一体いつからこうなったんだ?」

「確か1週間前くらいからだ。」

今度はロンが質問してきた。

「俊樹は日本人だろ?なぜこんなところに?それとも元から住んでいたのか?」

「悪いな。それがなぜか思い出せないんだ。東京から脱出して来たんだけど。」

脱出という言葉にロンが気になったのか聞いてきた。

「脱出・・・ってまさか日本もバイオハザードに?」

「そうだ。僕はそこから脱出して来たんだ。気がついたらこの島さ。」

「気がついたらか・・・ん?そういえば2時間前、ヘリが墜落するのを見たような・・・」

「ヘリ・・・?」

少し記憶が脳裏に甦る。仲間と共に喜んで・・・ライフジャケットを・・・で真っ暗に・・・

やはり思い出せない。真相はきっとそのヘリを見ればわかるだろう。

僕はロンに言った。

「詳しい話は脱出できたあとでしよう。とにかくそのヘリを見に行って見ないか?」

「なるほど・・・ちょうど行く先々だ。行って見る価値はある。」

「場所は?」

「この島の軍事基地だと思う。軍事基地は病院の裏口となぜか繋がっている。」

僕とロンは目的地に繋がる病院へ向かった。

無事脱出できることを信じて。

A・O・Rの怪物

ダーン！ロンの放った銃弾が1体のゾンビの頭を貫いた。ゾンビがわずかに怯む。
しかしまだゾンビは死なない。ここの奴らは急所を2回、致命的ダメージを与えなければ倒せないからだ。僕は怯んだゾンビを見てすかさずダガーナイフで飛び掛かる！狙いは急所だ。
ダガーナイフが大きくゾンビの頭に突き刺さった。すでにぐちゃぐちゃになったゾンビの顔と後頭部からさっきよりも多く血が噴き出た。これで今度こそゾンビは絶命する。
僕は倒れるゾンビの頭から勢いよくダガーナイフを引き抜き、後ろに後退した。
この状況では一休みはしていられない。今倒した敵は目の前にいるゾンビの群れの中の５０分の１。なぜ一度にこれだけ来るのかはわからないが、とにかく追い詰められた状況だ。
ロンがアサルトライフルを連射する。たぶん１００発の銃弾は消費しているだろう。ロンが持っているマガジンは５個。ＡＫ４７は装弾数が３０発で投げ捨てられたマガジンは3個だ。つまりロンは４個目のマガジンを使用しているのだ。銃弾は残り少ない。
しかしそれほど銃弾を放っているのにも関わらず、ゾンビは１０体も倒れない。丈夫すぎだろ。
僕も必死にハンドガンで撃退するものの数が多いだけあって狙いはめちゃくちゃだ。
早く道を開かなければ僕らはゾンビの餌食となってしまう。背後にもゾンビが数十体いるのだ。
銃声が止むことなく、響き続ける。だが、ゾンビの声は一向に止まない！本当にこのままでは死を待つばかりだろう。
背中合わせのロンに僕は手早く尋ねる。

「おい、何か強力な武器はないのか？手榴弾とかショットガンとか。」

ロンが残念だ、と答えた。

「あいにく俺たちは部隊から逃げだしてきた身だ。武器なんか持っていく暇はなかった。

たまたま手持ちにあった武器と言えばアサルトライフル以外にハンドガン１丁だけだ。」

「そうか。じゃあ僕らはこのまま死を待つだけっていうのか。」

ロンは何も言わなかった。死ぬのが辛いのだろう。死ぬのは誰だって辛いし怖い。はあ、僕の人生もここでおしまいか。バイオハザードの黒幕を突き止められないまま・・・・・・

その時、ロンが大声でいきなり言った。鼓膜が破れるほどかん高い。

「ははっ！俊樹、お前の背中にあるのは一体なんだ！」

僕は驚いた。背中？背中に何か？それともロンが狂って幻覚でも見えたのか？

とりあえず僕は背中を確かめる。すると何かが手に当たった。固い。金属みたいだ。

ん？そういえば僕はハンドガン以外に何か持っていたな。最も信頼している武器を。

僕はついに思い出した。途端に背中にある武器の取っ手を握り、引き抜く。そしてゾンビの群れに向かって構えた。それと同時に僕は心の中で笑った。

口に出すのはあとにしよう。とにかく今はこのゾンビ軍団を押しのけないと。

ゾンビたちにわざと接近した。距離が３０ｃｍほどまで近づいた。

ゾンビの体に銃口がぶつかる。
途端に引き金を引いた。5体のゾンビを一気に銃弾が貫通した。全員、体が真っ二つに！
上半身だけの這いずりゾンビをロンがアサルトライフルで撃退していく。その間、僕は次なる発射のため銃弾をセットした。この作戦ならゾンビに食われる前に逃げられる！
僕は少し笑いながらロンに言った。

「悪い悪い、ついショットガンを忘れてたよ！」
「全く、もう少し早く使えよ。俺の放った銃弾が無駄になったじゃねえか！」

再び戦闘に戻り、ゾンビの群れを蹴散らしていく。背後のゾンビは無視だ。背後を気にする時間があったら1秒でも早く逃げ道を切り開いたほうがいい。といってもしがみつかれた時は別だ。
前方ゾンビが数えきれるほどになった。僕はゾンビたちが纏まっていないためハンドガンに持ち替える
ロンもハンドガンに持ち替えたようだ。それを見て僕はすぐさまゾンビに銃弾を撃った。
ゾンビの頭に銃弾が命中したあとをもう1発の銃弾が放たれた。ロンの放ったものだ。
ゾンビが倒れる。僕はそのゾンビから目を離し、残りのゾンビに視線を向けた。さらに攻撃する。
片方が撃ったゾンビをもう片方が撃つ、という戦法で残りの数を減らしていった。
そしてついにゾンビが残り一体となった。僕はマガジンがちょうど空になったため、ダガーナイフを投げつけて仕留めた。最後のゾンビが絶命する。さあ、これで道は開けたぞ！
僕らはゾンビの死体と広がった血を踏みつけながらドアに走る。その間も背後のゾンビは追って来た。

といってもゾンビは分かっての通り動きが遅い。１０mは距離があるので小走りすれば大丈夫だ。
その時だった！後ろでロンがいきなり体制を崩す！何だ？まさかゾンビが？！
予想は大当たりだ！ロンは3体のゾンビにしがみつかれていた。ありえないだろ！
１０mは５００%あった。秒速１mも進めない奴がどうやって小走りの僕たちに追いついたんだ？
そんなことを考えている場合ではない。理由を述べるのはあとだ。
僕はハンドガンを撃とうとしたが、撃てないことに気がついた。うっかり余裕をかましてマガジンをセットし忘れていた。ちくしょう！自分を恨んでやる！
ショットガンも同様、弾切れだ。ならばダガーナイフで、と思いきやここでもうっかりしていた。
ダガーナイフは最後のゾンビに投げつけたっきりだ。拾いに行っていたら間に合わない。
こうなったら素手で倒すしかない。しかしゾンビは3体。全て追い払う前にロンは噛まれてしまうだろう。やばい！早くしないと手遅れになる！何かいい方法は・・・・・・
僕はぱっとひらめいた。そして素早くロンに告げる。

「ロン！痛いかもしれないが我慢しろよ！」
「はっ？どういう事だ？」

僕はロンに思いっきりタックルをした。途端に3体のゾンビを盾にしてロンは1本道の壁に激突する。
ロンがうっっ、と急き込んだと同時にグシャリと音がした。ゾンビたちの死のメッセージだ。
3体のゾンビはロンの下敷きとなり絶命した。これが僕の作戦である。

僕は咳き込むロンを引っ張り、ドアをくぐった。

ドアをくぐったあと全速力で逃げた僕らは何の気配もない、バーに逃げ込んだ。

ここで僕らは持ち物を確認した。

俊樹

ハンドガン、ショットガン、ダガーナイフ（予備）、ライター、消毒スプレー

包帯ボックス、ハ?５８、シ?５

ロン

アサルトライフル、ハンドガン（グロック２６）、消毒スプレー、無線機?２

ハ?７０、アサ?４５

ロンはバーの酒の方へ歩き出した。そして3分ほどきょろきょろすると赤ワインのボトルを1本とグラスを2つ持ってこちらに戻ってきた。

イスに座って休む僕とロンの間に赤ワインを置くとコルクを開け始めた。まさか飲むつもりか?

しかもグラス2つってことは・・・・・僕も飲まされる?

予想通り赤ワインを入れたグラスを僕に差し出してきた。といっても僕は遠慮などしなかった。

いつ頃からか酒の味が好きになったのだ。もちろん、ワインも飲んだことはある。

僕は一応、ロンに年齢を聞いた。

「・・・ロン、お前歳いくつだ?」

「歳?１６だ。俊樹は?」

「・・・14」
「なんだ、お互い未成年者か。」
仕方なく僕は一杯だけ赤ワインを飲んだ。三杯飲んでも酔わないが、気持ち悪くなり、まともに戦えなくなるとまずいためやめた。しかしロンはゴクゴクともう5杯飲み干した。
これ以上飲んで酔ってもらうと困るので僕は話題を切り出した。
「そうだ。［A・O・R］って何だ?」
「実は俺もよくわからないが、研究部隊らしい。確かこの島の北にある大船で研究が行われている。」
「他に何かわかるか?」
するとロンは少し黙りこくった。言いにくいことだろう。気になる。そう思っているとやっと話を続けた。
「A・O・Rは・・・2年前にこんなことが報告された。おっと、その前にA・O・Rは
何ていう文を略したか教えるよ。それはアイ・オープン・リプレイ(目を開きもう一度)。
これが何を表わすかは一握りの部隊員しか知らない。さて、では報告を言おう。」
「ああ、気になるから言ってくれ。」
「［A・O・R?獣兵器］が誕生した・・・と。」
「お、おいまさかそれって・・・」
しばらく沈黙が続く。さっきよりも長い。赤ワインはすでにロンが飲み干した。
ようやくロンが沈黙を解いた。

「たぶん今俺たちが戦っている化け物たちのことだろうな。」
「なっ・・・！じゃあ僕が日本で体験したのは一体・・・」

ドーーーン！！！僕の言いかけた言葉はこの破壊音によって途切れた。同時に心臓の心拍数が上がる。
音の方向をすかさず見た。しかし僕らは銃はおろか警戒すらできなかった。
それは現れた化け物の姿にある。この世のものとは思えない。今までで一番恐ろしいかも？？？
入り口近くの壁が破壊され、そこには獣の化け物が立っていた。

意外な弱点

ウオオオ、と獣の化け物が雄たけびを上げた。それと同時に辺りを伺い始める。

姿は狼と巨人が混じったようなものだ。狼人間といった方がいいだろう。手は大人の頭４個分くらいの大きさで指からナイフくらいの爪が伸びている。頭からは過去のリッカーよりも脳みそがむき出しに。脳みそからは奇妙な肉の触手が数十本、蠢いていた。大きさは僕らの2倍くらいだ。

こんな化け物に勝てるはずない、という事は隣のイスの後ろで立ち尽くしているロンもわかっているだろう。早く逃げなければまずい！しかし僕らは金縛りにあったように動けなかった。

敵は僕らに視線を止めると鼻をひくつかせ始めた。おそらくあと数十秒で襲ってくる！

僕は未だに銃を構えていない。目の前の光景に驚き、動けないのだ。その時、肩をトントン、と叩かれた。後ろにいるロンだ。すぐさま振り返る。

ロンはアサルトライフルを背中に装備し、ハンドガンを構えていた。ハンドガンの引き金を引くとロンは目で裏口の方へ合図した。逃げる、という事か。しかし逃げれるだろうか？

僕はハンドガンのマガジンを取り換え、引き金を引いた。ようやく金縛りが解けたみたいだ。

敵はまだ鼻をひくつかせている。まだ僕らには気づいていないようだ。逃げるなら今しかない。ロンが1歩前に足を踏み出した。それと同時に僕も足を動かす。

その瞬間、敵が今までにない雄たけびを上げた。鼻をひくつかせる音は消え去った。

僕は裏口の方へ向けていた視線を思わず、敵に戻す。ロンは振り向いていない。音に気がつい手にないのか?それともただの雄たけび

と思って気に留めていないのだろうか？
だとしたらロンは今の事態を知らない。それは最も恐れていたことだ。
僕は1歩前に踏み出した敵に視線を向けながら叫んだ。

「見つかったぞ！」

ロンがはっとしたと同時に奴はさらに雄たけびを上げた。僕らは走り出す！
裏口まではそう遠くない。しかしスピードの関係となると話は別だ。もしかしたら奴は狼並みの速さかもしれない。予想が当たれば僕らは逃げる前に追いつかれてしまう。裏口までもう少し、というところで敵が走り出した。斜め横で風を切り音が大きく聞こえる。
次の瞬間、奴が僕らの目の前、つまり？？？裏口？？？に現れた。
いや、追いつかれたのか。
逃げ場を塞がれた！さあ、どうする？ショットガンか？それとも二人同時にタックルして強行突破か？どれもうまくいきそうにない。
銃弾浴びせて倒せるか？仮に倒せたとしても今の手持ちの銃弾ではっても足りないだろう。その前にやられてしまうかも？？？？？
考えている合い間に奴が攻撃に入った！狙いは僕だ。爪が腹目がけて来る！
間一髪、我に返った僕は爪を「緊急回避」でかわした。背後に避けたため一瞬、隙ができる。
その隙を奴は見逃さなかった。奴はロンを無視し、立ち上がり途中の僕目がけて突進して来た！
しかし隙ができたのは奴も同じ。ロンに背後を向けるとは馬鹿だな。
ロンがとっさに構えたハンドガンの引き金を引いた。銃弾は敵の脳天目がけて放たれた。
脳みそむき出しの脳天を銃弾が貫通する。だが、1発の銃弾で怯むとは思えない。

結果は僕の予想を覆した。なんと奴はたった1発の銃弾で絶叫した。なるほど、ゾンビと同じ頭が弱点か。しかもかなり効くみたいだな。弱点は頭?????脳裏に戦略が浮かぶ。これはロンと共同作戦になる。

僕は絶叫する奴の声をかき消し、作戦をロンに告げた。

「ロン、僕の合図と共にワインのボトルを奴の頭上に向かって投げろ!」

「何をするつもりだ?」

「いいから早くワインボトルを手に持て!できれば料が多く入るボトルを!」

ロンは言った通りボトルを1本、奴の背後で構えた。準備次第、投げられる状態だ。

奴が抑えていた頭から手を離し、絶叫を止める。痛みが収まったようだ。

「今だ!」

掛け声と共にロンがワインボトルから手を離した。ワインボトルが奴の頭上を舞う。

僕はワインボトル目がけて銃弾を放った。ワインボトルと銃弾がうまく交差する。つまり銃弾がワインボトルに命中したのだ。当然、ボトルは割れ、ワインが流れ出す。

ガラスの雨が奴の脳みそへ降り注ぐ!ガラスは奴の脳みそへ深く突き刺さった。

奴がまた絶叫した。絶叫の声はさらに響き渡る。いずれ断末魔の叫び声に変わるだろう。

敵が脳みそへ刺さったガラスを一つ抜いた瞬間、床にかつてないほどの血が垂れた。

ついに奴は断末魔の叫び声を上げる。そして膝をガックリとつき、崩れ落ちた。
奴が倒れた瞬間、辺りは再び僕らの荒い呼吸とゾンビたちのうめき声が響いた。
ロンが警戒しながら奴の毛むくじゃらの体を足で突く。しかし奴はピクリとも動かない。
僕はロンに言った。

「死んだのか？」
「いや、わからない。一時的な絶命の可能性もある。」
「じゃあ早くこの場を離れた方がいいってわけか。」

甦るかもしれない敵を背後に僕らは裏口から走り出した。
５００メートルほど路地を駆け抜ける。さすがに僕らは疲れ、立ち止まった。ここで僕はロンに問いかける。

「一体あいつはなんだ？ゲームで言うボスキャラか？」
「たぶんあいつはバーで話したようにＡ・Ｏ・Ｒ？獣兵器の一つだろう。」

僕は脳裏に過去が浮かんだ。そういえば過去にもさっき見たな巨体の敵と戦ったな。赤い爪で攻撃してくる奴とかロケラン担いだ奴とか。確かそいつらは倒しても倒しても追ってきたような・・・
だとすると奴も同じ体系か？しかしあれは完全に絶命していた。過去の奴らはわずかながら生命の反応を感じたから追ってくると分かったが・・・じゃあ追ってこないのか？
念のためロンに聞いてみた。

「もう一度聞くがあいつは追ってくるのか？それとも死？」

「んなこと兵士の俺に１００％わかるわけないだろ。それよりあいつの呼び名を考えよう。」

そうだな、あいつの呼び名か。確かにシャドースライサーの時も同じ違和感を感じたな。いちいち奴と呼ぶのはめんどうだ、と。さっきのは「狼」というキーワードで考えればいいか。

僕は早速、思いついた。

「［ファング］ってのは？」

「おっ、なかなかいいじゃないか。それがいいな。」

奴の名前はファングに決まった。さあ、そろそろ脱出への糸口をさがさないと・・・

途端ドーン、という破壊音が響いた。僕らの間の壁が崩れる！化け物の襲撃だ！

崩れ落ちる壁の後に毛むくじゃらの鋭い腕が飛び出した！やばい！すれすれの所で僕とロンは後ろに飛びのいてかわした。かわせなかったら僕らは爪の餌食となっていただろう。その時、ロンがうっ、と悲鳴を堪える。

ロンは腕を深く切りつけられていた。肉までザックリと切り刻まれている。出血もひどい。

襲撃の主はもうわかっていた。毛むくじゃらの手、さらにこの襲い方・・・

「ファング」しかいない！壁のヒビがさらに広がる。それと同時に穴も広がった。

ついにファングが姿を現した。相変わらずというか、初めての時と同じでピンピンしている。

脳からの出血は完全に止まっていた。銃弾の穴も１ｍｍも残っていない。

何という生命力だ！もしかしたら過去に戦った奴で一番の生命力で

は！？
とにかく今はファングから逃げないと！とはいってもバーでの戦いみたいにうまく倒せるとは思えない。ロンと共同作戦で戦う、という手もあるが、ロンはファングの攻撃で大きく負傷している。ロンはまともに戦えないだろう。ファングの襲撃からずっと出血した手を離さない。
・・・じゃあ僕一人でファングと戦うしかないか。そうなるとロンは邪魔になる。
ロンはこの場から逃がした方がいい。どこかで待ち合わせをするか。

「ロン、その腕じゃ無理だ！ここは俺が何とかするから早くどっかへ逃げろ！」
「それはできないな。どうせ逃げてもアサルトライフルは使えない。ゾンビに食われるのが落ちさ。」
「おいおい、ハンドガンを忘れているわけないよな？ハンドガンなら片手でも扱えるだろ？
それでゾンビを撃退すればいい。とりあえずどこかへ逃げるんだ！」

するとロンは抑えていた腕を離し、息を吐き出した。そしてハンドガンを取り出す。
ロンが少しにやりとして言った。

「俊樹、お前には完敗だ。俺は病院近くの公園に逃げる。そこが落合場所だ。」
「わかった。でも僕が３０分たっても来なかった場合は先に進め。」
「お前が死ぬはずないな。あれだけの腕だし。しかし・・・油断はするな。」

そう言ってロンは先の扉をくぐった。

さて、次は自分の心配をしないと。ロンはああ言ったものの倒せるかどうかはわからない。
ファングの弱点は脳みそがむき出しの頭。現にハンドガン1発で怯んだのが証拠だ。
ならばハンドガンより威力の高い、ショットガンの銃弾を命中させれば?この作戦なら1発でファングを倒すことができるかもしれない。しかしうまくいくだろうか?
ファングが突っ込んで来る!それよりも早く僕はショットガンの引き金を引いた。
敵の攻撃よりも先にショットガンの銃弾がファングへ放たれた。もちろん、狙いは頭。しかも今の奴は突進してきているため、隙だらけだ。この1発で終わりだ!
しかしそううまくはいかなかった。なんとファングがショットガンの銃弾を爪で弾き返したのだ!
ありえないだろ。いくら人間が切れる爪って言ったって・・・鉛は・・・
余計なことを考えている間にファングは僕の目の前まで接近していた。ファングが爪を槍のように突きだす!食らったら当然、蜂の巣になるだろう。
僕はこれをしゃがんでかわした。が、すれすれのため髪を少し持っていかれた。
髪なんか構っている場合ではない。何とか奴の脳みそにダメージを与えないと!
その時、ファングの隙が見えた。奴の拳の下にいる僕にとって脳みそは絶好の的。
チャンスだ!銃を使うか?いや、ダメだ。まだ引き金を引いていない。ならば・・・
ん?ダガーナイフ!これだ!これなら今すぐにでも攻撃できる。攻撃力は今一だが。

ダガーナイフを持った腕を勢いよく後ろへ引く。そして次に脳みそ目がけて突き出す。
ダガーナイフがファングの脳みそへ深く突き刺さった。ファングが絶叫する。
さらに絶叫するか？と思いきや1度きりの絶叫で地面に倒れた。あの1度きりの絶叫は断末魔の叫び声だったようだ。
それにしてもナイフ一撃で死ぬとか弱すぎだろ。もしかしてこの方法を使えばもうファングは怖くないかも。銃弾もゾンビやその他化け物に使うだけで済む。
意外な弱点だな。一回の拳をかわすしてその隙にナイフをグサリ、か。
意外な弱点を持つファングを後に僕はロンの待つ公園に向かった。

ゾンビ化した猫・ゾンビキャット

ファングを後にした僕はロンの待つ公園とやらに急いでいた。しかしあろうことか場所を聞いていなかった（正直言うと忘れただけかも）今はとりあえずやみくもに歩いている。
あれからかなり時間が経ったがロンは大丈夫だろうか？肉までザックリと切り刻まれた腕・・・出血量も少しではない。さらに相手はウイルスによって生まれたと思われる化け物、つまり感染の心配もあるのだ。公園へ急がないと。
地図を探すのが先決だろう。やみくもに歩き回ったところで時間を消費するだけだ。地図はきっとどこかの店か何かに置いてあるはず。
外路地を進む。今の所、ゾンビもシャドースライサーも現れない。むしろそっちの方が好都合だ。
ファングはもう死んだのだろうか？いや、奴はバーで倒したにも関わらず、すぐに僕らを追ってきた。つまりファングは再生能力が高いという事だ。跡形もなく消さなければ倒せないだろう。
目の前にゾンビが１０体さまよっている。まだ僕には気づいていないようだ。このまま無視して進もうか？ん？待てよ、何だろう？あれは・・・・・・
ゾンビの群れの背後に低い影が５つ、見える。無論、人間ではない。四足歩行だろう。
ゾンビ犬！？だとすると初の人と動物のゾンビの共同戦が生まれる。そうなれば厄介の一言だ。
ゾンビ犬と思われる四足歩行の生物はゆっくりと身を露わにする。唸り声はゾンビのうめき声に消されて聞こえない。当然、ゾンビの方が数が多いからだ。
ゾンビたちが僕を見つけたのかうめき声をさらに大きくした。それ

と同時にこっちへ歩んで来る。
少しずつ後退する僕に選択しが脳裏へ出された。それは戦闘開始の合図についてだ。
今の僕の状況は前方には１５体の化け物、後方には行き止まり。このまま後退し続ければ逃げ場を失い奴らの餌食となる。壁に背を付けてから攻撃しても数を考えるともう手遅れだ。

だが、発砲することは容易ではない。ゾンビの群れに潜む動物が一気に動き出すかもしれないからだ。
さあ、どうする?発砲?それともあきらめて食われる?生き残る可能性が高い方はもちろん?????

「発砲」だ。その瞬間、僕はハンドガンからショットガンに持ち替え、化け物の群れに構えた。
この位置は奴らを倒すには最適。銃弾も十分にセットされている。あとは引き金を引くだけだ。
銃口、いわば標準を化け物の群れに合わせた。銃口はゾンビの足に合わさっている。
背の低い動物にも命中させるなら下段撃ちだ。ついに攻撃合図を出す時が来た。

引き金を半分引いたその時、僕はグシャ、という音に身を止めた。
一体なんだ?
すぐさま群れの異常を確認する。特に変わったところは・・・ある。
それは前方のゾンビだ。
３体のゾンビから大量の血が噴き出していた。３体のゾンビはどれも首から上が無くなっていた。
その首から上のもの、腐った頭が僕の足元に転がった。この頭に気を取られ、よく見てしまった。
かすかだが離れた部分だと思われるところに刃物で切ったような跡

がある。人間の仕業ではない。

動物だ。奴らゾンビの中にいる何かの動物。その動物がゾンビの首を切り落としたのだ。

しかしこれは犬の仕業、とは思えない。犬なら唸り声を上げてから後頭部に噛みつき、へし折るはずだ。じゃあなんだ?犬じゃないとしたら一体・・・・・・

ついにその実態が明らかとなった。そいつはゾンビ化する前とは比べ物にならないほど大きい。毛皮は所々剥がれ、肉が露わとなっている。身を守るために付いている爪も異常なまでに伸びている。

猫だ?????ゾンビ化した猫。ゾンビ猫、いやゾンビキャットの方がいいか。初めてだ。ゾンビ化した猫と出くわすなんて・・・・・・犬と猫、どっちが強いのだろう?

ゾンビキャットが唸り声を上げる。唸り声は普通より少し低い声でけっこう不気味だ。

5体のゾンビキャットが毛を逆立てた。おそらく攻撃体勢に入ったのだろう。僕が発砲する以前に攻撃開始の合図が出された。

ゾンビキャットたちがゾンビを追い越し、僕に襲いかかる!発砲しよう、と思ったがそれでは遅い。いくら散弾銃といってもこの幅では連続5匹を仕留めるなど無理だ。

銃は無理、じゃあふざけてナイフ?ナイフなんか一振りした時点で勝敗は決まるだろう。

僕は一か八かの賭けを思いついた。それはレストランで混乱の源となった火だ。猛獣は火に弱いらしいためライターの火を近づければ奴らを止めることができるかもしれない。

ゾンビキャットたちとの距離が1mまで縮まった時、僕はライターのコックを捻った。暗い路地に小さな明るい火が光る。戦況を覆す

かもしれない火でもある。
ライターを前に突き出す。今のゾンビキャットたちの瞳には火を持った僕が映っているはずだ。
先頭のゾンビキャットが火を見たのか少し止まった。が、また1歩足を踏み出す。効果はあったのだろうか？このまま奴らは後ずさる？それとも前進するか・・・・・・

一か八かの賭けは？？？成功だ！先頭のゾンビキャットは1歩踏み出したが、そのあとすぐに足を引いた。それをきっかけに1歩2歩3歩、と一気に後退する。あとへ続いてきたゾンビキャットたちも火を瞳にとらえた途端、同じように後退した。
よし、とりあえずゾンビキャットは止めた。だが、まだ終わらない。ゾンビキャットたちが僕に襲いかかるために追い越したゾンビの群れがいるからだ。

ゾンビたちは首が切断され、倒れた3体の死体に通行止めされていた。倒すなら今がチャンスだろう。しかしここで銃を構えたらどうなる？銃を構える＝両手、つまりライターを下さなければならない。ライターを下したら止めてあるゾンビキャットたちが再び動き出す。かといってこのままではゾンビたちが死体を乗り越え、僕に向かって歩き始める。

・・・・・ライター使ったところで戦況は変わらなかったな。むしろ効率が悪くなった。
何か作戦を考えないと！こいつらを一気にふっ飛ばす一網打尽の作戦を！
止まって唸るゾンビキャットと死体に引っ掛かっているゾンビを確かめながら路地を見渡す。いたずらで持ち出された消火器とかプロパンガスとかないか？

ゴミステーションが見える。ゴミ袋、傘、自転車・・・使えそうなものは見当たらない。
その中に埋もれている何かに目が留まった。赤い箱、いやボトルのようなもの。見覚えがある。あれはよくストーブに使ったな。電気ストーブを買う前までの話だけど。
灯油・・・・・！あれだ！この作戦ならこの化け物たちを倒すことができるだろう！
だが、うまくいくだろうか？この作戦はハンドガンの片手撃ちを実行しなければならない。両手で持って撃ったらさっき思った通りゾンビキャットたちに襲われるだろう。
ライターを左手に持ち替え、再び前に突き出す。そしてもう片方の右手でハンドガンを持つ。弾はバーでセットした以来発砲していないため、満タンだ。
ゴミステーション、いやあれはホームレスの寝床と言える。置いてある灯油の入れ物に標準を片目で合わせた。標準があったところで引き金を引く！

銃弾は灯油の入った赤いケースに命中！銃弾は赤いケースを貫通し、９ｍｍの穴を開けた。
開いた穴から灯油が流れ出す。流れ出した灯油は少しの坂となっている僕の方へ動き出した。
といっても先に灯油を浴びるのはゾンビたち。倒れた死体にも灯油はもちろん、染みつく。さらに灯油は流れ、僕の近くで唸るゾンビキャットにも染みついた。ゾンビキャットは僕に気を取られ、全く気に留めてない。
これでゾンビ、ゾンビキャット計１５体の化け物たちに染みついた。
さあ、いよいよ作戦実行の時だ！

ハンドガンをしまい、右手にはダガーナイフを持った。そのナイフを低く構え、走る体制に変える。

次に3体のゾンビの死体を確認し、狙いを定める。死体を狙っているのは・・・・・・

左手に持つ、ライターだ！これを投げて燃やしてやる！全体をだ！

ライターを勢いよく放り投げた。ライターが宙を舞い、火を灯したまま落ちていく。落ちる先は灯油の染みついた死体だ。

ライターが落ちたと同時にゾンビキャットたちが襲いかかって来た。

しかしこれは予想していたので対処は簡単にできる。というか対処する前に燃えてしまうかもしれない。

予想通り、襲いかかって来たゾンビキャットたちが一瞬にして燃え出した。ゾンビキャットだけではなく、背後で死体に引っ掛かっていたゾンビたちもだ。これこそ灯油作戦だ！

灯油が流れた路地以外、火事になった。もちろん、灯油が染みついたゾンビたちも火に包まれる。

僕は燃えていない、灯油が流れなかった路地の端を走り出す。左は壁、右は燃え盛る化け物たちだ。

火の路地から抜けるにはあと５０m越えなければならない。まあ楽勝だろう。

その時、右側の火から何かが飛び出してきた。ゾンビは飛び出すわけないので当然あいつに決まってる。５体で襲ってきた初戦のあいつだ。

そう、ゾンビキャットである。たぶん、運よく生き残った１匹だろう。全身、火で包まれている。

体格はほかの４匹よりも一際はでかい。ゾンビキャットの群れのリーダーか？そういえばこいつは先頭にいた気がする。

なるほど、１対１の勝負というわけか。ちょうど初戦にはふさわしい締めくくりだ。

ゾンビキャットが攻撃態勢に入った。僕は武器を素早くハンドガンに持ち替え、構えた。

敵が走って来る。かなりのスピードだ。犬より早いかもしれない。

パワーはどうだろう？
標準を合わせ引き金を引く。だが、ゾンビキャットは軽々と避けた。
続けて２、３発と撃つ。
ついに奴の脳天に銃弾が命中した。脳みその一部が飛び散った。やったのだろうか？
しかしゾンビキャットは死ぬどころか怯みもしなかった。ふむふむゾンビ犬より防御が高いみたいだな。ハンドガンでだめならショットガンで倒すまでだ！
ハンドガンからショットガンへ持ち替え、すかさず発砲した。この時ゾンビキャットとの距離はわずか６０ｃｍ。当然、ゾンビキャットは吹っ飛ぶ。
ゾンビキャットは腹を向けて倒れた。しかしまだ生きているらしく少しピクピクと動いている。また動かれたら厄介なのですかさずゾンビキャットに飛び掛かった。
ショットガンを片手で持ち、もう片方の手でダガーナイフを持つ。ダガーナイフをゾンビキャットの喉元に食い込ませ、一気に切り裂いた。
ゾンビキャットのリーダーは絶命した。これで敵はいない。あとはこの火の路地を抜けるだけだ。

ようやく火の路地を抜け、開けた路地に出た。安心し、一息つく。
一息つくついでに服を確認した。
服は燃えていない。少し腕と足を火傷したがそれほど酷くない。
グリーンハーブを１つすり潰し、包帯に染み込ませた。その包帯を火傷した部分に巻く。
持ち物を確認した。

ハンドガン、ショットガン、ダガーナイフ、グリーンハーブ？１、
救急スプレー、
包帯ボックス、ハ？８０、シ？２５、

歩き出そうとしたその時、燃えさかる路地で爆発が起きた！爆風で少し僕は吹き飛んだ。
膝を打ったがあまり痛くないためすぐに立ち上がった。同時に燃えさかる路地からさらに離れる。
それにしてもあの爆発原因は何だ？ガスボンベでもあったのか？でもそれらしきものは見当たらなかった。まあ、今となってはどうでもいい。

辺りを見渡すと遠くに一つの建物が見える。看板には「洋服店」を意味する文字が刻まれている。洋服店に地図があるかわからないがとりあえず行って見るのがいいだろう。
ゾンビキャットとの戦いを終えた今、再び僕は地図を探すため、洋服店へ走った。

キャリコM110＝罠

洋服店まであと300m。洋服店の看板はまだ電力を保っているのか輝いている。だが、路地は相変わらず暗闇と血の臭いで支配されている。

前方にまたしてもゾンビが姿を見せた。数は4体。さっき倒した群れよりははるかに楽だ。

僕はダガーナイフを1体のゾンビに投げつけた。ダガーナイフが矢のように宙を舞い、ゾンビの急所、脳天を貫いた。グシャリという音とゾンビのうめき声と共にそのゾンビが倒れる。

ゾンビが倒れたと同時に僕はハンドガンを構えた。銃口をナイフと同じくゾンビの脳天に合わせる。

銃口が合わさるのを確認し、引き金を引く。ゾンビにハンドガンを使ったのは久しぶりだ。ゾンビキャットたちとの戦いではゾンビには使わなかった。

ゾンビの頭が吹っ飛び、地面に脳みその一部や目玉が音を立てて落ちた。耳を塞ぎたくなる。

続けて2発の銃弾を発砲し、残りの2体を仕留めた。お約束なのかまた脳みそと目玉が落ちてからゾンビたちは倒れた。

さあ、これで通行に邪魔なゾンビはいない。早いとこ洋服店で地図を探そう。

再び歩き出す。目の前には光り輝いた洋服店の看板しかない。いや、今倒した4体の死体があるか。

最初に倒したゾンビからダガーナイフを引き抜くため、身をかがめる。この時僕は完全に油断していた。

その油断があだとなり、後ろからゾンビに襲われた！くそ！全く気配を感じなかった！

ゾンビの体重で僕は前に倒れた。同時に右手に持ったハンドガンを落としてしまった。左手で引き抜きかけたダガーナイフの柄からも手が離れる。

とっさに僕はゾンビにひじ打ちを食らわしたが相手は痛みを感じない化け物。倒れた状態で力があまり入らなかったため衝撃も弱い。当然、ゾンビは少し後ろに反れただけだった。

ゾンビが大勢を立て直し、再び牙を剥いた。噛まれたら感染するかもしれない。感染しない場合もある。それはゾンビが人間の頃の血液とその噛まれた人物の血液が同じ時だ。

とは言ってもやはり噛まれるのはまずい。早くこいつを引き離さないと！

背後でしがみついているゾンビの頭めがけて左手でパンチを食らわした。が、案の定、パワー不足で引き離すことはできなかった。どうする？

途端に僕は対処法を閃き、すぐさま実行した。伸びすぎて不安定な形の爪を思いっきり、ゾンビの目玉に突き刺す。刺さった瞬間、グシャリという音と魚の目のような感触が手に伝わった。

ゾンビの目から出た血が肩に降り注ぐ。その間、僕はヘッドロックでゾンビの顔面を攻撃していた。

１０回目のヘッドロックが決まった瞬間、ボキッ、という音が僕の耳に響いた。音のあとに髪の毛が血で染まる。血だけではなく肉や皮もついてきた。

ゾンビの力が弱まり、やがて崩れ落ちた。おそらくヘッドロックで鼻の骨が折れ、獲物を認識できなくなったのだろう。予想通りだ。

体が自由になった僕は辺りを見渡した。一番近くにある武器はなんだ？

鉄パイプが見える。きっとあれは逃げ出した住民か誰かが武器とし

て使っていたものだろう。その後、何らかの事情で（死んだとしか考えられない）落としたに違いない。
十分使える武器なのでとっさに拾い、武装した。そして這いずる鼻が折れたゾンビに歩み寄る。

ゾンビがしがみつくかのように手を差し伸べてきた。それと同時に僕は鉄パイプを頭上で構える。
ゾンビに別れの言葉を告げた。決して穏やかではない。むしろ残酷だ。

「死ね」

振り落した鉄パイプが勢いよくゾンビの頭を潰し、絶命させた。だが、鉄パイプは頭をそのまま貫通し地面に激突した。手に大きい振動が走る。鉄パイプは曲がった。
手をぶらぶらとさせながら鉄パイプを投げ捨てた。もう曲がっていつかは折れるだろうし、ダガーナイフがあるからだ。それにけっこう重量もあるので邪魔になる。
ダガーナイフをゾンビの死体から引き抜き、再び洋服店へ走った。

ようやく洋服店へ到着した。外からだとガラス張りのため店内がよく見える。店内には久しぶりの敵の影が見える。シャドースライサーがいるようだ。
さらに観察したが、シャドースライサー以外の敵はいないようだ。店内はまだ電気がついているようで明るい。これなら早く探すことができるだろう。
僕は地図がある、という期待を胸にドアに手を掛けた。ドアに力を込め、こちらに引く。

その時、僕は妙な違和感を感じた。それは洋服店の入り口から右の路地からだ。よくわからないが何か災いが起きそうな気がする。それはかつてないような・・・・・・
右の路地を注意深く見るがやはり暗闇しか見えない。耳を使って見てもいつもと変わりない、遠くのゾンビたちのうめき声しか聞こえなかった。
気のせいか?まあいいや、とりあえず先に進もう。ロンの命が最優先だな。
僕は違和感を無視して洋服店のドアをくぐった。

洋服店に入ってすぐ僕は警戒した。なぜなら外から確認した通り、シャドースライサーがいるからだ。
ショットガンを構え、音で数を確認する。しん、と静まる店内に心拍音とシャドースライサーのベタッベタッ、という歩みが聞こえる。
ベタッ、ベタッという音が6つ聞こえた。
となると数は6体!?今までにない数だ。かなり厳しくなるかもしれない。
服が並んだ言わば「服の壁」に身を隠しながら進む。シャドースライサーは過去に倒したリッカーとは違い目がいいのだ。それに加え、耳まで発達している。ずるすぎだ。

服の壁を横切った途端、ついに奴が姿を現した。数は2体。背中を向けているためまだ僕には気が付いていない。先手を取るチャンスだ。急所に当たれば一撃で倒せる。
2体がうまく並んでいる位置でショットガンを発砲した。銃弾が2体の変異体を貫いた。
遠くの1匹がギャッ、と悲鳴を上げ、近くの1匹が断末魔の叫び声を上げた。まずは1匹、仕留める。
しぶとく生き残った1体のシャドースライサーが腕を構え、突っ込

んできた!すかさず発砲しようとしたが、距離のことを考え、やめた。ショットガンを盾にし、身を固める。
奴の腕が振り下ろされた。が、三角型に盛り上がった皮膚はショットガンによって防御された。

シャドースライサーが隙を見せる。しかしこれはほんの数秒。構えて発砲していたらやられる。
発砲は無理と考え、ダガーナイフを投げつけた。この間わずか2秒。ナイフがシャドースライサーの背中に突き刺さる。かなりの出血をしたようだ。
にも関わらず、奴はものともせず飛びかかって来た。やはりゾンビとは違う。
だが、ここまでは予想通りだ。これは一種の作戦である。ダガーナイフで怯ませ、その間に構え、発砲する、という作戦だ。
飛び掛かって来た奴をギリギリのところでふっ飛ばした。シャドースライサーは地面に裏返り、断末魔の悲鳴を上げる。つまり???絶命したのだ。

次の攻撃に備えてショットガンの弾をセットした。予想では6体いるはず。だとするとあと4体いるはずだ。さあ、早く出てこい。終わらせてやる!
数分が経ったが、奴らは一向に現れない。もしかして僕の聞き違えだったのか?それならそれで嬉しいが。だが、まだ油断はできない。耳をすまして音を伺うが僕の心拍音しか聞こえない。どうやら6体というのは予想違いだったようだ。

ちぇっ、せっかく相手してやろうと思ったのに!という心の底では予想がハズレで嬉しい、という思いが浮かんでいた。本音はもちろん、ハズレて嬉しい、だ。
敵がいないのを確認したところで早速、店内を探索し始めた。まず

はお目当ての地図探し。声がなければここまで来た苦労が無駄になる。

服が畳んであるタンスに警官の死体が寄りかかっていた。無論、調べると使う暇がなかったと思われるハンドガンの予備弾がホルスターにあった。弾数は３０発ほど。

今度は試着室の辺りを調べると主婦と思われる死体があった。その近くには「薬局」と書かれた袋が置かれている。中を調べると救急スプレーとアルコール消毒液があった。

次にカウンターを調べるとレジの真下に何やらパンフレットらしきものが落ちている。確かめてみるとそれは予想通りパンフレットだった。中にはこの町の地図が載っている。

・・・・・ハハッ、地図だ！やった、ついに目的の品が見つかったぞ！苦労してよかった！

これでやっとロンの元へ駆けつけられる。すぐさま公園の場所を確認し、最短ルートをたどる。一番の最短ルートだとここから公園まで１０分程度で行けそうだ。

パンフレットをポケットにしまい、顔を上げる。その時、ふと一つのマネキンが目に留まった。

・・・・・！？何だあれは！？何で洋服店のマネキンがあんなものを？ていうかあれ実物か？

出口に向かわず、僕はそのマネキンに駆け寄った。マネキンは手に驚きのものを握っている。

銃―？？？？？？キャリコＭ１１０。キャリコＭ１００というサブマシンガンのバレルを２０１ｍｍまで短縮し、ストックを省略してマガジンを５０連に変更したピストルモデル。「バイオハザードコードベロニカ」でも登場した銃だ。

そのキャリコＭ１１０を２丁、マネキンの手に握られている。でも

なぜだろう?
とりあえず実銃かどうか確かめるため、マネキンの手から取った。
取った直後にカチッ、と音がしたがこれはきっとマネキンの軋みだろう。そんなことよりこれは実銃か?
かなり重い。マガジンの部分を取り外すとしっかり弾が込められている。どうやら本物らしい。

よし、これでまた新たに強力な武器ができた。何だか得をした気分だな。
もうここに用はない。今度こそ早くロンの元へ向かおう。そういって足を踏み出した。
だが、2、3歩進んだところで僕の足は止まった。それは背後で何かの気配を感じたからだ。
恐る恐る振り向く。ゾンビ?ゾンビキャット?シャドースライサー?それともファングか?
しかしその正体はゾンビのような化け物ではなかった。それはさっきまで見ていたあれだ。

そう、キャリコM110を握っていたマネキンである。マネキンは僕の方をジッ、と見ている。方向を変えるそぶりはない。よく見るとマネキンが立ててあった場所が少しずれている。
明らかに動いている・・・・・・カラクリか?でも何で突然動き出したんだ?
・・・・・!?もしかして罠!?キャリコM110を取った時になったあのカチッ、という音は罠の作動音だったのか!?

「キャリコM110=罠」新たに僕の悪夢の記憶にこの式が刻まれた。
その式を正解だ、というかのようにマネキンは僕に向かって突っ込んできた!

襲いかかるマネキンに僕は唖然とし、動けなかった。その間もマネキンと僕の距離は徐々に縮まる。

ようやく我に返り、身構えたがもう遅かった。マネキンは１ｍ以内まで接近していた。敵が手刀のポーズをし、一瞬ギギッ、という軋み音を発する。耳障りな音だ。

ものすごいスピードの手刀が襲いかかる！僕はとっさにダガーナイフを鞘から抜いた。そしてダガーナイフを胸の前で構えた。ある意味でいまの奴は隙だらけだが、僕には奴より早く攻撃する自信なんてない。そうなるとやはりダガーナイフで受け止めて防御するのがいいだろう。

だが、マネキンのパワーは僕の予想を超えた。手刀がダガーナイフに伸し掛かった途端、ギン、という鈍い音が！どうなったかは目を瞑っててもわかる。ダガーナイフが真っ二つに折れたのだ！

あり得ない。いくらマネキンの素材が丈夫といっても金属のナイフが折れるはずない。ダガーナイフは護身用、つまり普通のナイフよりはるかに丈夫だ。にも関わらず折るなんて・・・

ナイフの刃片と共にマネキンの手刀が顔面にヒットした。すさまじい痛みが走る。鼻がキーンとする。ナイフの刃片で頬が切れた。しかし傷に構っている暇はない。

マネキンの攻撃で僕は床に倒れた。同時に鼻血が垂れる。鼻血はマネキンの手刀によって負った傷だ。

奴が踏み足の体制に入った。たぶん、足の力で僕の骨を破壊するつもりだろう。マネキンの足が勢いよく落ちてきた。

が、反射的に反応し、緊急回避でかわす。これでマネキンとの距離が少し遠ざかった。しかしまだ僕は立ち上がれずにいる。早いとこ

立ち上がらないと。
マネキンに追いつかれるよりも早く何とか立ち上がった。まだ奴との距離は少し余裕がある。攻撃体勢に入れそうだ。でも奴をどの武器で撃退しよう？

考えているうちにマネキンに追いつかれた。奴が再び手刀で攻撃してきた。だが、2回目の攻撃は受けない。僕は身をずらし、奴の手刀を回避した。
マネキンが一瞬隙を見せる。攻撃のチャンスだ！銃は間に合いそうにない。となると・・・体術がいいだろう！僕は蹴りの体制に入った。
マネキンの足にバックキックを浴びせる。マネキンが体勢を崩し、地面に倒れた。鈍い音と共に腕が曲がる。なるほど、力は普通じゃないが体そのものの素材は変わらないようだな。
ならば奴の弱点、いわば機械の起動源を破壊する必要がある。その作戦は今が絶好のチャンスだ！

腹這いに倒れたマネキンに馬乗りになる。馬乗りになってすぐさま奴の足と腕を包帯で封じた。もちろん、包帯は何重にも巻きつけてターバンのようにしてある。
もがくマネキンの頭を手でがっしりと掴んだ。そして背筋のトレーニングをする時のように足の方へ引っ張る。このまま首の部分をへし折るのだ。奴の起動源は見たところ頭のようだ。
ミシミシ、と耳を劈く音が発せられる。だが、この音はやがてバキッ、という音に変わるだろう。
さらに力を加えていく。その度に音が高くなる。首がもげるまであと少しというところか。これは早く勝負がつくだろう。結構弱い。
まあ実質はマネキンだしな。

ベタッ、ベタッ・・・・・ん？何か今、首が軋む音に何か雑音が・

・・・・空耳か?でもこの音はどこかで聞いたような・・・この店は言ってすぐに・・・

次に瞬間、服の壁を押し倒してその正体が姿を現した。三角型の鋭い皮膚を体全体に持ち、四足歩行の化け物・・・そう、シャドースライサーである!

なぜ奴が!?確か全匹倒したはず・・・・・一体どこから侵入してきたんだ?路地からか?それとも僕が偶然、遭遇しなかった奴が今になって来たのか?

ふと天井を見ると一つだけ光っていない部分がある。真っ暗だ。さっきまでは(シャドースライサーが現れる前までは)なかった。どうやら天井の板が外されたらしい。

となるとシャドースライサーは天井裏から現れたと思われる。もし路地から侵入したのならばガラスを突き破る音が聞こえたはずだ。ガラスは一つも割られていなかった。

とにかくこいつらを何とかしなければ!まずはシャドースライサーから倒すのが先決だろう。マネキンはもうしばらく動きを封じられる。といってもやはり包帯ではそう長く持たない。

意識を集中させ、敵の数を探る。・・・・・シャドースライサーは3体というところか。

一つの気配は目の前、一つの気配は左にある服の壁のすぐ向こう、一つの気配は遠くに。おそらく初めは2体で襲いかかってくる。この位置からだと挟み撃ちにされるかもしれない。

僕はマネキンから意識をそらし、シャドースライサーだけに集中した。とりあえず手始めは目の前にいる1体。奴がベタッ、ベタッと音を立てて迫ってくる。距離はそう遠くない。

奴が1歩踏み出したと同時に僕はキャリコM110を2丁構えた。2丁同時につまり、1丁を片手で撃つことになる。これが初使用だ

が、今は試し撃ちなんてできない。
ぶっつけ本番だ！キャリコＭ１１０の引き金を２丁同時に引く。２発の銃弾がシャドースライサーに命中した。一瞬、奴が怯む。

さらに引き金を素早く引き、連発する。その度に反動と重量が手に伸し掛かるが、ショットガンほどではないため、平気だ。このまま連謝して一気に決めてやる。
しかし悪い予想が当たってしまった。死が近いシャドースライサーの対面側から、僕の背後からベタッベタッと音が・・・もちろん、正体はシャドースライサーしかいない。

挟まれた？？？？？？？？？だが、この事態に備えての対処方は考えてある。よく考えてみると誰でも中ボス的存在の化け物にはショットガンを使うだろう。なのになぜ僕はショットガンを使わなかったか？
それはキャリコＭ１１０の特性にある。キャリコＭ１１０は知っての通り２丁銃・・・つまり両方のシャドースライサーを一篇に相手にできるのだ！
腕を両方の敵に向け、キャリコＭ１１０を構える。そしてすぐさま発砲した。２体のシャドースライサーの声が混じり合い、一瞬変に聞こえた。

その声は１体のシャドースライサーの絶叫によってかき消された。いや、絶叫というより断末魔の叫び声か。最初に攻撃したシャドースライサーが絶命したのだ。
残るは近くにいる１体と遠くの１体。楽勝といえば楽勝だ。僕はキャリコＭ１１０からショットガンへと持ち替えた。飛び掛かって来た奴に標準を合わせ、引き金を引く。これで終わりだ！
シャドースライサーがはでに血を出しながら吹っ飛んだ。その体には頭がない。ショットガンによって吹き飛ばされたのだ。どうやら

クリティカルヒットしたらしい。

絶叫しながら絶命へと向っているシャドースライサーから目をそらし、再びマネキンに集中した。シャドースライサーはもう1体いるがかなり距離が離れているため、あとで倒せばいい。

再びマネキンの頭を掴み、足の方へ引っ張る。耳にまたミシ、という音が戻った。さあ、早いとこけりをつけよう。ロンの元へ急がなければならないのだ。

かつてないほど軋む音が高くなった。もう少しのようだ。僕で足を踏みつけ、足力で一気に引っ張った。ミシ、とい音がだんだん低くなる。

そしてついにバキッ、と音を立て首の部分が割れた。頭と体が離れたと同時にスパークが発生し、完全にショートした。よし、これでこいつはもう動かないだろう。

僕は立ち上がり、店を出ようとした。しかし、一つのあるものに目が引かれる。それはマネキンの折れた首の部分から白い煙のようなものにだ。

ショートした時の煙か?でもこの量は異常すぎるな。霧のようにも見えるけど・・・・・・

店内が霧らしきものであっという間に覆われた。1分もかかっていない。まあいい。とにかく早くここを出て公園へ行かないと。それにしても何だか頭がぐるぐるする。

何だろう?この感じは。記憶が引き出されるような・・・視界が悪くなる。いや、僕の意識が遠のき目が閉じているのかもしれない。

うっ・・・頭が・・・・・・

?????????見覚えのある風景、部屋が見える。部屋の隅にはモデルガンの山、壁側にあるテレビの横にはサバイバルやホラ

ー系のゲーム？？？？？？？？？？？これって？？？？？？？？？まさか？？？？？

感染疑惑

少し遠く?.?.?いや、隣り合わせの部屋で?.?.?無邪気に笑う声がする?.?.?妹の佳南?.?.?.次に妹を叱りつける声?.?.?またジャンプしたな?.?.?下階に迷惑かかるのに?.?.?叱りつけたのは?.?.?母さん?.?.?.ん?.ああ、夕飯か?.?.?.ドアを開けて?.?.?.早く向こうへ?.?.?.あれ?.向こうに?.?.?.父さん?.?.?.モデルガン?.?.?.バイオハザード?.?.?.あとでいくよ?.?.?.明日は?.?.?.卒業式か?.?.?.?.?.?

ドクン、ドクンと心臓の音が聞こえる。さらに何かのうめき声も聞こえる。えっ・・・?これって夢だよな?僕は今、家にいて夕飯を食べに行くところだったはず・・・

視界の風景が変わっていく。僕の家から洋服店へと。次に頭がズキズキ痛むのを感じた。おいおい、早くこんな夢、覚めろよ。夕飯食いに行くんだからさあ・・・

ん?待てよ。僕は・・・バイオハザードに2度巻き込まれてその2回中2回生還したはず。そして今また3度目のバイオハザードに巻き込まれた・・・だよな?それで確かロンとかいうやつと再会するために公園に向かっていたんだ。その途中、マネキンのカラクリに襲われて・・・でマネキンをぶっ壊した・・・そこから変な白い煙・・・霧だったかな・・・?そこから記憶がない。

やはりこっちが夢なのか?それとも家にいる方か?それとも僕は死んでどちらとも夢?.?.?.?.?

そうだ。僕はバイオハザードに巻き込まれ、ここまで生き抜いた。つまり、家族は死んだんだ。家にいる方が夢・・・今目の前の現実が夢だったらどれほどいいことか。しかし現実は変わらない。

どうやら僕は寝ていたようだ。その証拠に頭がズキズキと痛むし、

洋服店にある時計が１０分ほど針を進めている。にしてもこの頭の痛さは異常だ。まあ、時期に治まるだろう。
あの霧は催眠ガスだったのか？でもそれではあまりにもおかしい。普通、トラップに使用するとしたら爆薬を使うはずだ。このマネキンは子供が設計したのか？

僕はふらつきながらも立ち上がった。武器はまさか奪われていないよな？近くのイスに座りこんで休憩ついでに持ち物を確認する。

Ｍ９２Ｆ・ハンドガン、レミントンＭ８７０・ショットガン、キャリコＭ１１０、
救急用スプレー、包帯ボックス

イスに背もたれながら辺りを見渡す。相変わらず洋服の壁がズラリと並び、その最前列には首がない、マネキンが倒れている。マネキンを挟んでシャドースライサーの死体が2体、あった。
僕はレミントンＭ８７０からＭ９２Ｆに持ち替え、低く構えた。そのままゆっくりマネキンへと歩み寄る。念のため、マネキンから霧が出ていないか確認した。もし出ていたのを知らず、また吸ってしまい、寝るのはいやだ。幸せだったころの過去を見せられるのはやめてほしい。
マネキンから霧は出ていなかった。どうやら完全に放出したらしい。これでくまなく調べることができる。僕はマネキンの手足を外した。パキッパキッと壊れても耳障りな音を発する。

マネキンの右手を調べると中の空洞に何やら筒状の紙がある。何だろう？説明書だろうか？
筒状の紙を手に取り、広げる。すると中には聞きなれたといってもいい、文字が刻まれていた。

A・O・Rミストの注入

私のお気に入り銃コレクションの一つ、キャリコM１１０がマネキンの極めつけとして飾られることになった。無論、私は猛反対したが、我らがグループ設立者・レイン様からの申しつけだと知り、仕方なく認めた。防犯対策は最高らしいが、私は認めない。たかがマネキンのカラクリだけで侵入者を退けることなどできるか！キャリコM１１０は絶対に渡さない。そのために我らがA・O・R？ウイルス兵器・ミスト（霧）をマネキンに注入する。このミストに包まれた状態で息を吸うと徐々に睡眠へと陥っていく。普通の濃度ではただその者が一番望むものが目に映るだけだが、今回は強力なため、夢として実現する。当分は目を覚まさない。その隙に捕まえるのだ。

スパークランチャー同様、キャリコM１１０は誰にも渡すな。

ブラッティ病院・院長

・・・院長が送ったものか？ていうかたかが銃のためにどれだけムキになっているんだよ。洋服店側もこれじゃ赤字じゃないか。そんなことはどうでもいい。気になるのは「A・O・Rミスト」という用語だ。ミストは英語で霧。その霧に僕は包まれ、寝ていた・・・僕の一番望むものが夢となって。

しかしなぜ病院のことにわざわざA・O・Rが手を貸すのだ？でもA・O・Rミストを注入したのは院長・・・まさかA・O・Rとこの島の病院、いや、院長は何か裏の関係があるのか？

おっと、早いとこロンの元へ向かわないと。あれからかなりの時間が過ぎている。僕の体内時計だと1時間は経っているだろう。といっても体内時計など信用できないが。

僕はパンフレットを片手に洋服店を出た。

予想の１０分ほど走ると公園が見えてきた。頭上で雷の音、そして

地面では水がぶつかる音がする。この雨は洋服店から出た時に気が付いた。おそらくかなり前から降り続いているのだろう。

公園の出入り口を越え、辺りを見渡す。ロンはどこだ?再び見渡すがそれらしき影は見渡らない。見えるのは遊具と数体のゾンビだけだ。ゾンビたちが僕に気が付き、向ってくる。

僕はＭ９２Ｆで奴らの頭を撃ちながらロンを探した。公園の真ん中で突っ立っているわけない。あの出血の量だと水に触れたらかなり流れてしまう。もしかしたら大量出血で死ぬ場合もある。

ロンはどこかで雨宿りしているはずだ。あの大きな木の下か?いや、少し葉が少ない。そのことにロンも気が付いているはずだ。じゃあどこに?あの屋根がある遊具の下か?

試しにロン、と大声で呼んでみた。しかし返事はない。もしかしてもう死んでしまったのか?どちらにしろ、あの遊具の中を覗く必要がある。呼吸の音が聞こえるのを祈るまでだ。

遊具の屋根の上に何かいる。正体は言うまでもない。通常より大きな体、長くなった爪・・・ゾンビキャットだ!ゾンビキャットは屋根の下をずっと見つめている。人間がいるのか?

その人間がロンだとしたらまずい!いくらアサルトライフルを持っていると言ってもすばやいゾンビキャットには通用しないだろう。

僕がここから何とかしないと!向こうまで走っている時間はない。

僕はＭ９２Ｆの標準をゾンビキャットに合わせ、発砲した。ゾンビキャットの体を銃弾が貫通した。見たところ足に命中したようだ。

ゾンビキャットが低く唸り、僕の方へ向きを返る。

ターゲットを僕に変えたらしく、すぐさま突進してきた。僕はＭ９２Ｆをしまい、レミントンＭ８７０を装備した。ゾンビキャットとの距離が２０ｍほどまで縮まる。

ゾンビキャットの頭めがけてショットガンを発砲した。ゾンビキャ

ットが吹き飛ぶ。が、まだ絶命はせず、起き上った。立ち上がって辛そうに唸っている。どうやら目が潰れたようだ。
これはまたとない隙だ。僕は再びM92Fを構え、引金を引いた。ゾンビキャットの頭を銃弾が貫通する。続けて連射し、敵に計8発の9ミリ弾を浴びせた。さすがのゾンビキャットも絶命する。
僕はマガジンを取り換え、リロードした。そしてすぐさま遊具へと走り出す。

遊具の中へ入るとそこには左腕を抑えた一人の男が横たわっていた。男のズボンは血に染まっていた。そう、ロンである。僕はあくまでも冷静で駆け寄った。身の安全を確認しなければ。
ロン、と声を掛けたが返事はない。しかし呼吸はしているので生きているようだ。今は疲れ切って寝ている。相変わらず腕からは大量の血が流れていた。その下にはわずかながら肉が見える。
僕はロンを揺さぶりながら声を掛けた。

「おいロン、僕だ。俊樹だ。起きろ」
「ぐっ・・・俊樹・・・か?」

ようやく目を覚ます。それと同時にうっ、と苦しみの声を上げた。腕の痛みがぶり返したようだ。早く手当をしないと。僕は救急用スプレーをまずロンの傷口にかけた。次に包帯ボックスから包帯を一つ取り出し、スプレーをかけた。これで治癒力が少し上昇する。時期に痛みは治まるだろう。
包帯を腕に巻き付け、結んだ。とりあえずこれで手当ては終了だ。
次はロンの体調を聞こう。

「ロン、体調はどうだ?傷のことは無論、知っている。それ以外のことについて聞きたいんだ」
「・・・・・・殺せ」

「は！？どういうことだ？」

さすがに驚いた。いきなり「殺せ」なんて言うからな。それにしてもなぜこんなことを言うんだ？足手まといにはならないのに。ん？待てよ。ロンはファングに腕を切られた。あの鋭い爪で。爪はファングの体の1部。ファングは哀れなウイルス感染者。そいつに引っ掛かれたってことは・・・・・・

「脳が・・・体が肉を食えって言っている。まるで奴らになった気分だな。俺はいつかお前に齧り付くかもしれない。そうなったら俊樹、お前まで奴らの仲間になっちまう。今ならまだ間に合う、だから殺せ、と言った。おっと、即死できるように脳天を撃ってくれよ」

「おいおい、僕がお前を殺せると思うか？答えは1秒で出る。無理だ。ワクチンがあるかもしれないだろ？それにまだ感染したって決まったわけじゃない。肉が食いたい、と思うのは幻想かもしれないだろ？とにかく、僕はロンを連れて行く。さあ、早く行こう」

「・・・・・わかった。だが、俺がゾンビ化したときはすぐに額を撃ちぬいて殺してくれ。いいな？」

感染したと決まったわけじゃない？？？確かにそうだ。だが、感染した人特有の症状がロンに現れている。感染している確率は１００%に近いだろう。しかしワクチンを探せば何とかなる。今までの経験からして感染してからゾンビになるまでは約2時間。それまでに何とかしないと！

ロンの話だと軍事基地へ行くには病院を通ることになるらしい。病院ってレッド病院のことか？その病院はこの公園の裏門から行けるらしいが、今は閉まっている、とのことだ。

裏門のカギはおそらく見つからないだろう。お互い、そう思った。が、裏門のカギの構造は極めて簡単らしい。となると「キーピック」を探せばいいか。

「ロンは待っていてくれ。僕はキーピックを探して来る」
「その前にこれを持って行け。必ず役に立つはずだぞ」
それはサイドパックと通信機だった。これなら多くの資材を持ち歩くことができる。さらにロンとの連絡も可能だ。僕はサイドパックを腰に装着し、ポケットに通信機を入れた。
そして「ホームレスのアジト」と呼ばれている路地へ向かった。

ゾンビの進化

「ホームレスのアジト」という呼び名の路地はまさにその通りだった。荒らされたごみバケツやゴミ袋、さらに汚いソファー、段ボールなどが無数重ねられ、屋根が作られていた。なるほどこれこそがホームレスのアジトだな。にしては臭いがそれほどきつくないような・・・

この路地に入ってからまだゾンビには1回も出くわしていない。一瞬、誰かが倒したのか?と思ったが違った。もしそうだとしたら死体が絶対あるはずだし、薬莢もいくつか落ちているだろう。

ゴミをを重ねて作った屋根の下には食べ物の不要物がある。しかしそれはどれも拾ったとは思えない形で残っている。まさかここのホームレスたちは店から盗んだのか?はっきり言うとどうでもいいのだが。僕は銃を構えつつ、また歩き始めた。

念のためホームレスのようにゴミ箱をあさった。鼻が曲がるほどの悪臭を発する。そのほとんどは食べ物の不要物や残り物だが時には変色した食べ物もあった。それは胃で消火されている際に逆流して戻って来たもの・・・・・吐いた食べ物だ。うっ・・・こんなものは二度と触りたくない(他人の物。今触っている物はもちろん、ホームレスの吐いたものだ)気分が悪くなってきた。

その苦労も虚しく、目的のキーピックは見つからなかった。しかし役に立つものはいくつかあった。

特に一番使えるのが「ボウイナイフ」という刃長２０－３０ｃｍの大型ナイフ。マネキンのカラクリと戦う前ならば要らないと思ったが、今は嬉しい。なぜかショルダーバックに入っていたダガーナイフはマネキンによって刃が折られてしまった。半分以上折られたのでもうそのナイフは捨てた。

ボウイナイフはハンティング・ナイフの原型であり、元はヨーロッパで使われていたブッチャー・ナイフを改造したものが始まりらしい。西部開拓時代の英雄、アーカンソー州のジェームズ・ボウイが、決闘やバッファロー狩りに愛用していたことからボウイナイフと呼ばれるようになったという。

アメリカでは今も盛んにカスタムナイフビルダーと呼ばれるナイフ専門の刃物職人から大量生産の製品に至るまで幅広く製造されており、フィールドナイフの定番として、あるいはコレクターズアイテムないしインテリア用品として愛用されている。

・・・何でこんなに知ってるんだ?確か誰かから「銃とナイフ、つまりだな、サバイバル関係以外にもっと集中しろよ」と言われたことがある。確かに僕は銃とかナイフについてはインターネットで「ｗｉｋｉｐｅｂｉａ」を中心に知った。でも勉強してないわけじゃない。

しかしやっぱり脳の半分はサバイバルのことなのかも・・・モデルガン実銃化したしな。

おっと、まあそんなことより今は新たなナイフの相棒ができた。これでまた銃の節約が出来る。接近戦にも困ることはないだろう。よっぽどの化け物が現れなければの話だが。

聞き覚えのあるうめき声が聞こえてくる。その声は大抵、遠くから聞こえてくるがごくまれに餌を求めて近くに聞こえてくる。餌とはもちろん、僕達人間のことだ。うめき声がした時点で僕はすぐさま警戒した。敵は奴らゾンビしかいない。噛まれる前に急所を突くのだ。

ゴミバケツを蹴散らしつつ、ゾンビたちが群がって来た。数は・・・２０体。多い。やはりホームレスのアジトというだけのことはあるか。いいだろう全員、首切りの刑にしてやる!まあ、どちらにしても通行に邪魔だから殺すけど。僕は新品、いや、拾いたてのナイフ

を構えた。
普通は銃で倒す。だが、今回は銃は使わなくても十分対処できる。この路地はそれほど広くない（人で表せば大人二人分）ため、一度に向かってくるゾンビが少ない。つまりナイフで少しずつ倒していけばよいのだ。さらにボウイナイフは使いやすいこともあり、切れ味を試すのにもちょうどいい。

僕はナイフを低く構え、１０ｍまで距離が縮まったゾンビ2体に突っ込んだ。2体が同時に腕を伸ばしてくる。普通だったら掴まれて肩の肉に齧り付かれただろう。しかし僕は掴まれるよりも早く攻撃に入った。1体のゾンビの額目がけてナイフを勢いよく突き出す。グシャ、という音と同時に血しぶきが降りかかった。ボウイナイフには大量の血が流れ出す。血を無視して僕はすぐにナイフをゾンビの脳天から引き抜いた。抜けやすいようにゾンビには蹴りを入れる。再びナイフを構え、もう1体のゾンビに狙いを定める。そしてナイフの柄を使い、顔面を思いっきり殴った。グシャというよく聞く聞きなれない音が路地に響いた。

殴ったゾンビの顔面は見るも無残に破壊されていた。いや、破壊したというべきか。目玉が潰れ、さらに鼻の骨も折れたので獲物の臭いを探ることもできない。よく見ると耳もなかった！これはゾンビ化する前に無くしたのだろう。耳・鼻・目という獲物を追うパーツを失ったこのゾンビはもう終わりだ。
ゾンビがふらふらとめちゃくちゃに歩き始めた。そのおかげで後ろから迫るゾンビの通行を圧倒的に妨害した。こうなったら強行突破で一気に進むか？ロンの感染疑惑のこともあるので早くキーピックを探さなければならないし・・・よし、強行突破だ。僕は一瞬開いたゾンビの間に向かって走った。

その時、ゾンビとしての機能を失ったゾンビの後ろの奴が突然倒れ

た。だが、僕は少しも気をとられず、走り続ける。当然のことだ、些細なことに構っていたらそれこそ自分の命が・・・

次の瞬間、僕は勢いよく弾かれた。それはまさに予想もしないこと。ボウイナイフを低く構えていなければ危なかっただろう。それにしても一体なにが起こったんだ?

弾かれたことは知っている。しかし一体何の仕業なのかわからない。おそらくゾンビではないはずだ。きっとゾンビキャットかシャドースライサーだろう。それかファングか?

たぶん、僕の予想は間違っている。ゾンビキャットならモタモタせずに最初に飛び出してくる。シャドースライサーも同様だ。仮にファングだとしても唸り声で１００%わかる。

じゃあ一体・・・・・ん?あれはさっき走ってる際に倒れたゾンビだよな。死んではいない。ただ倒れているだけらしい。しかし食欲旺盛なゾンビがそうそう倒れるわけがない。もしかして足に異常でも起きたのか?足を観察してみる。もちろん、素早くだ。ゆっくり観察していたら・・・食われる。

なっ!?ありえない!あんな状態に絶対ゾンビが自分からなるわけない!ましてや足が切断されるなんて!足が切断されている。見るも無残に、膝から下が千切れていた。これは絶対、何かいるに違いない。ゾンビ以外の何かが。そう確信し、僕はナイフの状態を確認しつつ、ハンドガンを構えた。

ボウイナイフは幸い、使えない状態にはなっていなかった。峰の部分が少し欠けているがそれ以外は問題ない。鉄の刃を折るとはどんな化け物だろう。

そいつはついに正体を現した。僕に撃たせる間も与えず。敵はゾンビの群れを足から蹴散らし、僕に突っ込んできた。刃物のようなものが一瞬光る。それと同時に僕は身をかわした。

ようやく姿がはっきり見えた。もう驚きようがない。驚くというか

恐怖に包まれた。こんな化け物、今まで見たことがない。ゾンビなのか？いや、これはゾンビの進化形態か？とにかく目を疑う。
そのゾンビのような化け物は鋭そうな爪、いや、見るからに骨にも見える。その突起物が頭からたくさんと腕から2本、背中から何十本か飛び出してた。正確に数を数えている場合ではない。
頭の突起物は長い角のようなものが1本、飛び出ていた。手はなく、その代りとでも言えるのか突起物が2本ついている。背中からは背骨と同じ数の突起物が刺鎧のように飛び出していた。

それでこいつは一体なんなんだ？？？？？？？？？？ゾンビが進化したとしか思えないが・・・・・・
「角ゾンビ」・・・とでも呼ぶか。とにかく今はこの危険な奴を何とかしなければ！
僕は背後にいるゾンビたちから意識をそらし、角ゾンビに集中した。とはいったものの他のゾンビは角ゾンビによって絶命したかもしれない。もしかして意外にこの角ゾンビ、大軍掃除に使えるかも？
少し馬鹿なことを考えてしまったが戦闘に変わりはない。角ゾンビは中腰になりながら僕の様子をうかがっているように見える。頭がいいのか？それとも攻撃が遅いだけなのだろうか？

Ｍ９２Ｆの引き金を引いた。狙いはゾンビの急所、頭だ。これで一気に決着がつくだろう。いくら角が生えているといっても所詮はゾンビ。弱点は変わりない。銃弾が予想通りの方向へ放たれる。
銃弾が狙い通り角ゾンビの脳天に命中した。瞬時にキン、という金属音が響く。何の音だろう？遠くでも誰かが戦っているのか？こんなことを思ったが僕は分かっていた。事実を。
銃弾は何と角ゾンビの脳天に弾かれた！しかも傷一つついていない！さらに驚くことに９ミリ弾は奴の手前で落ちていた。しかも少し削れて。なんて硬さだ！銃弾を跳ね返すとは！
それどころかこの無駄な発砲で角ゾンビが攻撃態勢に入ってしまっ

た。角ゾンビが足を一歩前に踏み出す。奴はほかのゾンビと違って走れる。かわすのは困難だろう。

角ゾンビがドリルのように突進してきた！しかし距離が少し遠かったため、かわせた。とはいえ、少し足を掠った。脛の皮膚を浅く切られた。少量の出血と軽い痛みが走るが、問題ない。

ハンドガンでダメならショットガンを使う。僕はレミントンＭ８７０に持ち替え、すぐさま引金を引いた。角ゾンビとの距離はわずか２ｍ。ショットガンの絶好の的だ。

レミントンＭ８７０の引き金を引く。発砲と共に反動が手に走った。が、もう慣れているためそれほど手は痺れない。これでどうだ？ショットガンなら風穴が開くだろうな・・・・・・

ところが、またしても命中した瞬間、キンという音が響いた。僕は自分の耳を疑った。

なっ！？ショットガンまで！ならどうすればいいんだ？あと角ゾンビに試していない武器といえばキャリコＭ１１０とボウイナイフのみ。しかし試さなくても結果は見えている。ナイフは１００％無理、キャリコＭ１１０はＭ９２Ｆと威力は大体、同じのため結果はＦ９２Ｆと同じだろう。

じゃあどうこの状況を対処する？突っ込んで行って角をへし折るか？それともナイフで角ゾンビの胴体を切り裂くか？ん？よく考えてみればいい方法、とは言えないが生き残る唯一の手段があるじゃないか。武器を使わず、再びキーピックの探索に戻る方法が。

その方法とは？？？？？逃げる。角ゾンビに背を向け、振り切るまで逃げるのだ。角ゾンビは早いとはいえ僕ほど早くはない。途中、ほかの化け物に出くわすかもしれないが、その時は強攻突破すればいい。

蹴るなり、レミントンで殴るなり、タックルとかで。とりあえず逃げろ。

僕が５０ｍを走った頃、再び角ゾンビが動き始めたようだ。背後でゴオゴオと走る音がする。ていうか結構速いな。このままだと追いつかれるかもしれない！壁を越えて逃げるか？

ようやく考えた時はもう手遅れだった。角ゾンビが僕の背中に角をザックリと・・・いや、セーフだ。背中に背負っていたレミントンが盾となって僕は前に弾き飛ばされただけだった。転ぶ寸前で手を突き、すぐさま立ち上がる。立ち上がってすぐ僕が最初に見たのは角ゾンビではなかった。

半開きのマンホール。血がフタの周りに染みついている。きっとこのマンホールをこじ開けて逃げようとしたのだろう。こんなものを見ている場合ではないがなぜか気を引かれた。

待てよ。このマンホールを利用すれば角ゾンビを倒せるかもしれない。作戦だ。

角ゾンビが突進して来る。僕はマンホールを手前にただ立ち尽くしていた。これも作戦の内だ。角ゾンビがついに僕の手前まで来た。そして作戦通りの展開となる。

所詮は食う事しか頭にない化け物。人間の知恵には敵わないのだ。まさかこんな単純な作戦に引っかかるとは。マンホールのすぐ後ろへ立ち、奴の攻撃を待つ。突っ込んできて僕との距離があとわずかに縮まった時、角ゾンビは下水道へと落ちる。角ゾンビは頭がいいと思っていたがどうやら違うようだ。

とにかくこれでキーピック探索に戻れる。それにしてもキーピックはどこだ?辺りを見渡すと英語で「鍵屋」と書かれた看板の建物が見えた。まずあの建物に行ってみるのがいいだろう。鍵屋ならあるかもしれない。

僕は鍵屋へと走った。

レッド病院へ

鍵屋は意外に遠かったらしく、走って5分かかった。額の汗を拭い、次に手についた汗を拭きとる。手に汗で濡れたままにしておくと銃を持って逃げる際、落とす場合がある。一般人ならこのくらい細かいことなど気にしないはずだ。だが、念のためだ。この先、新たに銃が手に入るとは限らない。

僕は店内を確認しつつＭ９２Ｆのマガジンを取り換えた。さらにレミントンＭ８７０にも弾を十分にセットして置いた。キャリコＭ１０は予備弾がないのでマガジンを取り換えることはできない。

店内に敵はいないようだ。これで安心して探索できる。その前にドアを探さないと。僕は銃を構えつつ、ドアを探した。すぐに見つかったものの、開けることはできない。なぜならそのドアは自動だからだ。洋服店のように電力が残っている店もあればそうでない店もある。鍵屋はその悪い方か。さて、どうやって侵入しよう？念のため裏口を確かめたが、カギがかかっていて開かない。僕はドアを蹴りつつ、しぶしぶ元の場所へ戻った。

よく見ると、っていうかこの自動ドアはガラス張り。ガラスを割れば侵入できるんじゃないか？蹴りで壊すことはできないかもしれないが、鈍器を使えば壊せる。一瞬、銃を使おう、と思ったがやめた。もし銃の一部が壊れたら大変なことになる。壊れた部分が悪ければ使えなくなるかもしれない。ガラスをもう一度、調べる。ふむふむ、見た目からしてこれは強化ガラスだな。さすが鍵屋だけのことはある。まあ、鍵屋以外でも強化ガラスを使っている店はたくさんあるが。それよりこの強化ガラス、どうやって壊そうか？瞬時に辺りを見渡すとゾンビ化せずに死んだ作業員の死体があった。いや、あれは作業員というよりごく普通の一般人だろう。手にはバーナーを持っている。あれを使えばガラスを溶かすことができるだろうか？僕

は死体からバーナーを取り上げた。細かく調べる。どうやらガスバーナーのようだ。・・・・・確かめる価値もない。結論はもう出ている。

「無理」。ガスバーナーで強化ガラスは溶かせない。溶かせたとしてもこのガスバーナーはもうほとんど燃料がないのであまり長くは持たないだろう。また、振出しに戻ったな。早く行かないとロンの身が危ない。あの体ではゾンビくらいなら何とかなるだろうが、ゾンビ犬やゾンビキャットなどには勝てないと思う。その前に感染疑惑が本当でゾンビ化してしまうかもしれない。

再び辺りを見渡す。するとまたもや死体があった。さっきの死体とは異なり、その死体の下にゾンビが、背中から噛みついたと思われるゾンビの死体が、いわばゾンビ2体にサンドイッチ状態にされ、死んでいる。その哀れな死体の近くに赤い筒がある。あれは・・・消火器か。おそらくあの消火器でゾンビを撃退したものの、後ろから襲われ、前かがみに倒れて死んだのだろう。それにしても消火器を武器として使うとは結構いい考えだ。とりあえず消火器を拾ってみるとしよう。

消火器を持ち上げ、調べる。遠くから見たため気が付かなかったが、消火器の赤い部分には血がたっぷりついていた。中身はまだ入っているようだ。見たところかなり年期があるようで古い。その証拠に少しほこりがついている。これでゾンビの首を曲げた時はどんな感じだろう?

・・・ってこの際、消火器は関係ない。火事の時ならば１００％重宝するが、強化ガラスを割るとなれば別だ。こいつで殴っても中々割れないだろう。また時間を無駄にしてしまった。

その時、脳裏にある考えが浮かんだ。まず言えることは消火器で強化ガラスを割ることができる!ちょっとした工夫をすれば。僕は消火器を持ち上げつつ、自動ドアに再びもどった。

消火器を自動ドアの前に置き、１０ｍほど後退する。そしてレミントンＭ８７０に持ち替えた。今からやることはＭ９２Ｆでは失敗する可能性があるためレミントンＭ８７０に変えた。僕は消火器に標準を確実に合わせていく。銃口が合わさったところで引き金を引いた。

銃弾が命中したと同時に消火器から消火剤が噴き出た。そう、破裂したのである。破裂した消火器は僕の方ではなく自動ドアの方に噴射した。すさまじい勢いの消火器が強化ガラスに直撃した。

次の瞬間、強化ガラスにヒビが入り、一瞬にして広がった。そして強化ガラスは粉々に。作戦は・・・成功だ！この作戦は必ずうまくいくとは限らなかった。消火器の厚さがよくなければ消火剤が漏れ、穴が広がるのみだっただろう。他にも一か八かに賭けたことはある。見た目こそ古い物のもしかしたら新しいやつで破裂しなかったかもしれない。さらに噴射した方向が悪ければ僕に直撃していた。消火器が直撃して死亡した、という事件も聞いたことがある。つまり命がけでもあったのだ。とにかく今は成功を喜ぼう。おっと、喜ぶのはあとにしないと。早く探索をしなければ。

僕は粒状に砕けた強化ガラスを踏みつつ、鍵屋に侵入した。

鍵屋に入るとゾンビが約２０体、少し遠くから向って来るのを感じた。案の定、ゾンビたちはうめき声を上げながら獲物を捕らえようとする。もちろん、獲物とはこの僕だ。だが、みすみす獲物になるわけがない。すぐさまＦ９２Ｆで１体ずつ頭を撃ちぬいた。バタッ、というゾンビが倒れる音の１秒後に銃声が響く。もうだいぶＭ９２Ｆは使い慣れた。これまではモデルガンを改造した反動が少なく比較的軽いハンドガンを使っていたため、実銃はここに来て初めてなのだ。ゾンビが残り３体ほどになった。僕は倒した２１体（実際は２４体いたようだ）と同じように頭を撃って倒した。これで鍵屋にはゾンビも何もいない。ようやく探索ができる。といってものんび

りしているとまた外から侵入してくる可能性がある。急いで探さないと。キーピックはどれだ?店内を見渡す。

たくさんあり過ぎて中々見つからない。鍵屋なので当然と言えば当然だ。ていうかそれ以前に鍵屋にキーピックなんてあるのか?キーピック、いわばピッキングは犯罪だよな?それが正式な店で売られているなんてあり得るだろうか?僕は一気に不安のどん底に落とされた。しかしまだあきらめてはいない。僕はカウンターを乗り越え、店の裏側を探索することにした。店の裏側には強盗対策のためか「H&KUSP」というハンドガンが置いてあった。9ミリ・パラベラム弾を使用する新世代のオートマチックピストル。日本の警察特殊部隊SATも使用している銃だ。使用する銃弾はM92Fと同じなのでッ拾っておくのがいいだろう。その近くには予備弾が数十発置いてある。僕はH&Kと予備弾をショルダーバッグにしまった。しかし肝心のキーピックは見つからない。やはりないのか?

ん?あれは・・・ただのガラスケースか。それにしてはおかしい。目立つように置いてあるため普通ならこんなところには置かないはずだが。中にはカギが入っているようだ。僕はガラスケースを開け、中のものを調べた。あっ!この形はもしかして!改めて確かめるとそれは目的のあれだった。

キーピック!よく見ると日本にあったものとはつくりが違う。何か特別な技術が加えられているのだろうか?とにかくこれでロンの元へ戻り、病院に侵入できる。早いとここんなところ出よう。

その時、ふとガラスケースに張ってあるシールに目が留まった。シールにはこう書いてある。

危険!触るな!

どういうことだ?これ、「危険!入るな!」のパクリだろ。そんな

ことはどうでもいい。この言葉が一体何を示しているのか、全く分からない。もしかしてこれは店長のので少しでも触れたら「俺は狂いだして触れたやつを殺す」という事か？だとしたらもう関係ない。

店長は死んだん・・・・・・

その時、突然、見覚えのある白い煙のようなものが湧き出した。しかし煙ではないことは分かっている。これは・・・霧。Ａ・Ｏ・Ｒミストという催眠ガスのようなもの。霧はガラスケースの調度、キーピックの置いてあった部分から出ていた。まずい！早くここを出ないとまた眠らされる！

僕はカウンターを乗り越え、出口をくぐった。

鍵屋を出てから１０分、ようやく公園に到着した。雨は未だにやまない。服はすっかりびしょ濡れだが、仕方がない。僕はロンの休んでいる屋根のある遊具に身を乗り出した。念のため、Ｍ９２Ｆを構えてだ。ゾンビ化している可能性もある。しかし心配することはなかった。遊具内を覗くとロンは立って待っていた。どうやら体力は回復したようだ。ロンは調度、アサルトライフルのマガジンを取り換えている。僕の姿を見てパッと顔を輝かせた。

「俊樹！無事でよかったぜ！」

「それはこっちのセリフだよ。その体じゃゾンビ以外には敵わないだろうからな」

「いや、俺が言いたいのは無事、キーピックを探して戻って来たことだけじゃない」

僕はそうだ、と言い、ショルダーバッグからキーピックを取り出した。それを見てロンが驚く。どうやら探し当てたことじゃなさそうだ。ロンの話によるとこのキーピックはこの島最高、いや、世界で最高の物らしい。技術際あれば簡単なカギだけではなく、少し難し

いカギも外せるそうだ。なるほど、それであそこまでして守っていたんだな。ということはあの鍵屋の店長はA・O・Rとグルなのか？いや、待てよ。洋服店はレッド病院の院長に指図されて実行した。このキーピックも実は院長のお気に入りで洋服店と同じことをレインというやつに言われたのかもしれない。それでしぶしぶ同様の防犯対策と共に設置した。これで説明が大体はつく。ロンがまた話し始めた。

「実はお前が行った後、奴の雄たけびが聞こえたんだ。知ってるだろ？あいつだよ」

「あいつって・・・ファングのことか？」

「ああ。それでファングがお前の後を追っかけて殺したのかもしれない・・・と。」

ファングはやはり再生能力を持っているのか？とにかく今は病院へ向かうのが先決だ。僕らは遊具を出て公園の裏門へと出た。僕がピッキングを始めようとすると俺の方が早い、とロンが変わってきた。すると言葉通り、5秒でカギが外れる。ロンが得意げに扉を開け、そのドアをくぐった。くぐった先はやはり病院だ。看板があり、そこには「レッド病院」を現す文字が英語で刻まれている。ここがあの院長が働いていた場所か・・・もしかしたら院長とA・O・Rの関係を掴めるかもしれない。その期待と共に僕らは入口へと走った。

レッド病院へ（後書き）

気がついている方もいらっしゃるかと思いますが、第２４～第２７話は割り込み投稿したものです。

生存者の遺言

病院に入った僕らを出迎えてくれたのは化け物たちだった。ウウッと呻きつつ、両腕を前に突き出しながらこちらへ向かって来る。その化け物とはもちろん、ゾンビだ。ゾンビたちは白衣のものもいればごく普通の服装のものもいる。一般人と医師、看護婦たちだ。数が３０体いる所からよほど僕たちの到着を待っていたのだろう。化け物たちの出迎えなんて必要ないのに。僕はそう心で文句を言いつつ、Ｍ９２Ｆを構えた。この時すでに横で負傷しているロンはアサルトライフルを連射していた。銃弾のほとんどがゾンビの胸や腹、足などに命中している。頭でないとゾンビは一撃で倒せないが、ロンはちゃんと頭を狙っているようだ。その証拠に今、５体のゾンビが床に転がっている。残りはあと２５体という所か。僕も早く攻撃しなければ。慣れた手つきで銃口をゾンビの額に合わせていく。狙いは３秒でつき、その瞬間、引き金を引く。額を撃たれたゾンビが床に倒れた。血が広がる。というか血に構っている場合ではない。僕はすぐさまもう１体の額を撃ちぬいた。ドサッと倒れる音は聞こえない。なぜならアサルトライフルの銃声でかき消されるからだ。

その時、突然アサルトライフルの銃声に何かの声が混じった。この声もゾンビと同様、聞きなれてるな。耳に劈く金切声。こいつはシャドースライサーの仕業に違いない。洋服店などの建物内にもいたのだからここにいてもおかしくはないだろう。よりによってゾンビの群れに混じって来るとは！シャドースライサーの存在によって戦況は一気に変わった。奴はハンドガンやアサルトライフルでは倒すまで時間がかかりすぎる。となるとやはりショットガンだろう。だが、その間のゾンビたちはどうする？僕は頭をフル回転させ、すぐさま戦略を頭に浮かばせた。背中のガンケースに収めてあるレミントンＭ８７０に持ち替えつつ、戦略のことをロンに耳打ちした。

「ロン、ゾンビに混じって少し手強い化け物がいる。そいつは僕が倒すからその間、迫り来るゾンビはお前に任せる。倒し次第、またゾンビに狙いを戻すからな」
「わかった。手早く始末しろよ」

ロンはうなずくと再びゾンビたちに集中した。が、その目は少しキョロキョロしている。僕の言った化け物が気になるのだろう。確かロンはシャドースライサーを見たことがなかったはずだ。僕はレミントンを構えながらシャドースライサーの数を確認した。声が重なっていたから1体だけではないはずだ。奴の影が見えてくる。ゾンビの群れの後ろに1匹、天井に2匹、受付の近くに1匹・・・合計は4体。ロンの言った通り早く倒さないとまずい。まず一番近く、天井にいる2匹を狙った。その動作に気が付いたらしく2匹がまた金切声を上げる。耳を塞ぎたい思いを我慢しながら引き金を引いた。それほど距離が遠くなかったため、2匹に銃弾が命中した。2匹が悲鳴を上げ、再び立ち上がる。距離は10mもない。四つ這いの体を必死に動かし（僕にはそう見える）突っ込んで来る。一瞬、狙いはロンか?と思ったが違った。2匹とも僕を狙いに絞ったようだ。僕は奴の急所に狙いを定めつつ、少し右に（受付）動く。ショットガンは接近戦だと強力な武器になるためわざと引き付けるのだ。

2匹との距離がわずか5mに縮まった。もちろん、これも作戦である。その時、2匹の内で僕から遠いシャドースライサーが突然、止まった。踏ん張っている。足に力を込めているようだ。まさかジャンプするのか?くそ!厄介なことになった!1匹の場合なら問題ない。しかし今、相手にしているのは2匹だ。しかも1匹は前進、もう1匹はジャンプの体制。この状態になってしまったら2匹同時に銃弾を命中させるしかない。それにはタイミングを合わせる必要がある。飛び上がる瞬間ともう1匹の距離が1m以下に縮まった時を

合わせる。もし失敗すれば確実に負傷するだろう。感染はしないものの肉をえぐられる可能性がある。どうにか成功させるしかない。

前進している奴との距離が２ｍになった。もう１匹は・・・飛び上がった！空を舞う奴が少しずつこちらへ進んで来る。着地まではあと２秒くらい。その時、ついに１匹との距離が１ｍ以下までに縮まった。僕はとっさに反応し、引き金を引いた。

反動にこらえながら目の前の状況を確認した。今の２匹の姿を見ながら耳に奴らの声が響く。断末魔の叫び声だ。２匹は床に潰れ、その体から大量の血が流れた。そう、僕は奴らに勝ったのだ。だが、まだ安心はできない。シャドースライサーはあと２匹いる。僕はすばやく辺りを見渡す。２匹はどこだ？ゾンビの群れの後ろにいた奴がいない。そういえばあともう１匹はどこだっけ？確かこの病院の受付側にいた・・・受付ってロンのいる位置から見て右だったよな？ん？あ、まずい！

次の瞬間、背中にすさまじい痛みが走った。その痛みで僕は呻き、思わずよろける。背中を深く切られたようだ。正体は言うまでもない、シャドースライサーだ！受付側にいるのを知っておきながら引き付けるとか僕はなんて馬鹿なことをしたんだ！とにかく今はこいつを何とかしないと。僕は痛みにこらえながら奴の方に振り返った。振り向いたと同時に引金を引く。

背後に奴はいたようだが、かわされた。というより僕のミスだろう。痛みで狙いが中々定まらない。奴が飛び上がった。位置が高い。どうやらこの一撃で僕を仕留めるつもりらしい。しかしこれが隙になるんだよな。僕は奴が飛び上がったと同時に中腰になった。奴の攻撃は不発となるだけでなく、致命的なミスとなる。頭上に来たところをレミントンで撃ち落とした。腹を貫かれたシャドースライサーは地面に落ちた途端、絶命した。むやみに飛び上がるとはよほどＩＱが低いのか？

残るはあと1体。再び辺りを見渡す。どこへ行ったんだ?僕はふと、ロンに目が留まった。その光景により一瞬で背筋が凍りついた。奴はロンの近くにいた。さらにあろうことか背後から襲っている。ロンはそれを必死に振り払おうともがいていた。その拍子に落としたのか、アサルトライフルが地面に転がっている。見たこともない化け物に襲われれば誰だって慌てるだろう。シャドースライサーが三角型に盛り上がった皮膚をロンの喉元に当てた。危ない!このままではやられてしまう!

奴よりの攻撃よりも僕の方が早かった。途端にレミントンを撃ったことで奴がロンの背中から落ちた。そして僕は立ち上がる間を与えず、腹を踏みつけ、引金を引く。返り血が服に降りかかる。気が付くと銃撃戦が再開していた。加勢しようとM92Fに持ち替えたが無駄だった。振り向いて状況を見るとすでにゾンビたちのうめき声は止んでいる。ロンがとっさに落としたアサルトライフルを拾い上げ、素早く一騎したのだろう。とりあえずこれで危機は脱出だ。急いで病院を抜けなければ。だが役に立つものがあるかもしれないので僕は探索することにした。その間、ロンは「治療薬を探して来る」といって長い廊下に消えた。消えたといっても廊下が薄暗いからそう見えたのかもしれない。ロンがいなくなってすぐ背中の傷を手当てした。病院なので当然、治療薬が豊富にある。受付を飛び越え、さらに奥へと侵入した。ここなら包帯、消毒液、といろいろあるだろう。手持ちに包帯ボックスがあるが、肝心の消毒液となるハーブは使い切ってしまった。包帯だけだとウイルス以外の菌が入る可能性がある。

建物だけあってレストランと同様、病院は血の海と化している。医師の死体や看護婦、一般人と転がっている。中でも一番、一般人が多い。おそらく病院は避難所となっていたに違いない。普通の死体だけではなく歩く死体、ゾンビもいた。その全てのゾンビを手早く

始末し、治療薬を探す。
その時、何かの音、いや誰かの声が聞こえた。ゾンビなどの化け物ではない。この声は明らかに人間だ。感を頼りに声の主を探す。1分ほど探し回ると突然、足を掴まれた。僕は驚きながらも足元を確認した。そこには血だらけの女性がいた。年齢はロンと同じくらいに見える。出血量はかなり多くどうやら死にかけらしい。ゾンビにやられたのか?僕は立膝になり女性の傷を確認した。どれどれ・・・とてもゾンビに噛まれたとは思えない。シャドースライサーでもなさそうだ。腹に5個の穴が開いている。これは・・・銃か?でも感染していないようだし・・・とにかく生きてるみたいだからダメ元で声をかけてみよう。

「あの、生きていたら返事してください」

そう言ってから30秒後、女性が咳き込み始めた。吐血を起こし、その血が靴に降りかかったが気にしない。血なんて何度も浴びている。この量に値しないほどの。吐血が治まったかと思うとまた女性は気絶した。予想通り死にかけみたいだな。もう放って置いた方がいいか?そう思い始めた矢先、女性がいきなり話し始めた。声はかなり震えている。

「誰かいるなら・・・よく聞いて・・・早くこの病院から・・・出るのよ・・・」

一瞬、僕に向けて話しているのかと思ったが違うようだ。さっきまでは気が付かなかったがこの女性は腹だけではなく目まで潰されている。潰れた目からは腹の傷に負けないほど大量に出血していた。普通なら死んでいるはずだ。喋らない方が楽なのに・・・そこまでして何を伝えたいのだ?それに早く病院から出ろってゾンビがいることの危険を知らせるために?女性は吐血しつつ、話を続けた。

「この病院の院長マイケル・クーパーが・・・化け物が・・・私たち避難民を・・・拳銃で・・・」
「院長が一体どうしたんですか？しっかりしてください」
助からないことは僕も本人もわかっている。しかし重要な事に違いないので最後まで言ってもらいたい。僕は女性を抱きかかえながら次の言葉を待った。
「マイケル院長が・・・軍と一緒に・・・私たちを・・・」
次の瞬間、女性の魂が抜けていくのを感じた。とうとう力尽きてしまった・・・だが、一部の情報は掴んだ。予想できることと言えば院長のマイケル・クーパーが避難民たちを銃殺した・・・という事だけだ。軍と一緒に、と言ったが軍も絡んでいるのか？マイケル院長と何らかのつながりが？とにかく早く傷の手当てをして病院の抜け道を探さないと。ロンもそろそろ戻っている頃だろう。僕はシャツを脱ぎ、背中の傷に消毒液をかけた。傷口が少し深いためかかなりしみる。消毒液がある程度乾いたところで包帯を傷口にかぶさるように巻いた。胸元あたり全てだ。手当てが終了したところで包帯ボックスと消毒液をショルダーバッグにしまい、シャツを着直した。それにしても背中にズキズキ来るな。
僕は哀れな避難民たちの亡骸に背を向け、ロンの歩いて行った廊下へ向かった。ロンの感染疑惑とマイケル院長の殺人疑惑・・・謎が新たに増えたな。

院長宛ての兵器

今はもう廃墟と化した、いや化け物たちの住みかとなった病院を進む。あれから数分経ったが、奴らとは出くわしていない。まあその方がありがたいが。廊下は蛍光灯が点いたり消えたりしていて薄暗い。視界に問題はないがやはり気になる。病院はまだ電力は失われていないようだがこの様子だと時期に無くなるだろう。その時が来たら懐中電灯を使わなければ。そうなる前に病院を抜けられるのを祈るばかりだ。廊下を進む中、いくつかの病室に通りかかった。病室は役に立つものがあるだろうか?とにかく探索してみよう。僕はドアに手を掛けた。スライド式のドアだ。しかしカギがかかっていて開かない。当然、こうなることは予想していた。化け物に狙われているのにカギを閉めないやつはいないからな。子供だってたぶん、わかるよ。となるとドアを破壊するしかないな。だが、僕の力では空きそうにない。体当たりしても蹴りを入れてもだ。ならば銃を使うか?Ｍ９２Ｆは無理かもしれないがレミントンＭ８７０ならうまくいく可能性がある。僕はレミントンＭ８７０を背につけてあるガンケースからとＲ出した。すぐさま構え、発砲の体制を取る。弾は常にセットしてあるので確かめる必要はない。狙いを定め、引き金を引いた。静かな廊下に銃声が鳴り響く。

瞬時に目をつぶったため、結果は目を開くまでわからない。発砲する時、恐怖心からか僕は目を無意識につぶってしまう。発砲に慣れるまではそう時間はかからないだろう。慣れるまで我慢するしかなさそうだ。発砲から2、3秒後ようやく目を開けた。その結果は僕の期待を完全に裏切っていた。ドアの中心に穴が一つ、開いている。銃弾がめり込んでできたものだ。僕はドアのカギを狙った。しかしその苦労も虚しく、銃弾は弾かれ、カギを壊せなかったようだ。見た目とは裏腹にかなり頑丈だと思える。病室のドアをこんなに頑丈

にする病院は初めてだ。そういえば院長は異常なほどがめつい奴だったような・・・その癖が病院の建設にも影響したのだろう。全く、レッド病院の院長には改めてあきれ返る。あきれている場合ではない。レミントンＭ８７０で無理なのだから銃以外の方法を考えなければ。何か使えるものはないか？廊下を見渡すが死体、血痕、放置された武器、あと消火器しかない。消火器で打ち破るには当然、無理だ。自分の持ち物から探してみるか。

Ｍ９２Ｆ、レミントンＭ８７０、キャリコＭ１１０、ボウイナイフ、バーナー
包帯箱、消毒液、キーピック、ハ？４個（マガジン）、シ？１５発分

ん？いいものがあるじゃないか。「キーピック」を使えばたぶん開くだろう。普通のキーピックならば机などの簡単なカギしか外せないが今持っているものは特殊だ。簡単なカギだけではなくまれに複雑なカギも外すことができる。この町の秘密技術で作られたらしい。とにかく試して見るのが早い。キーピックをカギ穴に差し込み、まず錆から落としていく。ジャリ、という音と共に錆がカギ穴から出てきた。結構、古くからあるようだ。そんなことを考えながらカギを外していく。数十分経った所でようやくカチッという音が響いた。どうやら成功したみたいだな。キーピックをカギ穴から抜き、再びショルダーバッグにしまう。こいつはこの先もどこかで役に立つはずだ。僕はＭ９２Ｆを手に持ち、低く構えた。そして開けたばかりのドアに手を再びかける。ドアをゆっくりと開いた。

部屋の探索はドアを開けてすぐ中止した。というよりもできなかった、という方が正しい。苦労して開けたドアの向こうには悪夢としか思えない、おぞましい光景が広がっていた。これは罠か？それとも映画とかゲームでよくあるようなお決まりか？だが、これは現実。変えようがない、現実なのだ。

1・2・3・・・数えられないよ。こんな数、相手にしたことない。奴らだ。僕が基本的奴らと呼ぶのは一種の化け物しかいない・・・ゾンビだ！病室に缶詰状態のゾンビたち。見たところおよそ１００体はいる！ていうか１００人も入るなんて病室広すぎだろ！ここにも院長の性格が影響している。この間約1秒。その1秒が経った瞬間、僕は反射的に廊下の方へ飛びのいた。ゾンビたちは次の瞬間、廊下へ倒れこみ、すぐさま起き上った。早く逃げた方が良いのは分かっている。しかし肝心の足が動かない。驚きで金縛りにあったようだ。立ち尽くす僕を最初に起き上ったゾンビが察知した。獲物だ！とでも言うかのように。それにつられたのか他のゾンビも僕を目に捕らえた。ゆっくりと呻きつつ、こっちに歩み寄って来る！まずい！早く逃げないと奴らの餌食になる！

その気持ちがカギとなったのか、突然、金縛りが解けた。改めて我に返った僕は途端に背を向け、廊下を走り出した。ゾンビたちは歩きつつも僕の後を追って来る。普通ならこのまま奴らから逃げきっていただろう。しかしこんな時に限って強力な悪運が働いた。遠くからさらに薄暗いので気が付かなかったが、僕の逃げた先は一方通行の階段しかなかったのだ！階段の上には部屋があると思うが、その部屋の出口は一つしかないだろう。つまり僕は・・・いや、まだ可能性はある。とにかく今は自分の命を優先して逃げなければ。階段を一気に駆け上がる。奴らとの距離はまだ５０ｍくらい余裕がある。部屋に逃げ込んで作戦を考える時間はそれくらいで十分だ。だが、慌てすぎたため、7段を踏みしめた瞬間、足を踏み外してしまった。派手に階段から落っこち、壁に激突した。頭がジーンとする。体中が痛い。思ったより怪我は大きそうだ。歯を食いしばり、痛みを堪えつつ、再び階段を駆け上がる。落ちたことでタイムロスしたが、奴らとの距離はそれほど変わりない。一つの唯一の逃げ場の入り口が見えてきた。スピードを上げた（階段から落ちない程度だ）段数はあと5段。

今度は幸運が働いたらしく、奇跡的にドアの鍵は開いていた。ドアを開け、中に逃げ込む。部屋に入ってすぐ、僕は部屋にある机や銅像などをドアの前に置き、バリケードを作った。あいにく金槌と釘もあったのでこれでドアに木の板を打ち付けた。とりあえずこれでしばらく時間が稼げるはずだ。ひとまず安心し、床に座り込み、呼吸を整える。額の汗を拭いながら部屋を見渡した。さっきの病室と同じくらい広く、机、本棚などが目立つ。机の上にはたくさんの紙が重ねられ、その中に医学関係の本も見えた。着いたときはここはなんだ?と思ったが、部屋の様子がわかると大体、予想はつく。ここはおそらく院長の部屋だろう。いや、院長の部屋に間違いない。何度も思うが、こういう場所はマイケル院長独特の性格が現れている。それにしても院長の秘密がずっと気になっている。その秘密の手がかりがこの部屋にあるかもしれない。何にせよ、調べる価値は十分にある。ドアに群がっているゾンビたちを撃退させる作戦を考えなきゃいけないし。僕は左足の脛を抑えつつ、立ち上がった。

まず初めに本棚から調べた。やはり病院だけあって医学関係の本が五万と並べられている。僕にはとても読めない、理解できない内容だ。だが、理解できるものも中にはあった。それはあまり口には出したくない内容の本。父さんや叔父さんがよく隠していた本。こんなこと言うが実は自身も少し興味がある本・・・興味を持ち始めたのは８０%は父さんと叔父さんのせいだよ・・・その本は１８禁の本、エ〇本だ・・・どれどれ、少しだけ読んでみるか・・・っと読んでいる場合じゃない・・・!僕はこんな本を隠していたマイケル院長を恨みながら（半分は笑いだ）本を元に戻した。その時、僕の足元に何かの紙がパラリと落ちた。今戻した本からだ。何だろう?と思いながら拾い上げる。それが何かわかった時今度は声を出して笑った。封筒・・・中には１万円札が１０枚入っている!これは１

０００％へそくりだ！馬鹿すぎるよマイケル院長。何でこの本に隠すのかがわからない。この本の存在がバレてしかも説教途中にその本から封筒が、何てなったら・・・想像するだけで笑いのツボに来る！マイケル院長、ひょっとしてこういう日常的なことは苦手なのか？僕はこっそり封筒をポケットにしまった。

散々、笑わせてもらった後すぐさま探索に戻った。次は院長の机だ。見たところ最大の手がかりがあると思える。何といっても院長が使っている机だからな。僕は机の上を散らかしながら手がかりを探した。だが、これと言ったものはない。病院に関するコピーでいっぱいだ。ひょっとしてマイケル院長はごく普通の院長なのか？エ〇本隠しているしへそくりも・・・いや、違う。洋服店や鍵屋で見たではないか。それに生存者の女性の遺言・・・遺言であんなことを言う人は普通、いない。敵を取ってくれ、とでも訴えていたみたいだった。やはりマイケル院長には何かしら、秘密があるに違いない。念のため机の下も覗いた。すると何か四角い物があった。それを机の下から引っ張り出し、確かめる。金属の箱だ。玉手箱の金属板、と考えるのが良いだろう。フタを開ける。中には驚くべきものが入っていた。

Ｍ７９グレネードランチャー。大口径の散弾銃のような外観で、４０？４６ｍｍの榴弾、対人榴弾、発煙弾、散弾、フレシェット弾、焼夷弾などを射撃できる。高低圧理論応用の専用弾のため、反動が抑えられ肩付けでの発射が可能である。

なぜこんなものが院長の部屋に？その答えは箱の中にあった一つの紙からわかった。紙には発行が軍事基地、宛てがレッド病院、と書かれている。このＭ７９グレネードランチャーは軍事基地から送られたようだ。レッド病院、いや、マイケル・クーパーは軍事基地と何らかの関わりがある・・・手がかりが見つかれば見つかるほど謎が深まるばかりだ。だが、この箱が見つかったことで脱出の糸口が

できた。M79グレネードランチャーならゾンビたちを楽に撃退できるだろう。閉め所でグレネードランチャーを撃つと自分も負傷する可能性があるがこの部屋は広く天井も異常に高いため問題ない。さあ、早いところ脱出しなければ。僕は作ったバリケードを壊すべくドアへ走った。

その時、突然、足元が揺れた。地震ではなさそうだ。と次の瞬間、僕の直ぐ近くの床が破壊された！一体、何なんだ！？

アカイミチ

揺れはどんどん大きくなっている・・・！その度に部屋の床が外され、足場が狭くなっていく。揺れの原因は大体わかる。化け物だ。ゾンビやシャドースライサー、いやファングよりも悍ましい敵かもしれない。姿はどんなのだろう?ただはっきり言えることは逃げなければ死ぬ、という事だ。だが、僕は揺れに足を取られ、行く手を阻まれていた。この状態では武器を思うように扱えないだろう。頼みの綱と言えば今、手に持っている約3キロほどあるM79グレネードランチャーだ。予備のグレネードも手に持っている。これも金属の箱に3個、入っていた。つまり僕に与えられた攻撃のチャンスは4回。裏を返せばたったの4回しかない。それでも撃退できなかったらここですべてが終わってしまうかもしれない。とにかく今はやられることより襲いかかろうとしている化け物に集中しなければ。3個のグレネード弾をしまい、M79を両手で持つ。むやみに動き回ると危険が多いためチャンスを待って警戒するのが一番適切だ。姿を見せた瞬間、グレネードを体に命中させてやればいい。

敵が姿を見せないまま1分が経過した。心臓が壊れた時計の針のように激しく動く。汗もすでに体中から湧き出た。気温はそれほど暑くないが、これも緊張のせいだろう。汗を片手で拭う中、ようやく揺れが治まった。いなくなったのか?いや、そう簡単に化け物が獲物を逃がすはずがない。Nウイルスは確か感染者の嗅覚・聴覚を急激にアップさせるからな。そういえばNウイルスって何を略したのだろう?その時、ついに奴が僕に狙いを定めた。床が盛り上がる。僕の足元の床だ。すかさず反応し、飛びのいた。その床が破壊され、崩れる。一瞬、姿が見えた。赤い何かが。例えで言うと人間の内臓か。その人間の内臓のようなものが針のように床を壊していった。内臓を体に持つ化け物・・・考えただけで吐き気がこみ上げてくる。

だが、もちろん吐いている暇などない。奴は僕に狙いを絞ったのだ。すぐにまた足元が揺れだす。予想通り避けてから5秒以下で襲撃を受けた。また避ける。途端にM79で攻撃しようとしたが、間に合わなかった。早すぎる!あの攻撃を真正面から仕掛けられたらひとたまりもない。もしかしたらその時がもう間近に迫っているのか?

「死」が!

逃げ場はもうほとんどない。床の大半が抜けてしまった。このまま避けつつ、チャンスを待っていたらあげくの果てに追い詰められてしまう。新たな逃げ道を探さないと。とはいっても逃げ道と言えばゾンビたちが蠢く階段しかない。当然、奴らを倒していくことになる。しかしいくらM79を使っても道を開けることは不可能と言える。何といってもゾンビの数は3ケタの単位だ。策略を考え始めたのを隙と見たのか奴がまた攻撃してきた。素早く身をかわす???だが、今度はそううまくいかなかった。敵は本気になったらしく今まで以上に攻撃が早い!その攻撃に体がついていけず、ついに奴の攻撃が僕にヒットした。左足の膝を深く切りつけられる。血が流れ出すと同時にすさまじい痛みが体中を走った。あまりの痛みに床に倒れた。まずい!この状況で倒れたら奴の思うつぼになる!早く立たないと・・・右足に力を必死に込め、床に手を突きながらなんとか立ち上がった。途端にすさまじい痛みがまた襲ってきた。こんなんじゃ戦えない。やられる!2回目の痛みでM79が手から離れた。

左足膝の傷に手を添え、出血を止めようと試みるが無駄だった。立っているのに必死で警戒もできない。おまけに意識も朦朧としてきた。視界がかすむ。この体ではあと数分しか耐えられないだろう。これで終わりなのか?その時、また足元の床が揺れだした。奴の攻撃の前兆だ。だが、避けようにも体が思うように動かない。が、何とか避けた。いや避けたというより倒れこんだというべきか。奴の

攻撃は避けられたが再び倒れてしまった。悪運はまだ続く。倒れこんで数秒後、突然、床が派手に音を立てて崩れた。そう、倒れこんだ床はすでに奴の攻撃で破壊されていたのだ。落ちていく。周りは真っ暗で何も見えない。落下までそれほど時間はかからず、すぐに地へと着いた。２ｍくらい落ちてきたようだが幸い、骨は折らなかった。落下直後のバキッという音からすると銃の何かが下敷きになったらしい。とにかく助かった理由など今はどうでもいい。確認しなければならないことはいくつかある。ここはどこだ?奴はいるのか?戦えるか?武器は全て壊れていないか?

よろめきながらも立ち上がりすぐさま周りを確認する。明るさは病院の廊下と同じくらいの薄暗さだ。天井に電灯がついている。見たところかなり古い。部屋は石造りでできていて地面は砂で覆われている。部屋の広さは大体、院長の部屋と同じくらいだ。ここがどこかを特定しつつ、敵がいないか確認する。奴が襲ってきた場所はおそらくここだろう。ここは隠し部屋か何かか?自然にできたとは思えない。何やら実験器具のようなものがあるし。くまなく見渡したが奴はいなかった。いや、どこかに隠れているに違いない。とりあえず傷の手当をするくらいの時間はありそうだ。僕はショルダーバッグを開け、中を確認した。キャリコＭ１１０が無惨に壊れてしまっている。これが下敷きになったのだろうか?他のものは無傷で済んだようだ。壊れたキャリコＭ１１０を投げ捨て消毒液と包帯箱を取り出した。消毒液を膝の傷に垂らし、包帯で巻いていく。適切とは言えないが今はこうするしかない。手当てが完了したところでまた警戒態勢をとる。足は相変わらず痛むが耐えるしかない。

レミントンＭ８７０を構え、再び辺りを見渡す。そういえばなぜ素人の僕が実銃を十分に扱えるのだろう?確か小６の時から扱えたような・・・まあ、逆に扱えることに感謝するべきか。僕はよろめきながら部屋を歩き出した。心拍に混じって何やら不気味な声が響く。

気にせずあるものの探索を続ける。あるものとはさっき落としてしまったＭ７９だ。レミントンＭ８７０では歯が立たないかもしれないので念のため取り戻しておいた方がいい。Ｍ７９は１分足らずで手に戻った。落下時にそう遠くない所に落ちたのだろう。レミントンＭ８７０をしまい、再びＭ７９を構える。ここもそれほど閉所ではないのでＭ７９の使用には心配ない。警戒に戻ろうとしたがふとあるものに目が留まった。それは無数ある中の一つの試験管だ。試験管には赤紫色の奇妙な液体が入っており「Ｎ」と書かれたシールが貼られている。すぐさま手に取り、何なのか調べた。大体、予想はついた。ウイルスだ。そう、僕の人生をめちゃくちゃにしたあの悪夢の兵器。Ｎウイルスに間違いない！

その時、僕の耳に何かの声が響いた。呪文のようにも聞こえる。ただ言えることは明らかに人間ではないという事だ。あか・・・あか・・・と言っているような・・・赤って一体なんだ?その声に混じってジャリ、ジャリという砂を踏みしめる音が耳に届いた。何かが、化け物が近づいて来ている!音の鳴る方向に全神経を集中させる。だいぶ距離は縮まったようだが薄暗さのせいではっきりと見えない。その影は何だか人間に見えてきた・・・声の正体もだんだん掴めてきた。あかい・・・あかい・・・と今では聞こえる。「あかい」って「赤井」のつく名字の人か?考えるさなか、ついに奴の姿を捕らえた。その姿は・・・あまり不気味じゃないな。それもそのはず、今目の前にいる奴は人間にしか見えない。見るからに男性で髪がない。体つきはがっしりしていて白衣を着ている。顔は死んだように青白い。この人、どこかで見たような・・・院長の部屋に院長自身の写真があった。その容姿は目の前の人と似ても似つかない。この人、まさかマイケル院長か!?でもなぜこんなところに?とりあえず気がふれているようだから落ち着かせるか。僕は銃を下げ、口を開いた。

「あんた、マイケル院長だよな？まあとりあえず落ち着きたまえ」

おかしな口調になってしまったが、会話に影響はなかった。いや、マイケル院長が返してきたと思われる言葉は全く違うものだった。まるで独り言のような感じだ。

「あかいみ・・・アカイミチ！」

そういった次の瞬間、マイケル院長が突然、悲鳴を上げた。その開いた口からは僕を襲ったあの内臓のようなものが！それは僕に反応する間も与えず、襲いかかって来た！内臓のようなものが首の巻き付く。いや、これは間違えなく人間の内臓だ！この感触はゾンビを倒した時、たまに遭遇したことがある。その内臓はロープのように首を絞めつけ、僕の手からＭ７９を落とした。あまりの苦しさに半分パニックになる。一体、何をするつもりだ？だが、すぐに僕は正気に戻り攻撃に移った。ボウイナイフを腰の鞘から引き抜き、勢いよく内臓に切りつける。内臓は切断され、マイケル院長はまた悲鳴を上げた。僕は首に残った内臓を投げ捨て、瞬時にレミントンＭ８７０で奴を狙い、引き金を引く。マイケル院長も再び攻撃に入ったが僕の方が早かった。銃弾が奴の喉を貫ら抜いた。普通だったら大量出血が起きるだろう。だが、予想は外れた。マイケル院長の喉からは血ではなく口同様、内臓が飛び出してきた。マイケル院長、自らが化け物になったみたいだな。「アカイミチ」などとつぶやく化け物に。アカイミチって内臓の事なのか？奴は・・・内臓を欲しがっている？

レミントンＭ８７０は効果がなかったらしく奴は怯まなかった。怯ませるどころか逆効果でパワーアップさせてしまった、という気がする。レミントンＭ８７０は効かない、ならばＭ７９を使うしか方法はないだろう。僕はレミントンＭ８７０をひとまず投げ捨てＭ７

９の位置を確認した。そう遠くはないが奴より早く動けるか？可能性は低くてもやるしかない。ボウイナイフ片手にＭ７９に向かって飛びのいた。途端に奴も動き出す。しかしやはり間に合わなかった。内臓に足を取られ、派手に地面に顔面を強打する。痛みを無視し、すぐさまボウイナイフで内臓を切り落とした。奴が悲鳴を上げている間、ようやくＭ７９を手に取り戻した。立膝をつき構える。グレネードは落下時に落ちてしまったためセットし直した。衝撃に備えつつ、引き金に手を掛ける。その時、ちょうど奴が大勢を整え直した。これこそまさにチャンスの時だ！狙いを頭に定め、引き金を引く！発砲音が響き、体に衝撃が走った。何とか衝撃に耐え抜き、倒れずに済んだ。グレネードは・・・うまく命中したようだ。奴の上半身が吹っ飛ぶ。ざまーみな？？？？？？あれ？こんなこと前にも言った気がするな。

飛び降り

手、首、骨など上半身の体が四方八方に飛び散る。無論、これはグレネード弾の命中によってだ。今、すぐ近くで僕を始末しようとしていた赤い化け物は悲鳴を上げただろうか？いや、それはない。僕の攻撃はほんの一瞬の出来事だ。その一瞬で赤い化け物、マイケル院長は上半身を失った。普通の化け物ならばこれで倒れる。だが、油断は出来なかった。ボロボロになった奴の上半身から内臓のようなヒモが襲い掛かってくるかもしれないからだ。今、僕はＭ７９グレネードランチャーに新たな砲弾を詰めている。扱いはそれほど慣れていないため時間が少々かかる。しかし一発目を撃った時、衝撃に耐え抜いたため時間は少し余裕があるだろう。といっても奴の方が早く動く可能性の方が大だ。先制を取らなければ手遅れになる恐れも。約５秒でようやく砲弾を詰め終えた。すぐさま奴に狙いを定める。敵の姿は予想通り、内臓が無数、飛び出していた。だが、まだ攻撃はできないと見える。チャンスだ！正当な姿勢を保ったところでＭ７９の引き金を引いた。途端に衝撃が走る。さすがに二度目は耐えきれず、腰を抜かしてしまった。

暗く静かな地下室に爆音が鳴り響いた。それと同時にグレネード弾が内臓の中心で弾けた。奴へのダメージは内臓だけでは留まらず、下半身まで広がった。大量の血が飛び散り、肉片も分かれる。これだけの傷を負えばさすがに倒れるはずだ。何といっても急所に打ち当てたのだから。

しかし奴の恐ろしさは僕の予想をはるかに超えていたようだ。屍同然の下半身が地面に倒れたと同時に何かが爆風の煙の中を飛び出す。あれは一体なんだ？肉片だろうか？いや、あれほど大きな肉片はない。あの形、内臓にも見えなくはない・・・もしかして内臓のようなヒモか！？

その塊が砂の地面に落下した。へばりついたようにも見える。次の瞬間、唖然とする光景が視野に広がった。なんと塊が砂に埋まっていくではないか！大きな蟻地獄があるなら説明はつくがそんなものはどこにもない。塊は動いていた。そして自ら砂へと潜って行ったのだ！一体、何をするつもりだろう？

素早く新たな砲弾を詰める。砲弾はあと全部で2発しかない。慎重に使わないとあっという間に使い切ってしまう。強力な武器としてレミントンＭ８７０があるが、油断はできない。

砲弾を詰め終えて数秒後、突然、地面が揺れ始めた。それと同時に砂埃が舞い上がった。途端に地面の砂が渦を巻く。何が起きている！？原因はさっき潜って行った塊と見て間違いない。奴が現れるのだ。どこから襲って来るかは大体、予想がつく。おそらく渦の中心からだろう。

その時、ついに奴が姿を現した。渦の中心から何かが飛び出す。姿は巨大なミミズに似ている。体は赤く、あの内臓のようだ・・・！もしやこいつはマイケル院長を化け物に変えた源の正体か？だとしたらすぐにでも襲って来る。目にも止まらぬ速さでだ。襲われた瞬間、僕はこの世から消え去るだろう。早く行動を起こさないと！だが、揺れに足を取られ、Ｍ７９を使える状態ではない。そうこうしているうちに化け物が雄たけびを上げた。鼓膜が破れるかと思うほどうるさい。この行動は化け物によく見られる攻撃前の兆候だ。早く、何とかしないとやられる！

奴が無数の内の内臓の一つで襲いかかって来た。こうなったらもうＭ７９には頼れない。すかさず反応し、僕は鞘に収めてあったボウイナイフを投げつけた。ナイフが体の先端に突き刺さる。奴が2度目の悲鳴を上げた。どうやら効いたらしい。と次の瞬間、噴き出た血を砂に染み込ませながら砂へと潜って行った。揺れが一瞬引く。奴は砂の奥深くに逃げたようだ。

その間、僕はＭ７９グレネードランチャーからＭ９２Ｆハンドガンに持ち替えた。ボウイナイフが奴に通用したという事は先端さえ狙えば良い、ということになる。それにこの揺れの中では片手でも使えるＭ９２Ｆの方が有利だ。Ｍ９２ＦはＭ７９グレネードランチャーよりはるかに使い慣れているし。さらにＭ７９もレミントンＭ８７０も弾薬が残り少ない、というのも理由の一つだ。

再び地面が揺れ始める。奴がまた攻撃する前兆だ。足元の砂が渦を巻き始める。ここから飛び出して来るつもりか。とっさに僕は身をかわし、Ｍ９２Ｆを構え、発砲体制に入った。

予想通りの場所から奴が姿を現す。僕は奴より早く攻撃に入った。先端に狙いを定め、引き金を引く。銃弾は見事に急所へと命中した。赤い、人間としか思えない血が体に降りかかる。奴がまた怯み、先端を砂に潜らせ、逃走を露わにする。その間、Ｍ９２Ｆをたえず発砲し、奴の体に銃弾を打ち込んだ。先端ではないが効果はあるだろう。顔についた大量の血と砂埃を掃いつつ、Ｍ９２Ｆのマガジンを取り換える。すでに１５発の銃弾を使ってしまったが、戦闘に支障はない。

数秒後、また地面が揺れだした。そして足元の砂が渦を巻き始める。何て芸のない奴なんだろう。芸のない、というより頭が悪すぎる。まあこんな悍ましい化け物に脳があるとは思えないけど。

渦から身をかわした瞬間、奴が姿を現した。さっきの攻撃よりも素早さが増している。なるほど、本能的に僕を危険だと判断したのか。だが、十分にかわせるスピードということに変わりはない。同じく先端に銃弾を５発撃ちこんだ。と逃走も同様、先端から砂へ潜って行った。

潜っていく奴の体に銃弾を撃ち込んでいく中、ふと僕はこんなことを思った。今の状況はどう見ても僕の方が優勢だ。相手の攻撃も避けやすく、攻撃にも余裕がある。余裕がある・・・ということは時

間が多くあるということになるな。ならばＭ７９グレネードランチャーを撃つ時間も十分にある。わざわざＭ９２Ｆを使わなくてもいい。Ｍ７９が一発でも当たればそこで勝負がつくだろう。

すぐさま僕はＭ９２ＦからＭ７９に持ち替えた。３度目の奴の攻撃の兆候が伝わって来る。足元の渦から飛びのき、Ｍ７９を構えた。渦から奴が姿を現す。その姿は元の赤い体に負けないほど血で染まり返っている。衝撃に備えつつ、先端へとグレネード弾を発射した。グレネード弾が見事、奴の体の先端で弾けた。３度目の爆音が響き渡ったと同時に奴の悲鳴が入り混じった。次の瞬間、かつてないほどの血が降りかかり、ドシンと巨体が倒れる音が響いた。そう、ついに奴が倒れたのだ。砂に血が染み込み、絶命する。ようやく奴との戦いが終わった。

僕は息をふーと吐きだし、緊張をほぐした。Ｍ７９の最後の砲弾をセットし、Ｍ９２Ｆに持ち替える。そして足を引きずりながら赤い化け物に襲われる直前までいた場所へ歩き出した。左足の傷は浅かったようだが、歩くには不便だ。だが、出血は止まったため、何とか歩ける。

元の場所へ戻ってすぐ僕は赤紫色の液体が入った試験管をショルダーバッグにしまった。脱出できた時、証拠品として持ち帰るためだ。これがきっかけとなれば影の男の居場所がつかめるかもしれない。

もう一つ、緑色の液体もあったのでこれも手に入れた。

次に壁を調べる。この地下室は特別なようなので隠し階段か何かがあるはずだ。それは数分もかからず見つかった。階段や扉ではなく、ハシゴでかなり古びている。出口までは相当の高さがある。といっても５ｍくらいなので僕でも上りきれるだろう。ハシゴに手、足と順番にかけ、上る。

数分かけてようやく頂上まで登りきった。出口らしきフタが見える。マンホールではないのでこちらからでも開けられる。腕に力を込め、鋼鉄製のフタを勢いよく押す。

しかしフタは上がらなかった。何か上に置物があるのか？そうだ、ここはマイケル院長にとって重大な研究室なのだ。それくらい厳重に管理にしているに違いない。僕は絶望、という感情に包まれた。そう思い始めた次の瞬間、フタが勢いよく持ち上がった。途端に外の空気と水が僕の顔に降りかかった。ここは・・・外？この水、雨水じゃないのか？どうやら病院の外に抜けられたらしい。マンホールから顔を出すと一人の青年が立っていた。一瞬、ゾンビかと思ったが、振り向かれた途端、僕の考えは一変した。その青年が腕を抑えつつ、嬉しそうに僕を呼ぶ。

「俊樹！俊樹じゃないか！」

僕はマンホールからはい出て服の汚れを落としつつ、答えた。無論、こっちも嬉しくなる。

「やあ、ロン。まだ病院内でさまよっているかと思ったよ」

ロンだ！病院で別れたきり、彼の安全は保障できなかった。相変わらず、腕の傷は酷いが病院内よりは元気と見える。おそらく出口のフタが開かなかったのはロンがそこで待っていたからだろう。それにしてもこれほど嬉しい偶然は予想していなかった。

「ちょうどあきらめかけた所だった。待ち合わせ場所に戻って数分経ってもいないのだからな。まあ何にしても良かったよ。その様子だと化け物と一線を終えた、という感じだが」

「その通りだよ。赤い内臓の塊と戦ったんだ。そんなことよりこれを見てくれないか」

僕はショルダーバッグから赤紫色の液体と緑色の液体の入った二つの試験管を取り出した。

「僕の予想だとこの赤紫色はＮウイルスで緑色はそれを直す方だと思うんだけど。分からないけど使ってみる価値はある。ロンが決めてくれ」

「俺もそんな気がする。だが、もしそれでゾンビより悍ましい化け物になったら・・・しかしこのままだったら確実にゾンビになるな。よし、一か八かの賭けでやって見る」
僕は緑色の方の試験管をロンに渡した。ロンはその液体を空の注射器に入れ、血液中へと注入した。これが一か八になるか・・・あとは時の流れに任せるしかない。
「さてと突っ立ってても時間の無駄だ。俊樹、早く軍事基地に入るぞ」
「軍事基地？まさかこの先が？」
「そうだ。この橋を渡ればな」
言われた方向を見ると確かに鉄の橋と何かの施設が立っていた。どうやら病院を抜けると山に行けるらしい。軍事基地は山に作られていたのか。さらに海とも繋がっているようだ。
橋を渡る。橋幅は結構広くて落ちることはまずないだろう。この橋はレッド病院が造ったのか？橋の下は綺麗でが流れが少し急な川がある。
早くも半分渡りきった。この先に僕の記憶の正体が刻まれている――――――

その時、聞き慣れた雄たけびが響いた。その声はそう遠くはない。この声は・・・獣！また雄たけびが聞こえた。今度はどこからだ？
ロンが突然、悲鳴を上げた。とっさに僕は振り向き確認する。
・・・・・ファング！！！まさか生きていたとは！くそ、こんなところまでも！僕はＭ７９を構えた。最後の一発だが、おそらくこれで倒せるだろう。ロンに伏せろ、と声をかけ、狙いを定めた。
だが、撃つ間もなく、ファングが早く動いた。狙いはロンではなく僕だ。奴が目にも止まらぬ速さで飛び上がり、襲ってきた。Ｍ７９を弾かれる。とっさにボウイナイフを投げようとしたが、すぐに気が付いた。ボウイナイフはない。あの時、無くしてしまった。ならばＭ９２Ｆで・・・

次の瞬間、僕は無惨にもファングに攻撃を許してしまった。左肩を殴られ、激痛が走る。これだけならまだよかった。しかしその衝撃に耐えきれず、バランスを大きく崩したため、吹き飛ばされた。飛ばされた先は――――川だ。

宙を舞い、あっという間に僕は水に飲みこまれた。

「伏せろ！」

俊樹の声が響き渡った。攻撃の合図に違いない。現に彼は俺の武器よりも遥かに強力なグレネードランチャーを構えている。俺はホルスターからグロック２６を手に取り、とっさに伏せようとした。今、俺の背後には化け物がいる。グレネードランチャーの砲弾が命中すれば倒せて、また俊樹の手柄になったに違いない。しかしまさか自分が倒すことになるとは…思いもしなかった。

突然、伏せかけた俺の横を何かが走り抜けた。ものすごいスピードだ。ファングしかいない。だが、その攻撃も俊樹の攻撃で水の泡となる。次の瞬間、ガンッ、という鈍い音が響いた。何だろう？とっさに立ち上がり状況を確認した。橋の淵に何かが落ちている。あれは…グレネードランチャー！？俊樹が持っていたのと同じものだ。すぐさま視線を変え、攻撃態勢に入った。ファングが俊樹を襲っている。おそらく先手を取られたのだろう。あの状態では奴の攻撃を許してしまう。助けなければ！

だが、遅かった。ファングの拳が命中し、俊樹が弾かれる。さらに悪運は続いた。弾かれた先は…下水路！一瞬の内に俊樹は俺の前から姿を消してしまった。

俺はショックと驚きのあまり奴が見えなかった。奴はその隙を見逃さず、突っ込んできた！一メートルまで縮まったところで間一髪、反応し、奴の攻撃をかわした。頭上でブン、という空振りの音がする。俺は奴と同じように敵の隙を見逃さなかった。握っていたグロック２６で奴の頭に発砲した。銃弾は見事に命中し、敵を絶叫させた。その隙に俺はファングから離れ、空になったマガジンを取り換えた。いや、取り換える必要は無かったかもしれない。ファングに

とって頭は最大の急所だ。ハンドガンの銃弾でも一発命中させれば奴は倒れる。つまり、俺の勝ちだ。大量の血が吹きだし、奴が膝をつく――――――と次の瞬間、なんとファングが立ち上がった。なぜ！？弱点を告白したとでも…

休む間もなく、奴はまた突っ込んできた！今度はいち早く避けようと行動を移したが、それが災いとなった。動きを読まれたらしい。俺は片腕で首を掴まれた。必死にもがくが振りほどけそうにない。奴が腕を上げた。投げ飛ばすつもりか？今度こそやられる！奴が手を離した。

運は俺に味方した。橋の淵側に投げられはしたが、落ちずに済んだ。衝撃で体が痛むが、骨は折れていない。しかし何にせよ、ファングを倒さなければ命はないだろう。奴がゆっくりこちらへ振り返る。何か使えるものはないか？武器はグロック２６しかない。これで倒すのは不可能だろう。

その時、俺は何かを踏みつけた。とっさに足元を確認する。これは…グレネードランチャー！俊樹の唯一の落し物だ。砲弾は２発…これなら倒せるかもしれない。

その瞬間、再び奴が攻撃態勢に入った。今、俺は調度、グレネードランチャーに手を掛けたところだ。急いで拾い上げ、砲弾を詰める。どうやら落ちたはずみで砲弾が抜けたらしい。砲弾を詰め終えた時、ついにファングが走り出した！先手を取れるか？やるしかない。俺は奴の頭に狙いを定めた。

すさまじい衝撃が腕に走った。一瞬、倒れそうになる。何と言ってもグレネードランチャーを暑かったのはこれが生まれて初めてだ。というか衝撃が走ったということは先手を取ったのか？ファングの生死を確認する。むき出しの脳みそが吹っ飛んでしまっている。さすがにもう追って来れないだろう。

俺はもう一個の砲弾をグレネードランチャーに詰め、背のホルスターにしまった。そしてグロッグ２６を手に持ち、橋の上から下水路を見下ろす。ここからはどうやっても下りれそうにない。別の場所から俊樹を助け出すしかなさそうだ。ただし、生きていればの話だが…俺は一人、軍事基地への入口へ向かった。

軍事基地の入り口で俺は持ち物を確認した。

グロック２６ハンドガン、Ｍ７９グレネードランチャー、ハンティングナイフ（狩猟者の死体から入手）カードキー（軍兵の死体から入手）消毒液、包帯、ハ？４０、アサ？９０

軍事基地の入り口は鋼鉄の門で仕切られているようだ。取っ手がついていない所を見るとどうやらカードキー式らしい。カードスロットには「Ａ・Ｏ・Ｒ」と書かれている。ここもＡ・Ｏ・Ｒと関係があるのか。俺はサイドパックからカードキーを取り出した。病院内の軍兵の死体から手に入れたものだ。おそらくあの軍兵は軍事基地へ戻る途中だったのかもしれない。カードキーを差し込む。

ブザーがなり、門が開き始めた。念のため、俺は銃を構えて門の開放を待った。予想は当たった。門が開いた瞬間、数十体のゾンビが飛び出して来たのだ！これだけの数はさすがに倒せそうもない。とはいっても逃げ場はない。俺はとっさに辺りを見渡し、軍兵の死体の近くにあったアサルトライフルを拾い上げた。ＡＮアバカン…装弾数は調度、３０発入っている。手持ちの弾も使えば何とか持つだろう。銃弾を連射し、ゾンビたちを蹴散らす。全体を葬るのに時間はそれほど掛からなかった。ゾンビの死体を避けつつ、軍事基地へ足を踏み入れた。

まず俺が付いたのは飛行場だった。戦闘機などがある。しかしどれ

も錆びていて使い物にならない。Ｎウイルスの影響だ。仮に使えたとしても俺には操縦できないため、ここに居る必要はない。先に進んだ。弾薬庫に着いたものの、開けることは出来なかった。よほど重要なのだろう。とりあえず目的地は決まっている。下水道だ。下水道なら俊樹が流れ着いている可能性がある。下水道の入り口を探すさなか、俺は食料庫にたどり着いた。ここは…開いている。食料確保もして置いた方が良いだろう。俺はＡＮアバカンを構えつつ、中へ入った。すると突然、声が聞こえた。

「……誰？」

人だ！人がいる！声の高さからして女性の声だ。それにしても何というか絶望に満ちた声…この状況だ。仕方がない。俺は食料庫の奥へ進んだ。さすがに軍事基地だけあって結構広い。

ようやく開けた場所には１１人の生存者がいた。男性が６人、女性が５人…軍兵や看護婦の姿も見られる。もちろん、市民もいた。誰一人、明るい顔の者はいない。俺が来たのを見て一人の女性が口を開いた。さっきと同じ声だ。

「生存者ね？どこも噛まれていない？」

「噛まれてはいないが…腕をすっぱりと切られた。だが、ワクチンを投与している」

「ワクチン？まあいいわ。とにかく何かを口にしなさい」

その女性は唯一、少し明るかった。他の顔も順々に見ていく。その中には一人の知り合いがいた。

俺と同じ、Ａ・Ｏ・Ｒの兵員だ。彼も暗く、ぐったりしている。俺に気が付いたのか話しかけてきた。

「ロンか…よく生き残ったな。兵員は未熟だから他の仲間はほとん

ど奴らの一員になってしまったが」
「カーマイン…お前、どうやってここまで来たんだ?ここのカードキー持ってるはずないだろ」
「下水道を通った。マンホールのフタはボロボロで開けやすかったからな。それで偶然ここへ逃げて来たのだが…もう皆、おしまいだ…」

下水道を通って来た、という事は入り口も知っているはず。聞いて見るのがいいだろう。自力で探していたら弾薬がすぐに無くなってしまう。

「下水道の入り口はどこだ?」
「兵舎へ行けばわかる。兵舎は分かりやすいから見落とすことはまずない。それよりなぜ下水道なんかに?いや…行かないでおこう…どうせ、聞いたところで意味はないのだからな…」
「なるほど…」

俺はそう言うとすぐさま食料を詰め始めた。手榴弾もあったため入手しておいた。それにしてもこの生存者たち…ずっとここにいるつもりなのだろうか?

「皆、ずっとここに閉じこもっているつもりなのか?」

さっきの女性が答えた。

「そのつもり。ここなら食料にも困らないし、部屋も頑丈だし…救助が来るまで持つわ」
「救助なんて来ると思うのか?わずかな可能性を賭けて脱出口を探す気はないのか?」
「あんたもあの女と同じね。金髪で突然、ここに来た女…かなり傷

だらけだった。それなのに軽い手当てをしただけでここにあった銃を持ち、出て行った」

「その人はどこに？」

「下水道へ行くと言っていたわ」

俺は何か言おうと口を開いたその時だった。何かを破壊するような音が響き渡る。これはまさか扉を破る音なのか？俺はただ一人、攻撃態勢に入った。

ワニの化け物

頑丈な扉が徐々にへこんでいく…扉が押されるごとに間近の化け物が唸り声を上げる。それに衰えず、背後の生存者たちが一斉に悲鳴を上げた。その中の二人の男女は悲鳴を上げず、恐怖が顔に現れている。俺はＡＮアバカンのマガジンを取り換え、生存者の一人、カーマインに言った。

「おい、カーマイン！座ってないで早く手伝え！」

「やるだけ無駄だ。この頑丈な扉を破るほどの化け物何だぞ？そこらの武器で敵うわけがない」

カーマインは残念そうに首を振った。俺は直も説得した。

「馬鹿言うな！そのまま八つ裂きにされる気か？」

「そんな考え誰が持つか」

カーマインはグロック２６を手に、立ち上がった。戦う気になったのか？今までのは冗談で最初から戦うつもりだったのか――――――？そう思い始めたその時、カーマインが突然、床に倒れこんだ。

俺は慌てて駆け寄った。

「どうした？まさかゾンビ化間近なんじゃ…？」

うつ伏せに状態のまま、まさか、といい驚きの言葉を吐き出した。

「死んだフリだ。奴らは生者を真っ先に狙う。扉の外の奴も同じだ。俺は背後の奴らが襲われている間とお前が戦っている隙を見計らって這いずりながら外へ逃げる」

「貴様…！最低の人間だな！」

俺はありったけの憎しみを込め、足元の屑を睨みつけた。もう、こいつには頼れない。他の生存者を説得して見るしか――――と、その時、勢いよく扉が開いた。いや、押し出されたというべきか。外の化け物目にも留まらぬスピードで食料庫を駆け抜け、一瞬で獲物を捕らえた。血が降りかかる。背後の男性が一人、絶叫した。その声はすぐに止み、代わりにグチャ、グチャという嫌な音に変わった。

ようやく化け物の姿が露わになった。緑色の体。鋼鉄のような鱗。刃のような鋭い指のない手。身長は大体、２ｍくらいだろうか。足は手と同じく、指がなく、靴のような形だ。この化け物、まるでワニが二足歩行しているようだ。ワニの化け物は男性の内臓を引きずり出し、すするように食べている。

この光景を目の前で公開された生存者たちは大絶叫し、部屋中を駆け回った。内臓を食べ終わった奴は次なる獲物を探している。今が攻撃するチャンスだ！

俺はＡＮアバカンを奴の胴体に乱射した。これだけ銃弾を撃ち込めば助からないはず――しかし銃弾はめり込むどころか弾き返された。傷一つつかない。見た目通り鋼鉄の鱗ってことか。

ワニの化け物は俺に全く興味を示さず、次々と生存者たちを襲い始めた。部屋がどんどん赤く染まっていく。俺がこの光景を見届けていられるのも今の内だ。生存者たちが全滅すれば俺の番となる。

どうする？銃弾が貫通しなければどうしようもない。Ｍ７９があるが、こんな閉め所だと確実に自分も負傷する。グロック２６で頭を狙うか？いや、頭も鱗に覆われているから結果は胴体と変わらないだろう。ならば口はどうだ？口を攻撃すれば倒せるかも？？？？

俺はＡＮアバカンを床に投げ捨て、グロック２６を構えた。ワニの化け物に接近していく。一か八かだ。今、奴は俺を出迎えた唯一のあの女性を襲っていた。彼女は必死に化け物の攻撃をかわしている。不意にワニの化け物が壁に手を突っ込んだ。腕がめり込む。ものすごい力だ！だが、チャンスに変わりない。俺は奴の背後にまわり、口元に銃を当てようとした。

しかし、考えは甘かった。奴は俺が行くより早く、腕を引き抜き、肘で腹を殴りつけてきた。腹にすさまじい衝撃が走る。痛みのあまり床に倒れこんだ。その隙をワニは見逃さず、馬乗りになって来た。手の刃がキラリと光る。このまま喉元を切り裂くつもりだ！

その時だった。ワニの頭上の上に新たな金属が光る。鉄パイプだ。それが勢いよく振り下ろされる。鉄パイプが脳天に見事に命中した。

が、金属同士がぶつかったような音を発し、鉄パイプが大きく折れ曲がってしまった。やはり頭も胴体と同じ固さだったのか。

しかしこの攻撃がワニに隙を与えてくれた。ワニがうっ、と呻き、わずかに頭を抱える。ダメージは少し通ったらしい。うめき声と同時に、ワニの口が大きく開いた。本当のチャンスだ！

ベルトからハンティングナイフを引き抜き、深々とワニの喉に突き刺した。その瞬間、喉の出血が降りかかり、ワニが大絶叫する。ワニは俺から離れ、口からハンティングナイフと大量の血を吐き出した。そして血を垂らしつつ、食料庫から目にも留まらぬ速さで逃げ出した。

やった、勝った――俺は呼吸を整えつつ、立ち上がろうとした。が、腹の激痛で起き上れず、壁に寄りかかって座り込んだ。傷を確かめる。殴られた腹のシャツが破け、血が流れ出していた。おそらくやつの肘の鱗で切り裂かれたのだろう。手当てしなければまずい。呻く俺の元に一人の女性が駆け寄ってきた。あの女性だ。彼女も何とか生き残ったらしい。ということはワニを鉄パイプで殴りつけたのはこの人か。見かけによらず、たのもしい。

彼女は大丈夫、と問いかけながら傷の手当てをしてくれた。俺は微笑みながら答えた。

「すまない、助かるよ。たぶん、あんたがいなかったらあの化け物は倒せなかったし、俺は確実に死んでいたと思う」

「当然よ。あいつが倒せなかったらあなただけじゃなくて皆、死んでたもの」

彼女は顔を少し赤らめながら答えた。ふと、俺は表情を変え、言った。

「他の皆はやられてしまったか」

「残念ながらね…でも皆の犠牲があったからこそ私たちは助かったのかもしれない」

確かにそうだ。ん?他の皆と言えば一人だけ残っているはず…俺は食料庫を見渡した。うつぶせ状態のカーマインの姿はない。本気で

逃げたようだ。くそ、あいつもやられちまえばよかったのに。
手当てが終わり差し掛かった時、俺は彼女に尋ねた。
「で、これからあんたはどうするんだ？ここに残るのか？」
彼女は即座に首を振った。ということはついていくという事か。しかしなぜだろう？
「ここでもう救助を待つことはできない。扉が壊されたでしょ。仮に無事だったとしてもいきなりさっきみたいな化け物に襲われるのはごめんだわ」
俺はゆっくりとうなずき、微笑んだ。そして改めて名乗った。
「俺はロン・フライト。一応、兵員だ」
「私はカーラ・エイリーよ。この島のただの大学生」

手当てが終わり、ようやく歩けるようになった。まだ痛みは残っているが、耐えられないほどではない。それにいつまでもここで待機していたらまたあいつが戻ってくる可能性もある。
俺はさっき捨てたＡＮアバカンを拾い上げ、マガジンを取り換えた。ストックはあと１つほどある。カーラは２本の鉄パイプと１本のサバイバルナイフを落ちていたリュックサックに詰めていた。その後、食料を詰め、お互い、持ち物を確認し合う。

自分…グロック２６ハンドガン、Ｍ７９グレネードランチャー、ハンティングナイフ、９ミリ・パラベ　ラム弾４０発、５．４５ミリ・ロシアン弾３０発、４０？４６ｍｍ榴弾１発
カーラ…鉄パイプ２本、サバイバルナイフ１本、硫酸弾２発、消毒スプレー、包帯、

カーラの持っている硫酸弾はこの倉庫内で見つけたらしい。この硫酸弾はＭ７９に使えるものなので譲ってもらった。持ち物の確認が終わったところで目的地について話す。
「とりあえず兵舎に向かうのがいいと思う。下水道があるらしいか

らそこからこの基地を抜けて海へ出ればいい」
「なぜ海に出るの？モーターボートを使ったとして一番近い大陸の町までは四日はかかるわよ」
「この島の近くには巨大な船があるんだ。その船にはヘリコプターが何機もある。つまり船まで行き着けばいいわけだ」
カーラは納得したようでうなずいた。俺たちは血まみれの部屋を後に兵舎へと向かった。

不発

食料庫を出て３０分ぐらい経っただろうか。俺たちは息を荒くしながら兵舎にたどり着いた。俺はＡＮアバカンのマガジンを取り換えつつ、カーラに話しかけた。もうこの銃の弾のストックはない。
「な…何とかたどり着いたな…噛まれて…いないか…？」
彼女の金髪の長い髪は返り血で汚れている。青いシャツと黒いズボンもだ。あれだけの敵を殴ったのだから汚れるのは当然だ。カーラは少し間を置いてから答えた。
「ええ…どこも噛まれていないわ…血まみれだけど…それにしても何で突然にたくさんのゾンビが？」
そう、俺たちはここにたどり着くまでに大勢のゾンビ達に襲われたのだ。俺がこの基地の扉の前で相手した数を遥かに上回っていた。まあ、何にせよ、無事なことには変わらない。
ようやく呼吸が元に戻ったところで俺は考えを話した。
「おそらく、食料庫の血の臭いを嗅ぎつけたんだ。生存者たちの血と亡骸をな。だから一斉に食料庫に向かったんだと思う。証拠として奴らは俺たちにあまり攻撃して来なかった」
「なるほど…それにしてもこの扉、ビクともしないわ。電子ロック式かしら？」
カーラが兵舎の扉を引っ張ったり、押したりしながら言う。俺は扉の近くを調べてみた。カードスロットは見当たらない。どうやら電子ロック式ではないようだ。ならば鍵式ということになる。
俺はカーラと交代し、扉にタックルをかました。しかし、やはりビクともしない。引いてみても同じだ。カギがかかっているらしく、開かない。
ふと、俺はあることを思い出した。カーマインは、下水道を通ってこの兵舎のマンホールから軍事基地に侵入した、と言ってた。当然、この扉も通ることになる。内側から鍵を開けたはずだ。兵舎から出

た時、わざわざまた外側から鍵を閉めた、というのはありえない。と、いうことは――――騙された？いや、最初から騙すつもりでいたのか――――？くそ、どこまでも最低の野郎だ！俺は力任せに扉を蹴り飛ばした。それに驚き、カーラがすくみ上がる。

足が痺れた。が、その痛みを無視し、通路を見渡した。兵舎の隣の通路にドアがある。俺はドアの前に立ち、どこなのか調べてみた。プレートに「物置庫」と書かれている。とにかくここを進んで行くしかない。ドアの電子ロックはウイルスの影響で壊れ、扉は楽に開いた。

物置庫に入ってすぐ、俺たちの視界は真っ暗になった。ここは電力が通っておらず、明かりが点かないらしい。暗闇の中を不気味に這う音が響いている。濡れた雑巾で壁を叩いているような音だ。暗くて姿は見えないが、人間ではないことがわかる。俺はＡＮアバカンを構えつつ、攻撃の時を待った。

その時、カーラが足元の何かに気が付いた。手で触りながら調べている。そしてすぐに一筋の明かりが灯った。これは…懐中電灯か。と、次の瞬間、明かりに気が付き、暗闇の中の化け物が襲いかかって来た。調度、俺から見て右の角度からだ。カーラは後退して交わしたが、俺は足を切られた。傷は浅いようであまり痛まない。化け物が懐中電灯の光に照らされる。こいつは病院で見た化け物だ！

俺は奴の胴体に向って銃弾を撃ち込んだ。絶叫が響く。弾はすぐに無くなり、無防備になったが、襲って来なかった。カーラがサバイバルナイフを持ち、奴に馬乗りになっている。俺はＡＮアバカンを投げ捨てグロック２６で奴の足を撃ちぬいた。これで抵抗力が弱まるだろう。その様子を見てカーラがすぐさま化け物の喉を掻っ切って仕留めた。

「危なかったな…暗闇で不用意に明かりをつけるなよ？」

「ごめんなさい…気を付けるわ」

懐中電灯はもう一つ落ちており、俺はこれを使うことにした。物置

庫を一つ一つ照らしていく。すると荒らされた部分が見つかった。空気入れの山とオールの山が散らかっている。その近くを照らしてみるとマンホールが見つかった。マンホールのフタは抜けていてフタの周りの壁はボロボロに壊されていた。マンホールの近くには赤茶色の血痕が列をなしている。

「カーマインはここを通って行ったな。俺たちと同じ考えで。ゴムボートを使って海へ抜けるつもりか」

「あの人だけじゃない…この血…ワニの化け物も通って行ったみたい」

「とりあえず進むしかない。早くしないとカーマインがこの基地を抜けてしまうし」

俺たちは順にマンホールを下りて行った。

梯子のすぐ下の下水は血で染まっていた。物置庫で見た血痕と同じ色をしている。やはりワニの化け物も来ているらしい。その下水が透けて底にマンホールのフタが見えた。

血の混じった水以外はかなり綺麗に透き通っていた。臭いも全く気にならない。無臭といってもいいほどだ。除水の技術が進んでいるのか。という事は俊樹が生きている可能性も――あまり期待しない方が良いかもしれない。

１０分ほど進むと少し開けた道に出た。コンクリートの岸もあり、遠くには階段も見える。ん？人影も見えるような…どうせゾンビだろう。カーマインならゴムボートを浮かべて寝そべりながら下水道を下っているはずだ。それにしても…金髪のゾンビ何て見たことがない。とりあえずもう少し近づいて確かめるのがいいだろう。俺たちは水の音をあまり立てないよう、慎重に進んだ。

人影まであと１０ｍという所でその人影が突然、振り向いた。と、同時に構えられた銃が俺の脳天に向けられる。どうやらゾンビではなく人間のようだ。

女はすぐに警戒心を解き、安心した声で言った。

「人間のようね。驚かしてごめんなさい」
途端にカーラが声を上げた。
「あんたは…食料庫であったあの！よく生きていたわね！」
カーラが女を睨み付けた。なぜ怒っているのだろう？それにしてもよく見るとこの二人の服装はよく似ている。服どころか顔も似ている。
女はすぐ言い返した。
「喧嘩してる場合じゃないでしょ、カーラ。そうだ、まだ隣のあなたには名前を言ってなかったわね。私はベティ・アレナス。元ＳＷＡＴよ」
そういうとベティは向きを変えて歩き出した。俺たちもその後に続く。しかしカーラはふてくされながらだ。一体、この二人はどういう関係なのだろう？
考えながら歩いていて何分か経った。その姿を見てカーラが声を潜めて話してくれた。
「あの女は…私の姉なのよ」
「姉？家族に会えたってのになぜ怒ってるんだ？」
「腹違いだから…私の父さんはあの女の母親と結婚した。だから姓が違う」
ようやく謎が解けた。まあ、それほど重要ではないのだが。命がけの戦いのとき、こんなことはさすがに気にならないだろう。
その時、突然、ベティが止まった。銃を構えながらじっくり前方の何かを確認している。俺も並んで確認してみた。何かが浮いている。あれは…ゴムボートだ！カーマインが乗っている物に違いない。
その事を知らないベティは嬉しいのか、ボートに向かって走り出した。これはまずい！奴の事だ、近寄った途端、人間だろうが化け物だろうが撃ち殺しかねない。俺は必死に叫んだが無駄だった。追いかけて止めようともしたが、早すぎて追いつけない。と、次の瞬間、銃声が鳴り響いた。ああ、ベティが撃たれてしまった、俺のせいだ

―――――

しかし視線の先で走っているベティは倒れるどころか、さらにスピードを上げている。よく見るとゴムボートはひっくり返っていた。倒れる人影と銃声の源は別にあった。裏返ったゴムボートの先に二人の人影が見える。一人は手前でもう一人は奥にいる。手前の人影が倒れた。ゾンビだ。奥の人間が撃ったのだろう。その人間は俺がよく知っている顔だった。俊樹だ！！！

俺は歓喜の声を上げ、全速力で俊樹の元へ走った。向こうは気が付いていない。俊樹は銃を落とし、地面に倒れ込んだ。かなり体が危ないのだろう。早く手当てしなければ。

と、次の瞬間、何かが叫んだ。人間ではない。正体はすぐにわかった。駆け寄ったベティとずぶ濡れで腰を抜かしたカーマインに挟まれている…ワニの化け物だ！おそらくカーマインのゴムボートは水に倒れこんでいた化け物に突っかかって転覆したのだろう。

ベティが化け物に向かって発砲した。が、やはり固い鱗に弾き返される。俺が応戦しようと駆け寄る中、カーラがついてきた。鉄パイプを2本握りしめている。だが前のようにうまくは行かないだろう。俺はグロック26をしまい、M79を構えた。榴弾から硫酸弾にセットし直した。硫酸弾ならたぶん奴を倒せる。濡れているほど効果は高い。

「どけ！」

ベティが俺の呼びかけに気が付き、脇にどく。当てるのは今しかない。俺は化け物の顔目がけて硫酸弾を発射した。

硫酸弾は見事に命中した。だが、化け物ではない。化け物は驚くことに身をかがめて硫酸弾を避けた。命中したのはなんとゴムボートを捨てて逃げ去る、カーマインだ！カーマインが絶叫した。くそ、何もこんな時に死ななくても…早く次の攻撃に移らないとまずい！新たに硫酸弾をセットした。だが、俺が撃つより早く、奴は飛び掛かって来た。硫酸弾入りのM79が化け物の背後へと飛んでいく。

奴をすり抜けてM79を取りに行くなど無理だ。奴の後ろには誰もいない。全員やられる。終わりだ。俺のミスが全てを終わらすことになるとは？？？？？

生還

一瞬にして体が川底に近づく――――息を止め、水の浸入を防ぐ。流れを感じているとすぐに体は水面へと浮き上がった。が、また沈みそうになる。川は僕の身長よりも明らかに深い。早く岸へ上がらないと…溺れる！

僕は水が視界を遮る中、必死にもがき、辺りを見渡した。岸はどこだ？岸はすぐに見つかった。それほど距離はない。岸は少し高いが辿り着ければなんとか上がれるだろう。僕は岸を目指そうと泳ぐ体制に入った。が、すぐに今の状況がどれほどひどいかわかった。化け物化したマイケル院長に切られた左足の傷とファングに殴られた左肩の激痛で泳げない。沈まないようにもがくのがやっとだ。こうなったら沈まないように状態維持するしかない。もがいていてはダメだ。何かしがみ付いて受けるものを探さないと。

岸から意識をそらし、何かないか辺りを見渡した。すると岸が簡単に見つかったように目当てのものも見つかった。１m先にゴムボートがある。人はいない。あれにしがみ付ければ…しかし川の流れが速く、追いつけない。が、強運が働いたのか、ゴムボートは川の岩の間に引っかかって止まった。ありがたい。さあ早く乗船して…いや、無理だ。凍てつく川の水温で腕に力が入らない。それに今の僕は片腕、片膝しか使えない身だ。このまましがみ付いてどこかの岸に流れ着くしかないだろう。

ゴムボートが岩から外れ、再び流れ出した。離さないよう、片手で必死に掴む。それにしても体が重い。衣服を着ているからか？仮に衣服が原因だとしても脱げないから耐えるしかない。突然、僕は考えられる原因がパッと頭に浮かんだ。肩にかけているショルダーバッグだ。中にはいくつかの武器が入っている。原因はこれだ。何にせよ、捨てないと危ない。

どうしようか考えているとまたしても岩の間にボートが引っ掛かっ

た。捨てるには今しかない。しかし全て捨ててしまっていいのだろうか？もし、無事に岸にたどり着いてその直後にゾンビに襲われたら？僕はボートから手を離し、バッグを探った。中からＭ９２Ｆ取り出し、ボートの上に投げた。そして残りの兵器をバッグごと川底に捨てる。途端に体がふっと軽くなった。急いでボートを掴み直す。あれから２０分くらい経っただろうか？未だに僕は岸にたどり着けていない。このまま死ぬのか？そう思い始めた矢先、ボートの流れが変わった。ボートは下水路の入り口だと思われるトンネルに向かっている。それと同時にあることに気が付いた。ボートの上に気配がすることに。これはもちろん、人ではなく、ゾンビだ。足を負傷しているらしく、うつ伏せのまま呻いている。僕にはまだ気が付いていない。おそらくこの人は川を下る途中、ゾンビ化してしまったのだろう。

トンネルにだんだん近づいていく。この角度からだとトンネルの端の岸に流れ着きそうだ。着いたところで這い上がれるだろうか？落ちた時と比べて体力は遥かに少なくなっている。とにかく踏ん張るしかない。ここを逃せば海まで流され、そして…考えたくもない。ようやくボートが止まった。僕は岸に手を掛け、力を込めた。が、案の定、パワーが足りず、呻くばかりだ。残る力を全部使うつもりで動いたが、無理だった。徐々にわずかな体力も無くなっていく――――意識が朦朧とする中、トンネルの奥の方から足音が聞こえてきた。だんだん足音が近づいて来る。ゾンビか？それともファングみたいな悍ましい化け物か？この状態で襲われたらどうしようもない。視界がかすみ始めた。もうぼやけて何が何だかわからない。不意に肌色の手が伸びてきた。誰だ…？

腕を掴まれ、僕の体が冷たい水からやっと抜け出した。途端に寒さで震えが始まる。水の中の方がましだと思うくらいだ。地面に手の

ひらを立てながら僕はゆっくりと目の前の人間を見た。このグレー色の独特の服。男のようだ…ロンか？いや、違う。服装が同じだけだ。ということはこの人もＡＯＲの兵員なのか？

震えるあごを止めながら声を絞り出し、僕は問いかけた。

「あんた…誰だ？ロン・フライトの…仲間か？」

ロン・フライト。という名前を聞いた瞬間、男は突然、笑い出した。

「なんだ、お前、ロンを知っているのか？俺は奴と同じ兵員だ。三十分くらい前に別れたがな。まあ、あいつのおかげで逃げられたようなもんだ」

ロンが命を懸けてこの男を逃がしたとでもいいたいのだろうか？それにしては態度がおかしい。もしロンが命を懸けるほどの仲だったら男は心配でたまらないはず。この顔は出し抜いてやった、裏切ったという感じだ。

僕はここまでのいきさつを説明しつつ、なおも男に問いかけた。

「僕は軍地基地に繋がる端までロンと一緒だったんだ。その途中化け物に襲われた川へ…そこで流れ着いたのがここだ。ロンは今…危ないのか？」

そう言いつつ、ふと男の左胸を見ると名札が張ってある。「ｃａｒ（カー）ｍｉｎｅ（マイン）」というらしい。　男は不敵な笑みを浮かべながら答えた。

「ああ、そりゃ危ないだろうなあ。何せ、銃も効かない化け物だ。そんなことを聞く余裕があるという事はお前、ただ川に落ちたロンの友達ってところではないな。それよりいいものを持って来てくれたな」

カーマインはゴムボートを岸に引き上げ、ボート上の荷物を全て掃った。Ｍ９２Ｆが僕の目の前に、そして足を怪我したゾンビが下水に横たわる。

ボートに何もなくなるとカーマインはそれを担いで走る体制に入った。どこへ行くつもりだ？

カーマインは僕の疑心に自ら答えた。

「悪いがこのボートはもらっていく。俺のボートは途中、ゾンビと

戦ったときに撃った銃弾で敗れてしまったからな。海に出る前にこの奥に置いてきた武器を取りに来た。せいぜい、ロンの死体を探すことだな！」

そう言うとカーマインはあっという間にトンネルの奥へ走り去った。その後ろ姿を大声で罵ってやりたかったが、そんな元気はない。とりあえずロンがこの軍事基地にいることはわかった。早く合流するしかない。だらだらと時間をかけていたら力尽きて倒れるのが落ちだ。

下水道の壁を使い、なんとか立ち上がった。相変わらず、左腕と足の膝が痛む。僕はさっきゴムボートから落ちたＭ９２Ｆと元々積んでいたと思われる９ミリ・パラベラム弾の入ったマガジン一つとアーミーナイフを拾い上げた。ボートの乗船者も何か持っているかもしれないが、ゾンビ化しているし、体力も無駄になるためやめた。足を負傷したゾンビは岸に上がれず、水面から顔を出してもがいている。感覚を取り戻すため、僕はこのゾンビに試し撃ちをした。弾丸は見事と頭に命中し、一発で仕留めた。攻撃に関してはあまり問題はないだろう。

壁を伝って歩き始めてから３０十分経った。誰もいないし、下水道を抜けられるハシゴもない。体力もとっくに限界を超えている。途中で地面に座り込み、足を止めた。流れゆく下水を見つめる。ここの下水は川の水と同じくらい透き通って見える。この島の技術はやはりかなりのものだ。下水から足へと視線を移す。足の傷はかなりひどい。肉まで届いているのがわかる。足の傷に比べて肩の傷は遥かに良かった。あれほどの衝撃を食らったが、骨折はしていない。少しはれているだけで今はあまり痛まない。

再び進もうと立ち上がった時だった。下水を駆け抜ける音が奥の方から聞こえる。大きさからしてゾンビではない。人間か、もしくはファングのような化け物だ。Ｍ９２Ｆ構えながら少しずつ進む。人気下が見えてきた。あれは本当に人間か？かなり猫背のような気が

――――

下水道のわずかな光でようやく正体が掴めた。あれは人間ではなく、ゾンビだ。しかし明らかに普通のゾンビではない。僕はこのゾンビと一度、戦い命拾いした。そう、突起物の塊ともいえる、角ゾンビだ！まさか、こんな状況で出くわすとは。下水道に落としたからってなにもここに来ることはないのに…Ｍ９２Ｆの２９発の弾丸とアーミーナイフしかない僕に弾丸が効かない目の前の奴をどうしろというのだ？奴は確かに傷ついている。マンホールから勢いよく落ちたからだろう。頭の長い一本の角はあまり変わりないが、肘から飛び出している２本は折れている。背中はどうだ？

突然、奴は僕の隙を突き、勢いよく突進してきた。鋭い角が向って来る。だが、奴の角は僕の腹には命中せず、下水道の固いコンクリートの壁に衝突した。奴が角を抜こうとして隙を作る。僕はすぐさま奴の背中を確認した。これは…ほとんど突起物が生えていない。人間本来の肌がむき出しだ。

とっさに僕はＭ９２Ｆの引き金を引いた。弾丸は背骨を貫通し、奴を絶叫させた。大量の血が下水に流れ出す。思った以上にダメージは大きいようだ。今と同じように隙を突いて攻撃すれば勝てるかもしれない。

新たな弾丸を撃ち込むより早く、奴が角を引き抜いた。雄たけびを上げ、怒りを露わにする。今の攻撃は様子見だったのだ。僕は奴に背中を向け、死に物狂いで走った。足のすさまじい痛みなどどこかに行ってしまった。奴がまた壁に激突するよう、なるべく斜めに逃げる。

走って間もなく、不意に僕は岸に躓き転んでしまった。まずい！やられる――そう思った時、奴は僕の頭上を思いっきり通過して行った。もしかしてこれは転んでよかったという事か？案の定、奴は壁に激突し、また角を引っ掛からせた。またとないチャンスだ。すぐ近くで争うような気配がするが構っている暇はない。この隙を逃すわけにはいかない。僕は二発目の弾丸を奴の背骨に貫通させた。同時に角を抜いて暴れたが、すぐに倒れた。しかし倒れることにな

るのは奴だけではなかった。奴の死を見届けた直後、すさまじい痛みがまた左膝を襲う。無理をした分の痛みが帰って来たのだ。なすすべもなく、僕は地面に倒れこんだ。

「俊樹！」

誰かが僕を呼んだ。だが、もう立ち上がる力さえない。痛みのせいもあるがとうとう力を使い果たしたのだ。うつぶせ状態で少し先の光景を伺う。角ゾンビの二度目の隙が起こった時、感じたものだ。僕から一番近い場所ではゴムボートが転覆していた。あれはカーマインが持っていったものだ。なぜ転覆しるのだろう?二番目近い場所では緑色の化け物が立っていた。二足歩行で全身、緑色の鱗で覆われている。まるで、ワニが立ったようだ。その近くで怪物に弾丸を撃ち込む金髪の女性が見える。さらに奥ではグレネードランチャーを構えた僕より少し年上の男とそれと同じ年齢くらいの女性が鈍器のようなものを持って近づいて来ている。転覆したゴムボートの方に視線を戻すとカーマインが立ち上がり、戦いに背を向けていた。不意に男が伏せろ、と叫んだ。金髪の女性が素早く脇にどく。それを見計らって男が砲弾を放った。当たる――――そう思ったが、驚いたことに怪物は屈んでその弾をかわした。そして直後、さらに仰天が僕を待っていた。走り去るカーマインの後頭部に弾が命中したのだ!破片が飛び散り、すぐにカーマインの頭が溶けだした。あれは硫酸弾らしい。男たちは僕より驚いたようだが、すぐに攻撃態勢に戻るのがわかった。男が新たな弾をグレネードランチャーに詰める。かなりの早さでまた怪物に向かって構えた。

しかし攻撃は怪物の方が早かった。怪物は男の手からグレネードランチャーを弾き飛ばし、雄たけびを上げる。グレネードランチャーは僕の目の前に落ちた。だが、応戦などとてもできない。終わりだ。あの男たちは終わった。見るも無残な光景が、今、目の前を流れる

―――

その時だった。僕の中の何かが動き、グレネードランチャーを手に掴んだ。無意識に足が立ち、気が付くと僕は怪物に向かって弾を発射していた。体が炎のように熱く、エネルギーが溢れだす。硫酸弾はカーマインと同じよう、怪物の後頭部に命中した。カーマインの時よりも勢いよく、鱗とその下の肉が溶け出す。怪物が絶叫した。それを見計らって金髪の女性が手榴弾のピンを抜き、怪物の大口に放り込んだ。金髪の女性に続き、後ろの男と女、そして僕も地面に伏せる（もちろん、これも無意識だ）。次の瞬間、爆音と共に怪物の頭が吹き飛んだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7700r/

ディス・イズ・ナイトメア

2011年12月17日03時01分発行